伝説・伝承・地名を読む

水と緑の君津ヒストリア

君津市周西公民館

周西マップクラブ

表紙タイトル『水と緑の君津ヒストリア』は、君津市をイメージする言葉としてふさわしいこと。また、ソフトな感覚表現であることに配慮して命名しました。
水と緑の君津は、「君津市民の歌」の一節より。
また、ヒストリアは、史書を意味するラテン語より引用しました。
君津市の歴史・文化を訪ねる一助としてご活用下さい。

発刊にあたり

平成二十年、周西公民館で地域の歴史文化を研究するサークル「周西マップクラブ」を立ち上げ活動がスタートしてから今年で十年を迎える。

これまでの活動成果を振り返ると、

☆平成二十四年度は、君津市文化のまちづくり市税１％支援事業を活用して、野の花図鑑『周西・三舟花紀行』発刊。ガイドマップ「周西てっくてっく（健康ウォーク）」を作成した。

☆平成二十八年度は、君津市文化のまちづくり市税１％支援事業を活用して、周西地域を歩いて、見て、聞いて、調べて、記録する『周西地域誌』発刊。製鐵所の君津地区進出による地域変貌をビデオ化。金石文をＰＤＦ化してＤＶＤに収録した。

また、平成二十八・二十九年度「周西マップクラブ」は、活動で得られた情報を地域に還元することを目標にした。地域の各種講座より、「周西地域の歴史」についてレクチャー依頼があり、概ね達成された。

☆平成三十年度は、『水と緑の君津ヒストリア』『すさいの民話』を発刊する活動に取り組んだ。

『水と緑の君津ヒストリア』は、各地域誌や各種資料の伝説・伝承より歴史観や民俗観に着目し、地域と密接に関係する作品を選択した。原則的に原文通り採用したが、内容検証を進める中で新たな発見や原文との記述内容に齟齬（そご）が認められる文章・文言については修正した。また文献調査中、新たに確認された資料については一部加筆・編纂した。

『すさいの民話』は、地域で発刊された冊子より地域特性を重視した「民話」と「海苔ができるまで」を選び絵本にまとめた。

平成は三十年で終了する。周西マップクラブは、今年度で結成十周年。まさに記念すべき節目の年である。この節目の年に、伝説・伝承・地名を読む『水と緑の君津ヒストリア』『すさいの民話』の二冊を発刊できることは非常に感慨深い。この間、周西公民館をはじめ関係各位および地域の皆様より頂いたご支援・ご協力に衷心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

平成三十年十二月

周西マップクラブ　会長　元岡陸視

平成の語り部達へ　贈る言葉

この度の周西マップクラブによる『水と緑の君津ヒストリア』『すさいの民話』が発行される運びとなりましたことに対し、周西公民館として心より敬意と感謝の意を表し、お祝い申し上げます。

さて、本公民館では、現在五十二のサークルが多種多様な活動を展開しています。その中の一つである周西マップクラブは、本公民館地域の自然や伝統文化、歴史遺産などを独自の視点で調査研究を重ね、記録し、後世に残す事を生涯学習活動として取り組み、今年度で十周年を迎えるサークルです。活動の原点には、揺るぎない信念と歴史観が溢れています。その成果として、様々な研究結果を残しています。まずは、平成二十四年度に野の花図鑑『周西・三舟花紀行』を皮切りに、ガイドブック「周西てっくてっく（健康ウオーク）」を、平成二十八年度には、八幡製鐵所（現新日鐵住金）の君津地区進出に伴う地域の変貌を歴史の時間軸として克明に綴った『周西地域誌』の発行。そして、今回の平成三十年度には『水と緑の君津ヒストリア』『すさいの民話』の発刊へと。

この着実な実践と研鑽を積み重ねられたサークルの皆様方の、弛みないご努力と情熱に改めて感服いたします。いずれの作品においても「郷土（ふるさと）きみつ」への思いが静謐な内にも迫り来る言霊を感じます。多忙を極める現代に、まほろばの世界へと導く一つのガイドマップとして時代へ残し・語り継ぐべき貴重な作品であると思います。私達が住む「郷土（ふるさと）きみつ」を舞台に繰り広げられた歴史的・民族的世界をご堪能あれ。

改めて、二十一世紀の日本は、もっと自信を持って、自分達の街が素晴らしい街である事を再認識し、その街を更に素晴らしい街にするために、受け継がなければならない本当の良さを知る契機として頂きたい。また、自分達の住んでいる地域の伝統文化や昔の姿、またその変遷に触れる事は、未来を考える糧としても大切なことだと思います。これらの作品を公民館サークルとして自主的にまとめられた事は、極めて意義深いものがあります。周西公民館としても、この『三部作』をサークルの成果としてだけでなく、地域の学びの場に活用し、生涯学習の輪を広げるきっかけにしたいと思います。

結びに、この地域を慈しむ人々の輪が、小糸川の水面のように悠々たる流れの如く、広がっていくことを願うものであります。

平成三十年十二月

周西公民館　館長　宮崎直樹

目次

発刊にあたり　周西マップクラブ会長　元岡陸視
平成の語り部達へ　贈る言葉　周西公民館長　宮崎直樹
伝説・伝承・地名
阿久留王の伝説　1～2
神野寺の軍荼利明王信仰　2～3
小糸町と藤原鎌足　3～4
立たされた仙人　4～5
大友皇子伝説　5～6
蘇我殿の田植　6
建暦寺縁起　7～8
九十九坊廃寺　8～9
「周淮（末）の珠名」と「真間の手児奈」　9～10
高宕山縁起　10～12
さよみの布　12～13
防人物部の竜　13～14
周淮郡の郡衙伝説　14～15
古東海道と房総　15～16
七里川の地名と湯ヶ嶽鉱泉　16～17
諏訪神社と秋元の名の起源　17～18
御狩祭　18～19
小山野の田植如来　19～20
親王伝説の村「貞元」　20～21
愛宕山勝軍地蔵　21～22
源頼朝と君津　22～23
三百騎坂　23～24
棒術と鞨鼓舞　24
三尺坊信仰　25～26
周東景久　26～27
神将寺薬師堂の釜の蓋　27～28
天南寺　28
千本城伝説　29～30
はしご獅子舞　30～31
狐糸城　31～32
人柱おげんと青鬼の伝説　32～33
大日堂と「大蛇」伝説　33～34
加勢観音　34～35
久留里城「お玉が池」の由来　35
叶谷寺伝説　36～37
三船山合戦　37～38
鐘ヶ淵沈鐘伝説　38～39
円覚寺の宝物　39～40
真勝寺の子育て地蔵　40～41
一念坊道心　41～42
新井白石と久留里　42～43
神野寺の修正会と午王祝い　43～44

五人組帳　44～46
庄屋渕の地名伝説　46～47
最勝福寺の歴史考　47～49
最勝福寺の梵鐘　49～51
地頭　大草平内　51～53
高間伝兵衛の逸話　53～54
元禄・安政大地震の記録　54～56
大堀の由来　56～57
周准郡の助郷　57～59
石尊山の石碑　59
上総白炭製造者　土窯半兵衛　59～60
倉沢村の新田開発　里見倉沢　60～61
明和七年の高札　61～63
久留里藩と飢饉　63～64
房総往還と白牛　64～65
波浮の港の開鑿者　秋広平六　65～66
産科医　大牧周西　66～67
海苔養殖の祖　近江屋甚兵衛と出訴事件　67～69
平山用水　69～70
江戸時代の庶民信仰　70
権太節　71～72
サンチョコ節　72～73
鹿野山と旅日記　73～75
愛宕様の伝説　75
力石伝説　75～76
久留里藩の参勤交代　76～77
諏訪家の兜仏　77
野盗と怪火　77～79
西上総の馬出し　80～81
実録「お富さん」　81～82
上総掘り　82～83
呦呦館　83～85
久留里線物語　85～86
久留里線と江戸おか道　86～87
大町桂月と鹿野山　87～88
鉄道開通と周西駅建設　88～89
第二海軍航空廠八重原工場　89～90
海苔養殖最後の人見浦　90～92
菅原神社の「やぶさめ神事」　92～93
成願寺のメーコ　93～94
鹿野山みち　94～97
雨城楊枝　97～98
久保南陂水車　98～99
人見神社例大祭の特殊神事　99～102
薪の話　102～103
大戸見の神楽　103～104

小糸川の浚普請　104～105
人見妙見様の尊像　105
刀村正ふいご跡　105～106
かにの恩返し　106～108
野村の旦那と平六　108～109
黒船来航　109
袈裟の質入れ　110～111
五二日間の大旅行　111～112
女食村の話　112～113
ソロリに手を出すな　113～114
「かったかった」と言ふ行事　114～115
水車の思い出　115～116
白駒芝居　116
唐人凧　116～117
電気が無かった頃　117～118
船大工の仕事　118～119
鹿野山の「夜祭り」　119～120
鹿野山の「花嫁祭り」　120～121
泉のザル　121～122
上総の唐箕　122～123
明治の農村　123～124
西上総の方言　124～125
小糸川舟歌　125～126
漁業　126～128
昔の坂田浦の潮干狩と地曳網　128～129
小糸川「川尻」の思い出　129～130
昔し狐の嫁とり　130～132
海苔漁の思い出　132～134
イボ取り地蔵　134
川びたりついたち　135
地名　136～138
周西村　138～141
貞元村　141～144
八重原村　144～148
周南村　148～151
中村　151～156
小糸村　156～160
秋元村　160～162
三島村　162～169
小櫃村　169～173
久留里町　173～182
松丘村　183～187
亀山村　188
凡例　189～190
〈付録〉君津郡町村名・鹿野山参道地図　191
参考文献・資料　奥付

伝説・伝承

阿久留王の伝説　（鹿野山）

『君津郡誌上巻』から、古い資料の上に登場する、様々な阿久留王（あくるおう）を知ることができます。いずれも、鹿野山とその近辺に出没したようです。

「良民を苦しむるもの、ありしらん、此等の兇賊をば西上総御滞留の間に於て討滅せられし」、「歴史に記載がある、ないといえ、地方の口碑（こうひ＝言い伝え）として存在する」として主要なものを掲げている。これら資料によると軍荼利夜叉（ぐんだりやしゃ）明王、褸王（るおう）、悪褸王、亜久留王、阿黒王、悪露王、赤頭王、赤頭類王、悪路王、悪留王、六手王、また、東夷（蔑称の意）の酋長阿久留と表現され、さまざまな呼称があったようだ。『上総国町村誌』には「阿久留塚」の項がある。

阿久留王塚

「蝦夷（えぞ）」も阿久留王もヤマト人がつけた名前である。「蝦夷」の名前は景行天皇によってつけられた。その名は蔑視の対象としての呼び方である。蝦夷とは、現在のアイヌ人であり縄文人であった。北九州や出雲に上陸した弥生人は、やがてヤマト人と名を変え東へ東へと進攻していった。そこには、開拓すれば米の穫れる湿地帯が無限に広がり、湿地帯は葦が豊かな緑を作る豊葦原（とよあしはら）の瑞穂の国（みずほのくに）であった。しかし、それは数万年前から住んでいた縄文人の地でもあり、当然摩擦が起きる。後から移住して来た弥生人のほうが、圧倒的に力がありヤマト人は、縄文人を蝦夷と呼び蔑視、東へ東へと追いやったのである。その攻防線上が房総半島に至ったとき、そのヤマト人に待ったをかける人物がいた。それが阿久留王であった。当然、阿久留王はヤマト人から見ればとんでもない悪い人物である。だから「賊」「鬼」「蛇」の名を付け滅ぼしていった。

むかし、鹿野山に住む阿久留王と呼ばれる悪鬼が上総一帯を支配し、人々から忌み嫌われ悪路王、悪郎などと呼ばれたが、地元では今でも「鬼」ではなく、住民のことを思う大変優れた文武両道の豪族であったと伝えられているようだ。阿久留王は東征で上総に進軍した日本武尊と戦う。鹿野山山麓の鬼泪山（きなだやま）で両軍は激しく争い、敗れた阿久留王は六手（むて）の地で捕えられ殺される。日本武尊は阿久留王が蘇るのを恐れ、その体を八つ裂きにして別々の場所に葬った。川は王の血で三日三晩にわたって赤く染まった。日本武尊に攻められて、鬼が泪（なみだ）を流して謝ったので鬼泪山。赤く染まった川は、血染川（現染川）と呼ばれ、それが腐って海に注いだ地は地臭浦（現千種海岸）と呼ばれる

ようになった。

この戦いから三〇〇年後の推古六年（五九八）、聖徳太子の発願で、軍荼利明王（ぐんだりみょうおう）と薬師如来を本尊とする鹿野山神野寺を建立したとされる。本尊の一つ軍荼利明王は、阿久留王の垂迹（すいじゃく）とされ、手は六本。戦いに敗れ、手を切り刻まれながらも大和への服属を拒んだ、阿久留王伝説にちなんだ「六手（むこ）」の地名、鹿野山周辺に残る「神狩（みかり）神事」などがある。清和市場の諏訪神社で行われている「猪鹿切り祭（ししきりまち）」は、房総では数少ない御狩（みかり）祭で、毎年下社の境内で行なわれる。

（『阿久留王』露崎清美著他）

神野寺の軍荼利明王信仰

（鹿野山）

鹿野山・神野寺の軍荼利明王信仰は、現在でも鹿野山信仰の中心的な位置を占めています。ただ、本尊の軍荼利明王像は、ほとんど秘仏化されており、一二年に一度の御開帳のほか、毎年、元旦の護摩法会と二月の節分に、公開されます。

鹿野山白鳥峰（日本武尊塚）
〔Web ページ〕

神野寺の本尊は、もともと軍荼利明王のほかに、釈迦・薬師・観音を祀っていましたが、現在に受け継がれているのは薬師と軍荼利であり、信仰の中心に位置するのは軍荼利明王です。この軍荼利明王について中村国香の『房総志料』（一七六一）はヤマトタケルであるといい、田丸健良の『房総志料続篇』（一八三二）はアクル王（悪楼王）だとしています。確かに鹿野山の一峰には白鳥峰があり、そこにはヤマトタケルが祀られています。また鹿野山に隣接する鬼泪山は「ヤマトタケルに追われたアクル王が涙を流して哀れみを乞うたところに由来する」という伝承に基づく命名であり、「血草川は悪鬼の血で染まった」といいます。しかしこれらの伝承は、天台、熊野信仰の流れが濃厚であり、軍荼利明王の真の由来には、言及されてはいないように思われます。

鹿野山の軍荼利明王の姿は、何より手足に蛇をまとう姿に特徴があります。このことは、軍荼利明王が蛇神だということを示しています。一説によると、蛇や龍は水にかかわるとされ、農耕民族の信仰だとみなされます。しかしその一方で、蛇や龍は金気を嫌うともされています。金気を嫌うというのは、実は金気と無縁だといっているわけではなさそうです。おそらく、金気と密接なつながりがあるからこそ、このようないい伝えが生れたのでしょう。

実際のところ、蛇や龍の細長い形状は武器としての刀剣を象徴するものとして考えられてきました。また、その細長くとぐろを巻いた姿は生命の輪廻を表すものと位置づけられ、

生命の永遠性や不老不死を求め、「生まれ清まる」を根本思想とする密教系修験僧の信仰対象になってきたのです。彼らにとって、蛇の細長いその姿は永遠性の象徴であり、その永遠性は無限の生命をもつ金属に顕在化すると考えられ、又武器としての刀剣を示していたのです。このように、修験者にとってみると、蛇とは、まず何よりも金属を象徴するものであったと云うことになります。

鹿野山と蛇神とのかかわりを示す伝説に、旧清和村の長久寺に伝わる、鹿野山の大蛇に娘を奪われた長者を沢蟹が助けた、という話があります（『清和村誌』）。鹿野山の大蛇を象徴しているのは、蛇神を信仰する修験者のことでしょう。それに対して、長者の娘を救う沢蟹とは大蛇の渡来以前に鹿野山に住み着いていた先住の製鉄民族と考えられます。ここで、蟹とは「鍛冶」を表現しているのです。このように考えると、鹿野山を最初に信仰していたのは、蟹におとしめられた製鉄民、蛇神は彼らを支配した後続の製鉄民、すなわち慈覚大師をかたる天台系や熊野の修験道勢力だったと推測されます。

鹿野山の軍荼利明王が、蛇神に深くかかわるものだとすれば、それを信仰していたのは特に金属の生産や信仰と関係する修験道勢力だった、とみることができるはずです。

（『房総の伝説を鉄で読む』井上孝夫）

小糸町と藤原鎌足　（鎌滝）

高照院

専横（せんおう）目に余るもののあった蘇我入鹿を大極殿に斬ってからは、常に形影（けいえい）相伴うが如く、中大兄皇子を助けたものに、中臣鎌足があった。斉明、天智にわたって朝鮮半島出兵から、敗戦後の処理に当って、特にその力量を発揮した。その後、藤原一族の繁栄の基礎をつくった鎌足は、小糸町にいろいろの伝説を残している。

小糸町鎌滝の地名は、昔、滝山にあった一瀑布に、少年のころの鎌足が打たれて遊んだことから生まれたといわれる。また鎌滝の高照院には、鎌足が幼時に用いたという遺物が幾点か蔵されている。根本には鎌足桜という一大樹があり、鎌足が植えたものだといわれ、永く美しい花を咲かせていた。枯れた後から次々にひこばえが生じ、ごく最近まであったという。また、上高山円明院にある正観世音菩薩は、天竺の毘首羯磨（びしゅかつま）の作で、丈四寸、鎌足の守り本尊であったのを、僧行基が自ら別に丈一丈の観音の像を彫刻し、其眉間に之を籠め（こめ）祀ったものであるという。また寺伝によれば、円明院（廃寺：現根本大正寺に合祀）そのものが鎌足の創建したものであるという。これだけの伝説が重なると、どうも鎌足、小糸町になん

らかのかかわりがあるらしく思われてくる。

小糸町から山一つ向こうの矢那の高倉観音堂にも、鎌足伝説がある。高倉観音堂の縁日に曰く「本尊正観音は虚空より降り此山に留る。優婆塞（うばそく）徳儀大悲の現応を拝し大化二年丙午草創す。猪野長官謁（えつ）して之に祈る。遂に男子を生む。藤原鎌足是なり、故に白雉元年庚戌、鎌足広堂を構造す」と。

これらを総合すると鎌足は矢那の生まれで、その母親が根本または鎌滝から嫁ぎ、幼時母の生家にしばしば来て、これらの伝説を残したということになりそうである。元享釈書（げんこうしゃくしょ）には、鎌足は和州高市郡の人とあるが、歴史上有名人物で一番出生地のはっきりしない人である。それだけに、いつかこの地から出た人であることが、立証されないものでもあるまい。

（『小糸町史』）

立たされた仙人　（草川原）

三石山の山頂に役行者（えんのぎょうじゃ）の像が祭られている。高い一本歯の下駄とひざ小僧までの着物が印象にのこる。役行者は小角（おづぬ）と言って大和国葛城山に住み食断ちの行をしたり、滝壺で水に打たれたり、寸時も誦経（どきょう）をおこたることなく、その修行が完成されると行者は仙人となって飛行自在となるのである。

あるとき小角は、葛城山から吉野大峯の金峰山頂へ橋を架けようとする。この難工事のため多くの鬼神を使役させたところ、葛城山の主、一言主神（ひとことぬしのみこと）は顔がみにくいので夜間の工事だけ服したという。小角はそれを怒り、藤葛（ふじかずら）をもって一言主神を断崖に吊るしてこらしめたといわれる。かつて、雄略（ゆうりゃく）天皇さえも弓矢を捨てて、ひれ伏したという一言主神である。

このおそるべき呪術者（じゅじゅつしゃ）役行者は大和朝廷にとって油断のならない存在であった。そこで朝廷は、策略を用いて行者の母を捕らえ、いけにえにするとおどして行者を伊豆に流した。そのとき行者は、「甘茶の木」二本を笈（おい）に入れて落ちのびた。飛行自在の行者は、夜は富士まで飛んで修行を重ね、ある時は上総の山峰に飛来して行をされた。持って来た甘茶の木、一本は伊豆の天城に植え、一本は上総の山に植えた。それから銘茶を産するようになり、その頃からこの里を甘木（あまぎ）とよぶようになった。後に文字に当てて雨城（あまぎ）と書いた。今の久留里城の別名である。

三石山（縁結びの本尊）

ある春の日、三石山頂で行者小角が修行をしていると、若い男女が木陰で愛を交わしていた。それを見た行者は「はっ」として飛び立とうとしたが、一瞬神通力が抜

けて転倒した。久米の仙人のように雑念が横切ったのである。それから、「三石山頂縁結びの神」として立たされるはめになったと言う。　（『小櫃川流域のかたりべ』土橋幸一）

大友皇子伝説　（末吉）

君津市の小櫃地区には、壬申の乱に敗れた大友皇子が逃れてきたという伝説が残っている。『小櫃村誌』によれば、地元の人々にとってこの伝説は「信仰」に近いそうだ。明治期には小櫃地区の白山神社古墳を、弘文天皇の墓だと申請した事実が『君津郡誌』に記されている。大友皇子とは、いわずと知れた、天智天皇の皇子である。

白山神社古墳〔Webページ〕

大友皇子（後の弘文天皇）は、天武天皇元年（六七二）に起こった古代史上最大の争乱であった壬申の乱で、天智天皇の弟の大海人皇子（おおあまのおうじ）、後の天武天皇の軍勢と滋賀県の瀬田川で戦って敗れ、近くの山前（やまさき）という所で自害したといわれる。

弘文天皇落去伝説では、大友皇子は山前では自害せずひそかに逃げたことになっています。大友皇子が、その後辿った足取りは琵琶湖沿岸から瀬田川を下り、難波へ至り、そこから海で尾張国矢作‐伊豆国下田‐相模にたどり着き、最後は上総に渡り津浜（富津市）に到着したというものです。津浜からは陸路で矢那（木更津市）へ、そして小櫃川を遡り君津市俵田付近に御所を築いたといわれます。その御所のあとに建ったのが現在の白山神社ということです。このような伝説が成立した背景について『房総・弘文天皇伝説の研究』（千葉大学教育学部　井上孝夫資料）は、この地域が古代の製鉄民族「多（オオ）氏」の支配地域だったことと関連していて、大友皇子ゆかりの人々がオオ氏を頼りに房総に移住したと考えるのが最も理にかなっている。それはまた、「田原」地名の分布にはっきりと刻印されている。田原とはタタラであり、製鉄が行なわれていたことを示しているのである。だが、古代の末期から中世にかけて熊野修験道が流入し、その結果、オオ氏の祀っていた田原神は白山神へと姿を変えた。これが、現在の白山神社（君津市俵田）に菊理媛（くくりひめ）と弘文天皇が祀られている理由である。

大友皇子は、左大臣蘇我赤兄（そがのあかえ）等とともに小櫃地区に逃げてきたというのであるが、この地まで追ってきた大海人軍によって追い詰められ、ついには自害に追い込まれたという。白山神社の北を流れる小櫃川の支流「御腹川」は、大友皇子が腹を切って自害したところから名づけられたようだ。また白山神社（田原神社ともいう）は、後に、天武天皇となった大海人皇子の命により、大友皇子の霊を鎮める

ために建立されたとも伝えられている。そもそも「小櫃」という地名自体が大友皇子の亡骸をおさめた棺からついた地名だといい、小櫃末吉地区にある末吉神社には大友皇子に従って逃げてきた蘇我赤兄が祀られているそうだ。

神社の鳥居をくぐった奥が田原神（たわらがみ）ともよばれ、白山様と親しまれている白山神社で大友皇子をおまつりしてある神社です。石段をあがるとお宮の建物があり、そのうしろの森林になっている場所は前方後円型という古墳で、千葉県が史跡として定め守っている「白山神社古墳」です。

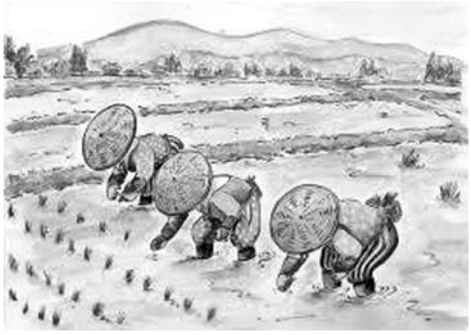
（「房総・弘文天皇伝説の研究」井上孝夫他）

蘇我殿の田植　（俵田）

久留里・小櫃のさくに「蘇我殿の田植」という話が伝えられています。この蘇我殿の田植えというのは旧五月七日のことです。この日には田植えをするものでないといわれ、久留里・小櫃のあたりのさくでは、この日に田植えをすることを忌み嫌っておりました。それにはこういう訳がありました。

現在、小櫃村には弘文天皇（大友皇子）の御陵や弘文天皇を祀った白山神社などがあります。蘇我殿とは、弘文天皇におつかえした左大臣蘇我赤兄だといわれています。

ある日、蘇我殿は弘文天皇をなぐさめるため、近郷近在から千人の早乙女を雇ってきて、田植えをさせて見せることにしました。この日、田植えは順調に進み天皇様も嬉々として、御覧になっておられたとのことですが、夕暮れになっても、決まりよく植え付けができなく、中途で終わりそうになりました。そこで蘇我殿は、西の空に沈む太陽に向かって「六ッの刻の位置にとまっていて下さい」と祈られ、なんとか、薄ぐらいなかにも田植えを終わることができました。ところがその晩、大雨が激しく降って、夜が明けて見たところ、昨日植えたばかりの苗が、全部流されてしまいました。



田植え〔Web ページ〕

さきほどの天皇様御覧のお田植えの日は、いつもより暑く、早乙女達はそのため熱射病にかかり倒れた人も大勢いました。この時の早乙女の笠をいけたところが小櫃村西原にあり、そこを笠塚といっています。また、この日たつまきが起こり大勢の人が死んだといわれています。

このように悪いことが重なったので忌み嫌い、この日もし田植えをすると悪いことが起こるといい誰も田植えをしませんでした。こんな訳で旧五月七日のことを「蘇我殿の田植」といわれるようになったということです。

（『上総町の民話』）

建暦寺縁起　（浜子）

原文を解読すると次の如し。

秦の始皇帝の阿房宮は一度の大火ですべて焼かれてついに跡形無くなり、魏の国を奪って晋をたてた武帝の銅雀台は稀にただ瓦を残すだけである。（同様に当寺は）昔七堂の境内であったが、天文年間に兵火に遭って、今は一箇の小さな寺院となっている。それについて上総国周淮郡浜子村浜子山、その昔鎌倉幕府執権北条家の崇信を受けて朝廷に執奏されたので、天皇が勅を出して元号を寺号とする。（そのため）今において建暦寺と称する。

建暦寺阿弥陀堂

これ寺号の由緒にして草創は、非常に古い。行基菩薩の開基であって、中頃より真言密教を伝えて伝灯を灯し（仏法の）火を掲げ、法流の流れを伝える。昔清和天皇第三の皇子・貞元親王は事情があって上総国にお下りになり、ついにその地で、お亡くなりになった。（天皇は）多田満仲、恵心院の源信僧都に仰せになり、親王の御菩提のためこの寺を造立なされた。これを中興とする。恵心僧都源信は六尺以上の釈迦像を刻んで本尊となされた。寺を釈迦院というのはこのためである。また釈迦三尊の木像・五条の袈裟をこの寺に伝えて重宝とし、木像は今千体堂の本尊とする。天正年中東照宮（徳川家康）の御朱印状で一五石の寺領を賜って法流の灯が再び輝き、法流が再び流れ続く。境内に蓮池があり、この辺りが親王の宮殿の跡と言う。また山門の内に銅像の地蔵菩薩が石の台座の上に足を組んで趺座していらっしゃる。誰の作と言われるか知らないが、忍辱の尊い姿に鋳造する巧みさはすばらしく優れている。また貞元親王の肖像画がある。錦の帷（とばり）で飾られ、黄金色の厨子に収められ、美しく威儀ある様子である。この親王のお墓は寺を隔てること十余町北にある。松の古木が五本も六本も緑色の雲を凌ぐほど伸びている。この場所を貞元村という。このお墓のほとりを馬上で通り過ぎる者があれば、必ず落ちる。これ千年の後の不思議である。この村にお供して来た人々の子孫がいる。又その地の字は昔の官職名を呼ぶ。雅楽と言い、掃部と言う類である。又毎年六月晦日、当寺に一つの法会が有って、親王の冥福のため回向する。その夜に老若を言わず男女を論ぜず手を挙げ足踏みして踊りながら（南無阿弥陀仏の）念仏を唱える。これは恵心僧都源信が上総国にお下りになった際に、一つには親王の菩提を飾り、一つには凡夫が煩悩を棄てて悟りの境地に入るためであるといって始め行いなさったかとみられる。今では関東諸国に広まっているが、当寺を踊り念仏の最初とする。今も踊り念仏の器物として二五の菩薩の面のうち三点が残っている。また千体仏

を安置する。源信の御作である。これは源信僧都が末世の衆生が過去・現在・未来の三世の（不徳の）罪を消そうとするために、三千仏を刻みなさって三箇所に安置なさった。一つは伊勢国安芸郡白子の里（三重県鈴鹿市）終南山悟真寺、一つは近江国滋賀郡堅田里（滋賀県大津市）海門山満月寺、いまひとつは当寺である。一千の仏像はいま百余体残っているところに近頃補って又千体仏とした。いま考えてみると貞元親王の事跡は典籍に所見がないけれども、村人の言い伝えも廃し難いところがある。当山の由緒は院主鏤慶師の物語に従って、とりあえず筆記することしかないのである。

文化十四年（一八一七）十二月二日　検校（塙）保己一

源（屋代）弘賢書

（きみつの古文書　久留里城址資料館古文書同好会）

九十九坊廃寺　（内箕輪）

古墳時代、小糸川流域を支配した須恵一族は、富津市内裏塚古墳などを築いたとされている。奈良時代の国の仕組みである律令制度の中では、都から赴任した国司の下で、周准郡といったこの地域を直接支配したのは、「郡司」に任命された須恵一族の後裔（こうえい）である日下部氏であった。その須恵（日下部）一族の中心地が八重原地区であり、それを象徴するものが、九十九坊廃寺である。九十九坊という名称は伝説からでたもので、たくさんの坊、即ち寺があったのではないかと思われる。

九十九坊廃寺跡

昭和八年、故大場磐雄氏等の調査により三重の塔跡が確認され、法隆寺式の伽藍（がらん）配置が想定されていたが、昭和六〇年度の調査によって、伽藍配置が異なることが判明した。現在、塔跡とみられる土壇上には、中央に中心礎石が残されていて、中心部には径約五〇㌢、深さ一四～二七㌢の穴が穿（うが）たれている。また中心礎石の西側には側柱礎石と推定できる五個の石が残っており、いずれも凝灰質砂岩で俗にいう房州石である。塔の平面の一辺は五・四㍍あることより換算して、高さ二〇㍍ほどの三重塔であったろうと研究家は推定している。

遺物としては、四葉単弁蓮花文の軒丸瓦、重弧文の軒平瓦、平瓦（布目瓦-ぬのめがわら-）等が出土している。これらの瓦は、当時の文化の中心であった大和地方のものと比較しても遜色ないといわれる。

建築年代は、出土した瓦の文様等から市原市の光善寺廃寺、千葉市の大椎廃寺等と類似しており、七世紀末の白鳳時代に郡司（郡の支配者）によって創建された寺院と考えられる。また、廃絶された時期は、調査の結果、創建後比較的早い時

期荒廃に帰したものと推察され、伝説を明確に証左しうる遺物、遺構も全くみあたらないという。

九十九坊廃寺に供給された瓦を焼いた瓦窯は、軒丸瓦は木更津市の牛ケ作瓦窯や、平瓦は市内の大鷲瓦窯で焼かれたものと推定されている。（「楽石雑筆」君津地方の遺跡調査）

「周淮（末）の珠名」と「真間の手児奈」（君津市・市川市）

わが国で最も古い歌集といわれる『万葉集第五〇葉』（巻九・一七三八～九）には、古代、この君津地方にいたという伝説の美女「上総（かみつふさ）末（すゑ）の珠名娘子（おとめ）」を詠んだ歌があります。（『君津郡誌　上巻』より）

しなか鳥　安房（あは）に継（つき）たる
梓弓（あつさゆみ）　末（すえ）の珠名（たまな）は
胸別（むなわけ）の　廣き吾妹（わきも）
腰細（こしほそ）の　すかる娘子（おとめ）の
その姿（かほ）の　端正（いつくしけさ）に
花の如（こと）　咲（ゑ）みて立てれは
玉桙（たまほこ）の　道行（ゆ）き人は
己（おの）か行（ゆ）く　道は不去（ゆかす）て
不召（よはなく）に　門（かと）に至りぬ
さし並ふ　隣の君（きみ）は
かねてより　己妻離（おのつまかれ）て
不乞（こはなく）に　鍵さへ
奉人皆（またひとのみな）　かく迷（まと）へるは
容艶（かほよきに）　よりてそ妹（いも）は
多波（たは）れてありける

反歌

金門（かなと）にし
人の来立ては
夜中にも
身はたな知らす
出でそ逢いける

この歌は高橋虫麻呂の作品といわれます。虫麻呂は、その人物についての詳細は不明ですが、伝説歌を多く手がけた個性的な万葉歌人として知られます。

周淮（君津地方）とのかかわりについては、藤原不比等（ふひと）の一子宇合（うまかい）が養老年間（七一七～七二四）に常陸国守として赴任し、安房・上総・下総三国の按察使（あぜち）に任命されるに及び、その属官としてこの地に赴いた可能性が指摘されています。これが歌を作るきっかけとなったのでしょう。

さて、歌の内容ですが、ここには自分の美貌を頼りに、限りある己が身をかえりみず、求められるまま多くの男性と戯れた娘子のことが書かれています。

珠名は、豊かな胸と蜂の様に細くくびれた腰を持つ美しい女性で、彼女が花のように微笑んで門に立っているだけで、

道行く人は彼女のもとに吸い寄せられる。隣の主人は、前もって妻と別れ、頼まないのに鍵（主婦の財産管理の象徴）までも進上してくるとあります。

珠名娘子

妖艶な珠名に惑わされ、これに群がる男たちの恋狂いの様子。また、そんな男たちに寄り添っては、みだらに振舞う珠名の姿が、浮き彫りされています。珠名は遊行女婦（うかれめ）のような存在だったのでしょう。遊行女婦は大伴旅人の周囲にもいたことが『万葉集』から知られ、彼女らは国府などにいて、役人たちの宴席に侍（はべ）って歌を詠んだりしていました。それなりに教養もあったと考えられ、虫麻呂がこの歌で取り上げている珠名もそうした遊行女婦の一人だったのでしょう。

ところで『万葉集』の虫麻呂の作品には、このあでやかな周淮の珠名とは反対に、素朴な清らかさを持つ美女、市川の真間（まま）の手児名（奈）（てこな）について詠んだものもあります。

その昔、真間山麓にいた手児名という娘子は、粗末な身なりで、髪もとかさず履（くつ）もはかずに歩くが、錦をまとった姫君たちよりも美しく、このため多くの若い男がこぞって求婚するが、結局どの男にもなびくことなく、ついに真間の入江に身を投じてこの世を去ったというものです。多くの男に言い寄られ、有頂天になって夜な夜な男と逢う珠名に対し、自分の美しさで世を騒がせてはならぬと、ひとり入水死をとげる手児名。房総における対照的な美女は、高橋虫麻呂の手によって劇的に歌の世界によみがえりました。都の人々も彼の歌に魅せられ、遠い房総の美女伝説に思いを馳せたことでしょう。なお現在、富津市二間塚にある内裏塚古墳の墳頂には、江戸時代末期に建てられた珠名の記念碑が残されています。

（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

高宕山縁起　（君津市・富津市）

君津市と富津市の境にある高宕山は、野生のニホン猿が生息していることで知られ、昭和三一年（一九五六）に国の天然記念物になった。

高宕観音

高宕山には、源頼朝伝説「雨乞いの鉄釜」や岩壁に建てられた高宕観音堂などがあるが、これに関して高宕山縁起（鈴木豊氏文書）には次のように書かれている。

爰（ここ）に上総国天羽郡高宕山大悲観音の由来をたづぬるに、むかし天平の頃行基菩薩この山に社保らを玉ひ、末世の衆生に結縁して大利をゑせしめがんために、彫刻し玉ふところの

霊像なり。その現益を被（ほっかむ）りしものあげて数ふべからずといえども、既に右大将頼朝公石橋山に軍破れ当国にわたりし時、この山にきたり玉い、源家興復を懇祈し尚良工を命じて黄金にて、おんたけ一寸八分の尊像を写し刻ましめ常におん肌を放ち玉わず、遂に志ざしをして、鎌倉に覇府（はふ）を開くに及び、是れひとえに観音の霊感によるものなりと信心肝に銘じ玉う。

ある夜、右将軍夢に謹厳美妙（きんげんびみょう）なる金色の大悲尊忽然とおんまくらべに影現（かげをあらわ）し告げて曰（いわ）く、汝が所願今は満足なりぬ。朕（われ）高宕山にかえり、遥かに後裔を護らんと玉うかとおもえば、夢さめ燈火清然異香馥郁（ふくいく）たるのみ。ここに於てかの守り本尊を当山へ奉送（ほうそう）し、尚若干の田禄を添玉う。又里見家鞠谷家（真里谷）等の崇敬も一方ならず田禄を附せられ、これによりて寺門の盛大をきわむといへども、物換り星移りて、いくたびの時勢変革を醸し、いわゆる桑田海となるのたとえか共に寺門も衰頽（すいたい）せり。これに加うるに再三の火災にかかりことごとく灰燼となりぬ。しかしながら本尊の霊験ますますあらたなり。ある時に狩人の火をあやまちて堂宇烏有に属し、あるときは雷火のためにことごとく焼失せり。本尊もこの厄にかかり尊容全く焼亡せりと衆人みな望みを失なへり。

然るに奇なるかな、老松の梢に忽然として留まり玉う。又あるときは火中より飛び去りて釜中の小水に依然たり。設入大火火不能滅（ママ・観音教）の金言空しからずと衆庶仰ぎ尊とめり。又天和三年の頃天下大旱（ひで）りて川流皆かれ、草木悉（ことごと）くしぼめり。郷民天にさけび地に呼ぼうの声巷に満つ。ある夜大悲尊夢に村の長に告げて曰（のたま）はく、汝知らずや我が奥の院なる釜中の青竜水を汲みとりて、田畑にてんじ散らさば必らず雨降らん。ゆめゆめ疑うことなかれ、との霊夢を被り速やかに村民に告げ知らせ一同に登山して、大悲のみ前に跪（ひざまず）き一心に哀愍（あいみん）を乞て夢想の如く計らいしに、果たして大雨降り田園を潤し五穀豊熟しぬれば、衆庶（しゅうしょ）の喜び限りなしといふ。

その余（よ：以外の意味）、育児除厄等の感応を冠りしもの其の数を知らず。故に遠近の緇素（しそ）参詣常に絶えず。然るところ当山は従前山林等を有し堂宇修繕に当つると雖（いえど）も、維新の際悉く上地なし永遠維持の目を失い、与常に之を憂うと雖も力及ばず、ある日、近傍の諸士等予を励まして曰く、かかる霊跡にして維持法たざるは実に遺憾に堪えざる所ならずや。その主任者にして発起せずんば誰か企図するものやあらんと、これによりて熟考するに護摩法は現当二世の大利を満足するの秘術なれば、永代護摩講を結び若干の支堂金を善男女につのり之を積累し、確呼（ママ）利生の法方をたて此の利金を以て永代護摩供の料と、堂宇保存

の資金に備えんことを欲す。
四方の諸君信心の人々、予が願望を助け玉はば予も亦丹精をこらし各家繁栄子孫長久の懇祈を抽（ぬきん）ずべくものなり。
干時明治十八年一月
千葉県上総国天羽郡田原村（現富津市田原）
満福寺住職
松本英順謹白　印
（『清和村誌』君津市三直　鈴木豊氏文書）

さよみの布　（糠田）

奈良東大寺の大仏は、今から一三〇〇年前に造られました。金銅の大仏は、鋳造されたばかりで金ぴかに輝き、そのお広めの開眼法会は、さぞや絢爛豪華に繰り広げられたことでしょう。このできたばかりの大仏殿を飾る際、一役買ったものに、君津地方から差し出された、紅の麻布がありました。

正倉院〔Web ページ〕

奈良正倉院御物の中に、浅紅布が保管されており、平成三年の正倉院展で公開されました。それは薄い紅色の帯状の麻布で、その一端に「大仏殿上敷紅赤布調一條　長四丈三尺　五副天平勝宝四年（七五二）四月九日」、もう一端に「東大寺」、反対側に「上総国周淮郡貲（し）調四丈二尺専当国司小掾（しょうじょう）正六位上上村主国嶋」と墨書されていました。この麻布は、貢納（こうのう）された時には鮮やかな紅色をしており、開眼法会には、布五枚を継ぎ合わせて広幅の上敷として用いられました。公開されたのは一条だけでしたが、あとの四条も宝庫に残っているそうです。

さて、銘にある周淮郡（すえのこおり）は君津のことで、昔、小糸川流域は周淮郡、小櫃川流域は望陀（もうだ）郡と呼ばれていました。当時の人々は、税として穀物や土地の産物を納めており、織物もその一つで調布と呼ばれていました。調布の銘に「貲（し）」とあるように貲布（しふ）で「佐與美乃沼能（さよみのぬの）」といわれ、糸が細く織目が密な良質な麻布の事です。この地方では「望陀のさよみ」として言い伝えられてきました。

「正倉院目録」の写真で見ると、天平一一年（七三九）の佐渡産の平織の白い麻布は、きめが粗く、ごわごわした感じがしますが、この浅紅布は非常に繊細でしなやかそうに見えます。一チセンの中に経（たて）・緯（ぬき）とも約二〇本という織り方で、通常の二倍の密度になっています。さらさらと着心地が良さそうですが、儀式用か遣唐使たちの貢ぎ物として使われたそうです。

ところで、一体どうして奈良の京から遠い片田舎の地に、高度な織物の技術があったのでしょうか。天智二年（六六三）「白村江（はくすきのえ）の戦い」に敗れた百済（くだら）の難民が、大勢日本へ渡ってきました。『日本書紀』には、天智五年（六六六）冬、「百済人二千人余を東国に移す」とあります。おそらく朝廷の命によって渡来人がこの地方に移住し、大陸の進んだ機織りの技術を伝え「さよみ」のような上等な布が産出できるようになったのではないでしょうか。当地方は「総（ふさ）の国」と呼ばれ、麻の産地として有名でしたから、特に選ばれたのかもしれません。総は麻の古い呼び名でした。

当時、市内の糠田は東大寺の封戸（寺社領）でした。紅布のほかにもたくさんの布が東大寺に納められています。東大寺の造営には『君津市史・史料集』にあるように、糠田や上新田からも手伝いの人々が貢進されています。君津と東大寺の結びつきはかなり強かったようです。ですからこの布は、東大寺の儀式用として糠田周辺で織られたのではなかったでしょうか。（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

防人物部の竜　（種泚郡）

私は時々まぶたに描く。今から凡そ一二二〇年の昔、天平勝宝七年（七五五）もまだ春寒い日、鹿野山麓のあばらやから、出かけていった一人の若者のことを。身なりも貧しく、弓矢と少しばかりの食糧袋を担いだ彼は、あづまの諸国から駆り出された、農民出身のにわか兵士の一人である。これから、ひと月以上の旅路を重ねて、遠く九州の辺土までやられるのである。

大君の命（いのち）かしこみ出で来れば
我（わ）ぬ取りつきて言ひし子なはも
種泚郡（すえのこうり）上丁
物部竜（もののべのたつ）

※折口信夫口語訳：天皇陛下の御命令で、為方（いたしかた）なく家を出て来たとき、わたしに縋（すが）りついて、かなしい言葉を繰り返しいう、いとしい人よ。

この歌は、『万葉集巻第二十』に採録されている防人（さきもり）の歌である。ただ、種泚郡（周准郡と同じ）とあるばかりだから、これが、小糸町の人であるとは言えないが、そうでないとも言えません。上丁は、「かみつよぼろ」と訓み（よみ）、二一才から六〇才までの男で、朝廷の課役に出たものの称である。

防人達〔Web ページ〕

老女帝斉明天皇の御世、皇太子の中大兄皇子は最高指揮官として筑紫におられた。百済王国救援のためである。日本兵二万七千人を動員したが、朝鮮の白村江（はくすきのえ）で、唐・新羅（しらぎ）の連合軍に大敗した。その後、西辺防禦

のため対島・壱岐、筑紫に防人と内乱、外寇（がいこう）のあった時、火を挙げて相報ぜしめた烽（とぶひ＝狼煙を上げる設備）を置き、水城を築いた。はじめ防人は東国に限らず、諸国から徴発していたが、後もっぱら東国から徴発されるようになった。東国の若者が勇武だったためであろう。

一時は成年男子（正丁）の三分の一が兵士として選ばれ、三年交替で九州に送られ、沿岸の警備にあたっていた。防人の人数は約三千人で、一度に一千人位ずつ交替した。

天平十年、帰国する防人達が、駿河国の駅を通過するに当って、その人数を調べて記載した駿河国正税帳に依ると、上総国二二三人とある。これは一度の交替人数であるから、上総出身兵はその三倍の六六九名位であったろう。物部竜がこの土地から遠く九州まで、一兵士として取られて行ったのは、この天平一〇年から丁度一七年後のことであった。年々二〇〇人余りの防人が、上総から出ていたのだから、可成り沢山の歌が防人達によってよまれていたろう。しかし、今伝わる上総の防人の歌は一三首、そのなかには、当時上総に併合されていた安房の防人達の歌も含まれている。参考までに隣郡出身の防人の歌を次に載せる。

旅衣八つ着重ねて寝（い）ぬれども
　なほ膚（はだ）寒し妹にしあらねば
　　望陀郡上丁　玉作部国忍（たまつくりべのくにおし）

道の辺の茨（うまら）の末（うれ）に延（は）ほ豆の
　絡まる君をはかれか行かむ
　　天羽郡上丁　丈部　鳥
　　（『小糸町史』）

周淮郡の郡衙伝説　（郡）

新御堂（しみんどう）の東の郡（こおり）は、古く律令の時代から小糸川流域の中心地であり、周淮郡の郡衙（ぐんが）は「郡」にあったとされてきた。近年の発掘調査の結果、郡衙と特定されるような遺跡は発掘できず、現在ではその北東の常代・外箕輪近辺にあったとの説も浮上している。奈良時代、各郡には郡司が置かれ、郡司には旧国造などの在地豪族が任命された。周淮郡の郡司に任命されたのは、かつての須恵国造の流れをくむ日下部使主（くさかべのおみ）一族と考えられている。そして、『万葉集』には、「日下部使主三中」とその父の歌が収録されている。

家にして恋ひつつあらずは汝（な）が佩（は）ける
　大刀（たち）になりても斎（いは）ひてしかも

右の一首は、国造の丁（よほろ）、日下部使主三中（みなか）が父の歌。

たらちねの母を別れてまこと我
　旅の仮廬（かりほ）に安く寝むかも

右の一首は、国造の丁、日下部主三中（『万葉集』巻二十）。三中は、この地からの防人の統率者に選ばれ、須恵の郡衙か

ら現在の市原にあったとされる国府に集合し、遠く北九州まで派遣されていったのだろう。

（栗原克栄）

古東海道と房総　（上総）

☆上総と下総

かつて、今の君津を含む房総中部は上総国（かずさのくに）と呼ばれていました。房総北部は下総国（しもうさのくに）といいました。この上総と下総はもともと総国（ふさのくに）といわれ、古代布の原料となる麻がよく繁殖し、その栽培に適した地域だったために、名付けられたといいます。

☆古東海道

ところで、房総半島の奥まった地域を上総といい、本州に近い地域を下総というのは、同じ関東で都に近い方から上野、下野ということと比べると少し不自然なように思われます。

しかし、これは古東海道が相模国（現神奈川県）の走水の海を渡って房総に上陸し、現在の市原市にあった上総国府を通って更に常陸国（現茨城県）の国府へ至る経路を通ったためです。古代東国経営の交通路の一つ東山道（あずまのやまみち）が「山道」であったとすれば、東海道は正に海上を通る「海道」であったわけです。

☆日本武尊の伝承

この古東海道の経路を示す話として、日本武尊の東征伝説があります。この伝説は、尊が東征の途中相模国から走水の海を渡り房総へ入る途中、渡神にさえぎられ、后弟橘媛が海に身を投げて暴浪を鎮めたために尊は無事に対岸に着くことができたというものです。

この日本武尊は、景行天皇の皇子とされますが、有史以来五、六世紀に至る大和朝廷の全土征服の歴史を象徴的に現した伝説上の英雄であるといわれています。

☆地名起源説

今の木更津・袖ヶ浦の地名の由来はこの日本武尊の神話から採られています。尊が上陸後、弟橘媛の死を悼み、なかなかこの地を立ち去ることができなかったことから「君去らず」が生まれ、それが「木更津」となったといいます。

また后の衣が流れ着いた所を「袖しが浜」と言ったことから「袖ヶ浦」の地名が生まれました。

なお、「君津」のいわれははっきりしませんが、文献的には明治一一年（一八七八）に現在の木更津第一小学校の前身「君津小学校」によって「君津」が初めて使われ、その後、望陀・周准・天羽三郡の郡役所が明治三〇年に「君津郡」と改称して以来君津の名が一般化しました。これも日本武尊の伝承を参照したものと思われます。

☆末の珠名と真間の手児奈

このように、古東海道が海路を渡って房総に入ったため、その入り口となった上総国周准郡（現在の小糸川流域の君津・富津市近辺）には、港町が形成されていたと考えられま

す。『万葉集巻九』には末の珠名という遊女と思われる一女性がよまれています。この末の珠名は、いわば妖艶な美女で行動的な女性としてよまれ、同じく『万葉集巻十四』に質素な身なりをした清純な乙女としてよまれた真間（現市川市の真間）の手児奈と好対象を示しています。

この珠名と手児奈の伝説は、奈良時代以前の東京湾にそそぐ河口付近の水上交通の要津（ようしん＝交通・商業上の重要な港）の面影を今に伝えるものといえます。

☆新東海道

宝亀二年（七七一）、武蔵国（現神奈川県の一部と東京都、埼玉県に亘る）が東山道から東海道に編入されることとなりました。その理由は、同国内に四つの屯倉（みやけ＝天皇や朝廷の直轄領）が置かれ、現在の東京都府中付近を中心とした南武蔵の開拓が進み、相模国から武蔵・下総・上総・常陸へ旅する者が多くなったためといわれます。

寛仁四年（一〇二〇）、『更級日記』の著者菅原孝標の娘は、一三歳の年の九月、上総国守であった父の任期を終えて市原の上総国府を立ち下総から太日川（現江戸川）を渡って武蔵国に入りおよそ九〇日を費やして京に帰っていますが、その時はこの道を通ったものでした。この日記の初めには、一一世紀ごろの東海道の景観が紀行風に描かれています。

相模から武蔵に入り下総から常陸への新ルートが開かれると、上総への古東海道とは逆コースで南進するようになりました。そのため、下総国府から上総・安房に向かう路線は東海道の一支線となり、これ以降東海道の要路から外れてしまいました。しかしその後も上総・下総の名称はそのまま残されることになったわけです。

（「坂田自治会報」色部昭男）

七里川の地名と湯ヶ嶽鉱泉　（黄和田畑）

房総丘陵の中央を貫く小櫃川の上流に字七里川がある。両岸絶壁関門のごとく奇樹老松が、その間に生い、絶景の地。久留里城下から天津村（現鴨川市）に至る道に沿い、その間の里程およそ七里のためこの名がある。

付近には札郷の原生林（東京大学演習林）・湯ヶ滝がある。湯ヶ滝は、川床から硫黄を含む鉱泉が湧出し、近世から湯治場として知られていたという。日蓮が入浴治療したという伝承が残る。上人（かみひと）沢・修行畑・閼伽井（あかい）・袈裟掛松など、ゆかりの地名が伝わる。

七里川渓谷〔Web ページ〕

近代以降同地で七里川石の採取が行われ、近在で道普請・石宮などの材料として使われた。また黄和田畑から四方木（現天津小湊）に入った左奥には白岩の断崖があり、秋には

紅葉の名所となっている。

「湯ヶ嶽鉱泉の由来記」によると、

抑々上総国望陀郡小櫃川上流黄和田畑村字湯ケ嶽鉱泉は人皇四十九代光仁天皇之御宇宝亀二辛亥年不思議法師安房国長狭郡清澄山、上総国望陀郡蔵玉村星福山両山草創の砌り当所より拾町程川下宇堂沢へ名地蔵を建立し、その節当温泉を試み給い諸病の薬湯なりとて土人へ教え且つ大日薬師の両如来を建立し給い（この頃は蔵玉村なりしが天文十二年に分村して黄和田畑村新田湯ケ滝と称す）夫より小風呂を立て入湯する者ありけり。

文永元甲子年当郡高水村井伊権右衛門上関村本吉太郎左衛門正久之両人当所に笹屋を立て入湯なし居りしに、日蓮上人東条左衛門と争い同人の為、房州長狭郡小松原にて上人数ケ所の傷を受け、療養の為この小屋に忍び入り入浴しながら同夜法華経を読誦し、題目を唱え、三十日間入浴して全快する。

当所近傍に上人沢・あ伽井・修業場・袈裟掛松・鬼之沢・団子渕・閻魔塚等皆上人の謂より地名と成り、又天正八庚辰年安房国館山城主里見安房守義頼公この鉱泉を呼浴し給い、奇効を御感ありしという。

（『きわだ風土記』）

諏訪神社と秋元の名の起源　（清和市場）

糠田部の千万呂が、アサ布を遠く大和政庁に納めに行った宝亀八年（七七七）から、丁度七〇年後の嘉祥元年（八四八）に、諏訪神社が建立された。

神社由来書に依れば、当時この地方の領主、左衛門尉藤原政常の孫に、左衛門次郎政業という人があったが、この一族、もとは信濃国小笠原の産で、この政業が人皇第五四代仁明天皇の御宇（ぎょう）、嘉祥元辰年に、信濃国諏訪明神を市場村に遷し祭った。一は万物の始で、第一の場であるという意味で、一場と言ったのだが、後に、市場村の字をあてるようになった。古来、小糸谷（こいとさく）三〇余村の鎮守であり、小糸町のうち鎌滝・大野台・長谷堂・庶子崎・金岡・沢巻・間野・大月・深井・森戸・八木・行馬・法木・長石・根本・蓑和田・大谷・塚原・高原・駒久保・長和田・中島のうち堀之内等、二二村の人々はその氏子である。

上諏訪神社

その後一一年、文徳天皇を経て清和天皇の御宇、御即位式大嘗会（だいじょうえ）が催されるに当って、各国郡に神田を作らせ、一一月に至って勅使を下して、其毛（それ）を見、稲穂を抜き取り、その穂を撰んで奉ったが、天皇は穂使が上総国より献（たてまつ）ったところの稲穂を、実に珍実であ

ると大へんに悦ばれ、これまことに「秋の元」なりと仰せられた。清和天皇の御時、貞観元年（八五九）一一月中の卯の日のことであったという。これにもとづいて、それ以後、この小糸町を中心とする地方一帯を「秋元」と呼ぶようになったのである。

（『小糸町史』）

御狩祭　（清和市場）

由緒によると、「諏訪神社起元第五十四代仁明天皇嘉祥元辰年（八四八）信州諏訪大神の御分霊を此地に奉祠し、上下宮両社を剏建（しょうけん）せり」と言われている。

猪鹿切祭（下諏訪宮神前）

当時は土地未だ開けず、人口は希薄で、猪や鹿の作物を害することは一方ならず、農民は之を駆除されることを、当社に祈願しました。時々の領主や地頭に於いても郡民に令を出し、かつ鹿狩奉行を命じて之を指揮させ、毎年一一月二六日より一〇日間郡中を挙げて猪鹿（しし）を狩猟し、一二月五日、之を神前に供えて祭典を行い神恩に感謝した。これを御狩神事と言う。これは諏訪神社創立以来の古例の一で、今日に至るまで執行し続いている。

一二月五日、通称猪鹿切祭（ししきりまち）は、猪鹿新穀の祭で、諏訪の氏子の掴み喰いと五人組・五本の指（五本箸）。猪鹿（しし）とは、猪・鹿など動物の肉の総称らしい。御狩祭は新穀祭も兼ねている。近郷近在の農民達から、当年とれた五穀が神前に多数奉納される。奉納された五穀に依り御狩祭の早朝、近在の子供達に赤飯（通称茶の子と言う）が諏訪神社の神前にてふるまわれる。

御狩祭の猪鹿切りは、午後祭事を行う。四つにおろされた猪鹿肉（現在は鶏肉）を「オカモチ」におさめて上諏訪宮の神前に供へて、上諏訪感謝報告の神事を行う。行事が終わると下諏訪宮神前（通称東の宮）に於いて調理献饌される。神前に供へて御祓いの儀を行う。そして調理する肉を五ツの板のお盆にのせそれを榧（かや）の椀（椀とは放射状に五本枝の出て居る榧の木を切り、藤の皮をはいだもので、ざるの様に編んだお椀）に乗せて参列者代表の手を経て宮司自ら捧げる。宮司による御狩祭の祝詞奏上、つづみ太鼓の奏楽とともに紅、白、青の餅（当年とれた新穀にて作られたもの）をまき、つづいて奉納してある猪鹿肉をうばい合い（このうばい合いは正に大勢なのでけんか同然である）家に持ち帰る。

肉と餅を持ち帰った人の家は健康と家内安全がもたらされると信仰されているので、我先にとうばい合いとりあって家路に急ぎ帰る習慣が今も残っている。江戸時代に於いては此の行事を通じ、尚武の精神高揚のため及び行政のためにも

力を注いでいたという。この行事は今現在なお続いている。

（『清和村誌』）

小山野の田植如来　（小山野）

小山野にある西了寺をテーマにした民話に「小山野の田植如来」がある。この民話の出処をたどると『君津郡誌下巻』寺院・西了寺の項に行き着く。建立は寺伝によると、恵信僧都が阿弥陀如来を刻して本尊とした事に創まると伝えている。この項を（「千葉県浄土宗寺院誌」（昭和五七年刊）より引用すると概ね次のとおり。

当山は、五六代・清和天皇第三皇子が、元慶八年（八八四）中秋の頃、上総国周集郡に配流され、延喜一〇年（九一〇）孟春一六日薨去（こうきょ）されるや、御母女皇は嘆きの余り、京都比叡山天台座主・良源慈恵僧正の弟子で日本浄土教の先駆・源信和尚恵心僧都(げんしんかしょうえしんそうず)を天録年中（九七〇～九七三）に北嶺より下山せしめて、親王の菩提のためこの地に一宇を建立したのを始めとする、と伝えられる。僧都帰洛の後、本尊を守護するも住僧ないまま朽廃してしまった。

その後、明暦年中（一六五五～五八）頃、深川靈巖寺開山・雄譽靈巖上人が当山を再建し、弟子・生譽檀風上人を開山として浄土宗寺院とし、今日に至っている。

当山の「山号」にまつわる伝承を紹介すると、此里に井沢何某という夫婦があり、共に深く当山・阿弥陀如来に帰依していた。ところが、その頃、疫病が流行し、夫婦は病床に臥したままで、田植もできずにいた。ある夜、夢枕に一老僧現れ、「汝、病中にて、また妻も病に臥れ誠に不便なり、故に今、汝の作れる田残らず植付く、必ず案ずるなかれ、病は近日中に全快すべし、ただし、全快の上は西了寺本尊を一向に信心すべし」と云い終えるや老僧は消えた。四、五日して病は、小康を得たので田を見に行くと、田植のすんだ青田が見事に繰りひろげられていた。さっそく寺に参詣したところ、本尊阿弥陀如来の腰から下は、泥に塗（まみ）れていたという。檀風上人はこれを奉拝し末代まで残るようにと、「照明山」を改め、「夜田植山」（本尊・田植如来）と号し、今「植」の一字を略して、「夜田山」と号するようになった。これが夜田山西了寺の縁起である。

田植如来（千葉ふるさとむかし話）
〔H4.2　千葉興業銀行〕

なお郡誌には、「…斯くの如く霊驗顕著なる尊像なれば命

により元禄六年（一六九三）江戸城西丸に於て開扉し徳川将軍家の夫人これを禮拜し此時赤地錦葵紋章の帷を賜はりしといふ。」との記述がある。将軍綱吉夫人より御下賜された三尊入座（本尊の阿弥陀如来と両脇の観音菩薩で外は漆塗り・内は朱塗り）の葵の紋章付帷は寺宝として現存する。

また、一軒檀家とされる金谷家には、安政二年（一八五五）、当時の住職東誉の書いた文書「夜田山最（ママ）了寺　舊記（きゅうき）」が保管され、西了寺も貞元親王や恵信僧都由縁の古寺と言われる。原文より抜抄すると、

元慶八年中秋の頃、上総国周准郡に配流され延喜十年孟春十六日薨去（こうきょ）さるるや御母女皇御歎きのあまり日本浄土教の先駆となりし名高き僧叡山横川首楞厳院（しゅりょうごんいん）源信和尚（かしょう）恵心僧都をして天録年中に北嶺を下山せしめて親王菩提の為に当地に一宇を建立せしめたり。

恵心僧都は当山に草庵を結びて昼夜朝夕親王追福の為に誦経念佛に精進数日を送れり、その間千体の佛像を彫刻し小堂を建立す、今浜子村千躰像是なり、…」とある。

（「千葉県浄土宗寺院紹介」「周南ふるさと誌」）

親王伝説の村「貞元」　（貞元）

小糸川南岸、上湯江の東に位置する貞元は、貞元親王伝説の地である。地元には、典型的な貴種流離譚（きしゅりゅうりたん）と言うべき貞元親王の伝説が言い伝えられている。

貞元親王が都にあったとき、この地出身の阿万（おまん）という宮仕えをしていた女性があり、阿万が暇乞いをした際、親王自身も後を追ってこの地に下り、やがてこの地で死去したという伝説である。

貞元親王墓

また、貞元親王が都から持参し植えたことから、この地では、蓮華草のことを「親王ぐさ」と呼んでいる。そして、貞元字下宿の道路に面した小高い場所には、貞元親王の墓、と伝えられる石碑があり、円柱状の石碑には、

右側：延宝六戊午七月十五日
正面：清和天皇第三皇子
　　貞元親王御廟
左側：判読困難ではあるが「施主平野権左衛門」と刻されている。

貞元親王は、六国史最終の書である『日本三代実録』によると、清和天皇の第三皇子として、貞観一五年（八七三）に親王となり、仁和二年（八八六）には一八歳で上野国（現在の群馬県）の国司に任じられたと記録されている。さらに、一二世紀頃成立と推定される『日本紀略』の記録には、延喜九年（九〇九）に近江の国で死去したとある。

同じく貞元親王の伝説に関係する市内浜子の建暦寺には「建暦寺縁起書」が残っている。文の作者は『群書類従』の編者として有名な塙保己一（はなわ　ほきいち）である。塙保己一はその縁起書の文末に「今案ずるに貞元親王の事蹟、典籍に所見なしといえども」としたあとに「俚民（りみん）の口碑（こうひ）廃しがたき所あり」と記している。

（栗原克栄）

愛宕山勝軍地蔵　（愛宕）

勝軍地蔵尊

社伝によれば愛宕神社は、坂上田村麻呂によって創建せられた京都の愛宕神社を、天永二年（一一一一）にこの地に勧請したと伝えられる。即ち約九〇〇年前、軻遇突智命（かぐつちのみこと）を主神として埴山比売命（はにやまひめのみこと）、水波能売命（みづはのめのみこと）を祀られ明治期まで愛宕大権現と称した。これらの神は雷神、火の神、縁結び、安産、更に雨乞いの神として尊崇せられる。社殿脇に摂社・軍神の勝軍地蔵あり。中世戦国時代、里見当主にして久留里城主、里見義堯公は北条氏康と永禄年間（一五六〇年前後）に合戦を繰り返した。

ある夜、夢枕に「吾は乾に当たる場の者なり」と告げられ戦略を授けられる。それ以後の戦いにさしもの北条勢も打ち払われた。これは霊神の賜なりと、城の乾の方向の当地山中に登って草木の間を尋ねると、小堂と神像が見つかった。即ち夢に逢う所の霊神なりと直ちに当地山頂に社殿を造営し、愛宕大権現と崇め、三百石を寄進された。

勝軍地蔵については、坂上田村麻呂と関連した次のような話しがある。一説によると、今から凡そ一千年の昔、桓武天皇の御代（七八一～八〇六）に坂上田村麻呂という武将がいた。勇武であってしかも温和な面もあったとか。時に桓武天皇に召し出され、鈴鹿山に住みついている悪賊退治を仰せつかった。田村麻呂は、相手が悪賊だから、退治することは容易でないと考え、京都の清水観音（千手観世音菩薩）に武運祈願をしてから、鈴鹿山に向かっていった。賊共は、種々の戦法を用いてくるので、進撃することが極めて困難だった。田村麻呂は心に観音さまを念じながら押し進んだところ、敵は遂に鉄門に入り抵抗したので、味方の矢は尽きてしまい進退ここに極まった。

この時、田村麻呂は遥か京都の方向に向かい、清水観音に願掛けした。すると忽ち頭上に白雲が漂い異常な光が輝くと、不思議にも傍らに千本の矢が置いてあった。之即ち清水観音のあらたかな御助力であると、将卒一同俄かに勢いづき激しく敵に矢を放ったところ、忽ちその矢も尽きそうになってきた。この時、いずこからともなく一人の小坊主が現れて、敵陣へ射込んだ矢を拾い集めてきてくれた。これを繰り返して

いたので矢は尽きることなく、とうとう敵もたまりかねてだんだん後退し、穴に逃げ込もうとする。すると、その小坊主が穴の前に立ちふさがり、逃げ込むことが出来なくなった。その上倒れた敵を片づけて、進軍を助けてくれた。流石の悪賊も降参してしまった。

田村麻呂は、このことを天皇に申し上げ、直ちに清水観音に御礼に参上したところ、境内にある地蔵菩薩の御足に泥がついており、御けさの房に矢羽がささっていた。これをご覧になった将軍（田村麻呂）は、陣中に現れたあの小坊主、さてはこの地蔵であったのか、あな有難や尊しやと、手を合わせて伏し拝んだという。

田村麻呂が、このことを天皇に奏上したところ、「地蔵菩薩をその方の守護神とすべし」との勅語があった。それ故に将軍を祀る愛宕神社の境内に地蔵尊が合祀され、勝軍地蔵とも呼ばれるようになったようだ。（周西マップクラブ）

源頼朝と君津　（周淮郡）

源頼朝は、我が国に初めて武家政権を打ち立てた人物としてお馴染みですが、この快挙の裏には房総の地での奇跡的な復興の日々がありました。

治承四年（一一八〇）八月、平氏打倒の兵を挙げた頼朝ですが、石橋山の合戦で敗れると、真鶴から海路を安房へ渡ってきます。そしてこの房総で千葉氏や上総氏の援助を受けて再起に成功、兵力を増しながら、一〇月には念願の鎌倉入りを果たすのです。頼朝が安房に上陸したのち、どのように房総を北上したのか、その進軍の経過については関係資料も少なく、はっきりとはわかっていません。しかし、頼朝にまつわる伝説は房総一帯に広がっており、君津市でも、その通過伝承が数多く残っています。

例えば清和の植畑や周南の小山野には三百騎坂と呼ばれる坂があります。これは頼朝の兵三百騎が峠越えをしたため名付けられたといわれます。植畑では他にも頼朝が休息した「ほっと井戸」という場所があります。この井戸の裏の方には「後見坂」という非常に険しい坂があります。今では、誰一人利用する者がいませんが、唯、墓参りをする人は登って行くようだと聞いています。この「ほっと井戸」で一息ついた頼朝の軍は、勢揃いをしてこの坂を登り、世を偲んだそうです。高宕山とも、大変お世話になったこの村とも、別れるのかとふり返りふり返り見て、思い出深い溜め息をつかれ武運を祈った坂であると云い伝えられています。宿原の三島神社にいたっては、頼朝の従者たちがこの地に根づかせたという棒術（千葉県指定文化財）が祭事として伝わっています。

頼朝およびその一行の戦勝祈願については、鹿野山神野寺をはじめ、八重原の塞（さい）神社、人見の人見神社、郡の春日神社、三直の八雲神社などにいい伝えがあります。

塞神社では頼朝が記念に松を植え、幕府を開いたのちは、

「道祖神」と書いた扁額を納めたといい、人見神社には頼朝が安房へ向かう海上で一路の平安を祈願し、上総を通過する際にも立ち寄って太刀を納めたという話が残ります。春日神社には臣下（しんか）の土屋宗遠（むねとお）、岡崎義眞（よしざね）が願文を奉納し、その付近には「頼朝館」が存在していたともいわれます。八雲神社にも頼朝の命を奉じた下河辺（しもこうべ）忠善、石黒正智が祈願文を納めています。面白いのは神社近くに、この両家臣の名に由来する正智院忠善寺があり、これが明治の神仏分離まで別当寺に位置づけられていたということです。

忠善寺

また、外箕輪には白旗台という字（あざ）がありますが、これも頼朝勢が白旗を掲げて、市域の周東・周西から士兵を募ったことに因んだものとされています。小糸の大井に入った頼朝軍は、すでに千騎になっていたといい、千騎坂と呼ばれる坂があります。近くには小さな泉があって、そこは頼朝が鬢髪（びんばつ）を梳（くしけず）ったので鬢盥（びんだらい）池という名がついています。

君津市周辺をみても、富津市上（かみ）には百坂（ももさか）、袖ヶ浦市上泉の房根（ぼうね）から川原井の根澄山に向かう途中には万騎坂があります。つまり坂の名だけをとっても、頼朝が西上総を北上していくなか、百が三百、三百が千、千が万と、兵数が膨らんでいく様子がうかがえます。もちろん、これらは頼朝の進軍に際してというより、当時房総を支配した上総氏の命令によって、各地から集まった兵の数を示しているという見方があります。頼朝自身が陸路によったか、あるいは東京湾を北上したかは意見の分かれるところですが、英雄の足どりは伝説となって、今もひっそりと郷土に息づいているのです。

（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

三百騎坂　（小山野）

小山野には三百騎坂という坂がある。この坂の中腹まではだらだら坂になっている。そして四、五軒の家もあり畑などもあるのでそう淋しさを感じないが、家がなくなると急に坂がけわしくなっていく。山と山とに囲まれて道巾も細くなり、曲がりくねって頂上まで続いている。こゝは高いので天気のよい日には富士山がよく見える。

昔、源頼朝が兵をあげたときに此の坂を通ったといわれている。頼朝は村人に頼んで、この難所に道を作って貰った。源氏の大将と聞いて村人は、我れも我れもと山刈りに、道作りにと喜んで参加したそうである。その道作り作業は幾日かかったかは不明であるが、その時に集まった村人の数が三百

人、かり出された馬の数が三百頭だったので誰云うとなく三百騎坂と呼ぶようになったとか、頂上に登りつめた処で兵を数えて見たら、三百騎残っていたというので此の坂を三百騎坂というようになったということである。

明治二、三年頃までは、佐貫方面へ通ずる主要道路であったと近くの老人から聞いた。坂を登り詰めた直ぐ右に「道六神様」という小さな石宮があった。道六神とは道祖神とも云って道の神だそうで、よく村境等に見られる。疫病や災難が村に入って来ないように守っていてくれるという有難い神様で、こゝでも村境にあった。この峠を降りると吉野へと続くのだそうである。

（『ふるさとの伝説　清和・周南』奈良輪　美智野）

棒術と鞨鼓舞　（宿原）

大山祇命（おおやまつみのみこと）を祭神にします三島神社は、源頼朝に関わる伊豆国三島神社の分霊を勧請して、創建したという古社です。九月の最終日曜、または、一〇月の第一日曜に斎行される三島神社の祭礼で、旅名地区が羯鼓舞（かっこまい）を他の豊英・宿原・奥米の三地区が棒術を伝承しています。

棒術は、源頼朝が真鶴（神奈川県）から海を渡って安房国（千葉県）に上陸。海岸沿いに北上して君津を通過したさい何人かの家来がこの地に土着し、武道に励みながら、三島神社に奉納したのが始まりとされ、豊英には丸橋流、宿原には蓮見流・田原流、奥米には朝山一伝流が伝承されています。本技は、六尺棒、刀、太刀、鎌、扇子などの武具を持って相対し、気合い鋭く技を展開するものです。

棒術

羯鼓舞は、かつて日照り続きになったとき、農民がこの社に集い雨乞いを行ったところ、突然竜神が現れ、慈雨を降らせたという故事にならって、獅子を竜にたとえて、舞いにしたものです。

羯鼓舞

羽毛を密生させた竜頭を、頭につけた親獅子・中獅子・牝獅子の三体が、ササラすりを四方に配し舞うもので、ササラを打ちならす音は雨音を表し、花笠の垂れ糸は雨滴にたとえたものです。哀調をおびた笛の音に合わせ、腹部につけた小太鼓を打ちながら踊る姿は、優雅の気に満ちており男性的な棒術と好対照です。

（周西マップクラブ）

三尺坊信仰　（山本）

君津市山本に秋葉神社があります。

社殿の中には、参拝者が奉納したという三尺（約九〇㌢）の棒が沢山並べられています。この辺りでは珍しい民間信仰です。愛宕神社と共に火防の神と言われます。

遠州の秋葉様が本社で、社伝によりますと、本社は秋葉山が古代から信仰され、神格化されて、火防の神とあがめられ、「秋葉の火祭り」の特殊神事が伝承されて来ました。三尺坊は、永仁二年（一二九四）、信州戸隠で生れ大変修行を積んだ真言宗系の修験者で、このお社に来て仕えた後、このお社に祀られるに至ったという。

秋葉神社

有名な火祭りの行事があり、清水の次郎長につながる、侠客ばなしの一つの舞台で、戦前は静岡県の県社だったそうです。祭神は火之加具土の神で、元の神は愛宕神社と同じです。山本の秋葉神社もそこからの勧請で、分社と思われます。

三尺坊さまの信仰とは、何でもお願いすれば、神様はそれをかなえてくれるそうですが、それには約束ごとがあって、この社にお供えしてある三尺棒を一本お借りして来て、神棚にお祀りしてお願いごとをすると、きっと願いごとがかなうそうです。大願成就の際は同じような三尺棒を一本そえて、二本にして三尺坊様へお返ししてお礼するのだそうです。もともとは、火災除けの祈願のために一本棒をお借りして行って、一年間火災から免れた時は二本にしてお返ししたということから始まったもののようですが、いつの間にか何事によらず祈願するようになったというお話です。

戦前には、草競馬もここで催されたそうで、今も竹林の中に馬場の遺構を残して、当時の賑わいを忍ばせています。この三山神社にも古くから奉納された三尺棒が沢山残っているそうです。古老の話によりますと、この古三尺棒さまの付近から板碑（青石塔婆）が二面も出たといいますから、少なくとも室町時代の頃から何らかの信仰があったものと考えられます。

いずれにしても、遠州の秋葉神社は三尺坊と深い関係があり、君津の山本の秋葉神社も三尺坊とつながっているので、おそらく本社から受け継いだ信仰と考えられます。山本の秋葉神社のお社には白狐に乗った烏天狗の像が祀られています。天狗とは、想像上の霊力者で、高山、深山に住み、あらゆる神通力をそなえ、その姿として鼻高天狗とか烏天狗とかに形象化されているのだと言われます。

明治になって神仏分離条例により、三尺坊の祭は秋葉神社

を離れて、かつての別当寺の秋葉寺に移されたといいます。ところがこの寺も廃され、現在の秋葉寺は新たに作られたものであるのに、今もって三尺坊と呼ばれているとのことです。

（『尾根は囁く』奈良輪美智野）

周東景久　（西粟倉・上）

「諏訪神社由来書」という古写本によると、周東景久は平常胤の後裔（こうえい）となっている。後亀山院永和の頃、下総国千葉介常胤の後胤（こういん）東七郎平胤国が、粟倉村八幡宮を再建立、後深草院御宇（ごふかくさいんのぎょう）宝治二戊申（一二四八）、真里郷に領地を定め、胤国より五代の景久が、応永二乙亥（一三九五）下総之州から移って来て周東・周西の分郷を定め周東左衛門尉と称して、原村に在陣したとある。この粟倉八幡宮というのは、粟倉村の氏神の一つで、今も村役場と道を隔てた、秋元小学校の校庭に接して鎮座している。まことに、ささやかなお宮であるが、今から六〇〇年前再建立されたものである。

八幡宮（現西粟倉公会堂）

棟札には、

「奉再造此八幡社壇者祖母尼正善始新造之而星霜積及破損之時弥七郎平胤重」と記され、

右上に

「得道来不動法性示八正道□権述、皆得度脱苦衆生、故号八幡大菩薩」とあり、

右下に

「勧進金剛干宥源、大工五郎左衛門宗吉封」

左上には

「永和四戊午八月十五日奉加平胤邦家尼奉修造事」と記されている。

この棟札から胤国とあるのは胤邦が正しく、また八幡宮の再建立は胤邦未亡人の意志によって、子の胤重がやったもののようである。とにかくにも、その頃下総の千葉氏の一族が真里郷を支配し、周東にまでその勢力が及んでいたことがこれでわかる。そして、胤国から五代目の景久になって、原村に陣屋を構え周東氏を称したのである。このころ鎌倉では、京都の幕府の真似をして、主師を公方と称し、執事を管領と呼び、国持ち大名を関東八家などといって外見をととのえたが、実は上の者の統制力は次第に衰え、世は乱れかけていた。

足利満兼の死後、その子持氏が公方となり、山内上杉の憲定が管領となったが、間もなく犬懸（いぬがけ）上杉の氏憲が管領となるなど、両上杉が鋭く対立した。憲定の子憲基は裏から公方持氏を動かし、氏憲（弾秀と号す）を圧迫すると、氏憲は京都の義嗣と謀って反をくわだて、応永二三年（一四

一六）一〇月二日夜、持氏の館をおそった。持氏は鎌倉からのがれて、駿河の今川氏をたよる。この反乱で関東の武士には弾秀に心を寄せるものが多かったが、将軍義持が弾秀の台頭をおそれて、駿河の今川範政らに命じて持氏を助け、鎌倉を追討させると、弾秀側は動揺して大かた心変わりし、敵方に加わるという有様で、ついに翌応永二四年一月一〇日、弾秀は自害してしまった。持氏が小糸村内の大谷を、鶴岡八幡宮に寄進したことが、集古文集にあり、

奉寄進
上総国周東郡大谷村（岩佐左馬助入道跡）事
右為天下安全武運長久所奉寄附之状如件
応永二十四年正月一日
佐兵衛督源朝臣　判

とあるが、この動乱のさなかに、鶴岡八幡宮に寄せて、武運長久を祈ったものと見える。

旧籾山村(現上)春日神社には、周東左衛門景久奉造立云々の掛仏があり、その裏面には応永二五年と誌るしてあり、これは弾秀の乱に大谷村を鶴岡八幡宮に寄進した持氏にならって、掛仏を春日神社に奉納したものと思われる。

その後、永享一一年（一四三九）二月一〇日、持氏が三浦時高にせめられ、鎌倉の永安寺で自害するに及んで、景久も主家と運命をともにしたのであろう。景久が拠ったと伝えられる周東城は、中島字武勇であると信じられているが、抜け穴の存在以外にはこれという証拠となるべき痕跡もなく、しかと定めがたい。大井の天照大神社が建立されたのが、景久がこの地に陣したと伝えられる応永二年（一三九五）から二年目の、応永四年九月である。

（『小糸町史』）

神将寺薬師堂の釜の蓋　（貞元）

神将寺（君津市釜神）の本尊、薬師如来を安置する薬師堂の屋根上には「釜」が祀られています。釣鐘型の逆さにしたような釜なのですが、それには次のようないわれがあります。『房総志料続篇』から引用してみます。

薬師堂

「土人曰、釜上薬師如来は、むかし釜の蓋にのりて、小絲川を流れ来り此所に着き給ふ。故に此処を釜上といふ。別当神将寺、小絲川の南岸にあり。」

この寺の本尊、薬師如来は釜の蓋に乗って小糸川を流れて来て、この地で、釜神薬師如来として祀られた、というのです。実際にこの寺は小糸川に隣接し、周辺の地名も「釜神」となっています。ただし、釜の蓋、釜、釣鐘の区別は明確になされていません。当初の釜の蓋への信仰はい

までは逆さに祀られた釜（釣鐘）への信仰へと変化しているようです。その信仰について、藤沢衛彦氏は「上総の巻」のなかで、「中国では海の神の蛇は金気を嫌うといい、その蛇を鎮めるために、鉄器を岸辺に安置したり、海中に沈めたりした」ということから、「日本でも、航海の安全や水難予防の意味を込めて、釜や釜の蓋を海中に沈めたり、岸辺に安置したりしたのだろう」としています。

確かに、蛇は金気を嫌うといわれています。おそらく、このような信仰の背景には、釜や釣鐘を制作する製鉄集団の存在があったと考えられます。神将寺のある旧貞元村は貞元親王（清和天皇第三皇子）のゆかりの地であることから名づけられたといわれていますが、古代律令の時代にはこの地は「湯江郷」と呼ばれた製鉄地帯でした。その伝統を引き継ぐ製鉄集団が中世においても活動し、神将寺の釜の蓋伝説をもたらしたと考えることができそうです。このように、釜神信仰では釜の蓋と釜が一対のものとして信仰されています。

現代、この地域に日本製鐵が建設され鐵鋼業が栄えていることを思うと因縁のようなものを感じさせられます。

（『房総の伝説を鉄で読む』井上孝夫）

天南寺　（鎌滝）

文明二年（一四七〇）秋元少輔義正は天南寺を建立した。天正一三年（一五八五）九月、家康は僧鉄山を遠州浜松肴町（さかなまち）大安寺から、この地に移住させて天南寺を再興させると同時に天南寺に対して制礼を発している。

制　礼

右於当寺之内、甲乙人等無道狼藉之事堅く停止せしむ。若し違犯之族有之においては、成敗の由仰出され、御朱印如件

天正十三年九月　　奉行中

天南寺

鉄山は、徳川広忠の弟で家康の叔父にあたる。天南寺にはいまも鉄山が乗ったという駕籠を蔵している。この時寺号天安を天南に改めたとする説があるが、天保七年（一八三六）九月、清水組領地上総国周准郡鎌滝村から出した「お尋ねの箇条御解答書」には「一、御朱印三拾石、武州高麗郡新谷龍穏寺末、神野山天安寺」と誌るされていて、天保時代には、まだ天安寺を号していたことがわかる。

江戸時代を通じて、寺領を賜った寺は数えるほどしかなく、成願寺五石、神野寺五〇石、建暦寺一五石であった。天南寺が如何に徳川幕府から厚遇されていたかは、今も保存されている数々の御朱印状や、葵の紋のついた鋏箱、銚子及槍等を見ればわかる。皆家康の寄せたものだという。

（『小糸町史』）

千本城伝説　（広岡）

千本城趾は上総松丘駅より東方に約一キロの地点、海抜一八〇メートルの高地にあり、物見台より城趾を望めば誠に荒城の感が深い、物見台は北野神社の一角となっている。ここより望めば一の台、二の台、三の台、曲輪（くるわ）その他言い伝えられている千本城関係の場所が一望の下である。

目を東北に向ければ兵庫殿谷難闘場、遠くは大福山より夷隅・市原方面の山々が眺められ、また西方には旭山から久留里・小櫃方面が見え、南西には旧城下千本宿・広岡一円の松丘地区が箱庭の如く眼下に展望され、又当地の名山、大坂富士も目の当りで、遥か鹿野山に続く房総の尾根延々と連なり、まさに一幅の名画たるの感が深い。当時難攻不落といわれた千本城築城の昔が偲ばれる。

戦国時代の乱戦とたびたびの火災により貴重な文献も失われた今日、伝説として古老の記憶によるほかなきはなによりの痕事である。城主は東平安芸守で築城の年月も不祥であるが、豊臣秀吉との交戦により落城、また里見義弘とも縁ありその勢力も強大であったらしく、天災を利して善戦したとの説で、大手門は現在の北野神社登り口辺にあり、落城後門も取り壊し、戸穴の薬師寺の門に使ったという。また城門の一部が障子の腰板に使用され、朝柄・戸穴方面の何人かの家に残っているとの事である。山頂に達するには、男坂・女坂の両道があり、戦闘は男坂方面で行なわれ、敵兵が攻め登って来る折、城兵は竹の皮を坂に撒き散らし、ために敵兵は滑って苦戦に陥ったといわれている。

また、幸田寺谷方面より攻め来た敵と沢小屋の難闘場（乱闘場）という場所で大激戦が行なわれ、敵味方とも多数の戦死者を生じ、その遺体を葬ったと思われる下の田より、大正年間の山崩れの際、多数の人骨が現われたという。このように城方は天嶮を利してよく護り善戦よく勉め戦況も一進一退と続いたが、西北の断崖絶壁の間に設けられた秘密の通路が、城兵の一人波多野某なる者の敵側への内通により、これを通路として敵兵を手引導入し、乱戦中城に火を放ったため遂に落城したと伝えられ、この次第書も昭和の初め頃までは、宮司方に保管されていたといわれるが、同家改築の時より紛失したとの説もある。

猛火に包まれた城の婦女子は逃げ場を失い、西方の崖より落ちのびるほかなく、衣をつないでこれにすがり逃れたといい、当時の崖は「八反がけ」の名が残っており、又その下手に「衣塚」もある。落人の一行は現在の粟殿付近まで逃げのび、城の方向を眺めて、姫は恐怖におののきながら殿を偲びて「嗚呼殿が」といわれて亡くなり、以来この語からなまって「粟殿」の地名となり、姫を葬った塚を「姫塚」といったが、年と共にいつしか削られて水田になった。そのためか永い間にこの田を耕作すると不幸があるといい伝えられたが、

その後所有者が石宮を作り姫の霊をなぐさめたため、今は良田となっていると伝えられる。

城の栄えた頃「大友皇子」も足を止められしとの事で、付近の三本松御陣屋跡付近に、お手植えの松が在りし由で、現在の大旗台より宇坪に通ずる急坂は、修行坂といい、当時皇子が修行された場所であるといわれた。

三本松公園（陣屋跡）

現在の神社は、千本城の守護神であったとも伝えられる。明治・大正の二回に亘る火災で焼失したが、格式ある社殿で、千本の地名も有名な天満宮司所在の地のみに使われる地名であると古老は伝えている。いま残る地名にも横町や宿はずれ、また田畑地名にも何屋敷などの名称が残っており、当時付近の繁昌ぶりが想い起こされる。

（『上総町の民話』）

はしご獅子舞　（鹿野山）

毎年、鹿野山の春季例祭に「はしご獅子舞」が奉納される。白鳥神社、社前の九十九谷を一望する天崖とよばれている広場に「ヒモロギ」を立て、山車をおき、その前に高さ約一〇㍍、二五段の大きなはしごを立てる。断崖に見立てたはしごの上で、二人で演ずる鹿野山の牝獅子が、奥高野に住む牡獅子に恋焦がれ、笛や太鼓の囃子にあわせて舞う様子は圧巻である。

地まき

まず、「地まき」といわれる地上での舞で、「四方固め」「花かがり」を演じたあと、横笛・大太鼓・締め太鼓による、乱拍子の囃子にあわせて、頭を振りながらはしごをのぼっていく。頂上に着くと、あお向けになって、四方を眺めるしぐさを行う。下りる途中でも、「天ぐるま」「しゃちほこ立ち」「腹わたり」「でんぐり」などの舞を曲芸的に演じる、手に汗握る獅子舞である。

鹿野山のはしご獅子舞の由来については、永正年間（一五〇四～一五二一）、紀州高野山から弘範上人という高僧が、布教のために、鹿野山を訪れた際、随行してきた木こりたちが、故郷の高野山を偲んで舞ったのが、始まりと伝えられている。

はしご獅子舞

はしごを使った、獅子舞は、千葉県内では、野栄町の「仁組の獅子舞」、東金市の「北之幸谷の獅子舞」、長生村の「岩沼の獅子舞」

など、四つが伝承されているが、地上の舞よりもはしごの舞が中心となっている点で鹿野山のものは特徴的である。この「はしご獅子舞」は、現在千葉県の無形民俗文化財に指定されている。

（「千葉県教育委員会」）

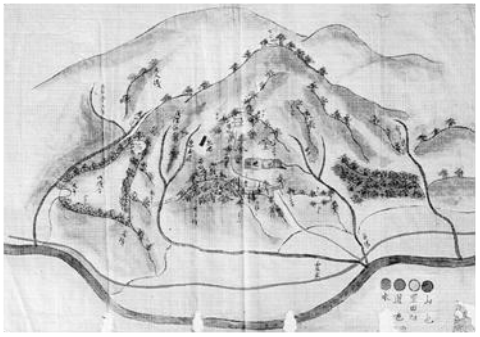
狐糸城　（秋元庄）

郷社諏訪神社由来書にいわく、

「人皇百三代後柏原院御宇永正年中四海穏やかならず、干戈（かんか）邦に充ち寇賊（こうぞく）巷に溢る。故に房総両州大守里見義豊公防禦の計策をめぐらし、所を市場の岫（くき）に見て始めて城を築き、特に族臣秋元刑部少輔義正に城を守らしむ。諏訪明神を鎮守として三十余ヶ村城下を氏子と定め祭礼を始めしむ」と。

里見氏の勃興は非常に迅速であった。安房一円を定めるに、ほんの五、六年しか要しなかったようだし、その後も西上総を制圧していた武田氏の内紛に乗じて、早くも秋元庄に手をのばしていたのであろう。義正が天南寺を建ててから約三〇年にして、小糸城はなったのである。小糸城の築造にからんで、また次のような伝説がある。

秋元刑部少輔義正は、新たに城を築こうとして、終日終夜あれこれと思いわづらうていて、ついうとうととまどろむと、夢に一匹の白狐が現われて、義正に告げていうのに「城を築くにこの上なく、よい地形のところを、教えてやるから私に従って来い。私の歩いた跡に、一筋の白い糸を残しておく。それに従って尋ねよ。必ず四神の地に至るであろう」と。



秋元城絵図〔戦国武将の時代〕

覚めると、すぐに従者をしてあたりを捜索させると、はたせるかな地上に、一本の白い糸がひかれてある。その糸に従って尋ねると、東方巍々（ぎぎ）たる鹿岳の北岫（きたくき）に至って、鬼火のように、糸をめぐらした土地があった。探者は何度もその地形を観察してから、近くの住民にたずねると、往昔（おうじゃく）よりこの山気に霊怪が棲んでおって、近所の者も近づかないという。

帰ってこの由を伝えると、義正は直ちに出陣し、計策をめぐらすこと猛虎の如く、谷をわけ、峰を駈けて、この霊怪を捕獲した。獲たところの怪獣は所謂（いわゆる）峯鬼（しんき）で、状狗のごとく、角があって身には五彩の文があった。これを伝え聞いた国人すべてその智勇に感じ、その武勇を歎賞せぬものはなかったという。

そこで、この峯鬼を山神として祭り、永正五年（一五〇八）春吉日、良辰（よしたつ＝良い日）を撰んで霊城の創営にとりかかったが、日ならずして成就した。狐の糸の手引きでな

ったので狐糸城という。狐糸がいつか小糸となり、このあたり一帯が小糸の名をもって呼ばれることになったというのが「狐糸濫觴（こいとらんしょう）」のあらすじである。

（『小糸町史』）

人柱おげんと青鬼の伝説　（清和市場）

君津市東粟倉の川面台（かわづらだい）という所には、「熊切」姓を名乗る家が何軒か固まっている。今の時代では、その面影を偲ぶ由もないが、その家々の間を通る道は、東粟倉村（川台村）から田倉や上総湊方面に抜ける昔の街道筋であったという。昔は城を築くときに「人柱」と言い、地の神の心を和らげるために若い娘をいけにえにし、生きたまま土中に埋めたとする伝承が各地の城のあった地域に伝えられている。

領主の秋元様が小糸に城を造ろうとしたときに、「だれを人柱にするのか？」という話が持ち上がった。秋元様は市場村や川台村の長（おさ）に相談を持ちかけた。人柱を出した家は、まことに名誉なこととして家や村の誇りとされる一方で、それを出した親には悲しむべきことであった。そのころ川台村でのちに言う名主の存在だったのが、若き熊切六左衛門であった。六左衛門には「げん」（元）というかわいらしい娘がいた。まだ六歳にもならないくらいの年だった。村の長のなかでは年下であり、幼い娘を持つのは六左衛門だけだったので、いわずもがな、ただちに人柱の候補として白羽の矢が放たれた。これをほかの家に頼むということは人情としてできなかった。おげんは幼いものの、しっかりした娘で、人柱として埋められてから「あたしが甕（かめ）を叩く音が聞こえなくなったときがあの世に行く時です」と親に言い残した。城の最初の工事の日に、泣き悲しむことをこらえようとする親の前で、おげんは甕に入れられ、土をかけて埋められた……。やがて時がたち、六左衛門は川台村だけでなく、あちこちの村人からほめたたえられたが、心をずたずたに切り裂かれる日々を送った。おげんのことで受けた傷を癒そうと家の庭に「心」という形で池を造った。

熊切家にはこのような伝承が今日まで伝えられていた。本家の女性は代々「げん」と名乗ったという。これは、その昔の悲劇と誇りを忘れずに、のちの世に伝えるための、方法だったと思われる。また、心の形にかたどった池は今に残されている。おげんと父の六左衛門を祀った、石宮の小さな祠は、熊切家の近くの山の斜面に祀られ、毎年一一月三日の稲荷祭りには一族がお参りし、新しい幣束と取り替えるそうである。

青鬼大神の碑

おげんが、人柱とされたと伝えられる場所は、本城のほうの大手門と言われているあたりである。もとは、そこに青鬼大明神の石宮があった。この青鬼についての伝説は、人柱のそれと関係があるのだろう。城の南の沢に鬼出沢がある。青鬼は「おげんの化身」だったのか、あるいは鹿野山の阿久留王と鬼の伝説と、あるいは、あまりに悲しい話だから鬼さえ涙したような話と結びついたのだろうか。秋元城を「青鬼(せいき)城」と呼ぶ事の理由がある。民俗学者の柳田国男は「諸国に分布する人柱が、決して一つ一つ史実で無かった」ことをいろいろ類似した話があるからと述べ、人柱はつくられた話であるとしている(『妹の力』)。しかし、地域ではその伝説を貴重に思い、清和地区では数年前に紙芝居にもされて、清和公民館の行事の際などに使われ、地域の子供たちに語り継がれている。なお、おげんの年齢についてはもう少し上の話も聞かれている。

(『戦国武将の時代』坂井昭)

大日堂と「大蛇」伝説 (怒田)

久留里に怒田(ぬだ)と呼ばれる地区がある。ここには一八世紀初頭に造られたといわれる大日堂があり、お堂は宝形造りと呼ばれる建築で、宝暦一〇年(一七六〇)に旧亀山村滝原不動の建物を移築したもので、その当時の記録が屋上の覆鉢に刻銘されている。また、怒田地区には、地名の起源となった「大蛇(おろち)」伝説があり、この大日堂も「大蛇」を祀るために建てられたと言い伝えられている。大日堂は昭和五〇年八月四日、君津市の文化財に指定された。

怒田の「大日如来縁起」の原文は長いので「大蛇」伝説を主に解読し、まとめると概ね次のようである。

ここに掲げた「大日如来縁起」は、私たちが毎月お世話になっている此処久留里城のすぐ隣(東南方約五〇〇メートル)の君津市怒田地区に、現存する大日堂の守護神の縁起である。

天文年間(約四五〇年前)天台宗の法性房と云う人格識見共に秀れた僧侶が、鎌倉から行基菩薩の御造りになった大日如来の御尊像の安置場所を求めて上総の地に来た。

久留里のお城の奥に大きな沼があり、そこに大きな「大蛇」が棲んでいた。たびたび近くの農民を食い殺し、往来する人達をも困らせた。そのため住む人は絶え、ついには、民家も遠ざかることになった。ある時、法性房がやってきて、大蛇のいる沼のそばに寺を建て、大日如来様の像を祀り、大蛇を封じ込める、護摩を焚いたところ、大日如来様が夢の中に現れた。この大日のご加護により、大蛇は水底に深く潜み、ついに害をおよぼさなくなった。

「ぬたの大蛇」伝説〔小糸川流域のかたりべ〕

村人の願いは成就したが、なお恐れ、なかなか参詣しよう

としなかった。そこで里見義堯公は、郷民に蓬草（よもぎ）で童子の姿を造り、内部に鹽硝（硝石）を入れて橋のほとりに置き、大蛇を成敗するよう命じた。大蛇がこれを呑むと、体内で硝石が発火したため苦しみに堪えられなくなり、西谷へ逃げ込み喘ぎ死んだ。

蛇骨は、今尚當寺にある。誅殺の日に郷民数千人集った所を町田といふ。その後、池の水を抜き、沼を水田として耕作した。むかしは「ぬかり田」といったが、その後「怒泥田（ぬかるだ）」というようになり、今は略して「怒田」というようになったという。

現在この大日如来様を祀る大日堂は、地域住民の信仰をあつめ、鎮守の森として参詣者も多く、部落内の春秋の御祭祀も、大日如来様にちなんで彼岸内に定め、春は三月一六日、秋は九月二二日におこなわれ、他の諸行事も佛様を中心とした催しが多いようだ。　（『上総の民話』『君津古文書の会』）

加勢観音　（久留里市場）

里見義堯が安房里見氏の当主となった頃、房総には新たな権威者として小弓公方（おゆみくぼう）・足利義明が登場していた。義明は鎌倉公方の血筋で成氏（しげうじ）の孫に当たるが、兄の古河公方・足利高基と対立していた。

天文七年（一五三八）、義明は上総・安房を主とする将兵を従え、下総の国府台（こうのだい）へ進み、高基を支持する小田原北条氏との間で第一次国府台合戦に突入した。里見義堯も参戦したが、総大将義明が戦死したため小弓方の敗北で終わった。撤退の途中、義堯は小弓御所に立ち寄り義明の遺児を救い安房へ退いた。合戦後、上総武田氏の勢いが低下すると里見氏が上総へ進出、久留里城を本拠地とし小田原北条氏と幾多の攻防を繰り返すことになった。そして生まれたのが、合戦にまつわる伝説だ。

息子の里見義弘が、里見本隊を率い下総へ出陣中のある夜、義堯の夢枕に金色に輝く観音様が現れ、「油断するな。間もなく小田原より大敵が押し寄せる。だが、心配するな。我も加勢する」と語り、仔細に作戦を指示した。

果たせるかな、小田原の数万の北条勢が相模より海を渡って上総にはいり、やがて、その先鋒が向郷に陣をしき、戦がはじまり久留里城へも迫った。

そこで義堯は、瑞夢のとおり軍策をもって立ちむかった。「もはやこれまでか」と弱気になった義堯だが、観音様のお告げ通りの作戦に出た。義堯は、観音様の台座や光背を取り外し、本体だけを縛って自ら観音像を背負い合戦に臨んだ。北条勢が雨のように射る矢は里見勢に当たらない。逆に敵は多くの屍を残して敗走した。北条勢との戦いに勝利した義堯が観音様に手を合わせると、何とその背に二本の矢が刺さっていた。まさに、観音様が加勢してくださったのである。以来、この観音様を「加勢観音」と呼ぶようになった。

加勢観世音菩薩
〔御開帳しおり〕

加勢観音は、平安時代の仏像で、久留里城の土の中から、出たとも伝えられる。身の丈六〇㌢で、里見家の何代目かの子孫が、正源寺の住職となられた時に、今の仲町の正源寺に、観音堂をつくり移し祀ったという。加勢観音は八月一〇日に御開帳される。

（『房総の伝説　民話紀行』さいとうはるき著）

久留里城「お玉が池」の由来　（久留里）

戦国乱世の頃、久留里に絶世の美女がいた。里見城将、小川秀政の一人娘で「お玉」といった。一目見たいと若者達が門前市をなしたほどの美女であった。

戦乱に明け暮れる久留里城は佐貫城を落し、北条との合戦準備に、城内は郎党や駆り集めた野武士でごった返していた。兵糧は幾山となく野積みにされ、松明（たいまつ）をかざした警護の者が右往左往していた。たまたま松明のこぼれ火から兵糧の一部が焼失する事件がおきた。二の丸には水がない。遠く内山清水池から水を汲み、桶やかめに蓄えて炊事に用いていた。

そこで城主義堯は、溜池の掘削を家臣兵馬に命じて、大軍を率いて国府台の戦に出撃した。城内は静けさを取り戻した。兵馬は、溜池の掘削に精根を費やした。地質は硬く難工事であった。その夜半また兵糧庫が焼失した。近くで作業していた兵馬が、火の不始末の疑いで捕縛監禁された。

お玉が池

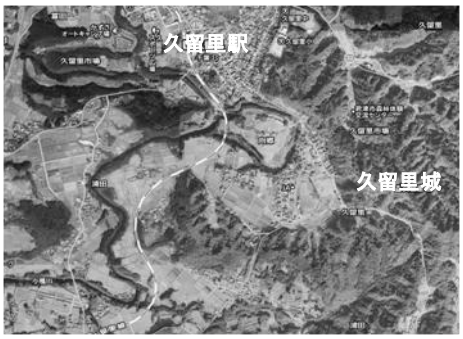
やぐら下で始終を見たお玉は、兵馬を哀れに思い、城主の帰城までに、溜池を完成しなければ罪はまぬがれない。お玉は自分の手で池を掘る決心をした。すきくわを手に池を掘り始めた。五日たち十日がすぎた。お玉の手から血がふき出して、手すきを真っ赤に染めた。そのとき若者が近づき溜池を掘り始めた。兵馬である。奉行の計らいで、日中は出牢して池を掘ることを許された。

それから二人で力を合わせて掘りつづけた。それは苦しく楽しい日々でもあった。池は完成に近づいた。それは兵馬との別れる日でもあった。しかし、負け戦で帰城した義堯は、兵馬を討ち首にした。乱世の掟である。それから数ヶ月後、大番頭間勘助が北条方と内通して放火したことが発覚し火あぶりの刑になった。兵馬の無実を知ったお玉は、黒髪を切って兵馬を弔った。貞女の鏡である。その後溜池は、「お玉が池」と呼ぶようになった。

（『小櫃川流域のかたりべ』土橋幸一）

叶谷寺伝説　（浦田）

久留里城を馬蹄形に取り囲む山々を、その昔「松葉溢し（まつばこぼし）の峰」又は「三ふり七ふりの山」といった。辺田（へた）山、浦田山、叶谷（かのうや）の総称である。昔、浦田盆地は浦（うみ）と呼ばれたほどの湿地帯で、秋の月が浦に映え絵師や、歌人の筆にのったほどの、絶景の場所だった。その南東丘陵の谷間が叶谷で、日本武尊東夷征伐の時、鹿野山より、阿久留王の残党を追討し給う終点の地なりという。



松葉溢しの峰〔地図 Yahoo〕

尊（みこと）の麾下（きか）の者、強弓を持って鹿野山から射た「かぶら矢」が、此の地に落下したので、「鹿野の矢」といったとか。また一説に、壬申の乱に敗れた弘文天皇（大友皇子）が、大和から当地王守（大森）に逃れ、身ごもった妃の十市姫や皇子福王丸と別れる。その日は豪雨であった。天皇はせめて別れの日一日、風雨を静め給えと天に祈った。願いは叶い煌々（こうこう）と日が射し込み、皇子福王丸は上奈良輪（袖ヶ浦町）に、十市姫は険しい山道を筒森（大多喜）に、それぞれ従者に守られて旅立った。天皇は肩口の傷が化膿して痛み、小川の里（皇谷）にとどまった。天皇は皇子と妃の幸せを祈って別れの谷を「叶谷」と名付けたという。

記録によると、天平二年（七三〇）僧釈良弁（しゃくろうべん）が坂東諸国を遍歴の際、浦田山に登り、雨降山大山寺（後の久留里城）を開き幾多の仏像を刻み、西の端一段高き所を獅子の台と称し、良弁自作の不動明王を刻み安置した。創建年代は不祥であるが、叶谷の峰に常光院叶谷寺が建立された。叶谷寺には、叶谷不動様が祀られ、之を坂中の不動と言った。

戦国時代の天文年間、里見義堯はこの雨降山大山寺に久留里城を築いた。古文書によると、永禄一〇年（一五六七）里見義堯が坂中の不動明王を叶谷寺に移したと記されている。

明治政府は神仏分離政策を進め各神社は神道に転換した。神祇事務局より仏像を御神体としている神社は、今後御神体をとり替えるよう通達があった。しかし当地方では廃仏毀釈に住民が抵抗して仏像を守り抜いた例が多い。

大正のはじめ叶谷寺は放火によって焼失した。このとき本尊不動様も共に焼失したものと思われていた。ところが、叶谷寺は荒廃し管理不充分のため、不動様は神に変身して、明治三五年（一九〇二）一〇月、小林悟郎神主の手によって、久留里神社に合併されていた。

今、久留里神社本殿内に眠っている不動様が、天平時代、聖武天皇の帰依を受けて東大寺の建立に中心的役割を果た

した名僧、釈良弁作の不動明王であるならば、破損寸前の不動様を専門家の鑑定を受けて修復し、不動堂に安置して拝したいものである。　（『小糸川流域のかたりべ』土橋幸一）

三船山合戦　（君津市・富津市）

足利幕府が倒れ、世はまさに戦国時代、群雄割拠の時代。当時の北条氏は歴史上、後北条氏・小田原北条氏といわれ、始祖は北条早雲、北条氏政の頃で、関東一円を支配するような勢いだったが、北から上杉氏が虎視眈々と狙っていた。

第二次国府台（こうのだい）合戦で、里見氏は北条氏によって大敗を喫した。北条氏は里見義弘の上総北部・西部の里見領を悉く占領した。更に里見義弘の居城である亀城（佐貫城）を奪うべく、南総の根拠地として三船山（現君津・富津市境）にある三船台（上湯江・前久保）の地に砦（空堀を掘り、掘った土で上を高くして馬をとめるような柵）を築き、北条氏政が総督した。

里見義弘は、この砦ができると、南に一里しか離れていない佐貫城が危険にさらされると考え、三船台に駐屯する北条軍（藤沢播磨守、田中美作守、磯部某）を攻撃した。これを知った北条氏政は、武州岩槻城主、太田三楽斎の男・源六氏資、源五資行、賀藤源左衛門等を援軍に向かわせ、自らも江戸湾を渡って佐貫城の攻撃に向かう。

一方、弟の北条氏照は、原胤貞とともに別働隊を率いて、市原郡方面から小櫃川沿いをさかのぼり、里見義弘の父・義堯の居城である久留里城の攻撃に向った。途中、秋元氏が居城していた小糸城（現秋元城）を落とした。里見義弘は、里見氏だけでは守りがおぼつかないので、上杉氏と裏で手を結び、いつでも危なくなると、上杉が来るぞ！上杉が来るぞ！と、北条側に流した。

また、里見の水軍が三浦半島に行き、こちらに出ている隙に、北条軍の本拠地を脅かすという虚々実々、大手搦め手と攻めている。

永禄一〇年（一五六七）二月二〇日、北条氏政を大将として三千余騎、小田原を出立し三船山に着陣、本陣を小字「陣場」に置いたという。同年九月、里見義弘が正木大膳（大多喜城主）とともに、兵を率いて三船山に向かい、本陣を虚空蔵山（障子谷の非常に深い湿地）に布陣、正木軍を八幡山（相野谷の非常に深い湿地）に潜ませた。

土地の人の話によると、朝早く（寅の刻＝午前四時ごろ）里見軍が、北条軍を急襲しては山麓に退却し、いかにも負けたようにして逃げていくという巧みな戦術で、朝霧の中に相野谷まで誘い出した。北条方は、地理を知らないので進路を誤り、沼地に入り込み身動きとれなくなる。そのときを見計らったように、八幡の森に隠れていた正木大膳の精鋭部隊が、進路を断つように横から攻め立てる。そして、虚空蔵山から里見の本陣が下り、三方より攻め立てた。挟み打ちとなって

色めく北条軍は、太田氏資をはじめ蓮沼辺りで多く討死した。

全滅同様となった氏政は、四五人を率い、海路で小田原に退いたといわれている。討取った敵は、藤沢播磨守、木曽庄兵衛、黒川権平、中条左右門、中里源左衛門等。これら五人は五〇騎の組頭だった。戦闘での戦死者二〇二八人、内五〇三名は里見方の戦死であったという。山頂には、三船山の戦いのときの戦死者を葬った俗称十三塚。「かぎのて」で、高くなっているのが土塁の跡。また、北条軍の本陣は現在のＮＴＴパラボラアンテナと、防衛庁の施設がある小字名・陣場にあったといわれている。

（「人見高齢者学級」川名邦五郎他）

十三塚（一部）

鐘ヶ淵沈鐘伝説

（内箕輪）

創建七世紀末～八世紀初頭頃とされる、九十九坊址に関する伝説として、鐘ヶ淵沈鐘がある。『君津郡誌上巻（以下郡誌）』に「…傳え云ふ古昔此に大刹あり、九十九坊を有す、里見・北条二氏交戦の時兵燹（へいせん）に罹（かか）りて廃滅に帰せりと云ふ、又本寺の梵鐘池に落ちて、其形を没す故に池を鐘ヶ淵と稱す、後梵鐘忽焉（こつえん）として鎌倉建長寺に現ると蓋（けだ）し小田原兵の掠略せるならん、編者人に託して、建長寺を探らしめしに今斯（かか）る梵鐘存するなし、但し維新前後に、同寺にては梵鐘四口を鋳潰（いつぶ）したることありしと、或は其中の一つたりしやも知るべからす」。

念仏池（通称：鐘ヶ淵）

大場磐雄氏（国学院大学：文学博士・考古学者）は昭和八年、君津地方の遺跡調査に訪れ『楽石雑筆（記録考古学史）』を著している。その中から九十九坊廃寺跡の調査に関する資料を抜粋すると、九月一〇日の資料に、「…丘陵上にあり、西南に念仏池と称する湧水池あり傍に弁天堂あり、この池嘗て梵鐘投入して鎌倉建長寺に出現せりとの伝説を有す。又この地往昔は九十九坊ありたる大伽藍存在せりともいう又畑中に土壇ありて鐘つき堂とも伝へ、源頼朝の為に焼失せる大寺ありしともいう」。また、同年一一月二五日～二六日の「波岡村から八重原村へ」の資料には、一一月二六日「…法木作の伊藤貞一氏を訪い、同氏が年少の頃鎌倉光明寺にて内箕輪の鐘を見たりし事などきゝたり…」と。さらに、古老その他より寺跡に関する伝説を聞くとして、次のことを記述している。一、犬石はもと新御堂へ持ち去りしが鳴きやまざりし故もと

一返せり。なお同堂には多数礎石を持ち去れりと

二、寺跡の北方に存する井戸は戦乱の御宝物をなげこみたりと

三、土壇上にありし鐘は弁天の池へ埋めしが後鎌倉橋材木座の光明寺に上がったと、今もありという

四、八丁堤にある礎石はもとシナリという力士担いでもちいけり等…

沈鐘の鎌倉建長寺伝説について調査した結果、梵鐘銘文の最後に、「建長七年卯乙二月二十一日　本寺大檀那相模守平朝臣時頼　謹勧千人同成大器　建長禅寺住持宋沙門道隆　謹題都勧進監寺僧琳長　大工大和権守物部重光」とあり、鎌倉三名鐘の一つで国宝にも指定されていることから、この説は誤りであることが検証できた。

次に、『楽石雑筆』の記述にある「鐘つき堂」の土壇は、高さ約一・二㍍、ほぼ方形で約一〇㍍×約一二㍍、心礎はほぼ中央にあったという。場所は九十九坊廃寺にあった塔の南西側、側柱の礎石も掘り出されている。さらに発掘時には「鐘つき堂」とも伝えとの記述もあることから、ここに「鐘つき堂」があったと推測される。しかし、現在、この部分はお墓があるため発掘できないので、考古学的に古代の遺構があるかどうか確認できない状況である。

また、沈鐘の鎌倉橋材木座（現神奈川県鎌倉市材木座）光明寺（浄土宗）説について所在調査した結果、梵鐘は、昭和三六年（一九六一）法然上人七五〇年縁起に当たり鋳造されていることがわかった。そこで、鎌倉浄土宗光明寺に鋳造前の梵鐘についてお尋ねしたが所在は確認できなかった。

（『君津郡誌』「楽石雑筆」）

円覚寺の宝物　（小市部）

武田信玄のもり役を務めた金丸筑前守虎義の二男・平八郎は、なかなかの才覚をもち信玄の奥近習（おくきんじゅう）として仕えた。元服して昌次と改名し、川中島の合戦では一七才で初陣を飾り、上杉軍に武田本陣が攻め込まれて危機にさらされたが、昌次は片時も信玄の側を離れず応戦したという。その後二二才で、騎馬百騎を預かる侍隊将に抜擢され、甲州の名族、土屋氏の名跡を継ぎ、右衛門尉（うえもんのじょう）に任ぜられた。

元亀三年（一五七二）一二月、三方原の戦で徳川方の武将鳥居門郎衛門忠広と組打ちとなり、兜のまま首を切り取って戦勝を祝う信玄の前に供えた。信玄はその武功をたたえて、その兜の定紋、「三ツ石畳」を土屋家の家紋にいたせと命じた。明けて天正元年正月、野田城攻略中、信玄は鉄砲の玉に倒れた。その傷を信玄は鳳来寺で療養中死をさとり、昌次に数珠をさずけ武田家の守護を託した。昌次は信玄病死のとき殉死を願い出たが、高坂弾正に公の遺志を守り、曹子（ぞうし）武田勝頼のために働くのが武士の務めと押しとどめられ

た。しかるに天正三年五月、長篠の合戦で、馬止めの柵を引き倒そうとしたとき、鉄砲隊の一斉射撃を浴びて戦死した。

土屋家は弟昌恒が継いだ。昌恒は武田信玄、勝頼に仕え、天正一〇年三月、田野村天目山で武田家滅亡のとき、片手千人斬りで、その名をとどろかせ斬り死した。徳川家康も敵ながも、その功績を絶賛した。後に昌恒の一子惣蔵をぜひにと召しつれ、阿茶局(あちゃのつぼね)に養わせ、家康の三男・竹千代の供を仰せつけた。天正一八年、家康江戸城入りしたとき、竹千代は元服して秀忠と命名し、惣蔵も忠の一字を賜って、土屋平八郎忠直と名付けた。

円覚寺

慶長七年(一六〇二)七月、二万一千石を領し、久留里城主に任ぜられた。そして三年目、土屋昌次、昌恒の霊を弔って円覚寺を建立した。今も武田信玄の遺品念数珠が円覚寺の宝物として保管されている。

(『小糸川流域のかたりべ』土橋幸一)

真勝寺の子育て地蔵　(久留里市場)

上総町久留里の真勝寺境内に、唐金作りの立派な地蔵尊の立像が安置されている。慈顔あふるるばかりの御姿で、霊験殊にあらたかといわれ、特に子供の病気の平癒、または安産を願うものに、功徳が現われるとの言い伝えで、子育て地蔵尊と称されている。この地蔵尊は寛永年間(一六二四～一六四五)に上総蔵玉の清兵衛という人が、この地に地蔵堂を建立して安置したと言い伝えられている。

お腹籠り地蔵尊

清兵衛は、徳川三代将軍家光以来御庭番として六代家宣まで実直に仕えたが、年老いるに及んで郷里の事、また子、孫の事も想われるままに、地蔵尊の勧進を考えていたので、おいとまを願う折に、そのことを家宣(当時文昭院)に願い出た。文昭院殿はこれを奇徳に思召されて、御腹ごもりの地蔵尊を下し賜わった。これを聞いた多くの御殿女中達も、それぞれの鏡を沢山集めて、清兵衛に贈った。清兵衛は殊のほかに喜んで、諸国勧進の旅に出立し、この鏡を鋳つぶして地蔵尊御像の鋳上げをある仏師に依頼した。程経て、ここに金銅御丈八尺四寸の立像が見事に出来上った。この御像の腹中には、文昭院殿御下賜の小仏像が納められていた。清兵衛は、この唐

地蔵尊とお腹籠り地蔵尊〔真勝寺蔵〕

金の立像を背負って生国の亀山に帰り、奉安せんとして一路江戸を発足した。

途中、久留里城下の久留里山真勝寺の前を通りかかると、不思議や地蔵尊がにわかに重くなって、清兵衛一歩も動けなくなった。まず一休みと腰を下し、さて改めてまた背負い歩こうとすると、また急に重くなる。清兵衛ホトホト困惑したが、恐らくこの地に地蔵尊が鎮座なされたき思召しと察せられたので、考えを改めて此の地に一宇を建立して地蔵尊を安置した。時に正徳年中（一七一一～一七一六）卯の春なりと言われている。この地蔵堂は、大正年間のさる大暴風雨で付近一帯に山崩れを生じた折、不思議にも地蔵堂だけは何の障りもなく、流石にあらたかなるものよと一層信仰をたかめられたが、余りにも四囲の地肌が殺風景なるため、信者一同の計いで安全な場所へ安置し、再度移されて今の真勝寺内へ遷ったという。蔵玉の清兵衛なる者の末裔は詳でない。

（『上総町の民話』）

一念坊道心　（久留里市場）

今から約三〇〇年前の寛文のころは、阿弥陀浄土念仏が最も盛んな時代であった。久留里仲町河岸の福徳山正源寺は、里見公以来、浄土宗の小本寺の資格を有し念仏道場として、隆盛を極めていた。

九ケの末寺と山門内に蓮乗寺・知源院・光源院などの寺があり、その塔頭から流れる、読経のひびきは、町はずれまでも聞こえたそうです。

正源寺

末寺富田村哀怒山菩提院、浦田村念仏院選要寺、大和田村念仏山一行寺の僧たちは、三つ巴となって荒業にいどみ、浄土三部経をきわめ「南無阿弥陀仏」六字名号を一心に唱え無我の境地に至った。なかでも、大和田村念仏山一行寺の僧道心は、寛文一〇年（一六七〇）七月二〇日、里の人々を愛宕山に集めて「火定（かじょう）」と称して、「心頭を滅却すれば火も亦涼し」と大喝一声、燃え上がる熱火の中に入りて自若として念仏を唱えつつ立ち往生した。

駆けつけた正源寺の上人は「観無量寿経」の一巻を火中に投じて印を組み、読経のあと、群集に向かって「道心の徳を説き、死後の世界は阿弥陀様に迎えられ仏となって、広く世の人々の難を救うであろう」と、そこに一寺を建立して念仏山稱名（しょうみょう）院と号したが、いつの時代にか廃寺となった。今は只、雑木林の中に、トタン屋根でかこまれた一㍍三八㌢の石仏が一体あるだけ。その光背には「一念道心火定為菩提也寛文庚戌十年七月二十日」と刻まれている。

滝沢馬琴の南総里見八犬伝に登場する「犬山道節（いぬや

まどうせつ）火道（かどう）の一説」は、この一念道心の事実から着想したものである。

（『小櫃川流域のかたりべ』土橋幸一）

新井白石と久留里

（久留里市場）

新井白石は、江戸時代の学者・政治家として有名ですが、久留里とのかかわりについては、意外に知られていないようです。しかし、白石は父正済が久留里藩主の土屋利直に仕えた関係で、幼年期から久留里藩に育ち、青春時代の一時期を久留里で過ごしているのです。

新井白石像
〔久留里城祉資料館〕

白石は明暦三年（一六五七）の江戸大火直後に、神田の土屋仮屋敷に生まれました。幼少より周囲が神童と騒ぐほど頭が良く、一三歳ですでに主君利直の手紙の代筆をつとめるなど、藩内においても将来を大きく期待されていました。また一八歳のときには、利直に従って久留里を訪れています。その居住したとされる現在の久留里小学校の一角には、白石居宅跡の標柱も立てられ、この郷土の英雄を顕彰しています。

二一歳のとき、土屋家のお家騒動に巻き込まれ、父ともども藩を追われ浪人となった白石は、二六歳で大老堀田正俊に仕えますが、正俊が暗殺されると山形・福島を流転し、再び浪人生活を強いられます。

三〇歳の頃から、幕府の儒学者木下順庵の門弟となっていますが、三七歳の時、この順庵の薦めで甲府藩主徳川綱豊のお抱え学者に召し出され運が開けてきます。そして綱豊が六代将軍家宣となると、白石もその政治顧問役として幕府の表舞台に登場することになったのです。

白石は、悪法といわれた「生類憐みの令」を廃止し、裁判の公正化や朝廷と幕府の融和に力を注ぎました。経済面では、貨幣を良質なものに改めたり、長崎貿易を制限して国内の金銀が海外へ流出するのを防いだりしました。これらの政治は、のち「正徳の治」と呼ばれるようになりますが、家宣・家継と二代を補佐した白石も、紀州から吉宗が将軍として迎えられると、たちまち罷免され政治家としての使命を終えます。

晩年は不遇でしたが、読書と著述に励み、多くの名作を生み出しました。自叙伝『折りたく柴の記』には、自身の劇的な誕生から、父と仕えた久留里藩のこと、恵まれなかった青年期、新しい将軍とともに行おうとした政治改革のことなどが克明に綴られています。そして享保一〇年（一七二五）五月、六九歳で波乱の生涯の幕を閉じました。

白石と久留里を結びつける一通の書簡があります。久留里市場の伴家に所蔵されていたもので、現在では久留里城址資料館に展示され、君津市の指定文化財にもなっています。これは正徳元年（一七一一）、白石が五五歳のときに、親友で

ある久留里の伴幽庵に宛てたもので、内容は上総名産の自然薯（山芋）を贈ってもらったことに対するお礼です。加えて政治家としての近況、即ち将軍家宣の命によって、中御門（なかみかど）天皇の即位の礼に参列したことや、将軍からいただいた小遣い銭をもとに、京都・大坂・奈良を見物したことが記されています。

幕府の中枢にあって、多忙な日々を送っていた白石でしたが、その政務の合間をぬって旧友に心寄せる温かい心情が伝わってくるようです。

（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

神野寺の修正会と午王祝い　（鹿野山）

毎年一月一五日の朝早く、神野寺では修正会（しゅしょうえ）の午王祝いが行われるので、各地の信者が集まる。この日の未明、本堂で大護摩法要の後、午前五時ごろ鐘の音が鳴りわたると、福の種という煎り米を午王のお札に包んだものや菱餅などがまかれる。集まった人たちは「み仏の、み徳はなおも高きやも、まけどまけどもつきやせぬ」と唱えながらこれを拾うのである。

そのあと、これよりさき一月八日のチョウナ初めの日に、神野寺出入りの大工によって寄進された二㍍ほどの杉板と、本堂の床を地元の上町と、下町の人が、はち巻姿で二組に分かれ円陣を組み、青竹で争って力いっぱいたたきながら、本堂の大きな柱を回る。竹の棒は一二本であるが、これは、十二神将をなぞらえたものであるという。

この行事は御祝い（ごいわい）ともいわれ、五穀豊穣、悪疫退散を祈願するものだが、特に青竹でたたいた時、飛散した竹や木の破片は雷よけのお守りといわれ、集まった人々が、これを奪い合うのがまた一つの壮観である。青竹で杉板をたたくのだが、物を打つということはショックを与えることで、神仏の持っている本来の機能を発揮していただくきっかけとし、一方にはそのことで悪霊を退散させようという願いが込められているものである。なお、飛び散った竹片や木片に雷よけの霊力があるとされているのは、神野寺の本尊の軍荼利明王に蛇よけの霊験があるとしていることと関係があろう。古くは雷神の本体が龍や蛇であるとの思考体系があったからである。

鹿野山　神野寺

昔、徳川時代の貞享（一六八四～一六八八）頃、神野寺と近くの百姓との間に土地の争いが起った。その土地の訴訟問題で、この寺の本尊が江戸に出かけられ白洲に立たれたこともあった。結局この訴訟は神野寺の勝ちとなり、やがて御本尊は帰途につかれた。その途中、御本尊は鹿野山のふもとの

宮の下（現君津市宮下）という村まで来ると、もう空腹に耐えることが出来なかった。そこでこの村に住んでいたかねてからの信者である次郎右衛門という人の家に立ち寄られ何か食べものはないかと請われた。

ところが、あいにくその時、すぐに差し上げることが出来る食べ物がなかったので、主人は困ってしまった。すると御本尊は、折から秋のとり入れ時の農家のこととて、庭の籾に目をとめられて「この籾を煎って食べれば、当座の飢えをしのぐことが出来る」と教えてくれた。

主人の妻は、教わった通りすぐに籾を煎って、箕であおってアラヌカをとった。そして御本尊にお供えしたら、大変お喜びになって召し上がった。

そうして「お前たちのおかげでわが空腹もいえた。お礼として、これからお前の家の田にはコヤシ（肥料）をやらなくても米がたくさんとれるようにしてやろう」といわれた。やがて御本尊は姿を消し、鹿野山に帰って行かれた。

このことがあってからというもの、宮の下のこの農家では肥料もやらないのによく米がとれたといわれている。

また、この煎り籾のことにちなんで宮の下の農家では毎年、煎り米などを神野寺に献上していたと伝えられている。別に伝えるところでは御本尊は宮の下での感激を忘れないためと、農家への恩返しの意味から豊年満作を祈願したのが鹿野山の午王祝いであるとされている。

貞享年中の鹿野山をめぐる土地争いのことについては、神野寺の勝訴を記した貞享三年三月六日付の判決文書があるとのことだから事実と思われる。しかし、まさか本尊が江戸に出向くはずもないから、この勝訴を本尊の霊験として語り伝え布教した人々があったのであろう。

籾を煎って作る焼き米は、粒食として古い形のものであるが、田の神を祭る時、つまり豊作を祈る際に焼き米を供えることが多いことを思い出す。つまり、全国的にみて、特に東日本では苗代に種籾をまく日、水口（みなくち）に、密教系の寺院から受けた牛王札などを、神聖な木の枝に挟んで立てるが、それと同時に焼き米をあげて田の神を祭り、豊年を祈る例が多いという。こうした民俗とのかかわりを感じさせるのが、鹿野山の午王祭りと煎り米の伝説である。

（「鹿野山歴史とその周辺」平野馨）

五人組帳　（鹿野山）

近世江戸時代、徳川幕府はその治世の末端組織として、五人組の制度をしいた。

五人組とは、村々の百姓や町々の地主・家主に命じて、作らせた隣保組織である。近隣の五戸を一組とし、火災、盗賊、浮浪人、キリシタン宗徒等の取締り、また婚姻・相続・出願・貸借等の立会いと連印の義務や納税、犯罪の連帯責任を負わせたものである。表向きは相互扶助であるが、むしろお互い

に共同責任を負わせ民百姓をうまく治める手段であった。従って近隣五戸といっても、本家分家や親戚同志は一つの組にはしなかった。共謀することを恐れたからである。

〔Webページ〕

この五人組制度では、「五人組帳」という文書を作成させ、お上（幕府）へ提出させると共に、町や村にも保管させ、時に及んで名主は、一般町人や百姓に読み聞かせた。「五人組帳」は、五人組に関する法令を前書に列記し、その後へ、村役人（名主・組頭・百姓代）以下各々五人組員が連名連印して、前書の法令に違背しないことを誓約した帳簿である。この前書の部分が大切で、いわゆる「五人組帳前書」といわれ、庶民がこれを守ることによって、社会の治安を維持しようとした。つまり百姓たちの日常生活の規範であった。

江戸時代は随時お触れや制札や御条目などが出されて、幕府の治世の方針や命令が伝達されたが、「五人組帳前書」に示された内容は、基本的なものであった。ただし、時代によって、地域によって、多少の内容の相違はあった。

さて、ここに取りあげたものは、「上総国周准郡鹿野山五人組帳」の、前書の一部で、原本は元禄年中（一六八八～一七〇四）のものだが、虫食いのため、天保二年（一八三一）に写したものである。この文書の解読は、

一　従公儀、被仰出候御法度之趣、不依
　何事ニ、大切ニ相守、可申事
一　切支丹宗門、惣而御法度之宗旨、御高
　札之通リ、急度相守、若シ疑舗者、有之ハ、
　早速御訴、可申上候、若シ隠置、脇ヨリ顕
　候ハハ、何分之曲事ニ茂、可被仰付事
一　御領内鉄炮之儀ハ、猟師并猪鹿オドシ、
　拝借鉄炮之外、一切所持仕間舗候、若シ
　隠置、脇ヨリ相知レ候ハハ、五人組迄曲事ニ、
　可被仰付事

右の文書の意味は、

一　幕府将軍から仰せ出されたきまりは、どんな事がらでもすべて大切に守るべきである。

一　きりしたん宗門を初め、許されていないすべての宗旨は、御高札（禁制の立札）に書いてある通り、信じてはいけない。もし信じているかも知れないと疑わしい者がいたならば、すぐお上へ訴えるべきである。もしそれを隠しておいて、ほかの方からわかった場合は、重い処罰が与えられる。

一　御領内で鉄砲を持つことについては、猟師が持てることと、百姓が田畑の作物を荒らす猪や鹿をおどすために、特別にお上から借りている鉄砲を持てることだけで、その外は一切鉄砲を持ってはいけない。

もし、隠して鉄砲を持っていることがほかの方からわかった場合は、その本人はもちろん、本人の所属する五人組の人々まで、処罰される。

というものである。

ここには、五人組前書のうちの三項目だけを、例として挙げたが、鹿野山の五人組帳には、全部で四一項目が書いてある。三項目の外には、

○ 父母に孝行　○ 御年貢納入
○ 田畑売買禁止　○ 助郷
○ 訴訟の事　○ 百姓跡式
○ 捨子禁止　○ 博奕禁止
○ 質素倹約　○ 押売の事
○ 寺社　○ 用水
○ 洪水　○ 人売買禁止
○ 喧嘩禁止　○ 聟娵（むこよめ）養子
○ 番屋　○ 御林
○ 御高札場　○ 火の用心
○ 旅人宿　○ 印形

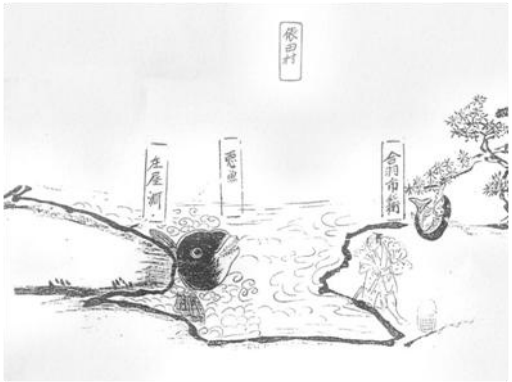
など、諸般の事項にわたって、実にこまごまと書き記されている。

（『西上総の史話』菱田忠義）

庄屋渕の地名伝説　（俵田）

～箕輪熊野神社縁起より～

いつの時代か定かでありませんが、俵田村（現在の小櫃地区俵田）の大川に曲者（悪魚）が現われ、付近を通る人々を襲って食べるという、話が噂されました。特に、雨の降る夕方には、必ず現われるといい、男が通れば美しい女に化け、女が通れば男に化けて惑わし、子どもならば、かわいい人形となって、川へ引きずり込むという始末でした。困り果てた村人たちは、領主様にこの曲者を退治してくれるよう、お願いすることになりました。



庄屋渕の怪〔小糸川流域のかたりべ〕

このころの領主は、田原八郎秀光という人でした。八郎は早速、村人の願いを聞き入れましたが、急に近江国へと国替えになり、皆との約束を果たす間もなく新任地に赴くことになりました。

八郎は出発の朝、見送りに集まった村人たちに対し「約束した曲者退治はできなかったが、ここでその方法を教えるので、皆で力を合わせてやってほしい」と言い残しました。そして「この大川で底なしといわれている場所が、曲者の棲家となっており、その渕の上手の、屈曲している所を掘り割り、

水路を直線にして水を流せば、渕の水位が下がるので、曲者も自由を失い、そこをねらって退治しなさい」と伝えました。

村人たちは早速、普請に取りかかり、作業が進むにつれ、水位も下がり、陸地も現われて、多くの田んぼが出来ました。しかし、三反歩ほどの場所は干上がることなく残り、曲者を退治することはできませんでした。それでも曲者の方も以前のような自由が利かず、その後は人々が襲われることもなくなりました。

やがて時が流れ、元禄時代のころ、俵田村近郷は大庄屋合羽市兵衛の支配するところとなりました。ある日、市兵衛は例の渕へと釣りに出かけ、三尾ほどの魚を釣り上げました。そして、その魚を近くの木に吊るし、なおも釣り糸を垂れていると、沼の底より「ギギウ、ギギウ」という声が聞こえてきました。何だろうと市兵衛が耳を澄ましていると、また「ギギウ、ギギウ」と呼ぶ声がします。すると先ほど釣り上げた魚も、それに答えて「ギギウ、ギギウ」と鳴きました。市兵衛は、今釣った魚は昔村人たちを苦しめた曲者の同類に違いない。今に俺を目がけて襲ってくるだろう。今日こそ退治してくれんと、刀に手を掛け待っていました。

やがて沼に逆波が立ち、釣鐘ほどもある真っ黒な頭に紅の舌を出した曲者が、市兵衛めがけて飛びかかってきました。市兵衛は三尺二寸の刀を抜き、真っ向う立て割に切りつけたので、曲者も頭を真っ二つに割られ、沼の底へ引き返していきました。しかし、引き返しざまにヒレの先で市兵衛を横から打ったので、市兵衛もたまらず沼の中へ落ちてしまいました。しばらくして曲者は死んで水面に浮かびあがってきましたが、大庄屋の市兵衛はそのまま行方知れずとなってしまいました。

その後、市兵衛が消えた渕のあたりを「庄屋渕」というようになりました。この伝説のある地も、現在では基盤整備が行われ実り豊かな水田地帯となっています。

（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

最勝福寺の歴史考　（新御堂）

新御堂の最勝福寺は、『日本歴史地名大系　千葉県の地名（平凡社）』によると、明徳四年（一三九三）三月晦日の第二代鎌倉公方足利氏満御教書（東京大学史料編纂所影写本反町文書）に「周西郡内最勝福寺」とみえ、鎌倉浄光明寺領（神奈川県鎌倉市扇ガ谷）の最勝福寺田畠敷地および寺辺敷地諸公事などが免除されている。亨徳二年（一四五三）にも役夫工米・国衙般若会以下諸公事課役ならびに守護使・郡使催促入部が免除されている（一二月一五日「鎌倉公方足利成氏御教書」浄光明寺文書）。従って、明徳四年～亨徳二年頃は真言宗鎌倉浄光明寺領だったと推察される。

その後について、『君津郡誌上巻（以下郡誌）』には、「寺伝に云う佐貫城主里見左馬頭義弘の開基にして、僧無学宗棼

（そうふん）の開山なりと弘治元年三月一五日本寺を開創せり一説に云ふ、里見義弘初め練木の里（中村）に本寺を創建し寺領四〇石を寄せしが後故ありて之を杉谷村（貞元）に移し同村の内四〇石の地を割き新たに一村となし之を新御堂村と称し全村を最勝福寺領となせり」とある。

また『小糸町史（以下町史）』には「今では全く遺跡もとどめていないが、練木の池の谷に里見氏によって、最勝福寺が創建されたのが、弘治元年（一五五五）三月であったといわれる。『中村誌（以下村誌）』に依れば、「下野国都賀郡大中寺住僧行脚の砌、上総国三直の城主上総介義勝、法輪に帰依ありて、国を護り、軍に勝ち、武運長久を祈るため、同国練木村に一寺を建立し、寺領四〇石を寄附ありしに創まる。依て護国山最勝福寺と号すとある。本尊は大日如来で運慶の作であった。その後故あって、天正年間、同国杉谷村北の作谷へ寺地を移し、新に御堂を建て、それから北の作谷を新御堂と称するようになったのである。練木字池の谷には、寺地に辻堂を建て、五輪塔一基を存している。」と記述。

『郡誌』、『町史』、『村誌』を比較すると、開基について、『郡誌』は里見義弘。『町史』は里見氏。また『町史』は、『村誌』を引用して三直城主上総介義勝に創まるとする。このように人物表記に微妙な違いが見られる。

そこで、里見氏の系譜より上総介の官位に該当する人物を調べたが、義勝は見当たらない。この時代に上総介を名乗った人物を拾うと、里見義通、文明一三年（一四八一）～大永

練木（池が谷付近）〔Yahoo 地図〕

五年（一五二五）？と、弟の実堯、文明一六年（一四八四）～天文二年（一五三三）七月二七日？の二名で、上総介義通か実堯の誤記ではないかと思われる。

創建年についても、『郡誌・町史』の里見義弘説をとると、弘治元年三月であるが、『村誌』の里見義通・実堯説をとると、弘治より以前の大永～天文年間（一五二一～一五三三）となる。

開山について『郡誌』は、僧無学宗棼（一六世紀中頃、曹洞宗大中寺の後継者争いで新たな大中寺を現栃木県大平町榎本に設立）とし、『町史』は『村誌』を引用して、大中寺住僧行脚の砌としており、大きな違いはないだろう。

建立場所について『郡誌』は「練木の里（中村）」。『町史』は「練木の池の谷」。『村誌』は「練木村」。と微妙に表現が異なる。開創・創建・建立は同義語と考えてよいが、『町史』が『村誌』を引用して「…一寺を建立し、…創まる」という表現には、『村誌』の意図に配慮する気配りが感じられる。

次に、開基に関する人物の齟齬（そご）について、『郡誌・町史および村誌』を引用して整理すると、最勝福寺は初め上総介義通か実堯が三直城主の頃、練木の里に建立し、寺領四〇石を寄附したことに創まる。多分この時、真言宗から曹洞宗に改宗したと考えられる。その後、里見義弘が弘治元年三月、練木の「池の谷」に創建したが、天正年間（一五七三～一五九三）、故あって（一説によると災害でお寺が沼に埋まる）、里見義弘（天正六年没）が、杉谷村「北の作谷」の四〇石を割き寺地を移し、新に御堂を建てた。それから北の作谷を新御堂村と称し最勝福寺領とした。

貞亨二年（一六八五）六月一一日、徳川綱吉より寺領四〇石を寄進との朱印證（幕府・大名より神社・寺院の寺社領として安堵（領有権の承認・確認された証書）を賜った。

昭和の頃から、住僧不在になったと思われる最勝福寺は、檀家の要望でやむなく光聚院（曹洞宗）が仏事を引き受けていたが、手が尽くせないまま次第に堂内は荒廃し、仏事を執り行える状態ではなくなったという。この状況に檀家の人達が困り果て、常駐してくれる人を探しているうちに曹洞宗の本庁にかけ合い、昭和五四年頃、師匠（現住僧）が曹洞宗宗務庁より赴任することになったようだ。そのような状況であったため、寺を引き継いだ時には、文書や記録等はほとんどなかったようだ。

お寺の過去帳や古文書などから歴史を検証すべきだが、残念ながらこの状況では不可能である。従って、やむなく現存資料（『日本歴史地名大系　平凡社』、『郡誌』、『町史』、『村誌』）を参考にまとめた。

（周西マップクラブ）

最勝福寺の梵鐘　（新御堂）

梵鐘は、明治初年に維新政府が祭政一致の方針に基づき、神仏習合を廃止した前後に、木更津市の銚子屋金物店に売却

梵鐘〔君津市史〕

され転々としたのち、小県（ちいさがた）郡上田（現長野県上田市）常田町の金物商、関口義兵衛に渡っていた。

その頃、明治一三年創立の長野県松本市梓川梓の恭倹寺（浄土宗）が「梵鐘は新鋳よりも音響の勝れた古鋳を探す」という意向により手配中だった。明治二四年、この金物商に古鋳があることがわかり、同年秋、二度の交渉により輸送料込み三三一円で恭倹寺に売り渡された。現在、恭倹寺の梵鐘と鐘楼は松本市指定重要文化財になっている。

梵鐘は、高さ一一三・九チセン、口径七六・六チセン、最勝福寺としては貴重な金石文である。銘文は次のとおり。

周集郡新御堂村　護国山最勝福寺洪鐘之銘并序

夫当山者無学宗梵和尚匡徒之禅而里見義弘公檀護之濫觴也　山高谷広茂林修竹欝乎標顕武江灘頭表実総陽福場而諸山　刹以無洪鐘爲関矣上者錐有之遭棄乱世凶賊鯨音噁才尚矣故前住大梁老人度記名謂予出几物啓発莫遑光於音声所謂関浮真教体也音声中首出法器上者其惟鐘乎鐘之爲徳也不楼上遠響枚挙縦百器可無豈一鐘可欠哉是当山第一関典也常兄弟欲補之環寺之末流相議企浦牢曰弁建之功於是教化主楼懐区〻尺牘扣〻丈慶終不果人遂命金道大開炉鞴千鈞重器末経一祀朘模円成矣高笈海外一撃両撃養先師之遺嘱万年億年伝児孫之完業普種諸檀之福因永関国家之政治矣乃銘以垂後世　銘云

護国禅苑　無堂道場　山聳総左　声鳴扶桑
洪鐘新筐　梵利長荘　音震両岸　声響徹十方
鯨吼明暗　冠神□胱　雷轟晨夕　天仙求祥
□出素月　断送斜陽　同鞭禅順　時告燈香
諸檀積善　諸民楽康　宣哉勝福　名実倶昌

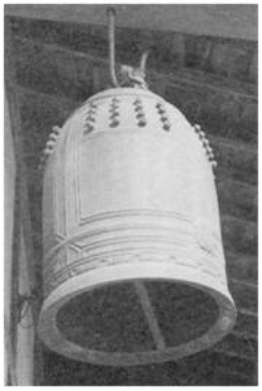
大檀那　従東照大権現代々征夷大将軍
源朝臣綱吉公御時建立之

―中段省略―（詳細は『君津市史金石文編　第一三章市外資料』７２５頁参照）

于時元録（ママ）十一戊寅　四月大吉日
護国山最勝福寺　現住　長山益伝叟誌
掌財監司　光聚院前住　水岩光順同元空直心
武州江戸神田住人御鋳物大工
小沼播磨守藤原正永作
梁円主座　宗玄信士　妙本信女　有縁無縁三界万霊等
一醒上座　心源院円恭信士　岸甚兵衛

○他に三平氏関係他計一三五名分の刻銘がある。

ところが、最勝福寺には、元禄一一年（一六九八）、高さ七三チセン・径四一チセンの「半鐘」が現存する。『君津市史金石文編　第一一章金造物　５５７頁』によると、銘文は次のとおり。



半鐘〔君津市史〕

（池の間一）

鐘銘

夫鐘者以虛空爲體其體不能
□□天不能載地其用之初通充滿
無遍法界是住持三寶故實盡法
門基碎邪至聖之枢紐也願以
此功德大檀那天下德行功成御
政而衆民悉得其所兼亦十方之
檀越蕩習氣行輪及與無遍法界
（袈裟襷）
之衆生普證得一葉之覺路豈可疑耶

（池の間二）

徑曰

諸行無常是生滅法
生滅無常己寝爲楽
上総國周准之郡新御堂村
護穀山最勝福寺住
釋尊長山益傳謹誌
于時元禄十一龍集戊寅孟夏佛延日
江戸住御大工
小沼幡（播カ）磨守正永作

（池の間三）

願主

前永平當山六世中興
禅峯文悦大和尚

梵鐘・半鐘とも文字表記は異なるが、元禄一一年　江戸住小沼播磨守藤原正永作である。この二つは同時代に同じ鋳物大工が製作したものと推察され、非常に興味深い。

梵鐘とは、仏教で時を知らせるために打鳴らす鐘。口径〇・五五メートル以上、高さ　〇・七六メートル以上は堂外の鐘楼につる。一般に釣鐘、撞鐘（つきがね）という。

半鐘とは釣鐘の小さいもの。本来は寺院・陣中などの合図に用いたが、江戸時代から火の見櫓につるし、火災・洪水・盗賊などの非常時に鳴らすようになった。

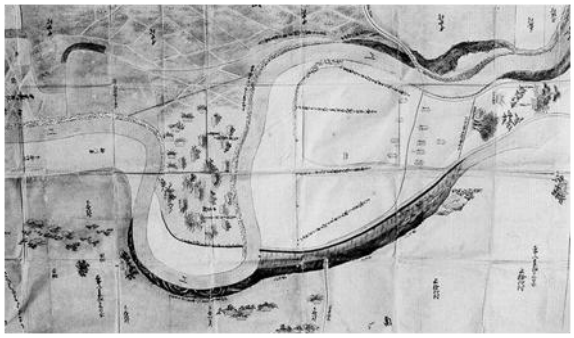
これら梵鐘・半鐘は、第五代将軍徳川綱吉より朱印證を賜った記念にペアで製作した物だろう。江戸中期から明治初頭まで新御堂村に時を告げていた梵鐘はないが、半鐘は残り、静かに歴史を刻んでいる。

（周西マップクラブ）

地頭　大草平内　（中冨）

大草平内は、今から三〇〇年前の元禄時代（一六八八～一七〇四）、中富村の水害による惨状を憐れみ、年貢の減免や救援米で村人を救ってくれた、大恩人である。

大草甚右衛門吉次を父、母は多田宗右衛門の娘で寛永一七年（一六四〇）九月二日、上総国周准郡に生まれた。幼名を孫助、その後、義徳となり、後に改めて悦重といった。旗本小笠原彦太夫長住の家臣で人見村に住み、中富村の地頭（土地管理・租税徴収する役職）であった。



延寶二年寅四月貞元・中富境界裁定絵図〔中富郷土誌〕

現存する中富の古文書（中富自治会所蔵文書）によれば、天正時代（一五七三～一五九三）、小糸川は釜神の宮崎神官宅の裏から、下湯江の自動車教習所の下で江川と合流していた。中富村の人達は三方を川に囲まれた中で、二八町歩の田畑を耕し、農業で生活していたのである。しかし、川は大雨のたびに流路を変えて西に移動し、中富村の耕地は減少するばかりであった。

寛文二年（一六六二）と一三年に、貞元村と境界の件で裁判沙汰となり、延宝二年（一六七四）にようやく決着し、現宮崎神官の大榎から計測して七ヶ所に石を埋めて貞元村との境としたのである。これが現在の河原山である。

元禄三年九月七日、五〇年来、かってなかった大洪水に見舞われ、数軒の家が流され、水は母屋の「ひさし」まで上がり、田畑は砂で埋まり、中富村は大被害を受けた。作物は全滅し荒涼とした田畑を見た地頭大草平内は、この惨状を解決するには川を直線にするしかないと考え、上司に再三お願いしたが、その願いは成就することなく元禄一二年、六〇才でこの世を去った。三年後の元禄一五年四月、中富村・下湯江村連名で、

一、長さ二百六拾間（四六八米）の新川を掘り直線にすること。

一、古川通りを新田に開発すること。

一、新川の作業は、両村の百姓が自分達の力でやること。

一、お弁当米お恵みいただきたいこと。

という内容文書と略図を添えて御代官にお願いしたところ、かつて平内の根回しができていたのか、早速受け入れられ工事が始まったのである。

流し普請という工法で、雨が降ると鍬や鋤で土を流して川幅を広げ、二年間で工事は完了したが、跡地の新田開発や境界の整理が三年位かかったようで、宝永四年（一七〇七）、一様の完成をみた。地頭大草平内の生前のご努力が実を結び、川が直線になってからは川筋を変えることはなかった。洪水

も少なくなり、農作物はよくでき、収穫も多く生活はゆたかになったので、中富の人々は平内の徳を慕い、感謝するため、冨西寺の境内に小祠を建て、平内の木像を安置し「日の宮様」としてあがめ、お日待ちと称して供養を続けている。この「お日待ち」は廟前で読経ののち公会堂に集まり、茶碗に高々と盛られた御飯と具が沢山入ったけんちん汁をお腹一杯食べるというもので、「お陰様で…」という人々の感謝の気持ちが込められている。

（『中富郷土誌』『貞元地域誌』）

高間伝兵衛の逸話　（常代）

江戸時代、元禄年間（一六八八～一七〇四）ころから米商人として興り、常代の地を本拠として地元に本店を構え、江戸に盛大に進出、ついに筆頭米商人の位置を確保。享保年間（一七一六～一七三六）には、幕府の米政策に参画し米方役にまで任命され、幕政の重要な存在とまでなった高間傳兵衛家も享保期をピークとして、段々と下降線をたどった様である。結果的には、享保年間を過ごし享保二〇年に死没した高間傳兵衛の代が最も盛んな時代であったと思われる。

江戸の豪商といえば、だれでも第一に紀伊国屋文左衛門の名をあげる。「沖の暗いのに白帆が見えるあれは紀の国みかん船」と歌われ、大海の大暴風雨・高浪を乗り切って、遥か紀州から江戸町人待望のみかんを運んで来た紀文大尽。そしてその豪奢な生活ぶり、江戸吉原の花魁（おいらん）を総揚げして小判を撒いて拾わせたという話しは有名である。この天下の紀伊国屋文左衛門にも匹敵するであろう豪商が、わが高間傳兵衛であったといえるのである。紀文大尽は元禄のころといわれるが、高間傳兵衛は少し下がって享保のころの人である。

天保三年（一八三二）に幕府の御鷹同心の片山賢の書いた『上総日記』にも記述されているが、高間傳兵衛が、江戸吉原の大門を三日までも閉ざさせたとあり、いわば江戸の慇賑地（いんしんち）を三日間も買い切ったことであり、大枚の黄金を積んだことであろう。紀伊国屋文左衛門はみかんであったが、こちらの高間傳兵衛は米であるから、恐らくその豪勢さは比較にならない程のものがあったろうと思う。また、二、三の文献や地元の伝承などをまとめてみると、その本宅である常代の高間家は、その屋敷の広さが凡そ一二町歩もあり、この屋敷に大きな四反歩もの池が造られていたという。この池に屋形船を浮かべ、その舟に愛妻（愛妾ともある）を乗せ、舟から大空へ紙鳶（かみたこ）を揚げて愛妻を喜ばせたという。この池の跡は現在の高間屋敷跡に残っている。

地元に残っている俗謡の文句に、

「あんば常代高間どん、すぎなりお笠で紙鳶揚げる。たあれに見しょとて紙鳶揚げる。お雪さんに見しょとて紙鳶揚げる」と歌われている。このことは、昭和二年に刊行された『君津郡誌』にも収録されている。なお、江戸で収録された落首に

は、「米高間、一升二合で粥にたき、大岡食わぬ、たった越前」というのがあった。

これは、米が高く（高間）なってしまったので、銭百文では一升二合の米しか買えない。これではお粥がせいぜいで、多く（大岡）は食べられず、たった一膳（越前）がやっとであるというような意味で、すさまじい米価の騰貴を語っており、米価管理をしている町奉行の大岡越前守の名を詠み込み、米穀商の高間傳兵衛の姓を入れて、世情を訴えた庶民の声であった。たしかに日常の常食の米の値段は、一般町民には最大の関心事であり、生死にかかわる一大事であった。それにしてもこの落首は、当時の世情社会の現実を語るものであり、又このように、高間傳兵衛が、名奉行といわれて後世に名が残っている大岡越前守とともに、一首の中にその名を詠み込まれていることは、注目すべきことである。

次に、高間傳兵衛の江戸屋敷が打毀し（うちこわし）の対象となったことも、大きな逸話とみることができる。この事件は、当時の江戸町人二千人近くを動員したことでも、大事件である。そしてその対象とされたのが、高間傳兵衛家のただ一軒であった。後の天明度（一七八一～一七八九）に起こった打毀しの対象となった米商人が一〇〇有余人あったことを考え合わせると、やはり一面から見た高間傳兵衛の逸話といえる。しかも、この享保の打毀し（うちこわし）は町人たちの大きな誤解であったことと、当の高間傳兵衛は決定的な打撃を受けなかったことなど注目すべきことである。

もう一つの逸話としては、高間傳兵衛は江戸の高間河岸と呼ばれた所に、いろは四八棟の倉庫を建てて、米蔵としていたといわれていることである。『すなみふるさと誌』には鈴木義治氏が考證して、いろは四八とは倉庫の総数でなく、倉庫としては、その半数の二四棟建てたものであり、この倉庫に出入口が二か所つけられており、それぞれの出入口に、「いろは」という様に、いろは歌の符号が、つけられていたのだという。それにしても、大変豪勢な倉庫であることは、驚くべきことである。この二四棟もの倉庫へ、米を出し入れした大旦那が、常代出身の人物だったのである。

江戸橋付近にあった「高間河岸」〔Webページ〕

（周西マップクラブ）

元禄・安政　大地震の記録　（千葉県）

古くは正平一五年（一三六〇）の上総地震があり、岩田寺（大坂）の堂宇破壊が記録されている。

元禄地震は、元禄一六年（一七〇三）一一月二二日未明、地震の規模は、M七・九～八・二と推測されており、関東大震災に匹敵するもので、今から三一五年前、千葉県を襲った、

元禄・大正関東地震の震源域〔Web ページ〕

前代未聞の、巨大地震津波だった。

防災誌「元禄地震」の要旨（千葉県）によると、現存する記録には、生々しい当時の様子が表現されており、地震の揺れの状況、家屋が押し潰される状況、津波の押し寄せる状況、デマに惑わされた人々の状況などがわかる。元禄地震の全体の死者数は、一万人を超えているが、房総（千葉県）での死者数が全体の六割以上を占めており、また、房総での家屋の流失被害が特に大きくなっていることから、房総の死者数には津波による死者がかなり含まれていることが容易に想定できる。この津波で犠牲になった人たちの霊を慰めるための伝承として供養塔や墓碑、位牌等があるが、二十三夜講が生死を分けたことなど、助かった人とそうでなかった人との些細な行動の違いや地域特性などに触れている。

また、地震によって土地は隆起（南房総市野島崎、館山市布良等）したり沈降（鴨川市内浦湾、鋸南町保田等）したりした。

隆起した地域では、新しい浜が誕生し、人々に利益をもたらした反面、場合によっては、新しい土地をめぐって、争いが生じたことなど。沈降した地域では、移住を余儀なくされた人々が多数発生するなど、地震による土地の隆起と沈降が、人々の生活の明暗を分けたことが、わかる。市域の記録では、わずかに大井村に「おびただしい地震に見舞われ大地が割れた」とある。

安政の大地震は、江戸時代後期の安政年間（一八五〇年代）に日本各地で連発した。実は安政元年（一八五四）、この安政の大地震を上回る、規模の三大地震（伊賀上野地震・安政東海大地震・安政南海大地震）が、わずか四日間に起きている。

世にいう「安政の大地震」は、特に、安政二年一〇月二日夜の四ツ時（午後一〇時）ごろ、関東地方南部を直撃した、M七ク

元禄地震記録（岩井海岸の津波）
～防災誌・千葉県～

元禄十六年の冬、十一月二十二日は空も晴れ、海は風もなく波が穏やかであった。日も暮れて夜の十二時ごろ、突然の地震が起きた。家中寝静まっていたところを、起きては転びながらもやっと立ち上がり、部屋の戸を開け後ろへ出た。親子みんな無事に門口に廻った。（中略）

浜台の老若男女が皆円正寺山の西にある平地に上って小さな松の木にすがった。寝静まったときの出来事なので慌てて、着物も帯びも忘れ、真裸で出る男女もあった。（中略）

李兵衛が家に戻ってみると、庭の中に波が押し寄せて腰くらいの深さになって、井げた（四角に組んだ井戸の枠）の縁が少し見えるほどであった。何もかもが海になってしまい、恐ろしいので早く家の中に入り、伊勢神宮のお札を持ってまた寺山に戻った。（中略）

十二月一日まで岡の庭に居た。その日、午後四時ごろ浜の家に戻った。哀れな事に、親は子を亡くし、また子は親を亡くし、夫婦もはぐれ、さらに幼子も波にさらわれ、親兄弟嘆き悲しむ有り様は、なんとも心痛む思いであった。目も当てられず、言葉も消えうせるほどのはかなさであった。（中略）

（地震から）十日十五日のうちは、浜に多くの死人が打ち寄せられた。昼夜犬がその死体を食いちぎって、家の門口までくわえてくるので恐ろしくて外に出られない。（後略）

ラスの地震で、「安政江戸地震」とも呼ばれる。幕府による公式調査では、犠牲者が四、七四一人、倒壊家屋一四、三四六戸。しかし、特に被害が大きかった武家屋敷を含めると犠牲者は一万人程に増えると推定されている。

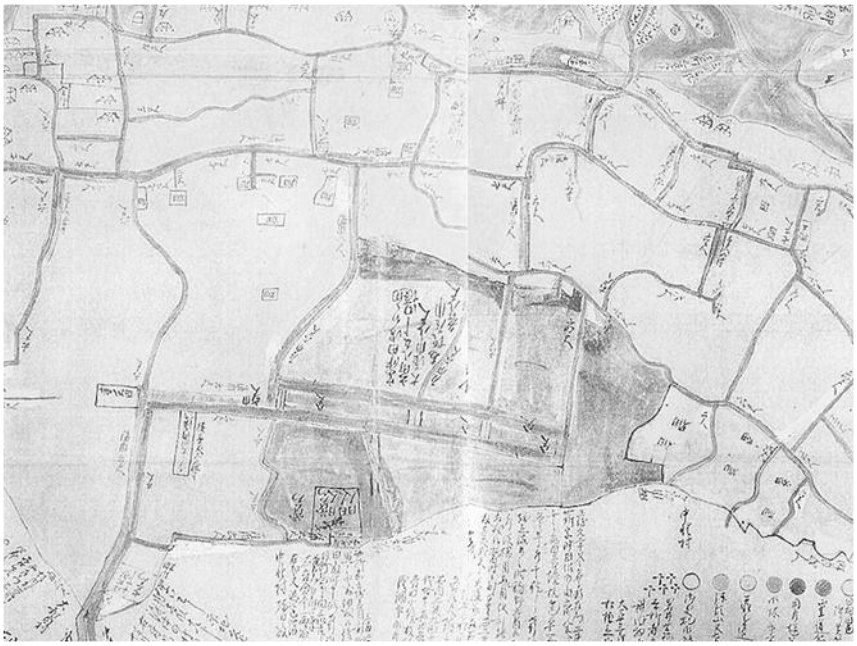
このときの記録は、市域の貞元、中野、小市部に残されていて、貞元村では二軒が全焼、鎮守・寺院・堂社・民家二三軒の大半が潰れて使用不能となり、その後も余震が日に何度となく続き、そのため野田、竹藪などへ小屋掛けして雨露を凌いでいるという状況だった。中野村では、村内の被害は全壊が一〇軒、半壊八軒、不幸にも潰れた家の下敷きとなり一名の尊い命を失い、小市部村では、この地震により道路の随所に山の崩落が起こり、その片づけのため他村の応援を願い出ている。また、この時は小糸川の道筋が三〇〇間に渡って割れ、地形に一尺余りの高低差ができたとも記録されている。

平成になってから、ここ十数年の間に阪神淡路・東日本・熊本・長野・大阪などの大地震で甚大な被害が発生している。さらに内閣府防災担当によると、ここ三〇年以内の巨大地震発生確率は、東南（八八％）・東南海（七〇％程度）・南海（六〇％）と予想し警戒を呼びかけている。このような状況下、いつ発生しても不思議ではない巨大地震に対して、常日頃から万全の準備をし対応しなければならない。

（周西マップクラブ）

大堀の由来　（坂田）

坂田のほぼ中央（西坂田一丁目付近）には、東西に貫く大きな溝があり、村民は大堀（おおぼり）と呼んでいた。大雨が続くと、この一帯は池沼のようになって稲は冠水し、非常に困った。今でも大雨の後のあの辺一帯の冠水ぶりは、われ



文政2年坂田古絵図〔坂田郷土誌〕

＜絵図欄外メモ＞
…正徳元年各々、旱水干乾し如願耕作道幅各六尺、且又幅壱丈弐尺之大溝堀立、満水之時稲草腐候砌者･･･

われの記憶から消えない。

この大堀は正徳元年（一七一一）に、当時の名主大牧新左ェ門が中心となって掘った。沖田一帯の低地冠水状態を見て、村人たちと相談のうえ、巾一丈二尺の大堀工事計画を進め、ほぼ六町八反余歩の水田はたちまちのうちに美田と化した。この難工事は恐らく村人全体が一致して従事したものと思われるが、幸いにも成功し、のちにはさしたる冠水もなく熟田となり、村人たちは大いに利益を得たという。

この大堀も、その後の永い年月の間には風雨で欠け崩れがあって堀が埋り、巾も狭くなったりしたため、その修理に沢山の人手を要したこともあり、文化一五年(一八一八)秋に、再び名主新左ェ門（名前は世襲で同一だが人物は異なる)、同役茂右ェ門ならびに組頭らが百姓達と相談して、溝浚（みぞさら）ひ、築堤につとめた旨が記されている。

この大堀が、後の世の坂田村の人々の為にどれだけ役に立ったか、まことにはかり知れないものがある。古い図面を見ると、大堀の一体は昔から雨が降ると水が満ち溢れ田の畔もわからなくなり、壊れてしまうような場所だったと描かれている。

大堀は水利組合に入らなかったので堰とは無関係だった。それで大堀の水を堰に汲みあげた。旱天（ひでり）のときなど、大龍から水をもらうときは大堀を利用した。大堀が変わったのは土地改良のときで、区画整理にはいる前はあった。その後、宅地化が進み消滅していった。

坂田は、このようにして、われわれの先祖が自分達の生活を守り、また地域のためを考え、血の出るような努力を重ねて作り上げたものであるといっても過言ではない。

（「坂田自治会報」坂井清治）

周准郡の助郷　（周准郡）

かつて、主要幹線道路だった房総往環道は、江戸時代中期までは、江戸から内海（江戸湾）に沿って、安房の北条まで行く道として、唯一の公用通行道路でした。当時の公用通行は、助郷といって、街道周辺の村々が組合を作り、その負担によって通行が維持されていた。もちろんこの制度は武士の公用通行のみに利用され、一般庶民の旅では、その恩恵を受けることは出来なかった。

天保４年宮ケ崎代官へ提出された平山村之文書〔Web ページ〕

周准郡の助郷は、糠田より東南三六ヶ村が鹿野山駅助郷、中部一九ヶ村は六手駅助郷、西部三八ヶ村は、貞元駅助郷に属していて、この三駅九三ヶ村は、房州峰岡の官牧並びに海岸防備等の運

輸を担当した。

助郷は、主要な街道の駅々の問屋場で、常備の人馬が不足する時に、宿駅の近くの村々に対し、村高に応じて一定の人馬を徴発するものである。つまり宿駅の人馬の不足を助ける郷村の意味で、これには二種あった。

定助郷（本助郷）。附近数里の諸村。

加助郷（大助郷）。後には、五六里乃至一〇里の諸村に助人を出させたことから、これを加助郷といった。

初期は高一〇〇石に馬二疋（ひき）、人足二人ぐらいのものであったが、次第に多くの人馬を出すようになった。宿場に遠い地方、又は激しく人馬を徴発される村々では、已む無く問屋場に対して一人に付七〇〇文、馬一疋（ぴき）につき一貫文というような過当な金銭を出して、涙をのんで請負（ママ）を頼む者が多くなり、問屋場では無宿の無頼漢を多く抱えて置いて、之を助郷の代わりに使用するようになった。かくして出来たのが雲助である（本庄氏、日本社会経済史）。

新田の開墾とか城砦の建築のような土木事業を起した場合に賦課されるのは一時的であるが、助郷のようなものは継続的労役の賦課である。この助郷に如何に村人が苦しめられたであろうか。

中野・貞元駅場の助郷は、小糸川を挟んで北の中野村、南の貞元村両村を親村として構成されていた。房総往還が通る貞元村釜神には、会所、筆・墨・紙を売る店、鍛冶屋、旅籠などの家々が並び宿場としてにぎわった。川には橋がなかったので馬や渡し船で渡り、水がないときは徒歩で渡り、大人数の通行の際は、船を横に並べ、その上に板を敷いて渡ることもあったという。公用通行の先触れが届くと、現場役人から助郷村々へ人馬の割り当ての触れを出した。触れを受けた助郷村では割り当ての人馬を用意し、指定の日時に継場へ人馬を出し、次の継ぎ場までの貨客の輸送にあたらなければならなかった。継ぎ場は宿駅と違って、日常的には人馬を用意していなかった。

この継ぎ場は、市内では貞元の釜神に置かれた。坂田は貞元、中野組合に属し、下りは木更津から送られてくる荷物を中野で受け取り小糸川を渡って貞元から佐貫まで継ぎ送りました。勝山藩の参勤交代にもこの組合が動員されており、中野・貞元駅からの継ぎたては、下りは佐貫、上りは木更津までだった。

公用通行には、公定の賃銭が支払われたが、無賃銭の継ぎ立て、また先触れを出しながら突然解約されることなどもあり、必ずしも受け取る賃銭だけでは賄いきれなかった。享保五年（一七二〇）の周准郡助郷では、二里の継ぎ立てに人足一人につき銭三九文、本馬一疋七八文、軽尻（からじり）一疋六四文と取り決められていた。この助郷は、享保期（一七一六～三六）に房州嶺岡牧が再興され、幕府の公牧が設けられたため、たびたび幕府役人が往来するようになって本格的

に整えられたようである。

（『君津市史』）

石尊山の石碑　（黄和田畑）

黄和田畑の南東境に石尊山がある。山頂には三基の石祠があり、中心にある石祠は台座をいれると二メートルを超す高さで、石室内に「大山阿夫利神社」の木札があった。これに前後する石祠は一メートル。手前の石祠の石室上部には「小天狗」、後方のものには「大天狗」の文字がある。

大山阿夫利神社石祠〔Web ページ〕

一般に小天狗は、鳥の嘴をした烏天狗を、大天狗には鼻の高い天狗を指す。さらに天狗には位があり、『天狗の研究』（知切光歳著、七五年大陸書房）の大天狗番付の東（東日本）には、横綱・富士太郎、大関・飯綱三郎、関脇・相模大山伯耆坊と並び、富士小御嶽正真坊、立山縄乗坊、御嶽山六尺坊、高尾山飯縄権現と続く。いずれも修験道の霊山になっている山の天狗だ。大山阿夫利（あふり）神社の天狗は丹沢の大山伯耆坊、これを勧請したのが石尊山の石祠だ。大山の天狗を大天狗と小天狗が護る、仏教でいう三尊形式をとっているのが石尊山の石祠なのだろう。

（「石仏１２５石尊山　千葉」）

上総白炭製造者　土窯半兵衛　（秋元・三島・亀山）

山林に恵まれた清和村は、かつては上総町とともに木炭の主要生産地であった。現在、木炭は電気、ガス、石油などによる燃料革命にあおられ、姿を消しつつある。

上総白炭〔本田寺蔵〕

昔の木炭は、消し炭のような粗悪なもので、しかも少量しか製炭できなかったといわれたものが、製炭技術の指導者、相模国足柄下郡吉浜村出身、常盤半兵衛の力によって現在のような良質の木炭が大量に製造されるようになり、普及したものである。

伝え聞くところによると半兵衛は、当初この地に木炭上納の督励役として派遣された役人であったが、この地の製炭技術が拙劣で粗悪であるのを見るに見かね、自ら刀をすて焼夫（製炭に従事するもの）と起居をともにしながら、その技術の改良研究をし、ついに土窯の築造による製炭法をあみ出し、製炭技術の能率化と、その品質向上を図り、広く西上総の山地を回って、この普及に尽力したのである。

清和村においては、この半兵衛の指導のおかげで、木炭製造の最盛期には、専業者八〇余人を含む製炭業従事者四五〇

人。製炭量一〇万俵にも達することが出来たのである。

現在もこの半兵衛の伝えた製炭法が、秋元、三島、亀山などの各地に現存しているのをみても、彼が西上総の山村のいたる所で歓迎され、土窯の築造や、焼き方の指導に各地を歩いていたことを物語るものである。

製炭技術の指導者、半兵衛は、後年三石観音を深く信仰し、山中生活の心の寂しさをそれによって慰めたといわれ、さらに山村にあっては、トバク、ケンカ、ワルザケの生活であった製炭夫たちを教化指導し、半兵衛のあるところ人それぞれみな生活を楽しみ、仕事に精励するようになったといわれる。いわば半兵衛は、ただ製炭技術の師であるばかりでなく、西上総の地における山村社会の指導者でもあったのである。

しかし、この半兵衛は、安永元年（一七七二）一二月一一日、観音を拝しつつ静かに瞑目したと伝えられる。半兵衛の墓は、清和村市宿の三経寺にあり、また亀山の人たちが報恩のしるしに三石観音のほとりに「心緑常性信士」と刻された土窯半兵衛の石碑を建てている。

木炭の将来は、まことに暗いものであるが、西上総の地の大恩人であり、山村社会の指導者であった土窯半兵衛の名前は忘れられてはならぬ名であり、郷土開発の先駆者の一人として銘記しておくべきである。

（「鹿野山歴史とその周辺」中嶋清一）

倉沢村の新田開発　里見倉沢

～川廻しの功労者～　（豊英）

三島村誌や清和村誌によると、江戸時代に里見倉澤（そうたく）という人物が、安房国より山深い、旧三島村の山村に移り住み、名主小泉儀右ヱ門に協力して新田開発のために「川廻し」という工事を行い、この村に大きな貢献をしたという記事がある。村人は、功労者里見倉澤の名を取って、村の名を「倉澤（くらさわ）村」に改めたと伝えるものだった。

八幡台を取り巻くように迂回している古川（小糸川）を「臼ケ台」と「八幡台」の間の狭い部分を切割り、流れをショートカット（川回し）した。
〔Web ページ〕

清和村誌「里見倉沢の開発」要旨によると、倉沢村は当時、小泉儀右ヱ門が名主で幅を利かせていた。儀右ヱ門は倉沢を見るや非凡な風格の持主であることを悟った。自家の一室を与え、百姓を手伝わせ、村用事にも出役させる等をした。その態度ぶりは名主儀右ヱ門の心を動かし、主・従の関係は次

第に深まり、信頼の度は増していった。

倉沢村は当時、農耕田に乏しく、名主は新田開発の急務を考えていた。この時、儀右ヱ門は一策を思い立ち、古川（小糸川）の湾曲している所の流れを変えて、旧河川敷を利用した新田の造成を考えたのである。勿論、倉沢もこの審議に加わり協力を誓ったもので、むつかしい技術の克服と難工事の連続であったが、数ヶ月を要して第一の堀切工事が完了し、やがて二町歩に余る美田が誕生したという事であった。倉沢が全面的に協力して竣工した、この第一の川廻し工事が何時であったか、詳（つまびら）かでないが、『三島村誌』には次のように記述している。

宝暦一二年（一七六二）二月開発が行われ、当時の名主伝重郎は次の担当者をきめ、代官根岸又左ヱ門に嘆願書を提出し、第二回目の工事の裁許を仰いで着工したとある。

開発願人　高倉村清左ヱ門
　　草敷村三右ヱ門
　　金立皿引村太郎右ヱ門
場所　古川延長四十二間
　　水田二町八反歩　を完工したと伝える。

伝重郎は伝兵ヱとも言い、儀右ヱ門の嫡子、里見倉沢は在住の間八幡台に居を構え、北川に築堤を造り、一隅に井戸を設け、常に八幡神社を信仰した。後、江戸御徒町通りに新住し、晩年を過したという。また儀右ヱ門が新田払い下げの為、江戸奉行所に出頭の際は、倉沢が案内同行する等、その便宜を計らい、倉沢の没後、小泉家は分骨して同家の墓地に葬り、開拓の恩人として懇愛を傾けている。今、小泉家に在る位牌銘には、

「徹心院宗廉信士　文化十三年八月九日没
　江戸オカチ町　里見倉沢」

とあり、名主儀右ヱ門と妻女との三名連記で位牌が作られ、その丁重な祭祀が偲ばれる。

（『すなみふるさと誌』）

明和七年の高札　（大和田）

高札（徒党札）　明和七年四月〔榎本毅蔵〕

高札には、徒党札、忠孝札、毒薬札、火付札、駄賃札、切支丹札、抜荷札、渡海札などがあります。

これは明和七年（一七七〇）奉行より出されたお触れで、徒党（ととう＝不穏な事を企てようと集まる）、強訴（ごうそ＝徒党を組んで強引に訴願する）、逃散（ちょうさん＝農民が耕作を放棄して、他領へ移る）を戒めた「徒党札」で、大和田の名主小左衛門家（榎本）で保管されています。

大きさは、横九〇チセン・縦四〇チセン・厚さ四チセン程の木板です。

内容は、

定

何事によらすよろしからさる事に
百姓大勢申合候をととうととなへ
ととうしてしゐてねかい事くはだつるを
こふそといひあるひは申あハせ村方
たちのき候をてうさんと申前々より
御法度に候条右儀これあらば
居村他村にかぎらず早々其すじの
役所へ申出べし御ほうびとして

ととうの訴人　銀百枚
こうその訴人　同　断
てうさんの訴人　同　断

右之通下されその品により帯刀苗字
御免あるへき間たとひ一旦同類になるとも
発言いたし候もの名まへ申出るにおいてハ
その科をゆるされ御ほうび下さるへし
一、右類訴人いたすものもなく村々騒立候節
村内のものを差押へととうにくはゝらせす
一人もさしいださゝる村方これあれハ
村役人にても百姓にても重にとりしずめ候
ものハ御ほうひ銀下され帯刀苗字
御免さし津ゞき志つめ候ものどもこれ
あれハそれぞれ御ほうび下し
おかるべきもの也

明和七年四月

奉行

と墨書されています。

明和四年の夏は全国的に雨が降らず、九州から東北地方まで大干ばつとなり、農作物の凶作と水不足が深刻でした。特に九州では筑前国（福岡県）秋月藩領、中国の長門・周防両国（山口県）から隣国の安芸国（広島県）にかけて。四国の讃岐国（香川県）と淡路国（兵庫県）が大凶作。さらに畿内では河内国（大阪府）の被害がひどく稲も大豆も小豆も全く実らず、京都の夏の名物、大文字焼も中止になりました。

東海地方では遠江国（静岡県）が前代未聞の干ばつ、関東地方では相模国（神奈川県）足柄地方がひどく、江戸近郊ではイナゴが異常発生し、東北仙台藩領では表高（おもてだか＝額面上の米の収穫高）の五割にあたる三一万石余の損害を負いました。

当然、各地で年貢減免を要求した一揆（大衆運動）が多発し、幕府の年貢収納率は最低に落ち込み、緊縮予算を組まざるを得なかったということです。

内部告発者を奨励する取り組みは、時代が変わっても変わらないようです。報奨金、銀一〇〇枚とは一体

どのくらいの値打ちがあったのでしょうか。

今から約二五〇年前、幕府から各地に出されたお触れ（徒党札）が「上総国周准郡」の一村である大和田村で発見されたことは歴史を知るうえで大変意義深く、貴重な文化的遺産です。（周西マップクラブ）

久留里藩と飢饉　（久留里）

飢饉、それはこの世の地獄である。農民はもとより殿様も家臣も商工も、どん底の生活であった。

今から二〇〇年前、異常気象がもたらした冷害による飢饉、天明三年（一七八三）六月は雨が多く、関東各地に大洪水があり、七月には浅間山の大噴火により、領内一円に火山灰が降りそそいで、昼間でも暗く、五穀はほとんど実らなかった。この年諸国では一五〇万人が餓死している。当時の米価は「金一分につき」四斗五升から五斗ほど買えた。しかしこの年は、八升五合と五～六倍にハネ上がった。

天明の飢饉：浅間山噴火の絵〔Web ページ〕

当時の物価を表で見ると、

金一分に付コムギ	一斗二升
〃　ソバ	一斗九升
〃　ヒエ	四斗
〃　オオムギ	一斗六升
〃　ダイズ	一斗六升
〃　アワ	二斗

酒は一升、一七二文と前年の七倍の高値になった。久留里城主黒田直亨（なおゆき）公は疲労から病に倒れ、翌天明四年正月他界された。同年三月、嫡男直英公二七才が三代目を継ぎ、七月には奥方が没した。

天明四年は七分作を見たが銭相場は下がり、一両が六貫五〇文にしか使えなかった。物がなく銭の価値が下がったのである。

天明五年一月直英公は、大阪城勤番を命ぜられ、家老山本主全他七〇余名を従えて出発した。その費用は久留里藩負担である。石高三万石ながら五〇〇石に満たない年貢米から雑穀しいなまじりで一〇〇俵を御用船で輸送した。

天明六年も雨が多く、たびかさなる出水に藩内の用水堰六〇〇数ヶ所が各所でこわれて水があふれ、田植えが出来なかった。農民の食べものはひどく、木の芽やカヤノ実、ヒエ、アワヌカなどが常食であった。

藩より借用の「種モミ」を老父母に食べさせて投獄された農民がいた。このとき老臣森清太夫は、夫食（ふじき）借りの返済をゆるめて農民を救った。七月に入って八昼夜に亘る

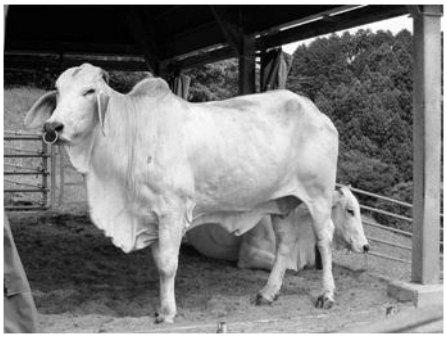
大暴風雨がつづいた。直英公は大坂城勤番中、病にたおれ二九才の若さで没した。この年は土用があけても稲穂が出なかった。

九月の末、三才の鶴松公が四代城主を継いだ。その日家老は、藩のお蔵米を放出して難民を救済したため、百姓騒動にはならなかった。しかし、領主の蓄積米を、農民の生存の為に支出することは出来ない掟があった。そこで家老山本主全は職を辞している。（『小糸川流域のかたりべ』土橋幸一）

房総往還と白牛

（周淮・天羽・安房）

江戸時代、江戸から船橋・木更津を通って館山に至る海岸沿いの街道を、房総往還といいました。当時の街道は、道幅が狭く曲がりくねっていました。小糸川には、橋がないため馬や舟を使って渡り、水が少ない時は歩いて渡りました。大人数の時は舟を横に並べ、その上に板を敷いて通ったといいます。この街道は房総の重要な交通路で、安房勝山藩が参勤交替する際にも通った道です。



白牛（千葉県酪農のさと）

この街道には、継場（つぎば）という東海道の宿場にあたる駅があり、「貞元、中野村」。「三直、六手村」。「鹿野山」の三駅がありました。人馬は常駐せず、公用通行の通知を受けた村が継場へ人馬を出し（助郷）、上りは木更津、下りは佐貫駅まで貨客の輸送に当たりました。

この街道は、天保年間（一八三一～一八四五）から通行がとみに激しくなりました。それは外国船が江戸湾（東京湾）に入ってくるので、その防衛の命令を受けた各藩の富津台場への通行や、幕府役人の海岸巡見が増えたためです。そして、その通行のたびごとに、助郷の人馬が動員されました。例えば、嘉永三年（一八五〇）の勘定奉行一行の通行には、人足二千人、馬一〇〇疋（ぴき）がかり出され、村々は大騒ぎになったといいます。

そのようななかで異彩なのは、白牛の継立てでした。記録では「白御牛」とあり、お犬様ならぬ白牛様です。白牛はそれまで日本では飼われていなかったし、今でも珍しいといえます。およそ「白い」というのは珍重され、例えば白馬といえば、数少なく特定の人しか乗れず、白蛇は神様の使いといわれるほどです。

享保一三年（一七二八）、徳川吉宗が軍馬を養成している嶺岡牧に、はじめて印度産の白牛三頭が放牧され、寛政四年（一七九二）には、繁殖して七〇頭にもなりました。

助郷は、この白牛の移動のたびにかりだされ、その丁重な扱いを要求されたということです。

ちなみに、現在の安房郡丸山町にある「酪農のさと」では、

この吉宗の業績にちなんで、アメリカから導入した白牛の飼育と、その繁殖に力を入れていますが、この「こぶ牛」と呼ばれるゼブー種の白牛の飼育は、全国的にもここだけという珍しいものです。文久四年（一八六四）の先触れ（さきぶれ）によれば嶺岡牧から江戸までの継立てで「二月、白牛六疋、三月二疋」とあり、一疋につき三人の人夫が動員されました。

ところで、幕府は小納戸頭（こなんどかしら）の岩本正倫（まさとも）に命じて、白牛乳から白牛酪を作らせています。これは、牛乳と砂糖を混ぜて煮詰め固形としたもので、今でいうバターのことです。医師である桃井寅（もものいいん）も『白牛酪考』という書を著し、体に良いと推奨しています。この白牛酪は、市販された我が国最初の酪製品で、寛政八年（一七九六）に、薬用として江戸で売り出された後、名古屋・大坂・広島・福井など全国一五か所で販売されるようになりました。

（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

波浮の港の開鑿者　秋広平六　（植畑）

作詞野口雨情、作曲中山晋平の名コンビで作られた童謡・唱歌「波浮の港」で有名な伊豆大島の波浮の港を開鑿（かいさく）したのは誰あろう、わがふるさと植畑出身の秋広平六その人である。

伝承によると、平六は宝暦七年（一七五七）君津市植畑に生まれ、一〇歳になって秋広家の養子になったといわれている。その後、二二歳で江戸に出て、大伝馬町利兵衛店の庄次郎方に身を寄せ、木材や薪炭の取引に従事していた。そして天明元年（一七八一）庄次郎と共に無人島探査参加を幕府に申請し、伊豆の島々を回る機会を得たと伝えられている。

波浮港〔Web ページ〕

当時の波浮港は水深が浅く、舟の航行は、満潮時だけしか利用できない不便な港であった。波浮港開港への意志は強く、ついに、寛政八年（一七九六）波浮港開鑿（かいさく）について幕府に建議し、同一〇年五月に、工事の見積書を添えて御代官に願書を提出した。

平六の熱意と、周囲の人々の協力によって幕府の許可を得、苦難の末、享和元年（一八〇一）ついに波浮の港が完成した。これにより波浮港は船の出入が盛んになり、大島繁栄の礎が築かれた。その後、平六は庄次郎と共に蝦夷方面に渡航し木材の取引に専念したが、文化一四年（一八一七）六一歳で没した。

秋広家菩提寺といわれる市宿の本田寺の改築に当たって発見された位牌がある。表面には永禄九年（一五六六）から文政三年（一八二〇）に至る一一人の戒名と没年月日を記し、その中に、

「安楽院貞祖日栄法居士

文政元寅四月二十二日命日」という戒名がある。

裏面には着目すべき記載がある。要約すると、「秋広家は市宿にあり、その先祖は秋広八良政高といって、土地の秋元城主秋元義久の家臣であった。その子孫である秋広藤原盛信（これが平六）は、寛政一〇年に、幕府の公命によって伊豆大島の波浮港を開いた。それにより、秋広家代々は港の重役を続けた」というのである。この位牌は嘉永二年（一八四九）四月に、先祖代々の菩提を供養するために大島から渡海して、三代目平六（藤原篤義）が納めたものである。

秋広家位牌〔本田寺蔵〕

市宿の共同墓地には秋広家の墓所と思われる場所があるが、平六の墓は見当たらない。ただし平六は、この秋広家へ養子に入った人物であるから、生まれた家は当然別にあるわけで、それについて植畑では、土地の山中家であるといっている。山中家の地内には、寛政一二年六月建立の馬頭観音の石碑があり、この年は平六が波浮港を竣工した年である。何らかの関係があるかも知れない。

波浮港の集落が展開しているその一角に、秋広本家の邸がある。その旧邸の近くの妙見堂のそばに、秋広家の墓地があり、墓石には、

「妙法安楽院貞祖日栄居士位

文化十四年四月二十二日寂」とある。

没年が前記した位牌と一年くいちがっている。従来の二、三の文献では、平六は宝暦七年に生まれ、文化一四年に没したとなっているので、行年六一歳である。平六の墓は昭和三年に東京都の史跡に指定され、昭和四一年、大島町は秋広平六の偉大な業績に敬意と感謝の意を表し、彼に名誉町民の称号を贈った。

（『ふるさと西上総』菱田忠義）

産科医　大牧周西　（坂田）

大牧家の祖は、既に中世からこの坂田に住んでいたと言われる。かつて、この家にあったといわれる過去帳によれば、その系譜は、熊谷次郎直実に繋がるものといい、中興の祖は文暦（一二三四～三五）頃の大牧義明という。

〔坂田郷土誌〕

大牧家は、江戸時代、坂田村の名主となった。周西は、八代大牧家当主で通称新左衛門、実名大牧明敬といい、宝暦七年（一七五七）坂田に生まれ、二四才で名主となった。この頃の大牧家は諸般の事情で財政的には苦境の時代だった。新左衛門は、この地方の旧地名である「周西」をわが号とし、当時はまだ研究も充分とはいわれなかった産科医学の開拓に、新機軸を開いた。

天明三年（一七八三）といえばあの浅間山の大噴火と大洪

水、つづいて起った東国一円の大飢饉であった。勿論、この坂田地方の農民生活も苦境に追い込まれた。この惨状を見た周西は「医は仁術である。人の苦しさをみて救うことこそほんとうの医師の務めである！」と、先ずわが米倉を開いて近郷の人々に施し、やがてはわが耕地や財宝まで売払って、米穀や食糧の購入費を捻出し、坂田周辺の農民を飢餓線上から救済した。

寛政の頃（一七八九～一八〇一）、周西は針医を開いて近隣農民を治療していたが、偶々（たまたま）友人の妻が難産で、それを見舞い非常に気の毒に思い、来合わせた産婆と協力して施術したところ、その方法が、ふしぎにも効を示し門外の産婆術に立派な成果を得たというところから、産科医術を専門的に研究するようになったという。

周西は、文政期（一八一八～三一）に京都の産科医賀川子玄（かがわしげん）の著した『産論』を求め独学で勉強しながら、近隣の難産に苦しむ婦人を貧富の別なく救い『産科指南　乾』『産科指南　坤』『産科新論』（三巻）と『産科餘考』（二巻）を執筆した。このうち「新論」と「餘考」は散佚（さんいつ）して発見されていないが、「指南」は、昭和一三年ある古物商から郷土史家の手に入り、小熊吉蔵氏の誘導と指示で、小川政吉が調査し、その概要を把握するに至った。

周西の産科医学は、年と共にその研究の深さが加わりつつあったが、彼は貧しい家庭の産婦には無料で施術し、また状況によっては大牧家の自宅に招いて世話をするなど近郷の人々から「お産の生き神様」のように慕われていた。

周西の人と成りは、「謙虚な学者、名主さん」という一語が当てはまるほどで、『産科指南』の序文等でも推察できるように「私の研究はすべて周辺、先人、先輩の賜である。この著書の内容、研究の成果など、これみな私の愛読した『産論』の著者、京都の賀川子玄先生の教えの結果である……」と周囲の人々に語っていたという。

周西の名著『産科指南』は、美濃紙に木版刷りで多年に亙る体験から得た研究を総合詳述している。特にこの書は、周西が晩年老齢に鞭打ちながら、文政六年（一八二三）四月に脱稿したものの、翌年四月八日、六七歳で没した。長福寺地蔵堂墓地の西側にある大牧家の墓所に葬られている。没後の文政九年に、高弟の森崎保祐（女性産科医）などが出版した。

（『産科指南』「坂田自治会報」ほか）

海苔養殖の祖　近江屋甚兵衛と出訴事件　（人見）

江戸時代の海苔は、品川や大森でなければできないとされ、大森の海苔は「御膳海苔」として上納されるほど品質に優れていた。養殖技術が地域外に流出することは、厳しく戒められた時代である。江戸四谷で海苔商人をしていた近江屋甚兵衛は、江戸品川、大森の海の海苔養殖を研究した結果、「江戸湾の何処でも、河水の注入するところなら、海中に粗朶木

（そだぎ）を立てれば、必ず海苔はとれる」と考え、五五歳のとき、新しい土地での海苔づくりを思い立ち、海苔づくりの勧誘、指導の旅に出た。

近江屋甚兵衛胸像
〔漁業資料館蔵〕

初めに、下総国行徳附近の江戸川河口をねらって運動したが、障害があって、まとまらなかった。次いで、養老川、小櫃川筋の村々を遊説したが、ことごとく拒絶され、最後に小糸川筋の人見村に辿りついた。当時、人見村には旗本知行（小笠原彦太夫）と代官領（保科氏）があり、旗本知行地の名主は八郎右衛門、代官領が源左衛門だった。小糸川の落口の人見・大堀へ入る時は慎重に交渉にあたり、まず畑沢村の名主と久保村の名主の協力を得て同行してもらった。そして人見村・大堀村の名主に「海苔を作ればよい稼ぎになる」と掛け合ったが、大堀村は「貝がだめになるし漁業にさしさわりがある」といってことわられた。一方、人見村名主の八郎右衛門は受け入れようとして、南組の名主とともに村人の説得にあたった。再三の説得でようやく同意させることができたとき、甚兵衛は五六歳でした。しかし、始めたのは僅か六人。この年の試作は、小糸川の出水でひびを流してしまい失敗におわった。

翌文政五年（一八二二）は海苔が成育し、改めて希望者を募ったところ一七戸が申し出てきた。当時の海苔養殖は当たり外れがあり不安定でしたので、誰でも参加できるわけではありません。応じたものは合わせて二三戸で、これらの家は村の上層の者と、それらの分家が若干含まれる位だった。

こうして人見村の海苔養殖は本格的にスタートし、各人の場所割りも行われ株数も決められた。文政一〇年、最初は勧誘を断った大堀村が、養殖の製法を願い出たので、甚兵衛は「人見村から手馴れた者を貸そう」と言って快諾した。その際、彼にしてみれば「人見村と約束したのと同じように、売り捌き（さばき）は私方一手に買い受ける」ということは既定のことと思い、改めて約束はしなかった。順調に生産できるようになった海苔だったが天保四年（一八三三）頃、大堀村では「甚兵衛とは売り捌きの約束をしていない」として独自の販売をするようになった。甚兵衛は「当初の約束と違う」と、天保七年に訴えたが否決された。その時、甚兵衛は七〇歳になっていた。こうして老衰でもあった甚兵衛は、独善的な問屋としての地位を失うことになった。その後、八郎右衛門の知遇のもと人見村に仮住し、弘化元年（一八四四）七八歳の生涯を終えた。

翌年は、海苔が極めて豊作だった。ところが、大森は大不作で海苔の値段は高く利益が多かったため、養殖希望者が続出するありさまで、海苔業は漸次（ぜんじ）各地に伝わるとともに、海苔製造技術も改良され生産額も増大し、江戸市場では「上総海苔」として名声高まり、大森業者に多大な影響

を及ぼすことになった。

元治元年（一八六四）に、西大森村ほか二ヶ村から、人見・大堀・青木・西川・新井の五ヶ村を相手取り、勘定奉行に出訴する事態になった。理由は、大森の特権となっている将軍家御用達の、いわゆる「献上海苔」の支障となるということである。その後、奉行所より関係各村に尋問があり、これに対して青木・西川・新井・人見・大堀は単独で答弁書を差し出した結果、上総側の申し出が通り勝訴となった。その答弁書によると、各村とも元来、小糸川下流は、窪地の上に田畑の土壌が悪く、農業のみでは生活困難なところです。近年、海苔事業が出来て、一同、無難にその日を過ごすことが出来るようになったことを述べ、各海苔開始の年代、運上金納付の年代、簗建面積などを記している。当時の海苔養殖状況を知ることができる。

（「人見老人会」川名邦五郎）

平山用水　（平山）

天明の飢饉以来、地主の家でさえ三度の食事は大麦五対米五であった。まして小作人は米三麦七である。あの飢饉から三七年、「アワやヒエ」に木の実や山菜のまぜ飯しの味を知っている。三郎左衛門は、二〇間余り崖下を流れる小櫃川の水面をみつめていた。あの水が大原台まで上げられたら、米がさぞ獲れることであろう。うまい飯が食えるであろう。

「水車方式」は、一〇間上げるのが限界である。「板羽目堰」には水量が多すぎる。「長水路方式」ならと、宇坪村の鈴木三郎佐衛門は、一人思案にくれていた。そこで夷隅（いすみ）郡の五右衛門という土木工事人を呼び水路を調査した。

小櫃川の上流、坂畑の稲ヶ崎から平山の大原台まで、延々二里半（一〇キロ）の用水路の工事申請願書を文政二年（一八一九）、川越藩三本松陣屋を通じて、松平斉典（なりつね）に提出した。審議一三年の末、天保三年（一八三二）許可された。この年、東北では飢餓に苦しむ者が多かった。三郎佐衛門は村人を説得し、有力者伊藤吉蔵、星野祐左衛門、石井庄兵衛、名主長兵衛等の協力者を以て、翌天保四年着工した。

平山用水〔君津市の文化財〕

小櫃川上流の取入れ口から平山大原台まで水路を定めるのに旗を立て、縄を張って位置を定め、夜は竹筒を水平に固定して、提灯のあかりをのぞき見て高低を定めた。途中には山や谷が有り難工事であった。ノミとツチで、こつこつとトンネルを掘り進む。身動きできない狭い穴から土を運び出す。二五ヶのトンネルは、巾二尺（六〇チセン）、高さ五尺（一五〇チセン）。作業は大原台の百姓はもとより道すじの村々の協力を得て、四年の歳月と延べ三万二千人の人達の手によって、天

保七年夏、用水路が完成した。

水路いっぱいに流れる水を見て「バンザイ」の声があがった。平山用水の完成によって一〇㌶の水田が五〇㌶に増え、豊かな田園となって天保の飢饉をのり越えることが出来ました。今でも水量豊かに平山の水田が潤い、うまい米が穫れています。

（『小糸川流域のかたりべ』土橋幸一）

江戸時代の庶民信仰

（糠田・根本）

江戸時代の中頃から盛んとなった一般庶民の信仰は、思ったほどかた苦しいものではなく、実に多彩で、楽しいものだったようです。当時の各村々では、その地域に祀られている、神仏の名称をとってさまざまな講（信仰者の集まり）を結成して、四季折々の祭や法要を営み、精神生活の糧としていましたが、それはまた親睦団体としても、大きな役割を果たしていました。これらの在地での講には妙見・天王・八幡・山神・天神・金毘羅などの氏神講や仏教系の観音・薬師・大師・地蔵をはじめ、子安・庚申等多くの講が生まれました。

行装束

また、遠くにある有名な神社仏閣に参拝するには、自動車・電車・飛行機などの乗物が無かった時代、庶民の旅は大変なものでした。そして、当時の幕府や藩は「物見遊山」の旅を容易に許さない時代でしたから、実際の旅の多くは、社寺参詣の形を借りた観光の旅でもあったので、講の組織は拡大しました。講の中でも、最も多かったとされる伊勢講の場合を見てみますと、糠田村では文化・文政期に講が結成され、講金を積立て講仲間でこれを運用し、その利息で毎年数名の代参者を伊勢路に送っていたことが「伊勢講勘定帳」によって知られています。

各村々での講の運営は、ほとんどこの方式で、まさに信仰が金融と相互扶助のもとに成り立っていたものと感心させられます。このような中にあって、根本村では、天保一四年（一八四三）近隣一八か村の講中が大人数で参宮旅行を実施し、伊勢の町から、二見ケ浦へ駕籠（かご）五四丁を連ねて繰り込んだ様子が伯部家の「参拝道中控」に活々と書かれています。

市域では、伊勢講につぐものとして観音・出羽三山・富士・御嶽・大山など各講の巡拝がさかんで、多くの参拝記念塔が市域で、一〇〇基ほど確認されています。

地方霊場としては、西国や坂東霊場にならって、上総国や安房国に、そして小糸郷等に観音・大師・薬師・地蔵の札所が生まれて、人々は、手近なところでも霊場参りが出来るようになりました。（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

権太節　（鹿野山）

「さんちょこ節」は、元来「権太節」といい、江戸以前から伝えられている。その昔、神野寺近くの茶屋の一人娘が、寺の美男僧を慕い、ひと夜病を得て遂に世を去った。これを悲しみ若い僧が作ったのがこの元唄とされている。

鹿野山中興の第一世と称せられ、室町時代の学徳すぐれた高僧と称される弘範上人は、永正年間（一五〇四～一五二一）ここで大いに教化に務めたので、近郷近在の者は先を争って鹿野山に登り、その説法を聞きに集まったという。その中に中村権太という者がいて、俗人ながら最も熱心な協力者であったといわれる。鹿野山に伝わっていた「権太節」という民謡はその中村権太にかかわるものであるという。

「ごんた　ごんたに多けれど　市村権太の中娘　あまり女子のよいままに　中村権太にもらわれて……」という始まりでわかるように、市村権太の娘が、中村権太の嫁となるのであるが、その名は「おるす」といい、歌のあらすじは次のようである。

「おるすは、長持ち七さお、七つづら、きんらんどんす七重ね　からかねの鏡七面　黒塗り手箱七箱　かもじ七ながれ　帯八すじ　馬七匹という豪華な道具を持って三月八日に嫁入りしたが四月八日に病みついた。折から、主人の権太は江戸へ商いに行っていたので、江戸に再度手紙を出したが返事がない。三度目の手紙に生薬を買いこんで帰って来た」。しかし、途中でおるすの死を聞く。

「なんの生薬もいらぬこと　おるすは果てられて　なんたることかなんたることかなと　家へ帰りてものいわずそのまま納戸にかけこんで　敷いても寝たかよこのふとん掛けても寝たかよこのお夜具　鬢にもつけたかこの枕　立てても寝たかよこのお屏風」と権太は嘆く。

おるすの枕もとに父、母、こじゅうとが集まっていると家の棟に青い雀を見、あれこそあの世の雀だろうと、あの世の様子を聞く。雀は地における産まずめ（子を産んだことのない女）の苦労を語り、

「お前の女房に似た人が　開きし蓮華傘にさし　つぼみし蓮華を杖につき　あの世の道へとさらさらと……」と説く。権太はおるすの後生のためにと堂を建てるが歌は、

「おるすの為とて堂建てて　黒塗り手箱を賽銭箱に　変らぬ鏡を鰐口に　ながさのかもじを鐘の緒に　おるすの為とて堂建てて　おるすの為とて堂建てて」と結ばれている。いかにも哀れをさそわれる内容であるが、これをとおして神野寺へのあこがれと賛美の念を起こさせ、信仰へと導く働きを持っている。

この歌は口説き（くどき）という形式の一つである。音楽を伴う口唱文芸には、叙情的で韻文（いんぶん）的、旋律的な「歌い物」と、叙事的、散文的で拍子を主とする「語り物」

とに大別されるが、口説は両者の中間にあり、長編で叙事的であるがリズムを主としている。口説は鎌倉初期から民衆の間を布教して歩いた僧侶の説教として生まれたといい、宗教的教訓色をもったものが多いといわれるが、民衆の強い共感と支持を得つつ伝承されてきた。

（「鹿野山歴史とその周辺」平野馨）

サンチョコ節　（鹿野山）

鹿野山のサンチョコ節は江戸時代、娯楽のなかった鹿野山の女の子たちが、お盆休みに各家の軒先に置かれた縁台上で「あやとり棒（砂利をいれた竹筒）」を拍子に合わせて、打ち合わせたのが始まりといわれる。名前の由来は諸説あるが、「山の頂上の娘」を縮めたものという説が、有力である。

さんちょこ節〔Web ページ〕

サンチョコ節には、伴奏や踊りはない。「ナンデモセー」「サンチョエー」とかけ合いながら素朴に唄うことから、別名「なんでもせぇ節」とも呼ばれるそうだ。竹筒の長さは二〇チセン、直径は四チセンで、中に小さい砂利が入っている。これを両手に持って歌の掛け合いに合わせ、二人一組で拍子をとりながら棒を叩く地味で素朴なあそびで、俳人高浜虚子は「おどりなきさんちょこ節はあわれなり」と詠んでいる。

歌詞は「心願・薬師如来・九十九谷・鳥居崎・春夏・秋冬・滝・鳥・烏・富士山」の一〇番で、鹿野山の四季と自然が、唄い込まれている。心願の歌詞は、「心願ネー　エッサモナンデモセー　心願かけるなら鹿野山におかけ、オーサンチョウエー」。薬師如来の歌詞は、「あやをネー　エッサモナンデモセー　アヤを取るなら鹿野山においでネー　鹿野山の薬師はあやとり薬師　オーサンチョウエー」。これは神野寺の薬師如来を唄ったもので、薬師如来信仰にも根付いている事がわかる。昔は、地元の小学生が奉納したようだが、その小学校も閉校になったため、地元婦人会が保存会を結成し継承された。県指定文化財になっている。

君津町南子安地区にも「サンチョコ節」という同類の歌があるので紹介する。

サンチョコ　サンチョコ
ネーサー　ナンデモセー
今度ー子安の吉兵衛どんの猫が
ノーオ　サンチョヤー
猫が嫁とる風雅なことー
ノーオ　サンチョヤー
蚤がなーサーナンデモセー
蚤がお給仕で板の間をはねる

ノーオ　サンチョヤー
サンチョコ　サンチョコ
ネーサー　ナンデモセー
花がー見たけりゃ成願寺へござれ
ノーオ　サンチョヤー
池にーそりばしょい蓮の花
ノーオ　サンチョヤー

以上、鹿野山をはじめとする西上総の各地に古くから残っている「サンチョコ節」である。しかし、いずれの地のサンチョコ節も踊りはなく、歌い手は女の子、婦人、老婆であり、やや哀調帯びた素朴な郷土民謡である。

（周西マップクラブ）

鹿野山と旅日記（鹿野山）

広重といえば幕末の天才的な浮世絵師、彼は当時、諸流派の手法をおさめ、特に西洋の遠近法を取り入れて構図や彩色に新生面を開き、傑出した風景画家として一流をなした。酒好きで失敗も時々あったらしく、鹿野山行きのときなどは、酔余に挙句のはてに小櫃川に落ちた様子が書かれている。

菜の花や　けふも上総の　そこ一里

行き交う人や、田圃に働くお百姓に目的地までの道程を尋ねると、「そんとこまでならあと一里だんべェ」と同じ答えが何度も返ってくる。この地方独特の距離の表現「上総の一里」を揶揄（やゆ）、又多少の広重のいきどおりが含まれているようである。

当時、江戸から安房、上総地方を旅行する場合、江戸橋の西詰「木更津河岸」と通称された桟橋から帆船で、上総木更津までの海上を利用する方法と、同じく木更津河岸から下総の行徳に船便で、それからは、陸路をたどる二つの方法があった。船は、木更津行の場合は木更津船と俗称されていた、特権的な五大力舟で、百二、三〇石程度の大きさ。広重の日記によると、早い時で五時間で到着。おそい時は一昼夜も海上に滞っていたという。これは当時、動力のない順風を待つ消極的な航海であれば、止むを得ない難渋ではあった。この船便によって、江戸の流行を旬日のうちに房総にもたらしたものという。

五大力船と木更津の町並み（広重画）〔Web ページ〕

天保一五年（一八四四）広重四八歳のとき上総の鹿野山参詣を中心とした旅行をこころみている。その時の見聞を綴ったのが「日記天保十五年弥生の末」と標題した日記で、約一週間、三月二三日からはじまって四月一日に終っている。この時の日記をみると、

三月二三日、夜四ッ時、江戸橋より船出、海上風なく船ひまどり、二四日昼頃、上総木更津着。

夜の四ツ時とは、午後一〇時頃。江戸橋とは「東京府資料」によると、上総木更津行の船便があり、嘉永版の江戸切絵図「日本橋南絵図」をみると西詰に江戸橋屋敷があり、川岸一帯を指して「木更津河岸」と記入されている。現在は首都高速道路が上下に交差している。

二七日は天気よく、四ツ時（午前一〇時）ごろ、鹿野山参りに出発。庄兵衛殿、勇吉殿と同道四人連れであった。七ツ時（午後四時）過ぎごろ到着。その日泊まったが、「宿泊人がこみあい、夜具が不足し一組に二人もやいだった」とある。その後、広重は坂戸市場（袖ヶ浦町）から瓜倉、久津間（ともに木更津市）あたりを回り、資産家や風流人の家に立ち寄っている。各地で絵をものにしたことだろう。四月一日、木更津から帰途につき、その日の夕方、鉄砲洲についている。

さて、その天保一五年から約一〇年後、無名の文人による鹿野山に関する旅日記がある。その名は「房州道行シテ・ワキ日記」。これは県立中央図書館の菱田館長が、かつて東京遊学中に古書店で発見された嘉永七年（一八五四）の日記であるが、シテ・ワキの名でもわかるように謡曲風に書かれている。コースは姉ケ崎（市原市）から坂戸（袖ヶ浦町）、木更津、太田、請西（以上木更津市）を経て、子安坂（君津町）方木屋吉右衛門方に着く。四月二八日、九十九坊跡、鐘ヶ淵、天王様（以上君津町）などを見、大井、尾車（小糸）と歩くが、ここで折からの大雨で昼食に困り、のぶという女の家で一飯をもらい、夕方、鹿野山木戸の藤屋という旅籠（はたご）に泊まったが、おるい、おきよというものが出てお酌をしたなどとある。

四月二九日は好天気で、神野寺を参拝、この寺などの紹介が記されている。ここは聖徳太子の創建で、十間四面、ご朱印五〇石の霊場、本尊を拝むなどとある。そして四十八の滝、桜句碑、白鳥神社、九十九谷のことなどが相当詳しく書かれている。

そのなかでも、回り二〇間余の日本一といわれた糸桜が花見時には数万の人を集めていたというがこれが枯れて三〇年前まで根元が残っていたのを、二〇年前の住僧が枯根を掘ってマキにしてしまい、いま跡形もないのは不風流の至り、残念などといっているのは、この人の考え方がうかがえておもしろい。また、笠倉弥七という人が三千本の名のある桜を植えたとも書かれている。

九十九谷については「千岩千色にしておなじからず、岩石に苔の筵（むしろ）を敷くが如し。間に間に小田あり畑あり、青葉の残念雪ならば一入（ひとしお）ならんと思いて、雪にして見たし青葉の九十九谷」などと名調子で書いている。なお、この日記は鹿野山でもう一泊してから天神山に出、内湾伝いに館山を経て小湊までの旅程が書かれているが、当時の

旅のようすが知られ、興味尽きないものがある。

（『清和村誌』「鹿野山の歴史とその周辺」平野馨）

愛宕様の伝説　（東粟倉）

川代村愛宕山頂にある愛宕様は、石段の数二七八段、荒神様として、部落の信仰を受けている神様である。酒に酔った男が社殿にうたたねをし、愛宕様の怒りに触れ、麓を流れる小糸川に放り出され、危うく命をとりとめた。

地蔵堂（内屋敷）

この愛宕様が、山火事の延焼によって焼けたことがあります。そのとき、愛宕様の御神体は白馬にのって、愛宕山を脱出し、昼日中、白馬にのった御神体は、シャン、シャン、馬の鈴を鳴らしながら、粟倉の横手街道を通るのを見た。また鈴の音は、村中聞こえたと村人たちは語った。

その白馬にのった御神体は、植畑村内屋敷の地蔵堂に避難していた。愛宕様も新しく改築されて、御神体も元通り愛宕山に還った。毎年愛宕様の祭礼のときは、内屋敷地蔵堂より御神体の還御式があり、内屋敷の田淵氏が火入れ式を行って祭りを行う。

（『清和村誌』）

力石伝説　（東粟倉）

東粟倉という所に愛宕神社があり、その前を旧三島の方から木更津へ通ずる唯一本の重要な道路が通っていた。人間ばかりでなく、いろいろな産物が馬車等によって遠く木更津・千葉の方までも運搬されていった。

御神体〔Web ページ〕

愛宕神社の御神体は、聞く処によると白い馬だそうで、非常にあらたかな、神様であると云われて居り、その神社の前を馬に乗った儘（まま）で通ると放り出されてしまうという云い伝えがある。だから当時は皆、馬から降りてその前を通ったそうだ。たまたま、或若者がその様な伝説のあることを知ってか知らずか馬に乗った儘、神社の前を通ろうとすると、馬が何に驚いたのか急に暴れ狂い、乗っていた若者は馬から落ちて怪我をしたとか、尚それが元で死んでしまったと聞いている。そこで川代の部落では、昔から農業用としては白い馬は使わなくなったという。

又、神社の前に広場がり、そこには昔相撲をとったという土俵がある。当時は相撲が盛んに行われ、田舎の関取りさんが方々にいたそうで、その土俵の近くに非常に重い石が置いてある。そしてその石には五〇貫と刻んでいる。ある時、誰かがその石をいたずらして四、五間もある下の畑へ転がして

しまった。部落の人達はいろいろ協議して「もとの位置に持って来なくてはいけない」ということになったが何しろ重い。その上、四、五間もある崖なので、その儘すぐ上にはあげられない。どうしても五〇〇㍍以上も廻り道しなければ、もとの位置には納めることが出来ない。その時、部落の中に加藤吉五郎という力持ちの人が居って「私がやってみましょう」と申し出たそうだ。

そしてその人は、五〇貫もある重い石を「えいっ」とばかりかつぎあげ、五〇〇㍍もまわり道してもとの処へ納めたという話である。その時、満身の力をこめたとみえて、履いていた股引きの綻（ほころ）びが各所にあったということだった。

当時は神社や寺の庭に、こうした「力石」がころがしてあって、若者達は何かの集りの折には気軽に腕くらべ等したようだ。但し自然石を利用するので、同じ三〇貫・四〇貫といっても形が様々なのでかつぎ易いものと、かつぎにくいものがあったようである。

（『ふるさとの伝説　清和・周南』奈良輪美智野）

久留里藩の参勤交代　（久留里）

参勤交代は、大名行列として領地から江戸表へ、江戸から領地へ、行列を整えて往来する。黒田氏は、三万石の格式に相応した供揃えを必要とした。戦に備える体制をたてまえとする。したがって、江戸市中往来するときでも、公式の場合は槍を立て替馬、衣装、茶、弁当を用意した。

安政六年（一八五九）の行列覚帳に、黒田公は両槍を許されているので、行列の先頭に槍二本並び、次に黒田家の馬印、升に水月紋の旗竿、宰領（荷物及行列の取締役）、者頭荒木一郎武標、幕箱、同同、騎馬、鉄砲一九連、先箱、騎馬、足軽二列、弓十張、矢箱、騎馬、長柄槍、立弓、騎馬左右に若党二人立傘、左右に槍持、挟箱、草履取、合羽籠、立弓、後に徒士三人横に並び騎馬、若党右に二人左に一人、立傘左右に槍持、挟箱、草履取、合羽籠、足軽一七人、最後に同勢侍と総勢一二五名の大行列である。

参勤交代図（Web ページ）

毎年一二月二〇日、参勤の為江戸表へ出府、その道筋は寅の刻（四時半頃）久留里を出立、小櫃―高谷―川原井―立野―今富―廿五里（ついへいじ）を通り養老川を渡り、五井より古街道を江戸神田、黒田表屋敷へ。八月一五日は城下りとして、また行列を整えて久留里へお帰りになる。

久留里には侍屋敷二七〇戸とあり、別に交代長屋六棟、一

棟は六畳五室位であった。しかし藩士の階級別に建物が別の為、足軽は城外に居住していた。

当時の江戸家老大森小平太、久留里家老神山清左衛門、用人小沢清照、元〆吉田耕蔵、梶川千右衛門儀厚等の名が連記してある。

（『小糸川流域のかたりべ』土橋幸一）

諏訪家の兜仏　（坂田）

坂田長福寺には、一体の兜仏（兜の八幡座につける守護神）がお厨子に入れられ、大切に保管されている。この兜仏は戦前諏訪数馬の生家（木更津市下烏田）裏山の崖が崩れて蔵が潰れたとき、その復旧作業中にでてきた。この兜仏は所々に土の付着があり取り出されたときの状況と一致する。また、表面に金の付着も見える。多分ご先祖の諏訪数馬が使用したものと考えてよいだろう。兜仏の製作年は不明、寸法は高さ七㌢の鋳鉄製である。

兜仏（諏訪家蔵）

数馬は、上総請西藩三代目藩主林忠崇（はやしただたか）に仕えた藩士（お納戸役）だった。林忠崇は慶応三年（一八六七）戊辰戦争勃発に伴い、旧幕府軍が藩領を来訪して助力を要請するや、自ら脱藩し藩士七〇名（諏訪数馬はその中の一人）と共に遊撃隊に参加した。脱藩した忠崇らは、幕府海軍（明治元年（一八六八）四月一一日の江戸開城後も戊辰戦争において榎本武揚に率いられ戦闘を続けた）の協力を得て、館山から相模湾に上陸し箱根や伊豆などで新政府軍と交戦するが戦いに敗れ一旦帰国した。

その後、病身だった諏訪数馬は、藩主林忠崇に従って長須賀村（現・館山市）まで随行して行ったが衰弱が激しく歩行も困難となり足手まといになることを恐れてこの地で自害した。林忠崇は、数馬（三三才）のことを憐れに思い、自ら介錯したとのことである。亡骸は館山の来福寺に葬られたが、後年、諏訪本家（下烏田）が来福寺から譲り受け弔っている。林忠崇の親族は浜子の建暦寺で官軍により処刑されたが、諏訪数馬の子（智海。現住職のおじ）、当時四才が一人助けられた。

資料によると明治三〇年（一八九七）、忠崇公は数馬の肖像画とその略伝を描いた掛軸に次のような歌を詠まれて諏訪家に贈った。

〝散りてのみ
　ふかきかほりのいまもなほ
　　残るや花のなさけなるらん〟

曾祖母セイによると、数馬は「性従順にして勤直」だったとのことである。

（周西マップクラブ）

野盗と怪火　（蔵玉）

明治改元（一八六八）の頃の話である。蔵玉のある山の中

に物持ち長者の屋敷があった。ある秋の夜のこと、この家に三人組の押し込み強盗が入った。いずれも覆面をし、長い物を光らせて家人を一人残らず縄で縛り上げ、主人の口から、所在を脅し聞き奪い取ると、更に部屋の中をかき回し、衣類、品物類までかき集めたが、やがて空腹になったのか、今度は食物をあさり始めました。夕食後で綺麗に片付いた台所には何も残っていませんでした。そこで、強盗は一番年下の娘の縄を解き、飯を炊くように命じた。

山村風景〔渡辺忠純蔵〕

この娘は、村内の身寄りから来ていたが、なかなかのしっかり者で、なんとかして隣家へ知らせて救援を得たいと、腹の中で考えていたので、時を稼ぐ為に故意に薪をぬらし、釜へも水をたっぷり入れて、ゆっくりと燃やし始めました。ぬれた薪のため、くすぶって煙だらけです。強盗共は、まだ何かをあさっていましたが、時々心配になるのか覗きにきては「早くしろ」とせき立てた。娘は「薪が濡れているので木小屋へ行って乾いたのを持ってきます。」と震えを見せながら言うと、強盗はたかが小娘の事、しかも夜中の事であり遠くへは行くまいと思い、外へ出してやった。娘は巧みにも、この機を狙い、隣家を起こし早口で急を訴えると、何食わぬ顔をして薪を抱えて帰って来た。

一方、隣家の親爺は流石にびっくりして家を飛び出し、本村までの一里の夜道を転がるように走って名主に急を報じた。名主は番木を鳴らして村人を集め屈強な若者を選んで三〇人余りに竹槍や道中差しや鉄砲まで持ち出しそれ行けと夜道を急行した。山坂を越えて走り続けたので、峠で一服つけたが、その折ひょうきんな男が長者家を安心させるつもりで火縄銃を一発空に向けて放った。四辺の夜の静寂を破って音は物凄く山々へこだました。一方、強盗は熱い飯をたらふく喰い、さて、今しばらくとゴロリと横になり安心し切っていい気持ちで休んでいた。

すると、とたんに遥かの山間からの銃声にびっくりして飛び起きた。娘は「しまった」と思ったが、咄嗟に「この頃、猪が出て近くの田畑を荒らすので猟師を頼んで夜通しおどしをかけているのです」とごまかした。強盗たちは他所者と見えて別に不審にも思わず成る程と納得しました。「定九郎じゃあるまいし猪と間違えられたら元も子もない話だ。もう少しゆっくり休んで出発だ」と強盗共はすっかり気を許していた。

間も無く、この家の周囲は武装した村人でぐるりと囲まれた。庭中へ火をたき昼のように明るくして喚声を上げた。盗賊たちは計られたかと刀を取ったが、もう震えあがりながら座敷の真中へ集まった。外から雨戸は全部外されたので、か

がり火の明るさで座敷も昼のようだ。村人たちの内に、かつて旅人渡世の男（旅屋の長兵エ、旅長どん）がいた。村人達は、家の周囲で騒ぐだけで抜刀している強盗共に刀を捨てさせるため、中へ入って行く者は誰もいない。

さすがに喧嘩場を踏んだ、経験のあるこの旅人あがりは、一人でのこのこ入り込み「今更手向かってもこちらは大勢、飛び道具もある。無駄騒ぎはやめて早くこちらへ刀を渡せ」と掛け合った。強盗は他所者でしたがこの旅長を見覚えており「旅長どん申し訳ない。お助けを」と言って刀を渡した。どうなる事かとかたずを飲んで眺めていた村人達はドット座敷へなだれ込み、三人をぐるぐる巻きに縛り上げた。長者家族は生き返った思いです。早速、物置から酒を出して振舞いました。強盗たち三人共庭先へ転がされたままで皆のふるまい酒の終わるまで待たされた。酒の入った村人達は強盗共を散々に殴りつけた。本村までの長い道のりを面白半分に突き飛ばされ、なぐられ、小突かれて三人共もう声が出ない。旅長どんも事がことゆえに村人に逆らってまで助ける事も出来ません。もう助からぬと覚悟を決めた三人は途中の崖ふちで一服休みのすきを見て川に向かって真っさかさまに飛び込んだ。下は深い淵である。さすがに村人も驚いて川へ降り探した時は三人共に物凄い顔で目をむいて死んでいた。

旅長どん〔Web ページ〕

昔のことゆえ、お上もお手柄を誉めただけで、そしているだけで一向に何者とも分かりません。そこで三遺体は釜生の無量寿というお堂へ無縁仏として葬りました。その翌年のこと、そのお堂からある大風の日（明治三年一一月）に怪火がでた。火の勢いは猛烈に山を越え・川を飛んで蔵玉の本部落へ飛び未曽有の大火となり、本村の大半を焼失し、果ては神社もお寺も燃え尽くした。当時は強盗のたたりの業火だと村人達を恐れ、おののかせた。火元の無量寺の番僧は火事の時から行方不明となったそうである。当時、蔵玉には六〇戸位あったらしく四三軒が焼け失せた由です。蔵玉の大火はすごいものだ。九万千軒と四十三軒焼けたと言われました。なるほど、熊野神社（くまんさま）と浅間神社（せんげんさま）が焼けたからです。災害のうちから出た苦しいユーモア話としていまだに言い伝えられている。

この事件に関しては、蔵玉自治会資料に次のように記録されている。

・明治元年（一八六八）四月二四日、小仁田鈴木家に押し込み強盗三名入る。

・明治元年五月二四日、強盗の件について前原役所に届け。

・明治三年一一月六日、蔵玉に大火。住家四三戸、円盛院虚空蔵菩薩堂、熊野神社、浅間宮等焼失。　（『蔵玉風土記』）

西上総の馬出し　（君津市・富津市）

馬に関する神事や行事には、「やぶさめ」「馬追い」などがありますが、房総の西上総、特に君津、富津の地域には昔から神馬奉納とその後の馬出し行事が行われてきました。この古い形の神馬奉納の様子を伝えるものとして、人見神社の「お召し」があります。昭和四五年、当時の君津町の無形文化財に指定され、毎年七月二二日の祭礼に行われています。坂田をはじめ周辺の村々では、今とは違って農耕用の多くの馬が飼育されていました。そして祭礼に際して、五穀豊穣を祈って多くの農耕馬の中から選ばれた馬が神馬として奉納行事に奉仕しました。この神馬となると、奉納に備えて祭礼の一年前から、大切に育てられたといわれています。馬出しは祭礼における神事から転化し、一種の余興となって、行われるようになったものと考えられます。

馬出し〔古典の会〕

馬出しには、村内はもちろん、周辺の村々からも、多くの馬が集まりました。他村から招待された馬を客馬といいます。何十頭もの馬が臨時に設けられた、ほぼ直線の農道を人馬一体となって、勇壮に疾走する様子は壮観で、祭りの最大の見せ場でした。そのため村内や近隣から、大勢の見物客がつめかけて、大いに賑わったといいます。近世後期の史料によれば、風俗取り締まりの一環から、近隣の祭礼にむやみに客馬を出すことが禁じられています。

馬出しは記録によれば、市内では坂田以外でも先の人見神社、南子安の子安神社、三直の八雲神社、貞元八幡の八幡神社、小糸大井戸の諏訪神社、富津市大堀の大六天社、神明神社、飯野の飯野神社、西川の八幡神社、西大和田の吾妻神社などで行われていました。現在では農耕馬の確保が難しくなり、そのほとんどが行われなくなりましたが、富津市西大和田の吾妻神社だけは、現在でも毎年九月一七日の祭礼に行われております。その馬出し用具一式は、千葉県の指定有形民俗文化財に指定されています。

坂田では、今から十数年前に当時の青年部によって復活され、その最初の年にまだ工事中であった坂田中野陸橋の場所でこの馬出しが再現されました。その後、何年間か奉納行事と地域への練り歩きが行われましたが、現在は馬の確保の困難さなどの理由から休止のやむなきに至っていることは大変惜しまれるところです。

ところで、神門の故川名邦五郎が昭和六三年四月に書いた「明治時代の妙見祭」（「周西高齢者学級」にて発表）なるレポートがある。それによると人見の中橋より中野方面の大通りは当時農家が飼育している農馬がこのお祭りには数十頭出場してこの大通り二〇〇㍍を馬と一緒に駆け走る競技も

非常に興味十分であった。これも殿様以外は乗馬できない徳川時代、妙見祭の祭祀が小笠原の殿様であったからだ。

明治四年（一八七一）廃藩置県で殿様がなくなり、以後は神官が祭礼を施行することになった。と同時に、この祭礼より殿様の馬が、お召馬として儀式に参加していると言うことである。

神馬奉納（人見神社）

ここに述べられているように、農民たちが、馬に乗れなかった時代、殿様から解放され村の祭礼で馬出しという形で、心意気を示した明治が偲ばれる。しかし人見神社の祭礼では、神馬の奉納が元々の姿で、大正から昭和の初めには「馬出し」というほどのものはなかったようである。ただし、ここでは、祭礼一週間前に神馬奉納式を公会堂で行っていた時代、神馬と共に一般農耕馬も集まり足慣らしを重ねて鳥居前を駆けさせ馬出しをやったとも聞くが祭礼時のものではないようである。「馬出し」は日露戦争から大正期にかけ小さな社の祭礼でも農道を利用し行われた。村の若衆が馬のたてがみにしがみつきながら片足で調子をとり馬と一緒に駆けわざを競っていたものである。これも馬の減少などですっかり姿を消した。

（『周西地区民俗調査報告書』「坂田自治会報」）

実録「お富さん」　（坂田）

「お富、与三郎」のお富さんは、本名は「よし」と言い、君津市坂田の油屋（先祖は廣部市右ェ門）に、寛政一〇年（一七九八）に生まれました。

家は、椎の木の繁った大きな家でした。父は厳しい人で、お富が読み書きを、ひと通り習い終えた一四、五歳の頃になると、江戸深川の御屋敷に、行儀見習いに出したそうです。その後、木更津新宿、菱屋の若主人に見染められ嫁入りいたしました。それは一六歳のときでした。菱屋は蔵が七ツもある網元だったので、よい家柄に嫁いでくれたと坂田の親戚も喜んでいたそうです。

お富さん供養碑

お富は、時には商売で江戸に往き来していたそうですが、船で往来しているうち、木更津の染物屋の型職人の与三と良い仲となり、だまされて菱屋を出て、裸一貫のそれも親くらい歳の違う男と一緒になってしまいました。それが菱屋にわかり、与三は菱屋の奉公人達に切られて海に投げ込まれてしまいました。お富は、与三が死んだものと思い江戸に逃げて行き、深川辺の芸者屋とか、芝居小屋とかに身を隠していました。

一方、与三は運よく一命をとりとめ、傷が治ったので、お富を探しに江戸に出て、終にお富を見つけ出し、その後二人は、長唄に、芝居にと芸の道を歩んでいました（この頃から芸名をお富というようになったと思います）。しかし、与三は四、五年後、切られた傷がもとで病気になり故郷に帰ろうとしましたが、駆落ち同様の身分でしたので、仕方なく袖ヶ浦の坂戸附近の農家の離れを借りて二人身を寄せていたそうです。その後、与三の病気が重くなり兄という人が与三を引き取りに来ました。そして間もなく、与三は兄のもとで亡くなりましたが、お富は臨終にも立ち会うことも出来ず、あとで「亡くなった」と聞いたということです。与三が死んだと聞いたので、お富は、世話をしてくれる人があって、外房に近い所（茂原らしい）に嫁入りしました。

茂原に嫁入りして間もなくのこと、深川の芸人がお富の嫁ぎ先の家を探して色々説得して江戸に連れ出しました。与三は死んだのではなく病気が治り、江戸にいると言って連れて行ったということです。ところが江戸にいたのは与三ではなく、芝居で与三郎を演じていた大吉という芸人であり、だまされたことを怒りあばれたが、終には芝居の与三郎役の大吉と結ばれ芸の道に励んだといいます。

どうしてお富をこうも探したり、連れ出したりしたかというと、お富は身振り動作が天下一品で、誰にも出来ないあでやかな身のこなしが出来るので、芸人仲間では無くてはならない人であったということであります。お富はこうして、芸人として芝居などに出演していましたが、明治一一年（一八七八）八月、八〇歳の生涯を終わりました。

お墓は、東京品川の妙国寺にあります。墓石には、正面に「三ツ揚羽蝶」の家紋がきざまれ、台石に「芳村」と書かれ、正面右に「勇猛院徳翁日進信士」弘化四年六月十六日　四十八歳（本名大吉、芝居の与三郎役　東金の生れ）、正面左に「操立院妙精日護信女」明治十一年八月二十九日八十歳とあります。この操立院妙精日護信女がお富（本名よし）の戒名であります。

木更津市の光明寺にある与三郎の墓は、染物屋の職人だった与三郎の墓です。いわゆる「切られ与三郎」の墓です。また、この墓には「慈久行心信士」文政七年とあります。

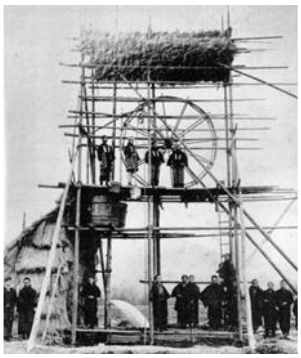
私は坂田の油屋の子孫で、廣部弥三郎の妹とよ（君津市小山野の金谷家に嫁ぐ）の娘であります。従って、母「とよ」や叔父の「弥三郎」に、およしさん（お富の本名）のことについて色々聞いている血縁者であります。　（金谷ふみ）

上総掘り　（上）

もともと日本の井戸は、人力で地面を掘り進む「掘り井戸」でした。江戸時代中期になると、鉄の棒で地面を突いて地下水を自噴させる「掘り抜き井戸」が広まりましたが、深さは三〇㍍程度でした。河岸段丘（河岸に見られる階段状の地形）

が発達した君津市では、飲料水や農業用水の確保が困難でした。

文化一四年（一八一七）ごろから、小糸町糠田の池田久蔵が孫の久吉を助手にして、井戸掘り業に従事していたという。当時の技術は幼くて、鉄棒のさきに矢筈形、八角球形の金具をつけて足場を組んで突き、大体二五、六間（約四五・五～四七㍍）で出水させたようだ。被圧地下水が流れる透水層が、浅ければいいが、深い場合は取水が不可能ということもあった。

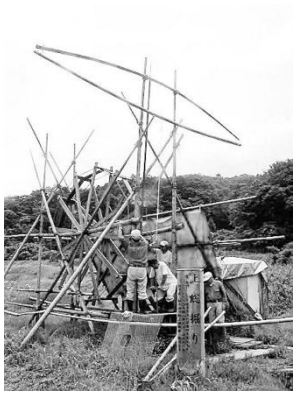


〔木更津・君津・富津・袖ケ浦の 100 年〕

明治一五年（一八八二）、大村安之助と池田久吉は鉄棒の代わりに樫の木を使う樫棒式を考案した。その結果、用具の軽量化と労力の軽減を実現し、さらに深く六、七〇間（約一〇九～一二七㍍）もの掘削が五～六人で行えるようになった。その後、大村と池田徳蔵が竹ヒゴと鉄管を組み合わせた掘削技術を考案した。

明治一九年には、石井峯次郎がハネギを考案し、沢田金次郎が「シュモク」と「ヒゴグルマ」を考案したことにより、明治二九年ころには、ほぼ現在の形に近い技法が考案されたようである。

世にいう「上総掘り」というのは、被圧地下水の存在を推定し、場所を定めて、そこに櫓（やぐら）を組み、その真中に大きなヒゴ巻き車を支え、櫓の上にハネ木を固定する。その先端にヒゴを吊り、ヒゴの先に大地を掘り抜くための鉄管とノミをつけ、ヒゴを上下することで結んだハネ木の弾力を利用しながら、鉄管の先に付けたノミで地中を掘り抜き、被圧地下水を、自噴させる方式だが、小糸町の池田徳蔵が、江戸時代の、池田久蔵の後継者として、長年苦心した末に樫棒でない竹ヒゴで、掘り抜く改良が行われて、初めて「上総掘り」の名で普及し始めた。



材料もほとんど現地調達できるため、上総地方の職人は全国に招かれて活躍した。天然ガスや石油、温泉の掘削などにも利用され，近代産業の中で重要な役割を果たした。人の力だけで五〇〇㍍以上の掘削が可能であることから、現在では開発途上国への技術指導が行われている。

（「鹿野山歴史とその周辺」他）

呦呦館　（鹿野山）

鹿鳴館時代と言えば、明治一七年（一八八四）以降、東京の鹿鳴館に上流社会の紳士、淑女が集まり、外人を招いて夜ごとダンスに興じ、欧化主義が世にはびこった時代だが、鹿鳴館をまねた社交場が、東京湾をへだてた景勝地鹿野山の頂

上にもあった。名づけて「呦呦館（ゆうゆうかん）」という。詩経にある「呦呦として鹿鳴く野の苹（くさ）を食（は）む」からとったもので、鹿鳴館の向うをはってつけたのだろう。

この呦呦館を建てようと企てたのは君津郡長の重城保と秋元村（現在清和村）長谷川隆造、小糸村大野保四郎、佐貫町宮荘七の地元有力者だった。重城保は安房郡長も兼ね、のちの第一回衆院選にも当選した人で、進歩的な性格だった。「鹿野山を開発して鹿鳴館にも負けぬ建物をつくり、外人や県下の有力者を呼ぼう」と県令船越衛に持ち込み、鹿野山の国有林に手を入れる許可をもらった。

鹿野山は海抜三五〇㍍、昔からきこえた名山で、聖徳太子の建立といわれる神野寺が全山を支配していた。江戸時代には下総から安房に抜けるには鹿野山を越えるのが普通で、頂上は宿場として栄えた。特にここで張られる賭場は有名で、三月の桃の節句には大バクチが開帳され、関八州のその道に通じた人なら必ずここの「場」を踏んだという。全山杉、ヒノキ、松の森林地帯が青々と起伏し、頂上に立てば眼下に東京湾が広がり、遠く富士、伊豆、筑波の連峰も一望のもとに見下ろせる絶景の地、軽井沢、大磯、箱根などがまだ名も知られぬころだったから、東京からもっとも近い避暑地だった。

まず道路づくり、木更津港から佐貫を経て頂上に至る約二〇㌔、森林をバッサ、バッサと切り開きながら、幅六㍍の人力車でのぼれる道をこしらえた。官民一致の事業だったから、工事は相当急ピッチで進んだのだろう。こうして山林の中に、白亜の呦呦館がこつ然と現れたのは明治二二年。杉林とヒノキを用いた二階建て約一六五〇平方㍍（五〇〇坪）の洋館で、ベランダもあり、寝室付き客室だけでも大小一三室、ほかに通訳の泊まる部屋、ボーイ室、浴室のほか玉突き場やダンスもできる広い会食室もあった。ホステスには、土地の地主や豪商などの良家の子女が行儀見習いという名目できそって集まった。お給金など問題ではない。着物などは家から持ち出し、御殿女中のように身を着飾ってお給仕をし、時にはダンスの相手さえもつとめた。

呦呦館〔鹿野山歴史とその周辺〕

東京在住の外交官や、横浜の外人たち、新政府の高官たちがぞくぞくと訪れ、お山の様相は一変して「文明開化」の息吹に脈打った。部屋のガス灯は、あかあかとともされ、嬌声はいつ果てるとも知れなかったという。当時小学生だった松本斗吟さん（木更津、郷土史研究家）は「夕日の沈むころ、木更津港のほうから、鹿野山の方をながめると、夕日がギヤマンの窓に反射してキラリキラリと光り、きれいだった」という。このころ木更津港から頂上までは鉄輪の人力車がお客を運んだが、先棒二人に後押し三人

がついた。二〇キロを二時間で登り切ったというのだからたいへんなスピード。これも異人さんたちが大いにチップをはずんだからだろう。木更津在住の石川寛さんは、中にはひょうきんな外人がいて「異人さん、高いですか」と日本語で車夫をひやかす人もいたと話す。

この呦呦館が全盛を極めたのは七、八年あまり、鉄道開通とともに開けた箱根、伊豆方面が避暑地として伸びるのに従ってこちらは経営不振に陥った。また鹿野山の地元である清和村一帯では唐人凧が流行。「うなり」をつけて呦呦館の上にあげ、外人にいやがらせをしたという。当時から鹿野山に残る唯一の旅館、大塚屋の大塚政二郎さんは「とくに宿泊料はべらぼうに高く、木更津の一流どころの約三倍。これでは普通の日本人は寄り付けなかった」と語る。いずれにせよ、呦呦館は明治三〇年代にはいって、名古屋市内の郵便局に生まれ変わり、大震災まで健在だった。

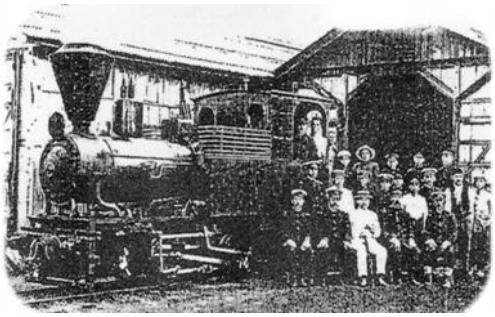
今の鹿野山は当時のおもかげをしのぶものは何一つない。ゴルフ場、観光牧場が開発され房総の軽井沢を目ざしているが、これも時勢というものか。

（『清和村誌』）

久留里線物語　（木更津・久留里）

久留里線は、大正元年一二月二八日に営業を開始しましたが、これほど時代の波に揺さぶられた鉄道も少ないと思われます。当初は県営事業としてスタートし、線路の幅も六〇センと超狭軌でした。大正一二年、国鉄へ移管され、昭和五年には軌道幅が一〇六・七センと一般並に拡張されました。

昭和一一年三月、それまでの木更津―久留里間が上総亀山にまで延長され、久留里線の総延長は三二・二キロとなりました。その後、木原線との接続問題や太平洋戦争中の昭和一九年一二月、久留里―亀山間のレール撤去（昭和二二年四月に復活）などの歴史がありました。



久留里線三号機関車（久留里駅）
〔木更津・君津・富津・袖ケ浦の 100 年〕

わが国の鉄道の歴史は、明治五年（一八七二）九月の東京新橋―横浜（現在の桜木町駅）間の開通に始まります。明治天皇は開通式に当たって、「鉄道網を全国に張り巡らすように」と勅語を下しましたが、当時新政府には資金がなく、思うように仕事が進みませんでした。そこで政府は明治二〇年、私鉄を許可する条例を公布し、民間の資力に期待を求めました。

これに刺激され、千葉県でも北総部を中心に鉄道企業熱が高まり、明治二七年には市川―佐倉間、同三〇年には銚子―東京間が開通しました。同三九年に入ると鉄道国有法が公布され、主要な私鉄は国に買収されることになりました。ちなみに東京湾側の開通は同四五年三月に姉ケ崎まで、大正元年

八月には木更津まで、大正四年になると周西駅（現君津駅）も開設され上総湊にまで及んでいます。

このような時代背景の中、小櫃川流域の人々の要望が実り、明治四三年、久留里線が建設されることになりました。翌年、鉄道債を募集したところ、たちまちにして予定額三九万五千円に達したといいます。当初、終点の久留里駅は青柳字水深に置く予定でしたが、久留里地区住民の熱意によって現在の位置に延長されました。

敷設工事は、鉄道連隊が訓練を兼ねて大挙出動したことや追加工事費を久留里の人々が出し合ったことで、着工して七か月という短期間で終えました。こうしてドイツのコッペル社製の小型車輌が、木更津―久留里間を一日四往復、時速一五キロで走ることになりましたが沿線の人々の夢を運ぶには十分でした。

大正一一年、改正鉄道敷設法によって、久留里線を鉄道省へ移管する問題が起きました。ここには、木更津から大多喜を経て大原に至る路線計画も含まれていました。久留里線は営業成績が良かったので移管を惜しむ声もありましたが、折原県知事は、「狭軌の改良や大原までの延長を考えると、目先の小利害にこだわるわけにはいかない」との考えを示し、県議会の承認を経て大正一二年九月一日の関東大震災の日、国鉄へ無償提供が決まりました。しかし、大原までの延伸の件は結局実現されず今日に至っています。

（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

久留里線と江戸おか道（木更津・久留里）

久留里線は、大正元年一二月二八日木更津・久留里間に軽便鉄道として開通し、その後、上総亀山駅まで延長され、ゆくゆくは外房の夷隅郡大原に接続する「木原線」になる予定だったそうです。

久留里の素封家で県会議長の職にあった藤平量三郎氏は、木原線期成同盟会長として、実現に奔走しましたが、当時の鉄道敷設技術では困難な地形・地質が多くなかなか着工できないうちに、満州事変に続く戦争の拡大のため挫折しました。

戦争末期には久留里・上総亀山間の営業も停止の憂き目に遭い、レールは全部取り外され、東南アジア占領地の鉄道敷設に転用することになったそうですが、輸送の途中敵軍に攻撃されて船と共に沈んでしまったと言われます。

戦後は、しだいに国力が復興し、「くるま社会」の現代に至っては利用客が減るばかりで、赤字続きのローカル鉄道は廃止され、バス輸送に代わったり、民営として辛うじて存続している鉄道もあり、木原線は民営「いすみ鉄道」と名称を変えて、大原と上総中野間を走っています。

木更津駅を発車した電車は、祇園、上総清川、東清川、横田、東横田、馬来田、下郡、小櫃、俵田、久留里、平山、上総松丘、終着駅上総亀山の順に単線で約三五キロを、通過待ち

合わせ含め約一時間掛かって走ります。ほとんど無人駅で久留里街道沿いに駅舎やホームがあります。

俵田駅は木更津から約二二キロで、経営の合理化で駅業務は廃止されて、民家の生け垣に沿った短いホームに、白い標示板だけが俵田駅の存在を明示しています。

久留里道（俵田道標）

ホームから、直接南へ百メートル歩くと、信号機のある久留里街道の四ツ角にでます。この角には、元禄二年（一六八九）に俵田村の念仏講二九人が建てた、六角形の六面六地蔵尊があり、正面の地蔵尊像下部には、

是より北は江戸おか道なり
是より西は江戸ふなみち

と、二行に分けて道しるべが刻んであります。

この道しるべは、外房州から城下町久留里を通り過ぎて陸路を江戸へ行く人と、木更津から船に乗って行く人との分かれ道のしるしで、お年寄りの話では「もとは小櫃川に近い旧街道にあって、川舟が出ていたらしい」とのことでした。おか道は、ほぼ県道に拡幅され、一部は裏道になったり、廃道になっているようですが、約四キロ北の裏道、三田のお地蔵さまには、

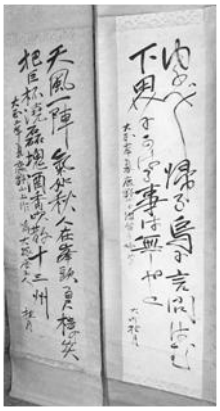
北ゑどみち　あねさき四り　かさもり四り
西たかくら一り半　きさら須三り半

と刻まれた道しるべがあり、往時が偲ばれる話しです。

（『西上総歴史よもやま話』高崎繁雄）

大町桂月と鹿野山　（鹿野山）

大町桂月（本名芳衛）は、明治二年（一八六九）に高知県に生まれ、明治二六年（一八九三）東京帝国大学（現東京大学）に入学、土井晩翠の新体詩会に加わりました。明治三一年、「美文韻文黄菊白菊」の執筆でその名が知られ、中学校教諭を経て雑誌評論などに活躍。



掛軸（大塚屋蔵）

その間、紀行文、随筆、人生論などを書き、美文調文体の興隆につとめました。酒を好み、旅を愛して全国を行脚、多くの観光地を世に知らせる働きもしました。晩年は、諸所を旅して紀行文の第一人者といわれていました。

大町桂月は、鹿野山の地形を論じて、「房総第一の高山なり。この山は下より見るべき山にあらず。上より見下すべき山なり。山上の眺望は房総第一なり。関東全体にても、第一流なり」とその紀行文で紹介している。

大正二年の初夏、桂月は本の執筆と旅を兼ね、鹿野山へ向かいました。第一夜を木更津の鳥飼旅館に宿泊、その翌日に

鹿野山へ行きました。当時、木更津から鹿野山への交通は徒歩かピーポー馬車によるかであったのです。桂月は馬車による登山でした。木更津の八幡神社前を出発→子安坂→三直→尾車→草牛を経る道でした。やがて宿の大塚屋に到着、少し静養の後、主目的である「人の運」という題名の本の執筆にかかりました。

数日たつと、鹿野山周辺の村々に、大町桂月が大塚屋旅館に宿泊していることが知れわたりました。中でも小糸・湊・環等の小学校青年団からは講演依頼が出るほどでした。桂月は話が上手なうえに時々、冗談などを入れるので受けがよかったようです。当時の大塚屋の主人が、その頃の若い人たちに語ったことを記してみますと、「先生はお話好きだったので、よくいろいろな所に出かけた。私が忘れられないのは、ある時、話に出かける前に「良い着物がないので貸してくれ」ということだった。私は仕方なく、自分の結婚式の時の紋付きの着物とはかまを貸してあげたら、それを平気で着て出た。「気どらない人であり、仙人みたいな人だ」と語られた。

桂月が鹿野山滞在中は、小糸村青年会の人達とも交流がありました。このことは小糸町史にも記されていますが、当時、小糸村青年団長であった谷中國樹氏宅にも、桂月作の俳句の短冊があったことから、親しい関係が窺えます。また、小糸町史には、前記とほぼ同じことの上に、桂月の博識や明るい人柄の偲ばれる様が記されています。小糸青年団が、小糸村の大井戸で桂月の歓迎会を開いた時のことです。さっそく、得意の即興で、

「聴衆が　思ったよりも大井戸に
　調子に乗って　法螺（ほら）を福岡」

と、このような狂歌を作ったことが記されています。桂月のひょうきんで明るい一面を知ることができます。

桂月は、宿舎の大塚屋旅館には屏風へ大書した「鹿野山二十詠」の短歌や二幅の俳句の掛軸を贈っています。近隣の行く先々でも掛軸や短冊を贈っているようです。それにも増して、当時の青年達に贈った美文調の格式の高い文章は往時を学ぶ指針となることでしょう。

（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

鉄道開通と周西駅建設　（坂田・中野）

市役所の北側を走る内房線は、大正四年一月一五日に開通しました。当初は北条線といい、君津駅は周西駅といいました。開通日に備えて周西村長の保坂亀次郎は各戸に国旗を掲げること、停車場構内で祝賀会を催すことを触れています。

ここに至るには、関係地域内には、賛成反対の、いろいろな意見があったといわれています。たとえば、「そんなもんが来ると、ケブばり出しやがって。火の粉も飛ばしやがって。畑も田も潰されて」という人もかなりいたそうです。それに対して、周西村は前向きで、なかでも中野区は積極的に誘致

運動を展開しました。「明治四十五年度から大正二年度にいたる中野区の区費支払簿」（『君津市史史料集Ⅲ』五〇六頁）には「大正二年三月十七日一金七円、鉄道捨天所設置運動費」などの記述があります。捨天所とは「ステーション」のあて字と思われます。当時、米価一俵当り六～七円の時代でした。

現在、君津駅から青堀駅方面へ向かう線路の両側は、きれいに宅地化されていますが、当時は一面のドブッ田（帯水田）でした。そこへ土盛りをして、線路敷地を造成したのです。必要な土は、近くに点在していた島畑（カッチ）の土を用いました。土を取って低くなった畑は堀田といい、沿線に点在していましたが、今は跡形もありません。また、線路敷地が新設されるについて大和田・坂田方面からの、排水路の確保が問題となりました。坂田区と中野区の代表が協議の末、大正二年四月二四日、中野区内に排水路を新設する契約書を取り交わしています。

周西駅（大正４年）〔石渡金右衛門蔵〕

このように、中野区では、鉄道誘致に積極的でしたが、駅が設置される条件にも、恵まれていたと思われます。江戸時代からの房州街道は、畑沢から高坂山を越え、今の君津保育園わきへ下り、アピタ東側の踏切から貞元・釜神方面へ通ずるものでした。周西駅の位置は房州街道との交点にあたっていたのです。「当時の駅周辺には一軒の家もなかったが、数年にして次第に家並みが形成されていった」と、九四歳の古老が語ってくれました。

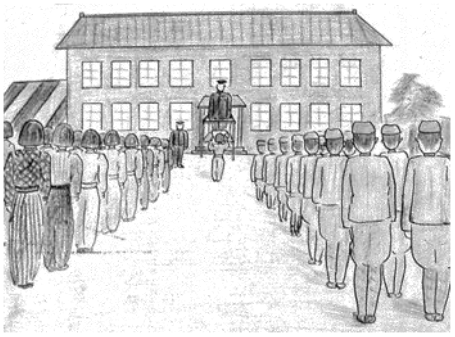
昭和一七年、八重原航空廠が創設されると、工場内への貨車引込線が敷設されました。以後、周西駅の利用は急増していきました。（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

第二海軍航空廠八重原工場　（周西・八重原）

太平洋戦争中、君津駅の東側一帯に海軍の広大な八重原工場がありました。敷地となったのは、杢師・南子安・北子安・久保・台にまたがる田園地帯で、一〇〇㌶にも及ぶ土地です。なぜ海軍はここに、このような大きな軍需工場を造ったのでしょう。

昭和一六年、巌根の木更津海軍航空隊の側に、第二航空廠ができました。職員は三万人を数え、そこでは主に飛行機の修理や整備、エンジンや計器類を扱う仕事をしていました。対米戦争が始まって次第に戦闘機の消耗が激しくなると巌根工場だけでは手狭になり、当時の八重原村・周西村にまたがる八重原工場をつくることになったのです。

昭和一七年、工場建設のための土地買収が始まり、買収価格は軍によって、一方的に決められました。田は反当り六五



入廠式〔戦時下の 60 年史〕

〇円という安さで、土地所有者は驚きました。さらに、買収地内に住宅のある者は、至急移転しなければならず、その移転費も民間の三分の一、戸平均三千円という有様でした。「これでは移転が……」と言うと、軍に「戦時下ですので…」と言われ、泣く泣く了解しなければならなかったのです。こうして海軍は、この年八月には早くも工場の建設に着手しました。

昭和一七年一〇月、二千人の朝鮮人が「鎌倉丸」に乗せられ、朝鮮半島から日本にやってきました。彼らは強制的に徴用されたもので、うち二〇〇人が八重原工場に割り振られました。八重原では工場敷地の整備造成にあてられ、一年半でほぼ完成すると大部分がサイパンなどの海軍の基地に送られたといわれます。

昭和一九年、工場が完成すると、たくさんの人が動員されました。県内外から技術者・徴用工員・挺身隊員が、また勤労動員として、近隣はもちろん、安房・市原・千葉から中学生や高等女学校の生徒、はては国民学校の児童まで動員されました。文字通り君津の地で国家総動員体制が行われたのです。そして消耗した飛行機の修理などに明け暮れました。

昭和二〇年、米軍機による本土空襲が激しくなり、八重原工場も機銃掃射を受け、毎日退避する日が続きました。そこで海軍は、厳根や八重原の工場を近隣の小学校やお寺などに疎開させ、最終的には佐貫地下工場へ移転することに決めました。

戦争が終わると、工場の土地は前の所有者や開拓の入植者に、また土地と建物の一部は、君津中学校や千葉工業大学に払い下げられました。『市史史料集Ⅴ現代1』をみると、戦後一〇年後の工場の使われ方がわかります。やがて新日鐵が進出すると、跡地には商店や住宅が建ち並び、今では当時の面影を残す建物が二、三あるだけとなってしまいました。

（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

海苔養殖最後の人見浦　（人見）

近江屋甚兵衛がこの世を去って約一一九年、海苔採藻開始より約一五〇年になる。明治六年（一八七三）から三〇年まで海苔場紛争事件があり、村落民に平均割の株が配分され、今日まで六〇数年間、上総海苔の本場として、全国に販売されてきた。

しかし、大東亜戦争で敗戦となり、国家国策の見地より、東京湾東部沿岸は工業地帯として造成され、北は浦安より南の富津岬まで埋立てが決定し、千葉浦をはじめとして、八幡浦・五井浦・姉ヶ崎浦まで埋立てに同意した。人見浦も昭和

三六年、君津町長岸周治の在任中、県開発部は、八幡製鐵株式会社の要望により、役場を通して、君津町沿岸海苔場の埋め立て斡旋に、協力するよう呼びかけて来た。これに対し、君津町漁業組合長白井千代吉は、組合役員を組合事務所に招集して、経過報告をすることになり協議したが、役員間には反対する者が多く、特に甚兵衛ゆかりの地、一五〇年の歴史を有する人見浦で、埋め立てに反対という事態になった。組合長は、事は重大と考え役員会を一〇数回開催した。町としても、議長鈴木菊次郎が町を代表して役員に懇請するとともに、人見浦海苔場が当町の盛衰を左右するものとして、漁業会事務所に役員を訪ね懇請した。これに対し、白井組合長も計りきれず、前組合長守市五郎ほか、守彰三、幹事茂田育三等とも協議懇談を重ね、善処することを約束した。組合役員・組合員にも協力を要請し賛同を求め、なおも協議の結果、組合総会を決行することになり、組合長は組合員に対し最後の通告を発した。

拾い海苔付け作用風景〔漁業資料館蔵〕

召集を受けた組合員は、実に全員が参集した。定刻になり、白井千代吉組合長は経過報告とともに「この町の前途を思うとき、町の発展はこの浦が左右し、全町に及ぼす影響は大きい」と説き、組合員に善処するよう要望した。この協議の結果、組合員の賛否は両論となったので、ついに投票となった。その結果、三分二の賛成を得て可決成立した。千葉県養殖海苔の発祥地として由緒ある養殖場も、ついに埋め立てを決定したのである。

海苔権を放棄したことに対し、海苔業に生活補償として十年間の転業資金が支給されることになった。組合員が協議し放棄決定に踏み切ったあと、県開発部と補償額の折衝を重ねた結果、昭和三六年、海苔業者は六三五万円で妥結調印。沖漁には、別に七五万～一三七万円で解決した。

その後、同年八月と翌年三月、組合員二一七名に一四億八千万円が支払われることになった。これにより八幡製鐵株式会社の進出が確定した。八幡製鐵株式会社は、事務所を人見漁業協同組合に置いて総務課・建設課を配置し、五〇余名の職員で事業が開始された。

昭和三八年、人見浦・大和田浦の海苔養殖場は完全に陸地となり、昭和三九年には、工場の一部が完成し操業を開始。当時の作業員数は四〇〇余名だった。しかし、溶鉱炉がないので八幡製造所より厚板鋼板が海上輸送され、君津製鐵所の工場で製品加工して京浜地区の自動車工場、その他に納入した。

昭和四二年、八幡製鉄本社の指令により、埋め立てに同意

を得た坂田浦とともに、沖合の第二回埋め立て工事が国土総合開発により開始し、全国より集めた浚渫船一八隻が沖合に展開して予定の場所に配置された。停泊中、配水管の準備に着工、各船とも四月より一斉に給水を開始。沖合の海上は戦場の如く、昼夜の別なく活動が続けられ、夜間は各船とも万燈の光で不夜城のようだった。そしてついに、五ヶ月間で一八〇万坪の工場敷地が完成した。

昭和四三年八月一三日、豪州より輸入鉄鉱石二万八千屯を積んだ第一号鉄洋丸が坂田沖岸壁に入港。同年一一月には第一高炉が完成した。これにより海苔養殖で栄えた町は、今や昔の海や山の面影なく、威容を誇る大型鉄鉱プラントに呑み込まれていった。

「はまっぺ」は、「おかっぺ」になった。が、いつのときかまた、歴史は繰り返されるのだろうか。

（「人見老人会」川名邦五郎）

菅原神社の「やぶさめ神事」　（北子安）

菅原神社の祭神は、菅原道真・日本武尊・譽田別命で、創立は、元弘二年（一三三二）六月二五日（北朝光厳天皇正慶元年）、時の地頭が当地の鎮守として、社を創建し菅原道真公を祀る。毎年一月七日には、神社境内で「やぶさめ神事」が行われ、地域の人々には「てんじんさま」と呼び親しまれている。

「やぶさめ神事」は、伝承によると元禄年間（一六八八～一七〇四）、当時の領主が斉田を寄進、正月七日をもって祭祀料を供進し、やぶさめの行事を行い、武道の奨励と、五穀豊穣を祈願したことに始まるとされる。また、神事に奉仕する男子を「わかと」といい、享保二年（一七一七）からは領主の名代として一五歳未満の名主の嫡子が、この神事を行いました。明治以降は主として、神社および秀明院総代家一〇歳以下の男子が選ばれ、神事を担当するようになったともいわれる。

〔Webページ〕

普通、「やぶさめ神事」は、馬に乗って走りながら行うものと思われますが、ここでは歩いて的を射る「歩射（ぶしゃ）」で、約一〇㍍離れた位置から的を狙う。

神事の前日、先ず氏子総代および秀明院の檀家総代各三名が、弓、矢、的を新調し準備する「矢迎え」が行われる。弓は代々石井家の門松に用いた約六尺の竹を使用し、矢は若鍋家から奉納された篠竹を用いて一二本作り、的は竹を編み、上に紙を貼る。

祭日の七日朝、的を射る「わかと」をはじめ関係者が神社に集まり祭典を行ったあと、やぶさめ神事になる。的はその

年の恵方の方角に立てられ、射る距離は弓の長さの五倍となっている。的と射手の間には清められた新藁が敷かれ、いよいよ「わかと」により始められる。わかとは一二本の矢を二回繰り返し射る。

その後、神官、自治会長、神社総代、檀家総代がそれぞれ順次、的を射る。矢が的の白い部分に当たった方が多い年は晴れ、黒い部分に当たった方が多い年は雨といわれ、その年の天候や作物の豊凶などが占われる。射た矢はそれぞれ家に持ち帰り、軒先にさしたり、神棚におさめたりして、幸運の舞い込むしるしとして大切に扱われる。

「やぶさめ神事」は、昭和四五年九月二一日、君津市の無形民俗文化財に指定されている。

（『房総の祭り』中嶋清一）

成願寺のメーコ　（中島）

君津市中島にある成願寺には、メーコと呼ばれる行事があります。毎年の四月二六日に行われており、近隣からの人出が多く、当日の賑わいは大変なものです。このメーコとは御影供（みえく）が訛った言葉です。御影供は本来の御影供養を略した言葉であり、それは弘法大師（空海）のお姿を絵に描いたものを掲げ供養することです。

御影供

わが国に真言宗を広めた人は弘法大師といわれていますが、大師の生存中は、お弟子たちも安心して布教活動を続けていました。しばらくして、大師の入寂（にゅうじゃく）が近づいたことを知った弟子たちは大心配になって、ついに直接「もしお師匠さんの亡きあとは」と御伺いを立てたところ、大師は「なにも案ずることはない。わが姿を描いて、それを空海と思うように」と諭されました。その後、真言宗のお寺では、弘法大師の御影を供養するようになったといわれています。大師入寂の三月二一日に因（ちな）んで、その日を御影供の日としたのですが、寺々の事情で、この成願寺は四月二六日になったといわれます。

成願寺のメーコは、お寺の住職を中心として仏事が厳修（ごんしゅう）されます。法類や縁故のあるお寺の坊さんが集まって本堂に弘法大師の御影の軸を掲げ、前讃、理趣経（りしゅきょう）・後讃などが読経され、大師宝号が高唱されます。また、御詠歌講中の和讃も奉納されます。境内を中心として門前の道路いっぱいに露店が続きます。飲食物店あり、日常生活品あり、おもちゃ、農具、植木、花木ありで人々は湧きたちます。

現在、君津地方でいわゆるメーコを行っているところは、成願寺と富津市小久保の真福寺です。真福寺は、四月二一・二二日の両日でこれも大変な人出です。この二か寺とも、智

山派のお寺です。これに、豊山派ですが木更津市請西の長楽寺と君津市人見の青蓮寺の二か寺を合わせて西上総の真言宗四か寺といわれています。

成願寺は末寺も多かったのですが戦後は本末の制度は廃されました。寺伝や口碑などによれば、成願寺の開創は、伊豆走湯山宥祥（妙浄上人とも）のお弟子源暹（げんせん）法印（備後法印とも）であるといわれています。また、時代は鎌倉時代と考えられています。

成願寺の山号は息災山、院号は東光院といい、本尊は不動明王といわれています。江戸時代には、御朱印五石も与えられており、寺容完備、境内も整備されていました。殊に庭前の池は景観を添え、中本寺の尊厳を保っていたといいます。

（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

鹿野山みち　（富津市・君津市）

房総三名山の一つに数えられる鹿野山は、古くから有名な山です。山上に集落があり、それは白鳥神社や神野寺などの門前町でもあり、房総往還の宿場町でもありました。従って、鹿野山への登り道はあちこちからありました。

今回、古くからの道を探訪してみましたが、既に今は廃道になってしまって、蔓草や竹木の繁るにまかされている道もあります。それこそ歩くのにも大変な箇所もありますが、昔の登山道には、道標があったり、句碑があったり、時には地蔵様や馬頭観音の石仏があったりします。樹木に蔽われ落葉の散り敷いた道を進むのも風情があって懐かしいものです。

現在、鹿野山への自動車道は福岡口・粟倉口・佐貫口・湊口から四本があります。次に何本かの古い道を紹介してみましょう。

一、草牛みち

この道は君津市六手から尾車・草牛と進む道です。この道には「山彦」といわれる名所があります。文豪大町桂月はここを通って鸚鵡岩（おうむいわ）と名づけたといわれ、谷の向こうの岩に大声で呼びかけると、反響が返ってきます。尾車には、戦前までは枝ぶりの美しい「曲がり松」という名木が道のそばにありました。草牛から鹿野山への登り道は鋸屑の山です。かつて大正六年の大暴風雨に倒された山上の大木を製材した場所です。

その手前の所に、桃の木台という所があり、ここに句碑があります。

表に「枯芝やまた陽炎の一二寸　芭蕉」、

裏に「冴えわたる遠寺の鐘や冬の月　桂下坊」

「野を一里耳を離れぬ雲雀かな　蝶二」とあり、

地元小糸地区の俳句仲間が建てたものです。近くに立派な道標があり、正面には馬頭観音坐像の浮彫の下方に「かのふさんみち」とあり、文政一一年（一八二八）の建立です。文字も大きく鮮明で美しいものです。この道標とならんで、

大正二年に中島・泉・荻作の二〇七戸が協同して建立したという「鬼泪原野拂下記念碑」があります。
この辺は元来三地区の入会秣場でした。そこから製材の鋸屑の積もった道を登って、鹿野山の大塚屋旅館の近くへ出ます。

一、馬登みち

六手からの道はもう一本あって、皿引をかすめて馬登を通り、鹿野山の国土地理院測地観測所のある所へ出るわけですが、出口の所に道標が有ります。明和三年（一七六六）四月吉日の建立です。正面は上部に如意輪観音坐像の浮き彫りがあり、下方に「大山みち、きよすみ、なこてら」とあり、

右側面には「東　かの山道、くるり、たかくら」、
左側面には「西　岩とみ道、さぬき、ふつつ」、
裏面には「北きさらす道」とあり、

鹿野山の念佛講中の人たちが建てたものです。このあと上町への入り口に木の門が立っています。これは下町の入り口にもありますが、昔の閭門（りょもん＝村境いの門）の名残と思われます。

一、福岡みち（北参道）

木更津から小糸地区を抜けて、福岡から登る道は、現在、立派な舗装道路です。麓から頂上まで、道の両側に桜が植えられていて、桜時には文字通り花のトンネルとなります。福岡のバス停留所の近くに、大きな碑があり「皇紀二千六百年　鹿野山参道　桜舟書」があります。碑の裏面には、この参道に、桜苗千余本を植えた由来が書いてあります。発起人は荻作の榎本喜宗治・溝口三郎の両氏で、荻作の青年団員の作業奉仕でした。

鹿野山参道道標（福岡みち）

福岡道の登山口には、鎌滝昭二家の墓所があり、そこに二基の道標があります。

「かのふ山みち」「たかくらみち」と書いたものです。これは立派な道標で、一石の三面の上部に二体ずつ、六地蔵菩薩像が浮き彫りになっていて、文字も美しいものです。もう一つは寛政五年（一七九三）の建立で小型ですが、中央に馬頭観音像が浮き彫りにされており、

「東　高蔵一里半」
「西　鹿野山一里」
「北　木更津三里半」とあります。

高蔵は現在木更津市で、高蔵寺は高倉観音で有名な坂東第三十番の札所です。なお、荻作の旧道に「世四丁目」という文字の読みとれる小さい角石が立っていますが、いわゆる「町石」かと思われます。

一、粟倉みち（東参道）

清和の粟倉からの登山道です。この道にも両側に桜が植えられていて、舗装道路ですが旧道の所々は、昔の山道の姿を留めています。この旧道に芭蕉の句碑が二つあります。

「初しぐれ猿も小みのをほしげなり」

「梅が香にのっと日の出る山路かな」というものです。今は杉林の中に埋まってしまっていますが、そのころはこれらの句にふさわしい場所だったものと思われます。

一、関みち

房州大山の金束（こづか）から木の根峠を越えて上総にはいり、関の継場へ来ます。関では天狗岩の景観もたのしめます。

継場の所には清水屋などという旅篭屋もありました。馬に水を飲ませたという井戸も残っています。

そこから貝がら坂（貝層）を通って大田和へ出て、大川崎の川ぶちから湊川を渡って、東大和田へ出て、田倉の前新田からいよいよ登り坂となります。ここから鹿野山の鳥居崎へ登るわけで、これが安房から上総鹿野山への正式な本道で、いわゆる山側の脇往還です。途中に屋号「はきめ」という家がありますが、「百騎目」の意味らしく源頼朝伝説とのつながりを思わせます。この関みちが、鹿野山を通って前述の草牛みちへつながり、木更津へ結ばれてゆくものです。

一、田倉みち

これは田倉本村からの登山道で、細い山道です。面白いのは田倉本村と鹿野山地籍との境あたりに「綱張り」があります。これは一本の縄綱に、わらじや杉の葉や炭を吊り下げて、「塞の神」とした習俗が残っているわけです。この道には、道中の無事を祈ったと思われる石地蔵も祀られています。明治初年（一八六八）田倉の大樟がまだ樹勢を張っていたころ、わざわざ見物のために、鹿野山からここまで降りて来た文人墨客がありました。

一、湊みち（南参道）

湊から更和・桜井を通って登ります。舗装道路です。更和には「踏地蔵」と呼ぶ平らな石が道の端にありました。旅に出る時これを踏んで道中の安全を祈願したと聞いています。桜井には小さい道標が二基あります。

一つには「道引地蔵大士」とあり、

「東　鹿野山」

「西　天神山」とあります。

明和九年の建立です。もう一つには年号はありません。この道は昔から鹿野山表参道といわれ、昭和初年には上総湊駅前に大きな三角塔が立てられ、筆太に「鹿野山表参道」と書かれていました。そのころ佐貫駅前には「鹿野山本参道」という三角塔がたてられ、鹿野山は当時観光のメッカでした。湊みちは、新助台を通って鳥居崎へ出ました。新

助台には、鹿野山のお祭りの日には臨時の茶店ができて、「白玉」やサイダーなど売っていました。鳥居崎にも昔は茶店があり、近くに十三州一覧台や三本杉の名所もありましたが、今はこの道を通る人もなく、大変さびしい限りです。広重の錦絵などには立派な鳥居が描かれ、人馬の往きかった所です。県の国民宿舎鹿野山センターの入り口の横から鳥居崎への道があります。なお、湊口からは「馬車道」がありました。馬車専用の道で、材木や薪炭を積んで鹿野山をくだるのはさぞ大変だったと思います。

登山道の富津市の塵芥焼却場の近くの旧道には、明治三三年に建てられた桜井の人、

市川亀遊の

「うぐひすや鋸山に引霞」の句碑があります。

一、佐貫みち（西参道）

佐貫は「鹿野山と新舞子」というキャッチフレーズで、山と海の観光に力を入れてきました。現在、佐貫町駅から鹿野山と新舞子の両方へ定期バスが通っています。この道は佐貫から佐貫城址の前を過ぎ、宝龍寺を通って登ります。途中の山林は見事な林相を見せています。途中に関山用水の記念碑も建っています。昭和一一年に建てられたものですが、幕末の用水開鑿の成果を改めて顕彰したものです。マザー牧場・ゴルフ場などへも通じます。

このほかにも佐貫からの鹿野山みちは、岩富地区にある古刹岩富寺の門前の横からの旧道もありますが、今は道一杯の竹木に蔽われてしまっています。

（『西上総の史話』菱田忠義）

雨城楊枝　（青柳）

房総半島の中央部のなだらかな丘陵に立つ久留里城（別名：雨城）。この雨城に抱かれるように広がる城下町の久留里。かつて、武士の生活の糧の一隅として、この久留里に生れた「上総楊枝」が、明治の後半、「森家」によって「雨城楊枝」に生まれ変わる。この久留里地区近辺で育つ落葉低木樹の「クロモジ」は、恵みの雨に育まれて、日本一香り高いと文献につづられている。

これは、江戸時代末期、上総久留里城藩士の間に内職としておこったものといわれる。最初、材料は付近の山林に多くあった「黒文字」の木を用い、普通の「妻ようじ」だけを削りつくったということである。この妻ようじのことを「ザコ」と呼んでいる。が、やがて廃藩置県後、禄を追われ食うに困った藩士が、これを業として本格的にうちこむようになり、やがて技術も向上し、民芸品的美しい細工楊枝をつくり出したのである。これがいつしか久留里城の別名、雨城の名にちなみ「雨城楊枝」と呼ばれるようになったものである。

古くは、黒文字の木を切ってくる人と、それを削りつくる人とは別で、切る時期は一〇月から翌年の三月頃、寒い時が

最適とされている。なお黒文字の木の太さは、親ゆびくらいのものが、最もよいとされ、その製法は、黒文字の木を楊枝の長さの五チセンから、一五チセンに切る。それを「タマギ」と呼ぶ。次にその「タマギ」をナタボウチョウで、ようじに削りやすいように割る。それを約一昼夜、あくぬきのために水に浸しておき、その間一、二度その水をかえることをする。水切りしたものを、コズカガタの小刀一本で削り上げるのである。この細工楊枝は目で見て楽しく、美しく、感覚的な味わいがあり、風格の高い楊枝である。初代故森光慶氏が製作技術を開発し芸術品の域まで高めた。

雨城楊枝〔森光慶作〕

その細工楊枝の種類は多く、現在伝わるものでも三〇種くらいあり、中でも「ウナギ」とか「竹」、「のし」とかいわれるものは会席用に用いられ、すべての日常品が化学製品で味気なくなってきた現在、手作りのものとして人気のあるものである。

（『西上総民俗誌』）

久保南陂水車　（久保）

久保水車は、冬季の間は分解され倉庫に格納。春先、田植え時になると組み立てられて、小糸川の水を、坂田の水田に汲み上げた。小糸川は水面と陸地の落差が大きいため、水を汲み上げるためには、水車下流で水を堰止めし、水位を上げる必要があった。堰がとめられると下流の水がひいて、あちこちに大小の水溜りができ、大きな鯉や鮒、鯰、鰻などが飛び跳ねた。

久保南陂水車の碑

坂田をはじめ近隣の人たちは、大きな網やバケツを持ち、部落総出で繰り出し、それらの魚を我先に捕まえ食膳に供した。小糸川堰止めの日は、部落中が待ち望む楽しみの日であり、春の到来を告げる風物詩の一つでもあったとのことである。

久保南陂水車之碑（碑文）

内務大臣従二位勲一等子爵芳川顕正公篆額

南総君津郡周西八重原二村沿小糸川地高川低不可以漑田圃而村中如久保坂田杢師往年各為一村今則久保坂田属周西杢師併於八重原然猶為一聚落雖土質頗良不能盡其地利秋成無害十歳間僅十二年耳甲午歳旱甚加以虫害久保水田三十六町九段餘其能挿秧者不過十之一河壖一帯無青色矣議者曰田以水為命無水即無稲今也工藝日進火輪走焉電音傳焉或有利用河水良器豈可束手望雲霓乎坂田杢師人亦欲合力興修水利集議累日殆忘眠食有人告曰和泉人藤原次郎吉今寓千葉発明農桑器機最功水車乃聘之規畫曰非費二千圓不能也則豫定其率課之於三聚落七十弐町三段二畝八歩其引水久保則十之六分

二釐坂田三分釐杢師釐議諧約堅乃相地勢起工於久保南陂陂北並鑿板渠三條堰河引水渠頭設閘門置水則中渠濶十二尺長十五尺下通於河左右両渠濶各一尺下稍廣稍隆其長檗居中渠之半渠窮處設水車状如并両輪為一者輪径三十八尺輻六尺六十四幅湊一轂輪邊左右周函函方一尺深五寸其数二百五十六是曰戽樋材皆檜鐵軸貫**轂**大三寸長十四尺植六柱以受之輪三方安槽高二十八尺受輪運之水曰受水規材良器完頗極機功創工於甲午八月一日竣於明年一月十三日是日遠近観者如堵其排閘也河水□□入渠中車輪旋轉飜飜聯聯運左右兩渠之水為瀑落槽中自槽一方奔注田畴勢如激箭料一時間得水千三百八十二斛四斗衆抃躍曰我等蘇生矣爾来三年諸穀皆熟夫耕婦績享終身飽煖之樂望霓之歎聲変為鼓腹撃壤之歌其功亦偉矣哉頃村人請余欲勒其事於石併鐫成功盡力者姓名碑陰使後昆知起工之所因古昔有灌漑得其利為作均水約束刻石立碑似防分争者村人之意亦其在于此于乃記之

明治三十一年季四月

従七位　重城保撰并書

田　雲　錦　刻

この久保南陂水車の完成を祝して、明治三一年（一八九八）四月、大宮神社の境内の一角に石碑が建てられた。記念碑は、長さ六尺九寸（約二・一〇メートル）、幅三尺五寸（約一・〇六メートル）、厚さ五寸（約一五センチ）という大きな仙台石によった。そこには当時の農民の苦しみと水車完成の喜びが次のように刻まれている。

建　碑　願

千葉県君津郡周西村久保位置小糸川ノ流れ二沿ヘリ。然レドモ土地高層ニシテ田地用水ニシテ欠シク、十中ノ八・九年ハ旱害ニ罹リ、人民ノ困苦年ニ増ス。就中去ル明治二十七年ノ如キハ、久保田地凡ソ三十七町歩ノ内、漸ク三町歩ヲ挿秧ス。爰ニ於テ、人民生死ヲ決スルノ時トナリ、同村坂田・八重原村杢師ノ賛同ヲ得、苦ヲ忍ビ資ヲ募リ、技師ヲ雇ヒテ小糸川ニ揚水車ヲ架設ス。然ルニ成績良好ニシテ、爾来旱害ノ患ヲ忘レ、甫テ蘇生ノ思ヲナス。依テ后来ニ昔日ノ苦ヲ示シ、且ツ、該車ノ維持法其ノ他引水等ニ於テ、紛擾ナカラシメンガ為、即チ記念トシテ、碑ヲ周西村久保三百八十五番地字宮田大宮神社境内ニ建設致度、碑文写寫相添此段奉願候也。

明治三十一年二月一日

周西村久保惣代　金田盈蔵　㊞

同　刈込徳次郎　㊞

同村坂田惣代　坂井四郎治　㊞

木更津警察署長

警部　宮村　豊　殿

（周西マップクラブ）

人見神社例大祭の特殊神事　（人見）

人見神社の例大祭は、毎年七月二二日に行われる。前夜、迎えの神事、御衣替えの儀式が執り行なわれ、翌日の例祭には、神馬奉納やお浜出式が行われる。旧氏子の大堀から神輿、二間塚から錦の御旗、大和田から剣、青木から獅子舞が、奉納されてきた伝統がある。

神馬奉納

神馬と書いて「おめし」「じんめ」「しんめ」ともいう。神がお召になる馬、神の乗り物として奉納された馬で神聖視された。この神に奉納された神馬は、神の意志をも表すものと考えられ、人々はその年の豊凶や天候などを占い、その判断を神の啓示として敬った。神馬には、一二尺の真竹の鼻竿がつけられた。鼻竿持ち一人と、口取りが左右に一人ずつの計三人が馬と共に駆ける。この鼻竿は一二の節のついた真竹が用いられる。円周約三〇㌢、長さ一二尺の太い真竹で、一二節というのは一年一二か月になぞらえたものといわれる。人見神社のお神馬は、三五〇年余の伝統ある神事として長く引き継がれてきた行事といわれる。

☆マコモの栽培

当社には古くから真菰田という、一畝ばかりの田があってマコモが栽培されてきた。毎年七月一日社家によって真菰刈りが行われ、その真菰でご神体のよろい（鎧）が作られる。

☆御衣の調整

七月二〇日、御衣を作る作業に取りかかる。この日朝早く社家が、沐浴潔斎をして、干し上げた真菰を持って神社に参上し、神前に供える。宮司は御衣調整にかかる旨を奏上し、この後社家によって御衣の調整が行われる。二一日午後、新調の御衣は、小糸川に設けられた垢離取り場で浄められ、神前の仮安置所に置かれる。

☆神馬の選定

かつては、多くの農家で馬を飼っていたので神馬として上がってくる馬には良い馬が集まった。人見神社の神馬(雄馬)になることは大変誉とされ、競って奉納を希望した。したがって神馬の選定には、祭支配人によって厳正に行われ、小櫃や亀山方面まで出かけた時代もあった。

☆神馬の結納式

結納の日、馬は馬主、奉仕者ならびに関係者に付き添われて、高橋家に来る。高橋家では、床の間に人見神社の御神像の掛け軸を飾り、用意された式場に馬を引き入れて神馬の結納式を行う。冷酒が回り、厳かに儀式が終わると、神馬は部屋を東回りに一周して外へ出る。この結納式を通して、馬主に結納金が渡される。この日から馬は、神馬としてあらゆる仕事はさせず、最高の待遇を受けることになる。このような伝統を持った結納式も、戦後の混乱や馬の減少もあって一変

し、高橋家で行ったような儀式はなくなった。最近では青年館に関係者が集まって行っている。

☆御衣替えの神事

お召し替え神事ともいわれる。例大祭前日（七月二一日）の宵祭りに催される。夜一〇時から行われる神事である。毎年一回、神社がまつっている、三柱のご神体に着せてある、真菰で作った胴衣を、新しい胴衣にとりかえる儀式である。

社家によるお供え物の儀式〔人見郷土誌〕

四人の社家と宮司が担当する。午後一〇時から、修祓の儀、祝詞奏上、玉串奉奠の儀式の後、宮司を先導に、社家が本殿に入り、御神体三柱の御衣替えに移る。これに当たる社家たちは紙のマスクをつけ、ローソクの明かりだけで、絶対に口をきかず、厳粛な中で執り行われる。

この御衣替えは、今日も非公開である。三柱の神前には、それぞれ鏡餅が供えられ、特殊神饌（八重なりおこわ・ササゲ・ナス・キューリを切り合わせ麻で束ねたもの）を三方に載せて供える。御衣替えが済むと氏子総代がついでくれるお神酒で三三九度をやり、八重なりのお膳で簡単な直会に入る。

☆古いお衣のお焚き上げ

この後、拝殿前に設けられた斎場でお焚き上げ（庭上祭）に移る。御衣替えで取り替えた胴衣や、新しく作ったときの裁ち切れを、境内で燃やして納める儀式である。これで、御衣替えの儀式が、滞りなく終わることになる。

古いお衣のお焚き上げ

お焚き上げの残り灰が、歯痛の妙薬として、霊験あらたかであるということで、参拝者がよく持ち帰るということである。

☆神馬飾り付け

七月二二日早朝七時ごろ、神馬が到着すると青年館前で付き添ってきた馬主や神馬手配方代表らにより、神馬の着装が行われる。

☆垢離取り式

かつての神馬奉納式は、祭礼一週間前の一六日に行われた。小糸川で神馬を浄める儀式で、大鳥居下から小糸川までの道を、高橋家の当主が塩花で道を浄めながら先導し、小糸川へ案内する。川の水で神馬を浄め鳥居前まで三往復して垢離取りの儀式は終わる。続いて参道を二，三回駆けさせる。この後関係者による奉納式が公会堂で挙行された。冷酒による盃事が終了すると、手締めが行われ総支配人から馬主に、二二日の祭礼まで神馬を預けることが告げられる。この垢離取り

及び奉納式は、今日では祭礼当日に移行し、朝九時頃から垢離取りの儀式を行い、続いて山頂の社殿にて奉納するという形に変化している。

☆神馬奉納の神事

七月二二日午前九時頃より奉納される神馬奉納の神事である。昭和四五年九月、指定無形民俗文化財。

（『周西地区民俗調査報告書』）

薪の話　（鎌滝）

鎌滝は三面山に囲まれ、山ひだには多くの雑木林がありますが、昔燃料を薪炭にたよった時代に、薪として出していたのです。秋の農作業が終って、木の葉が落ちる頃になると、商売人が山を買いに来たものです。雑木は一〇年位で切れるので、山師はどこの山が切れるのかたいてい知っていました。山師とは林産物を商売する人の事で、この辺では薪山師、木材山師、竹山師とあり、また先山師というのもあって、大きい山師は東京に問屋をもち、先山師は木更津、大堀（富津）の商売人に頼まれて、山を心配する人。これには大小があって小さい商売をする人は、土手っこ山師といったものですが、その頃は数が多かったようです。

鎌滝には、三軒の大きな商売人があって、それぞれ東京に問屋を持っていた様です。売買契約は個人でしたり、または山師仲間を集めて、競争入札をさせたりしました。買った山師は切子を抱えているので、その切子が仕事をするのですが、切子の中にはなた頭という人があって、頭が仲間の者に暮から、来春木の芽が出るころまでに切らせるのです。山は平坦なところと斜面のところもあるので、頭が幾つにも小割りして、みんなが平均して仕事ができる様、手間賃も同じ様にとれるよう配慮して、切残す様な事は、滅多にありませんでした。

木挽道具〔茂田和男蔵〕

春の陽光を浴びて、切った薪が白くひかり、さく立っているのを見ると綺麗な感じがしたものです。

乾いた薪は中いい（束り）と言って、女竹の細いもので、真中を束ねるのですが、それも薪束り仲間といって、中年過ぎた老人の一年中の仕事でした。薪は中いいで出すのもあったが、タカベといって山に蔵の形に積んで雨の入らぬ様にして、置いて充分枯らして出すのもあり、タカベ積みは達者な男達の仕事でした。

山からの運搬は、人の背に頼るところが沢山あるので、薪ショイ（背負う）仲間により適当なところまで背負い出し、その先は駄馬によって川岸まで出したのです。鎌滝では、芝原の川岸、馬場の川岸がその頃の名残の家名です。川岸に出

された薪は、両ハナ（端）といって、字の如く両端を藤で束り、川舟に積んで大堀に出し、更に東京へと出荷されていったのです。川舟は、山田屋、橋本、円（えん）山と三家の舟持があって、県道の出来るまで、小糸川の便に頼っていたのですが、県道が明治三〇年（一八九七）頃出来て、それ以後荷馬車で出す様になって、川舟は大正一〇年過ぎ使用されなくなったようです。

薪切りにしろ川舟にしろ、稼ぐ人には雇主を丹那場と云って尊敬され、雇用する方でも、いい時も悪い時も面倒をみていたようです。鎌滝では柴山の関山、立葉作、寺山、谷山、部分林等共有山、個人山の雑木山がたくさんあり、九～一〇年でお金になり、農閑期も仕事になり、又鎌滝には酒屋もあり、醤油やもあり、商人もありで他部落に比べればお金が昔から動いた様であります。

鎌滝男とか植畑女とか、金と何とかは鎌滝にあるなどと言われたのも、明治時代鎌滝の華やかな様子を、他からは言われ羨望の言葉であると思います。

戦後何年かたち、燃料も変わり生活様式が一変して、薪の需要もなくなり、薪山はあってもなくてもの世柄となりましたが、昔は生活の資金として大いに尊重されたものでした。

（『鎌滝部落誌』）

大戸見の神楽　（松丘）

大戸見の神楽は、千葉県君津市の南部、小櫃川上流の稲荷神社の祭礼に拝殿わきの神楽殿で演じられる二人立ちの獅子舞で、地元では「獅子神楽」と呼んでいます。

この神楽は、江戸時代の天保七年（一八三六）灌漑用水（平山用水）が完成したとき、地区の人達は大喜びし、五穀豊穣を祈願して氏神様（現在の稲荷神社）に奉納したのが始まりと言い伝えられています。

当上総地区の神楽の舞、太鼓、笛は三太夫系と林治太夫系の流儀があり、大戸見の神楽は林治太夫の流儀と言われております。

囃子は、「ばかばやし・ごばやし・さんぎり・きりんばやし・あまだれ」の五種類で、「さんぎり」と「きりんばやし」は名人芸といわれ、難しく伝承されておりません。

大戸見の神楽

神楽の舞は、「前かがり・おんべの舞・鈴の舞・くるい・おくり」からなっており、人間がだんだん成長していく過程を、表現しているものだといわれております。

「前かがり」は神を招く準備とされ、一人で歩けない幼児期をあらわしているといわれ、続いて御幣を持って舞う「おんべの舞」で舞台を祓い清めて神を招きます。

そして「鈴の舞」の鈴の音で神が降臨します。ここまでは一人で舞いますが、「くるい」は二人立ちで、青年期に達した若者が、恋人に恋い焦がれている様子を表現したものとされ、荒々しく豪快な動きで、人間の内に秘めた心情を情熱的にあらわしたものとなっております。結びに「おくり」を演じて終わります。

戦前は小櫃川流域の各地で伝統的に神楽の奉納が行われており、毎年祭礼前には神楽稽古が行われ、荒稽古となると朝から夜まで先輩や招いた太夫から指導を受けたとの事です。祭礼当日には各地区の氏子連が神楽宮を担ぎ、ばかばやしの笛・太鼓勇ましく神社の境内に参入する「入り込み」をし、所定の陣地にむしろを敷き酒盛りをして、矢頃になると宮元神楽から順次奉納しておりましたが戦後、多くの地区で伝承が途絶えていくなかで、大戸見の神楽は宮元を中心に各地区の太夫の連合によって何とか一組を奉納していました。

昭和三六年千葉県無形民俗文化財に指定されたことを機に保存会が組織されましたが、昭和四〇年代後半には太夫の高齢化等により一組の神楽を奉納するにも大変な状況となり消滅が危惧されました。しかし貴重な伝統芸能を何とか保存継承しようと、昭和五〇年に松丘地区無形文化財保存会が組織され、松丘小・中学校で希望者を集め、後継者の育成に努め、成果をあげました。その後、昭和五六年に大戸見の片野地区で、翌年に名殿、利根地区で神楽保存会が結成され、現在では八月の第一土曜日（以前は八月二〇日）の稲荷神社の祭礼に二組の神楽を奉納できるようになりました。この二つの保存会を合体して、大戸見の神楽保存会として保存継承に務めています。

また、稲荷神社の大戸見の神楽奉納とは直接関係ありませんが、平成二六年から、巫女舞（みこまい）が演じられています。聞くところによりますと、この巫女舞は近くの神社祭礼に、関東地方の神社に所属する、巫女さんにより奉納されていました。これを保存会の会長が、地域振興・祭礼活性化を目的に依頼し、巫女の協力を得て実現したそうです。

（「大戸見神楽保存会」）

巫女舞

小糸川の浚普請（さらえぶしん）

河岸は上流から間並（西猪原村）、中野（市場村）、清水（市宿村）、川崎（大野台村）、鎌滝・沢巻・長谷堂・長和田・深井・駒久保・塚原・行馬・根本・大井・東前（中島村）、長泉寺（大井村）、籾山・練木・原、大下（中島村）、三直・六手、松川（常代村）に設置された。舟持と用水水車組合との間ではしばしば紛争が起きたため、天保六年（一八三五）用

水留切水車組合と舟持組合との間で用水水車に関する取決めを交わしている（「留切水車設置願」綾部家文書）。川舟の遡航を可能にするよう川縁村々の竹木の伐払いや川浚いが幕府代官の命令で行われた。通船水流幅は川上の猪原村から原村・六手村までは六間から八間、曲り角一〇間、それから杢師村・久保村までは八間から一二間、さらにそれより下湯江村辺りから川尻までは一三間、曲り角一五間と定め、以後この水流幅がなければ浚普請を行うことを取り決めていた（「小糸川浚御触書控」山口家文書）。

（『日本歴史地名大系千葉県の地名』平凡社）

人見妙見様の尊像　（人見）

むかし、むかし、おおむかしのことだがな。

おらが村には、住む人もあんまりなくてな、たった二軒しかなかったんだとよ。そのな、二軒のおやじはな、太右衛門という人とな、市右衛門という人だったとさ。

妙見大菩薩〔青蓮寺蔵〕

ある時にな、この太右衛門がな、野原の草を刈っているとな、その少しさきの草むらの中に、なんだかわからねえが、ピカピカ光っているものがあったとよ。

太右衛門は、おそるおそるそばへ寄って、草をわけて見るとな、それがな、ありがてえ、ありがてえ、妙見の尊像だったとさ。そんでな、太右衛門は、いそいで市右衛門のとこへとんでいってな、

「市右衛門どん、どうすんべ、どうしたらいかんべ」と相談したとよ。

「ありがてえ妙見様だから、あのまんまにしておいてはもったいねぇ。どこか、たかきゃあとこん、祀るべぇよ」

「きっとな、おらぁの守り本尊だよ、大事にしべえな」

といって、二人はこの妙見様のおすがたをな、あの人見山のてっぺんに祀ったんだとさ。

それがな、今の人見の妙見様だって話さ。

そしてな、妙見様のおすがたを、みつけたことをばぁ、今でもな、「妙見かくし」といってるでよ。

ありがてえ、ありがてえこんだ。

（『西上総民俗誌』中嶋清一）

刀村正ふいご跡　（鹿野山）

むかし、相州鎌倉の刀工岡崎五郎入道正宗は、弟子の貞宗に家督をゆずり、隠居して諸国遍歴の旅に出立、巡り巡って上総の国の名山鹿野山へやって来た。神野寺と白鳥神社に詣でてから、見晴らし台に立って、春霞たなびく九十九谷の谷々を見おろした。すると、九十九谷の山のひとところから、トンテンカンと鍛冶の槌音が聞こえて来た。

「これだけの槌の打てる金匠（ママ）なら、土地の守護地頭にも召しかかえられて然るべきであるが」と考えながら、正宗はハタと膝を叩いた。「村正だ。村正でなければ、これだけの槌の打てるはずがない」さすがは正宗。故あって破門したわが弟子、村正の打つ鍛冶の槌音を見破ったのである。

〔Webページ〕

正宗は、山上のはたご屋大塚屋に宿をとり、毎日、見晴らし台に来て、その槌音に聞きほれていた。ある日、トンテンカントンテンカン　カーンという槌音が響いて、鍛造の音がピタリと止まった。槌音は、すべて陰陽の法則にかなっていたが、残念なことに、最後のとどめの一打ちにみだれがあった。

あくる日、正宗は、「鍛冶山の金匠どのに届けてくれ」と一通の書を、大塚屋のあるじに託して、飄然（ひょうぜん）として立ち去った。宿のあるじの届けてくれた手紙の封を切って、村正はびっくりした。まさしく師匠正宗の手紙である。手紙には「とどめの槌」の秘法がこまごまとしたためてあった。村正は、はじめてとどめの槌の秘伝をさとり、遂に刀鍛冶としての奥儀に達したのである。

九十九谷の鍛冶山からは今でも、金屎（かなくそ）が出て来るという。

（『君津風土記』人見君太郎）

かにの恩返し　（西日笠）

君津市西日笠に延命院長久寺というお寺がありました。お寺の北がわには、小糸川が流れていて、上流に「かにが渕」という深いよどみがあります。この「かにが渕」のあたりは川岸が切り立ったがけですが、がけの中ほどに岩屋がほりこんであり、ここに「かに山権現」という石のお宮がまつってあります。石宮は延享五年（一七四八）に建てられたもので、年月日と「かに」の形が彫刻されてあります。ここに、このようなめずらしいお宮をおまつりするようになったのは、次のようなお話があるからです。

かに山権現

むかし、この西日笠になさけ深いお金持ちがいました。他人に親切で、とても動物をかわいがり、お地蔵様を信心して、いつも「延命地蔵様」と声に出して唱えていましたので、村の人は「延命長者様」とよんで尊敬していました。

延命長者には、かわいい女の子が一人いました。この女の子も親によくにたやさしい心の持ち主で、とくに川や渕にいる「かに」をかわいがり、村の子どもたちが「かに」をつかまえてらんぼうな遊びをしているのを見れば、お金と引きかえに買い取って、もとの川や渕まで持って行き、「もう安心だからね。気をつけてお帰り、二度とつかまらないように、

あぶない所には出て来るんじゃないよ」と、やさしく言い聞かせては、静かに放してあげているのでした。

ある日のこと長者は、この一人むすめを連れて、鹿野山にお参りにでかけました。いくつか坂をこえ、いよいよのぼり道にさしかかったとき、道ばたの草むらの中で大きなへびが、きじをまきこんでじりじりとしめつけ、首をもたげて今にも飲みこもうとしていました。かわいそうに身うごきもできないほど強くしめられ、目をとじたままのきじは死ぬのを待つばかりでした。

〔Web ページ〕

これを見た長者は大へびに向かって、「そのきじをはなしてやってくれないかえ、ここは、お寺のある山ではないか、弱いものをいじめないでおくれ」と、たのみましたが、

このへびは、

「せっかくつかまえたきじだ。いやだよ。はなすものか」

と、ますます強くしめつけようとします。

長者は、われをわすれて思わず、

「そのきじをはなせば、かわりに、この子をお前にくれよう」

と言いました。それを聞いたへびは、とぐろをゆるめてきじをはなしてやり、するすると草むらの中に消えて行きました。そして、あぶないところを助けてもらったきじは、うれしそうに鳴いて鹿野山の方へ飛び去りました。

さて、月日がたって何年か後、長者の子どもは年ごろの美しいむすめになりました。

ある日のこと、ふだん見かけたことのない若者が、長者をたずねて来て、とつぜん、

「あなたのむすめをおよめにもらいたい」と言い出しました。しかし、どうも話しかたやようすがおかしいので、あやしく思った長者は、

「せっかくだが、ことわる。どこのだれともわからぬ男に、だいじな一人むすめを、よめに出すことはできない」と、きっぱりことわりました。

すると若者は急に顔色を変えて、

「いつかあなたは、鹿野山に行くとちゅうで、わたしに、お前がそのきじをはなせば、その代わりにわしのむすめをやろうと言ったではないか。今になってその約束をやぶって、ことわることは、承知できない」と言いながら、長者にとびかかろうとしました。

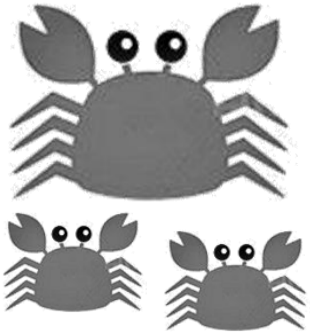
長者は「はっ」と思いあたり、この若者が、あの時の大へびの化身であると気がついたので、追いはらおうとしましたところ、若者の目はつり上がって大口を開け、頭の毛をさか立てながら、むすめのへやへ入りこもうとしました。

さあ大変です。家じゅうが大さわぎになって、この若者の入るのを止めようとしているすきに、長者はむすめを連れ出してお堂の中にかくして、いつも信心しているお地蔵様をお

がみつづけていました。

若者は姿をかえて、たちまち大へびとなってお堂をまきこみ、口から赤いほのおを出して、人々をよせつけません。

そうこうしている内に、ふしぎやふしぎ、どこからともなく大きな「かに」が出て来たのです。つぎつぎに、はさみをふり上げながら大へびにたちむかい、とうとうへびの体を切りきざんでしまって、お堂のなかのむすめを助け出してくれました。



長者は、これはきっとお地蔵様のおかげにちがいないと、ここに長久寺というお寺を建て「へびづか」を作り、いのちがけでむすめを助けてくれた「かに」のために「かに山権現」と言うほこらを建てて、朝ばん感謝のお参りをおこたらなかったということです。

（『西かずさ　昔むかし』）

野村の旦那と平六　（市宿）

市宿村の秋広平六（一七五七～一八一七）は、農村生まれの冒険商人として有名である。市宿村では、馬鈴薯を平六芋と呼ぶ。この平六が若いころ、伊豆大島から久しぶりで故里へ戻って来た。正月なので、年賀の礼を兼ねて土地の分限者、野村様の屋敷をおとずれた。

そこで野村の旦那に、「どうしたら金持ちになれるか」たずねてみた。平六があまり熱心にたのむので、「あすの朝、妙善寺の六つの鐘が鳴ったら、台所へやって来い」と言ってやった。

翌朝、台所へ行くと、「その井戸から、つるべ桶で、四斗だるへ水をくみこめ」と旦那に言われた。平六が、いくら水をくみこんでも水がたまらないので、ふっとのぞいてみると、四斗だるは底が抜けていた。それでも夕方まで、ガラガラ、ザアッと水をくみ続けた。

清水河岸（野村家集積場）〔木曽野家蔵〕

野村の旦那は、「今日は日が暮れたから、またあす来い」と言った。

翌朝も妙善寺の六つの鐘を合図に、野村さまの台所へ行くと、また水をくめという。ヒョイと平六が四斗だるをのぞくと、やれ嬉しやチャンと底がある。喜び勇んでつるべに手をかけると、今度はつるべ桶に底がない。それでも、我慢をして、底のないつるべ桶で、朝から夕方まで早春だというのに汗を流して水をくんだ。

今日の四斗だるには底があるので、底の抜けたつるべ桶から、タラタラとしたたり落ちるしずくがたまって、夕方になると、四斗だるの底に五チセン位の水がたまった。

旦那は平六を座敷に招いてこう言った。

「金を儲けてもナ、使ってしまえば底のない四斗樽と同じだ。ところが、四斗樽に底があれば、底のないつるべ桶でくみこんでも、いつか、つもりつもって水がたまる。……わかったか、平六、金持ちになるには入って来たものを出さぬに限る」。平六は豁然（かつぜん）として金持ちになる秘訣を悟った。

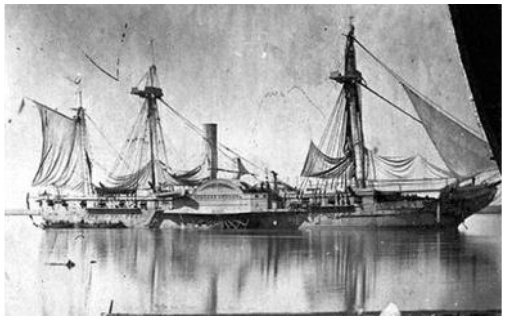
（『君津風土記』人見君太郎）

黒船来航

（周淮郡）

弘化三年（一八四六）、東インド艦隊のヴィンセンス号とコロンビア号が江戸湾浦賀沖に来航し開国を求めたが、幕府は「新たに外国の通信通商を許す事堅き国禁にして、許さざる事也」と回答して退去させた。うちつづく二百数十年の平和で、すっかり武を忘れた武士達が、つもる塵埃（じんあい）を払った武具に身をかため、陸続と小糸の原を通って西へ向かった。われわれの祖父母のそのまた祖父母達が、この有様を見て鹿野山に登り、そこから噂にきいていた黒船を、驚きの念をもって遠望していた。そんな物語を年寄から聞いて覚えている人もまだ多い筈である。

嘉永三年（一八五〇）になると、老中阿部伊勢守から外艦渡来に関して、国民一般にその心得について触書があり、また一般から請書を徴した。その大要は、「近来外夷横行、このままにしておけば、日本の国威にかかわり、厳重の取り計らいに、及ぶ場合もあるであろう。万一戦闘に及ぶとも不覚のないよう、士民一体となり、各々その分に応じ、報国の心得を以て、沿岸防備に心を尽くすべし」というのであった。



蒸気船外輪フリゲート艦ミシシッピ号
〔Webページ〕

嘉永六年（一八五三）六月三日、ペリー提督率いる米艦隊が、浦賀に来航した時は、水野筑紫守が海岸を巡検した。その時の様子は、多数の兵士の通行、織るがごとくだったそうである。ペリー帰国後、老中阿部正弘は、ペリーの再来航に備え、開国か攘夷かの意見書および、黒船退治案を諸大名ばかりでなく、百姓・町人にまで広く募集した。幕府が目下の者に意見を公に聞くなど、幕府始まって以来のことだったようで、幕臣たちの動揺がうかがえる。

当時の世相を風刺した狂歌に

「泰平の眠りを覚ます上喜撰（じょうきせん）
　たった四杯で夜も眠れず」がある。

お茶の銘柄「上喜撰」を黒船の「蒸気船」に。お茶「四杯」を黒船「四艘」に掛けた狂歌。国内が騒乱した状況をうまく表現している。これらはまさに開国へと続く序奏だった。

（『小糸町史』他）

袈裟の質入れ　（常代）

幕末には色々な世相があり、庶民の生活もさまざまだったが、お寺の坊さんも裕福なくらしをした人もあったが、反面結構貧乏ぐらしの人もあった様である。

ここに紹介するのは、君津市のあるお寺の坊さんが、大事な商売道具である袈裟を質屋に入れてしまい、旦家の葬式ができたというので、その葬式当日だけ、一時貸してもらいたい、と質屋に頼み込んだ手紙である。坊さん本人は、大まじめの真剣な手紙であるが、何ともユーモアに満ちた話で、自然とほほえましくなる。恐らくすべてを達観し、物事にこだわらない大物坊さんであろう。

江戸時代、幕府はキリスト教を厳禁したため、すべて仏教に入信させ、一般庶民は全員どこかの寺に登録させた。旦那寺に所属し、旦家として、「宗門人別」の中に加えられていた。幕府は仏教を公許の宗教として大切に保護し、大きい寺には寺領を与えていた。「御朱印状」といって将軍の朱印を押した証文を授与したのである。立派なお寺はそれ相当に寺領を持っていたし、従って坊さんも格式が高く、それなりに見識のある指導者だった。

しかし、さしたるお寺でもなく、旦家の数も少ない場合は、坊さんの生活も大変だったと思われる。さらに中にはお酒の好きな坊さんもいたろうし、世に「テラ銭」という言葉もある様に、お寺がバクチの場に使われ、坊さんも仲間入りして、お金に困ったかも知れない。

この文書を、今の文字に書いてみる。

一筆啓上仕候、向寒之節ニ相成候處、貴家様并御家衆中、倍増、御安泰之由、奉珎喜候、然者、近頃御無心之至リニ御座候得共、拙寺旦家、村方忠左衛門母、病死仕候間、貴殿方江、御預ケ置候、七条、御拜借仕度、何レ今日、夜ニ入候得者、早々御かえし置候間、何卒此段、偏ニ御聞、可被下候、先ハ用々斗リ、余者与平方ヨリ萬々申上候、早々以上

十月十九日　　宮下村

〇〇寺　㊞

常代村

藤右衛門様

便宜上、お寺の名は、〇〇寺としておくが、今はこのお寺は、他のお寺に合併して、廃寺となっている。手紙の宛名の藤右衛門は代々名主の家で、副業として質屋をやっていた。

また、この文書には、月日は書いてあるが年号がない。しかし、関連文書があるので幕末の安政二年（一八五五）のものであることがわかる。簡単にこの手紙の内容を紹介する。

手紙をさしあげます。寒さに向かう季節になりましたが、ご一家皆様、ますます御安泰でお喜び申しあげます。

さてお願いで相済みませんが、私の寺の旦家である村うちの忠左衛門さんの母親が病死、そのお葬式がありますので、お宅へ質入れしてあります袈裟を、一時お借りしたいのです。今日お葬式が済みまして、夜になればお返し致します。どうぞ、このこと御承知くださいます様、まずは用事だけ申しあげました。その他のことは与平から申しあげることに致します。

以上の様な文面で、文書の中に「七条」とあるのは、僧衣の一つで、袈裟のことである。与平とは寺男か、近所の人であろう。この手紙を持たせて袈裟を借りにやった人かも知れない。

（『西上総の史話』菱田忠義）

五二日間の大旅行

（久留里大谷）

今の旅行は、交通機関の発達により、国内はもとより海外へも気楽に行くことができます。しかし、江戸時代までは、ほとんど足まかせだったので、大変苦労されたようです。

〔Webページ〕

ここでは、安政六年（一八五九）に大谷村（久留里大谷）の朝生八郎兵衛、半兵衛の二人連れが五二日間をかけ伊勢神宮、金毘羅様、善光寺などを参拝した時の道中日記により、その足跡を辿ってみました。

【富士を経て伊勢へ】

六月一一日　午前九時、大谷村を出立し、木更津から船で神奈川宿に行く。

六月一三日　大山子安宿を出立、大山不動尊さらに小田原の道了尊を参拝し、矢倉坂泊。

六月一四日　須走より富士登山にかかり、午後一〇時頃八合目の室に泊まる。翌一五日朝七時頃頂上に到着した。

六月一七日　安倍川は洪水のため四人掛かりのれん台で、次の大井川は八人掛かりのれん台で渡る。

六月一八日　浜松泊、二〇日宮泊、

二一日　桑名着、二三日伊勢着、小林太夫様へ泊。

六月二四日　伊勢神宮に参拝。

【高野山を参拝し金毘羅様へ】

六月二五日　伊勢を出立、名張をとおり二七日奈良に着き春日大社を参拝。

六月二八日　高野山に到着、翌日高野山内詰所を参拝して回る。

六月三〇日　高野山を出立、七月一日堺の妙国寺や大阪の天王寺などを参拝。

七月二日　大阪川口から、船で四国の丸亀に向かうも暴風のため途中で停泊し、七日の早朝丸亀に入港。荷物は茶

店に預け金毘羅宮を参拝し、山内の諸所を見学して下山する。

【丸亀から善光寺へ】

七月八日　丸亀を後に備前岡山に向う。

七月一一日・一二日　姫路、明石見物。

七月一三日　京都西六条着。

七月一四日　京都見物し瀬田唐橋泊。

七月一六日　関ヶ原を越え、翌日、馬籠宿に到着した。

七月二一日　信州松本の御城下を見物し、翌日善光寺に参拝する。

【善光寺から江戸を経てわが家へ】

七月二三日　上田にて真田帯四筋(四本)を買い求め小諸泊。

七月二四日　小諸を出立してから大雨となり安中宿泊。

二五日　暴風雨のため足止め。

二六日　安中宿を出立したが前日の暴風雨で道が荒れ、高崎・藤岡・本庄・深谷・熊谷を経て二八日やっと上尾に到着。

七月二九日　上尾出立、江戸橋着。

八月一日　午前八時より芝増上寺、京極金毘羅宮・桜田門、諸大名屋敷、神田明神、湯島天神、浅草観音などを参拝見学し、午後九時船で木更津へ向う。

八月二日午前一時頃木更津に着いたら、親戚や知人などが多く出迎えに来てくれた。まず、見性寺に、無事帰宅の報告を行った。家には多くの人々が帰宅見舞いに来てくれたので、酒飯を差し上げ、めでたく帰宅の祝儀をすませた。

陸路だけで今のJRを利用しても、一七〇〇㌔もの距離を旅したことになります。

（「君津いまむかし」君津市史編さん委員会）

女食村の話　（大戸見）

君津市の山間部にあたる上総地区に、大戸見という所があります。小櫃川をさかのぼるように走る久留里線に乗って、木更津駅から約一時間で一二番目の無人駅、上総松丘に着く。駅から進行方向に歩いて曲がりくねった坂をのぼると、ここが見はらしのいい三本松公園のある大戸見です。

大戸見は、明治七年（一八七四）一一月に蓮見・女食（おなめし）・谷向（やつむかい）・九兵衛・片野・田面（たも）・七郎兵衛・八郎兵衛・細野・網場・切畑（きりはた）・四町（しまち）という一二の村が、ひとつに合わさった村の名で、それから松丘村となり、上総町とかわって、今は君津市大戸見といいます。ところで、大戸見村になる前の、一二の村の中で何と読むのかわからない村や、人の名のような村の名前があることに気がついたと思います。そこで、その内のひとつだけ、「女食」について、お話しましょう。

むかし、まだ村に名前がなかったころ、このあたりに「三

郎」と「さく」と言う若夫婦が住んでいました。この夫婦はなさけ深くて他人に親切で、正直者でよく働きましたが、どういうわけか子宝にめぐまれませんでした。二人は朝ばん、神社におまいりして、「神様、どうか私たち夫婦に子供を授けてください。お願いいたします」と、熱心においのりを続けました。その真心が神様に通じたのでしょうか、赤ちゃんがやどりました。

でも、一年たっても二年たってもなかなか赤ちゃんが生まれず、三三か月たった三月三日の梅の花がさきにおう晴れやかな朝になって、ようやく元気な泣き声とともにまるまると太った男の子が生まれました。願いがかなえられた両親は大よろこびで、さっそく「梅丸」と言う名前を付け、それはそれは、かわいがって大切に育てました。

梅丸は、すくすくと成長して早くも七才になりました。両親は元気に育った梅丸の手を引いてお礼まいりにでかけました。お宮の前には女郎花（おみなえし）の花がかざってあり、そのそばには羽衣を着た美しい天女がすわっていて、両親に向かって、

「この梅丸は、大きくなったら世のため人のためになるという役目を持って生まれた子ですから、お坊さんにして苦しんでいる人やこまっている多くの人びとを救わせなさい」とお話しました。とつぜんの事ですから、両親はびっくりしましたが、

「ありがたいお話だ。このうえもない一家のめいよだ」と、よろこんで梅丸をお寺にあずけました。

梅丸は名を福蔵と改めて、いっしょけんめい修行を始めましたが、両親のよろこびもつかの間のこと、福蔵はちょっとした病気がもとで帰らぬ人となってしまいました。がっかりした夫婦は、親に先だったわが子のめいふくを願って、ここに福蔵寺というお寺を建てました。そして、福蔵寺のある村を「おみなえし村」と言うようになりましたが、年月がたつうちに、いつしか「おなめし村」と、よび名が変わってしまい、「女食（おなめし）」という当て字で書くようになったということです。

なお、元禄（一六八八～一七〇四）のころ、九兵衛村は片野村から、七郎兵衛村と八郎兵衛村は、谷向（やつむかい）村から分かれた村だそうですが、めずらしい村の名前ですね。どうして、このような村名が付けられるようになったか、いろいろ想像してみてください。　（『西かずさ　昔むかし』）

ソロリに手を出すな　（貞元）

飴の商いにはそれぞれ得意先が決まっていた。なじみの人達と情報交換をしながら商売をしていたようである。平日でよく売れたのは漁師町で、桜井・大堀・富津・大貫へ天秤棒でかついでは、それぞれの得意先へ出かけて行った。

斎藤粂五郎、通称ソロリは明治一一年（一八七八）生まれ

で、祖父は医者で馬に乗って往診していたという。孫の粂五郎は幼少の時から骨接ぎを学び、戦時中は腕のいい田舎医者として、遠くからリヤカーや大八車に乗せられて患者が治療に来ていた。鼻筋の通った彫りの深い顔は子供心に本で見た外国人のように見えた。筆者も小学校の時に足の骨折でお世話になったが、診てもらうことが楽しみであった。戦後病院へ行くようになったが、触診にもかかわらず、レントゲンと全く同じで評判になっていた。この家でも年寄りや女房が飴を作り、骨接ぎの合間に粂五郎は大貫方面へ商いに行っていた。口調はおだやか、歩くのもゆっくりでソロリ、ソロリとあるくので、ラッパの音を聞いて、「ソロリがきたよ」と、皆さんが集まって来て、買ってくれた。

〔Webページ〕

いつものように、大貫の海岸へ来ると、遊び人の若い衆、数人にとり囲まれて、金の工面を強要されたのである。応じなかった粂五郎に業を煮やしたのか、遊び人は飴箱を取り上げようとしたのでたまらない。粂五郎は天秤棒で即座に三人を薙ぎ倒してしまった。二人は逃げたが、何事もなかったかのように倒れている三人を尻目に、飴箱を担いで時々ラッパを吹きながら家並みの方へ歩き出した。粂五郎には柔術の心得があり、当然棒術も達人であったという。

遠くからこの様子を見ていた漁師達は驚き、大騒ぎとなった。「ソロリには手を出すな」人は見かけによらぬ。まさにこのことである。筆者も母親が大貫の出身であり、子どもの頃に母の生家に行くと、慶応生まれの祖母からよくこの話を聞かされた。「ソロリはまだ丈夫でいるかい」。昭和二六年逝去された。享年七三歳であった。

（『貞元地域誌』）

「かったかった」と言ふ行事　（人見）

昔より、妙見祭は毎年七月二二日に施行した。祭典には大堀より神輿、大和田より剣、二間塚より錦の旗、青木より獅子が参加した。

明治二一年（一八八八）頃より大堀の神輿は、浜の弁天様前から担ぎ始め新道を通り、当時人見橋が無いので小糸川を担いで渡り、「こり取り場」より上陸して、山下鳥居前に鎮座して休憩となった。是を、交代して人見若連が担ぎ、石段を登り頂上に至り拝殿前に安置する。式が終わると人見の若衆が頂上を担いで、時間になると神輿を頂上に納め、人見の若衆は下山して大堀連に伝える。大堀の若連は石段をかけ登り、頂上の神輿を担いで石段を下り、元の道を大堀に戻るのが昔の祭典であった。

ところが、今より八〇年前の事。其の際、大堀の神輿が人見連中にさんざんと乱暴された。これが喧嘩の元となり、翌年より大堀の神輿は、妙見様の祭礼には参加しないと断って

きた。そこで、血気盛んな人見連は、参加しなければよいと、早速相談して神輿を新調したと言ふ。

それ以来、妙見様の喧嘩のお祭りとして、人見橋を境に昭和の初期まで続き、人見と大堀の神輿の間で、喧嘩のたえることがなかった。この関係から明治時代まで、人見と大堀の若衆が毎年、年越しには、山からモウソー竹を中心に大木を切り出した。これを人見橋の両岸に立て、周囲に村中より集めた「わら」を高く積みあげる。年越しの晩に火をつけ、火炎が高くあがった方が勝ちという新しい行事につながった。このかけ声が「かったかった、人見がかった。大堀が負けた」と、勝った方がはやし立てたことから、この行事を「かったかった」と呼ぶようになった。

妙見様の祭り（石屋の前）〔漁業資料館蔵〕

そんな行事が明治時代にあった「かったかった」の行事の由来である。

（「人見老人会」川名邦五郎）

水車の思い出　（坂畑）

いまは亀山ダムの湖底になってしまったが、山神社の下に米搗き用の水車があった。村の人は車屋と呼んだ。神社から四〇〇㍍位のかなり急な坂道（通称車屋の坂）を下りきった、笹川の支流のすぐそばに、明治三三年（一九〇〇）一〇月二三日に、約五㍍位の落差を利用し、四つの臼を取り付けた水車が動きはじめた。

〔Webページ〕

修繕の時以外は年中無休で、終戦直後まで回り続けた。遠い家は約二㌔もあるところを、背負いはしごで米を搗きにきたのだから、家の臼で搗くより、はるかに能率的であったことがうかがえる。

大きな水車、回転軸も軸受けもすべて木製で、ときには軸受けに種油をやって、回りをよくした。水の量が少なかったり、油ぎれでもしようものなら「キーバッタンバッタン」と、大きな音を立てて道往く人を驚かせたり、また、なつかしさを与えてもくれた。

一株の家は一日中、半株の家は半日使うことができて、子どもの頃は母親に連れられて箕（み）やとおしをもって水車小屋へ行ったものである。ときには、夕飯を食べてからカンテラをさげて、うす暗い夜道を一緒に行ったこともある。一日に二俵くらいしか搗（つ）けなかったが、途中で糠取りをするくらいで、あとは家でほかの仕事ができたのでたいへん便利であった。

杵の落ちるところへ、杵のすっぽりはいるくらいの、わらでつくった輪をいくつか重ねて、搗けのいいように仕掛けてあったことや、水車の力をうまく利用できるように四つの杵が順に落ちるように工夫されてあったことなど、子どもの頃であったが感心させられた。

わずかな期間であったが三番組が中心になって棒谷に小型の水車を作ったこともある。

（『笹生活史』）

白駒芝居　（白駒）

明治から大正にかけ、「白駒芝居」で知られる中村駒十郎一座というのがあった。駒十郎は芸名、本名は笠島長次郎で、もと下総の人である。生まれつき芝居好きで、小糸の白駒に流れつき、ここで、田舎歌舞伎の一座を結成した。駒十郎は市川千車の話を聞くと、さっそく一座に招いた。女房も三味線をひきながら、間をつなぐ義太夫で一座をもりたてた。この一座には千車の外に鯉之亟というのがいた。他国からの流れ者で、女房は床山であった。一座として興行して廻るには、どうしても一四、五人いなければならない。足らぬ人数は北多摩方面から雇って来た。そうしてだいたい一年の半分を上総・下総、時には安房にも出かけて芝居をつづけたのである。これを人々は、最初の旗あげ地に因んで「白駒芝居」と呼んだ。

〔Web ページ〕

明治四四年（一九一一）、この白駒芝居が、小糸の長石で三日間の興行を打ったことがあった。勧進元は長石区で、舞台は「よばたけ」と呼ばれる畑の中に丸太を組んでつくられ、周囲には蓆（むしろ）をたらした青空劇場である。出し物は「義経千本桜」二段碇知盛（いかりとももり）外二つであったが、千車の知盛が評判をとった。木戸銭は無料で、篤志家から纏頭（てんとう）が出る。一円寄付すると、金百両、どこそこ、誰々様と、いちいち半紙を何枚もついだのに書いて貼りだすから、何となく景気がよい。

二日目、客もぽつぽつ集まりはじめるころ、雷を伴う夕立があった。集まった客は、近くの下谷や馬場谷などの家々に駆け込んで、台所の土間も軒端も厩（うまや）のひさしも木小屋も人で埋まるというハプニングもあったが、とにかく三日間大入り満員だった。地元の芝居好きも、捕り手などに扮して「ヤアヤアヤア」と達者な芸を見せていたという。その後も根本・大月・高原等で興行がつづき、昭和に入ってからも塚原・福岡等で、この白駒芝居の興行があった。

（『小糸町史』『君津風土記』）

唐人凧　（六手）

第二次大戦の初期の頃までは、北風の吹く冬空、南風の吹く夏空には上総・天羽両地区の処々に、「唐人凧」が勇壮な

姿・形で妙音を響かせて住民を楽しませたものです。この凧は上総の国特有のもので、均整の取れた独特の形の凧で、頭部の強力な弓に張った「うなり」の音色が、変化に富んだおもしろい音をし、その一小節が、外人（唐人）が早口で喋っているのに似ているところからつけられた名称だと言われています。

凧の作り方は、竹で作った骨組に茨城県でできる、丈夫な西の内という和紙をはり、頭の楕円の部分に家の紋を、下の部分には細長く図案化した「竜」という字などを墨で書くことが多い。凧やうなりの作り方はなかなか技術がいるので、凧屋という専門家もあった。唐人凧は大人たちにとって非常に魅力があり、しばしば凧上げ大会を開き、何かと金と暇のいる道楽の一つで、家財の傾く場合もあったという。

唐人凧〔すなみふるさと誌〕

その構造は、弓の大きさで寸法を表します。標準は、通常三尺六寸（約一㍍一〇㌢）で、凧の全長は約一一尺五寸（三㍍四五㌢）。真竹で弓を作り、割れないように全体に麻を巻き、中骨は大名竹で弾力のあるものに。竹ひごを組み合わせて麻で縛る（約三五〇ヶ所）。形を整えて日本紙（西ノ内）で貼る（二三枚）。頭部に太さ七寸位の円を書き中に家紋。胴から尾に「龍」や「寿」等の文字を書く。書く墨は、紙ににじまないように、たんぱく質の液（大豆の煮汁）等で、墨を溶かしたもので書く。

空に上げたときに、紙の貼り方、骨の強弱などで凧が左右に傾いたり、大きく移動したり、満足なうなりが出なかったり苦労します。技術的にはなかなかむずかしいものですが、風の強弱によって「うなり」を強く張ったりゆるめたり、又中糸目を調節して角度を変えて、何回も上げたり、下したりして楽しみながら試上し、満足な「うなり」が出たら上空へ送り上げたものです。なお、唐人凧には「しっぽ」が綱約四〇㍍に布を二箇所吹流につけます。

現在の若い人々には想像もつかないものですが、周南の空に再びあの勇姿、妙音を浮べ響かせようと、ときどき上げて試しています。（『周南部落誌』「鹿野山歴史とその周辺」）

電気が無かった頃

（山高原）

山高原に電気が点いたのは、昭和二四年だそうです。我家は事情があって、その後も暫らくローソクと、石油ランプの生活が続きました。夕方、作木の車屋さんの電気が点くと、羨ましくて、「なぜ、家には電気が点かないのかしら」と、子供心にも不満に思ったものです。今でも物置の隅には、その当時のランプが埃だらけになってぶら下がっ

〔きみつアーカイブス〕

ています。今すぐにでも十分使えそうな、そのランプを手にすると「あんな事もあったなあ」「こんな事もあったなあ」と、子供の頃が懐かしく思い出されます。そういえば、ランプの掃除も毎日のように手伝いました。小さな手をホヤの中に入れ、器用にスス（油煙）を拭き取ったものです。風の強い日には、家の中でも、ランプの炎が揺れて、壁に映った自分の影でさえお化けのようで、恐ろしくてたまらなかった事もありました。

母屋とは別棟にあるお風呂に入る時は、提灯を掲げて行き、その灯で入りました。風の強い日や雨の日は灯が消えてしまう事もありました。そんな不便さもあってか、お風呂は暗くならないうちに入ってしまうのが常でした。夕食も日が長い夏場は庭に置縁を出して、明るいうちに食べたことを覚えています。

夜は、うす暗いランプの下で、母は良く衣類の繕いをしていました。たまに使うアイロンは、炭火を入れてその熱を利用したもので、煙突のようなものが付いていました。私はその側で本を読んだり、着せがえ人形ごっこをしたりして過ごしました。そんな時のランプの灯は、とてもやさしくて暖かい感じがしました。　（『すなみふるさと誌』山高原の巻）

船大工の仕事　（人見）

人見浦には戦前、カリヤ（仮屋）を持つ船大工が三軒あったが、戦後、三軒増えて六軒になった。

Ｓさんの家の仮屋は、中橋の近くにあった。Ｓさんは、高等小学校の高等科を卒業した一五才の時から、徴兵検査まで、青木（富津市）の船大工で見習いをした。見習いは、鋸を引くことから始まった。一人前といわれるようになるのは、徴兵検査後だったが、実際には、一〇年の経験が必要と言われていた。難しい墨付けが出来るようになるには、一〇年かかったからだという。昭和二六年から、埋め立てが決まった三六年まで、父親に代わって棟梁となり弟子二人を使い仕事をした。

仮屋：イメージ〔Web ページ〕

仮屋は横二間（約四㍍）・長さ五間（約一〇㍍）、梁までの高さは七尺五寸ぐらいの大きさであった。この仮屋で作った船は三種類。

☆三人乗りのハエナワ（釣り縄）漁船：長さ二五尺・幅四尺三寸・板の厚さは（仕上がりで）一寸。

☆二人乗りのテグリ（打瀬網）魚船：長さ三〇尺・幅五尺八寸・板の厚さは一寸二分。

☆一人乗りの海苔採り船：長さ一五尺・幅三尺・板の厚さは七分。たまにはハシケ（平田伝馬船）を造ったが、こ

れは当時、Sさんしか造れなかったという。帆柱は、長さ六㍍（四尋・一尋＝五尺）・太さ一〇㌢角だった。

船の値段（戦前）は、テグリが一九五円、上等なもので二〇〇円。ハエナワはテグリの七割ぐらいで、海苔採り船は一〇円だった。船材は、船体に使う主なものは杉で、ほかにヒノキ（檜）やカヤ（榧）の木が使われた。舵やコベリ（網などを揚げるところ）には、アカカシ（赤樫）やケヤキ（欅）が使われた。杉は地のものが堅くて、曲げるときの粘りがあり持ちがよかった。特に鹿野山のものは大変良かったという。

（『周西地区民俗調査報告書』）

鹿野山の「夜祭り」　（鹿野山）

鹿野山には、毎年七月八日の「夜まち」がある。この日は近郷近在から若者が沢山登山し、神野寺では本堂でお護摩が焚かれ、夜の法要が営まれる。山の賑わいもまた格別で若者や娘たちの出会いの日ともなっていた。鹿野山は山上集落であり、門前町であり宿場町でもあったので、民家はいずれも中廊下のいわゆる旅館のような造りだった。

この夜まちの晩はほとんどの民家で座敷を解放し、出会いの場を提供していたという。この日、縁あって結ばれた者が、翌年の花嫁祭りに、お礼の登山ともなればめでたきかぎり。「夜まち」が「花嫁祭り」を生み、今年の「花嫁祭り」が次の年の「花嫁祭り」を生んだ。いつ頃から若者や娘たちの出会いの日になったのか、わからないが、民家が座敷を解放して出会いの場を提供したのは、江戸時代から受け継がれてきた、門前町の心意気だったのだろう。

今では、ゴルフ場やマザー牧場が開設されて、観光レジャーの地となっているが、実は江戸時代に於いても、この地は特殊なレジャー地帯として、関東中に知られる次のような一面もあった。

神野寺を中心にして上町、下町と二つの門前町が出来上っているが、江戸時代の春祭、夏祭には、上町、下町すべての民家の座敷が賭博場として開放された。関東一円の親分衆が集まって来て、民家を借りて賭博を開いた。五〇戸ほどの民家があかあかと灯をともして、夜通し丁半博打をやった。これは鹿野山の夜祭りと呼ばれ、関東三大博打場の一つと云われていた。

〔Webページ〕

鹿野山は、徳川家康以来の御朱印地で、一般町方の役人などが手を入れることが、できなかったので、夜まちの晩は公然と、博打を開帳することができたのである。ただし、秋元村の代官根岸又一郎だけは、夜祭り取締りと称して町内を巡回した。又一郎は代官手代に十手と提灯を持たせ、小者に金

棒を曳かせて、ジャラーン、ジャラーンと山内を見回った。各民家で賭場を開いている親分衆は、又一郎の行列を見ると、お伴の代官手代の袂に金包みを投げこんだ。この金が一晩でおどろくほど大きな額になったという。

樹齢何百年という杉林にかこまれた山中の町で、昼のごとくあかあかと灯をともして博打が行われていたのだから、たしかに壮観であったであろう。これだけの大博打が行われても、血なまぐさい事件は一つも起こらなかったという。

（『君津風土記』「君津いまむかし」）

鹿野山の「花嫁祭り」　（鹿野山）

鹿野山は古く聖徳太子の開山といわれる神野寺があり、御本尊の薬師如来と軍荼利（ぐんだり）明王のお徳が高く、広く御利益があるといわれ、参拝客が絶えなかった。

毎年、四月二八日は鹿野山白鳥神社の祭礼で、一般に「花嫁祭り」の名で呼ばれている。この日はむかしから近郷の夫婦がそろって参拝する風習があった。特に祭りの日までの一年間の新婚夫婦は結婚式当日と同じか、またはこれに準ずる盛装をして、結婚のお礼と安産祈願、災難よけのため参拝したのでこの名があった。当日、神野寺でもこの若者たちにゴマをたき、守り札を授ける厄除けの行事があったという。

花嫁祭りの由来は、日本武尊と弟橘媛の睦まじさにあやかろうとするものといい、尊は頼もしい男性の代表、媛は貞婦の模範であり、夫婦愛の理想実現をこの伝説に託したと説かれている。日本武尊に符合したその説明は、尊の伝説がいかに強い精神的影響を与えたかを明らかに示しているが、本来の花嫁祭りの意味はどこにあるのだろうか。

花嫁祭り

花嫁祭りと呼ぶ祭りは、県内にも県外にも各地にあるが、花嫁市（はなよめいち）といっているところもあることからすると、花嫁を競って求めようとする意味が、こめられているようであり、それは、歌垣に似た要素があるのではないかと思う。歌垣とは「歌かがい」のつまった語で、「歌掛け合い」を意味するとみられている。それは古く豊作を祈る目的から、神が示現すると考えられていた神聖な山頂とか大樹の下とかで、互いに和歌をたたかわせたものであるが、それが次第に豊作の実りをもたらす神秘な力と生殖崇拝が結びつき、人間の性的結合をも付随するようになった。そして未婚の男女が公認の時と場所で和歌の手合わせをし、歌で異性を征し配偶者を決め、同時に夫婦であることを社会的に公認してもらう集団的行事にまでなったといわれている。古くから歌垣の際の名歌が万葉集などに残されているが、盆踊りなども本来は歌垣の系統から出ている

のではないかとの説もある。

鹿野山の花嫁祭りに歌をたたかわせる風習はないが、花嫁市と呼ばれている花嫁祭りがあること、この日に新婚夫婦が祭りに参加し、社会的な公認を求める感を与えること、春の季節に行われること、鹿野山という山頂の聖地で催されることなどを総合すると、歌垣の名残ではないか。また「成田山に夫婦連れで行くと不動様がやきもちをやくので御利益がないが、鹿野山へは夫婦連れで行くものだ」といわれているが、これも花嫁祭りや歌垣の潜在意識がいくらか反映しているとみられそうだ。　（「鹿野山歴史とその周辺」平野馨）

泉のザル　（泉）

竹や笹には、六〇年に一度花が咲き、実がなって枯れるという性質があります。その上、その枯れ方が異常で、絶滅状態になることから「竹の皮で編んだ履物は使わない」とか「竹箸は縁起が悪い」とか言われています。

しかし、私たち日本人にとって、竹は昔からとても身近な植物でした。もともとは「竹は古代から、無限の繁につながるものとみられ、人の世に解釈して、万代を契るものとして喜ばれた。そして、神の依代として、神招きの祭具として、神事に欠かせぬものであった。この事例は、記紀・万葉の時代に培われ、継承されて、今日の正月の松飾り、七夕、地鎮祭の笹竹など、神域の標と神の依代として、竹はその主役をつとめている」と、言われるように、神聖な植物でしたが、時代とともに、日常生活としても欠かせないものになってきました。

江戸時代に入ると、子供の玩具の材料としても、多く利用され始め、凧、小弓、竹馬、笛、弓矢、豆鉄砲、紙鉄砲、水鉄砲、竹トンボ、たが回しなどがあります。日常生活品としても、竹針、桶のたが、ザル、からかさ、釣竿、うちわ、竹かご、さしこなど、数多く利用されてきました。この竹の名産地の一つに、小糸川流域があります。うっそうとした竹藪が、家の裏庭や山の所々に茂っている風景は、まるで「舌切雀」の雀のお宿を見るような感じがします。なかでも、鹿野山の北麓の泉と、東麓の市場は、今でもザルを作っていることで知られています。

今から七、八〇年前の泉は、ザル屋が軒を並べ、「六手のむしろ、泉のザル」と言われるぐらいにさかんだったということです。部落九〇戸のうち、ザルを作る家が五〇戸、その他の家も竹伐りとか、その集荷や販売に関係していて、村中いたるところに、竹の置き場や竹の削り屑が、散らばっていました。この泉にザルの製法が伝わったのは鎌倉時代で、鎌倉から追われた流人によるとも、安房里見の落人が泉に流れてきて住みつき、製法を伝授したとも言われています。そのいわれと、当時のようすを、故増田重衛氏はこう言っています。「昔、泉の土地は、上総掘りで井戸水が利用できるまで

は、あらかた畑で、それも、重粘土質で仕事に骨が折れ、収穫も思うようでなかった。それで皆が、自然にザル作りに精を出し、それを天秤の両鼻につるして、望陀・天羽から市原・夷隅・安房まで振売りに出かけた。そのさきざきで、てんでに口から出まかせの由来話を、もっともらしく創作した。それで、いろいろ由来話ができたわけだ。（中略）その頃の村の者たちは、こうして稼いだ金を、すぐバクチですってしまい、だから働いても働いても、いつも貧乏だった」。

竹ザル

泉のザルは、ほとんどが二斗ザルで、材料は女竹を使っています。孟宗竹や真竹は、まとまった竹藪になっていますが、女竹は雑木山や樫木山に自然に生えていて、どこの山から伐ってきても、誰にもとがめられません。馬登から鹿野山、法木山系の山々にはこの女竹がいくらでも生えていました。この泉のザルも、昭和に入ってからは、だんだん需要がおとろえてきましたが、第二次大戦中に一度、とてももてはやされたことがありました。

戦争中、日本軍は、中南支からインド、マレーシアと東南アジア方面で戦っていました。兵隊は鉄かぶとをかぶるものですが、これらの国で戦っていた兵隊たちは、赤道直下の、ぎらぎらと照りつける太陽の直射熱に、誰もが苦しめられていました。その時に、軍は鉄かぶとの上にザルをかぶせ、直射日光からいくらかでも防ぐことを考えたのです。そのザルをつくったのが、泉のザル屋たちでした。

ザルの注文は、陸軍からばかりでなく、海軍からもありました。軍艦で炊事に使う米とぎ用や食器入れ用、野菜入れ用などの注文です。値はよくありませんでしたが、それでもつくればいくらでも引き取ってくれたということでした。この戦争という異常な時代のもとでの繁栄が、泉のザルの最後でした。終戦と同時にその需要も絶え、その後は二斗ザルだけになってしまいました。

（『上総の民話』）

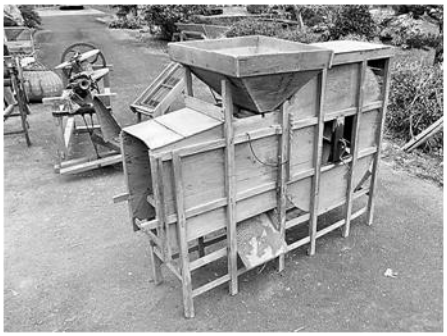
上総の唐箕

（久留里・松丘・亀山）

つい先ごろまで、唐箕(とうみ)は農家の宝だと言われた。唐箕は、手まわしの風洞選別器で、稲、麦、菜種などの脱穀した穀物の、実殻やごみを取り除き、さらに良い実、悪い実と三つの吹き出し口でより分ける。手仕事の多い百姓には、唐箕はなくてはならない農具だった。上総で生まれた唐箕は、上総の百姓が、工夫して作ったものだから、上総唐箕と言われ、選別の吹き出し口を三つに分け選別の能率をあげた。

戦争前までは、百姓仕事のかたわら、みんなで上総唐箕をつくって行商して歩いたという。関東はもちろんのこと、東北から北海道まで歩いたのだそうな。三、四人で組をつくり、

組み立てるばかりに、こさえた材料を背負って、農家を一軒ずつ歩く。話がまとまると、その家の庭先で、手早く唐箕を組み立てる。試運転してみせると、近くの農家の人らもやってきて、「ほおー、ほおー」と声をあげて、唐箕をなでまわしていた。買った家では、唐箕のきまりの代金のほかに、米だとか酒だとかも礼だと言って、わたしてくれたもんだったそうな。



上総唐箕

戦争が終わって、唐箕も物不足で材料を集めるのが大変になった。行商して歩くと、宿賃で足を出したから、外交屋が一人で注文取りに歩く。話がきまると、それっと、ばらしてある唐箕をかついで、組の者が出かけていく。だが、お上（かみ）は物の値段をおさえたし、クギなどの金物もなかなか手に入らねえ。そんで、生産組合をつくった。そしたら税金だとか、仲間内のいざこざだとかも出てきはじめて、組合は解散になった。

そんでこんだぁ、仲間で会社づくりをしたが、こんだぁ新聞が脱税とさわいでよ、会社もうまく行かなかった。それでも、上総唐箕をほしいという農家が、遠くから注文してくる。そんで、もう一度上総唐箕組合をつくって、唐箕づくりをした。唐箕はよう売れて、つくっても、つくっても、まにあわんかった。

昭和四〇年ごろ、千葉に川鉄の工場がやってきたころから注文が減りだしたな。減反だの、作付けの転換だのと騒がれて、政府が農業をおさえ工業に力を入れてから、稲や麦の作付け反数が減りだした。唐箕は、農家の納屋に投げこまれたもの。

昭和四五年に組合がまた解散して、今じゃあ上総唐箕は、つくり手はいのうなった。それでも、麦を選別するには、唐箕が一番だ。上総亀山の鈴木清さんは、いまでも一人で上総唐箕の改良に精出していると、百姓も自動機械が入ってきてるだから、唐箕も手まわしでなく、モーターをつけたんだそうな。工夫したら、電気洗濯機のモーターが使えるんだと。捨てられた電気洗濯機のモーターをとりつけた上総唐箕は、よくまわって値段も安いのだと。

麦づくりには唐箕が一番だから、清さんは、また百姓が麦をつくりはじめたら、上総唐箕が入り用になるといって、いまも工夫を忘れていないのだそうな。（『上総の民話』）

明治の農村　（君津郡）

明治時代の君津郡下の農村の人々は、まことに純朴なもので、寒中でも足袋をはく人はまれであった。お百姓さんが木更津の町へ出る時は木綿じまの着物を着て、「尻はしょり」

をして菅笠をかぶり、足には脚絆を巻き、素足のわらじばきであった。

学校の先生と警察官以外で、洋服を着ている人はなかった。少し財産のある旦那衆になると、羽織を着て、毛布のまん中に紐をつけて、それを外套のかわりに着て歩いた。女の人は、外へ行く時は「おこそづきん」をかぶり、嫁に行った人は、子どもができると眉毛を剃り、お歯黒といって、歯を黒く染めたものである。娘さんは、桃割れ、銀杏返し、島田などの日本髪を結い、人妻になると丸まげという、日本髪を結った。きものは、すべて手織木綿で絹のきものを着るのは、地主の旦那か、その奥さん位であった。大地主となるとかなり高収入があったもので、年貢米（小作料）として毎年三〇〇俵から二千俵の米の入ってくるような豪家が、一つの村に二軒か三軒はあった。仮に千俵の年貢米が入るとすると、今の価格にしてざっと年収八〇〇万円である。

農村風景（昭和の頃）〔漁業資料館蔵〕

小作人は、地主の家の玄関から入ることを許されず、裏口から頭を下げて出入りしていた。凶作でお米のとれない年には、「きりひき」といって、年貢米を負けてくれるよう恐る恐る地主の旦那に哀願したものである。生活が苦しいので、子どもを何年いくらという前金を受取って、東京へ年季奉公に出す人もあった。「小作人は、かえると同じで、自分の子を喰っている」。これは、その頃の小作人のいつわりのない嘆きの言葉であった。

（『君津風土記』人見君太郎）

西上総の方言　（鹿野山）

ふるさとのなまりなつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

この歌のように故郷をなつかしさのあまり、駅に出かけていった気持ちは作者石川啄木ならずともわかる。

ふるさとのなまりーふるさとの方言は、京葉工業地帯の造成・開発・発展のかげにかくれ消えようとしている。

県立木更津高校郷土研究部調査資料により、鹿野山周辺地区の方言にじかにふれてみよう。

「ヨノナカモ、カアッタモンダネェー、アノヒレエウミガ、ウンメタテラレテ、イマジャーエントツカンハ、モクモクトクレエケブガデテ、ダンプカーハ、ツンパシルシ、ヤマンホ

久留里線の思い出〔戦時下の 60 年史〕

ウジャ、ダンチユウモンガデェイテ、ヒラケルシ、ココイラヘンガ、モトア、カタイナカダンナンテ、テンデカンガエラレエネエー、ダケッンガ、マチガハッタツスンノハイッケンガコオガイダ、ナンダカンダト、スミズレエニナルンジャネエカト、ソンダケガシンペィダアー」

これは「世の中も変わったものですね。あの広い海が埋めたてられて、今では煙突からモクモクと黒い煙がたちのぼり、ダンプカーは暴走するし、山の方では団地が出来て開けるし、ここがもとは片いなかだったのはとても考えられません。ただ町が発達するのはよいのですが、公害だ何だのと住みづらくなるのではないかと、それだけが心配です」ということである。

古語は方言に残るともいわれているが、それと思われる「クッチャー」ということばがある。それは蝮（まむし）のことで、蛇の古語クチナワから出たことばであろう。西上総の他の地では蝮のことを「ヒトクレエ」「ヒトシライ」と呼んでいる。また、「おたまじゃくし」「ひきがえる」は、それぞれ「フータン」「フータンゴ」であり、他の地域では「フグタン」「ゲェーロンコ」「アンゴ」「フンアンゴ」などといっている。そして、蛙は「アンゴ」といい、大佐和、君津、富津などの各地では、ほとんど「ゲェーロ」である。

「けんかぐも」は鹿野山周辺においては「ホンガネ」といい、富津・君津地区は「カンキ」、木更津市井尻・平川・根形地区は「ホント」、天羽地区は「ホンキ」、富津町川名・篠部・旧大貫町では「フンチ」といっている。

また、鹿野山周辺地区では次のような特徴が考えられる。座敷が「ざしい」、書く→かう、いくつ→ゆうつ、どこへ→どへ、ここへ→こへ、この所→こんとろ、それで→そんで、ないけれど→ねっけんど、今のところ→いまんとこ。といったように、子音のK音、子音母音のK音の脱落、ラ行がンの音に、ナ行がンの音にかわっている。

一〇年前、西上総のある農村の中学校の進学父兄会に出席したことがある。その際、ある私立校の創立者某氏が、自校の内容を、ふたことみこと説明しだすと、今までこわばっていた父兄の顔が、急にときほぐれ笑顔の中に聞き耳をたて始めたのを覚えている。某氏の言葉はその土地のなまりあることばであったからである。

方言―これは単に地域語であるばかりでなく、生活に密着した生活語であり、飾り気のないふだん着のことばである。方言には私たち祖先の血が流れており、方言は祖先の心情にあふれている生き生きとした感情表現である。

（「鹿野山歴史とその周辺」中嶋清一）

小糸川舟歌　（久保）

富久橋の出来る前の事。橋の少しかみの久保に立派な水車があり、川を止めて久保の原へ水を揚げていたので、川向う

に行くには釜神橋を渡るか、渡し船、あるいは細い橋でした。急ぎの時は、誠に困ったことで駅まで歩むのは苦労でした。たまに止めた水を切る日には、上から木炭、薪をたくさん積んだ川舟が何隻も揃い、他に材木を沢山つらねたイカダの勇ましい掛声で、その風景は、何ともたとえようがなかった。

私は、川の端でタキギ取りして居たので見る事が出来たです。久保の水車は有名で、各方面から見学に来たようです。私も飯野小学校の四年生のときに、歩いて初めて見学に来た場所で、皆さんが驚いたのは、水の音で何も聞こえないことでした。ただ恐ろしかったのみです。

久保南陂水車〔君津・富津の昭和史〕

舟方唄

色は黒くとも
大堀海苔はよう
白いマンマの
ぺぺとなる

（内房線・青堀・大堀海岸一帯）

色が黒が磯部の海苔は
白い御飯の肌さ抱く
アーコラショよいこらしょ

と小糸川舟歌を歌いながら、

色が黒で貫いてなけりゃ
鹿野山の鳥は皆な後家か
アコランショよいこらしょ

小糸川舟唄とは、大正九年頃まで小糸秋元から竹や木材を筏に組んで流したり、川舟と言って底の浅い舟に米・炭を積んで河口の河岸に降ろしたり、空船に日用品などを積んで小糸川を引き揚げたりする時に、船頭さんが唄ったもので、今は君津舟唄として残っている。

（北川ちか）

漁業　（人見・大和田・坂田）

☆漁と風

天候についての知識は、ほとんど親たちから伝えられたものが多く、中には体験的に知った知識もあった。天候について最も気をつけなければならないのは風の向きや性質である。特に漁と関係し、その風が「怖い」とか「怖くない」とかいい、体験的に自分の身を守る知識として誰もが持っていた。ナレイ（北風）やカンダチ（雷）、冬季のシュウテと呼ばれる風は特に恐れられた。「カンダチ時は海が荒れる」といい、「シュウテが一番怖い」とされ、そんなときに出漁すると命にかかわるものとされていた。

人見浦に吹く風は、春から夏は南風が吹き「ミナミ」といい、秋から冬は北風か北東風が吹き「ナレ（ナライ）」といった。この北風には「ミ（実、強い力）」があると警戒した。

特に警戒した風は東南風の「イナサ」と北西風の「サガ」と呼ぶ風だった。

☆魚介類の習性と漁

魚はその生態に即して、「浮き魚」「底魚」という区別がある。カレイやキス、メゴチは底魚、イワシ、コノシロ、スズキは浮き魚である。これらを捕獲するには、それに適した漁業方法及び道具が作られることになる。また、魚には「寄り魚」と「根魚」という区別もある。寄り魚はイワシやサワラと言った回遊魚で、季節的に村近くに現れるものである。根魚というのは、アイナメ、メゴチといった海底に生息する比較的移動性の少ない魚をいう。魚は産卵期になると沿岸の浅い場所にやって来るという習性を持つ。更に魚には「夜行性」と「昼行性」という行動パターンがあるので、目的の魚によって漁の時間を都合しなければならなかった。

☆漁季

漁季は大体春の彼岸頃から、秋一一月一杯位まで、昔は寒中でも出漁したらしい。毎日、夕方出船して、日没頃、目的の漁場に着き、日没と同時に網を入れる（漁師は西明りの消える頃を「まづめ」と言って、此の時間帯が一番魚のとれる時間だと言った。明まづめは、この反対時間）。一回の網の曳き時間は大体一時間半位だが、その時の状況に依って多少時間に違いがある。

☆漁場

漁場は沿岸の浅場を瀬ノ上と言い、水深二尋か三尋位から、沖は千葉県と神奈川県の中間にある「中の瀬」と言う水深一二、三尋から二〇尋位の間で、盤州から横須賀の勝力の鼻を見通した線の南側で、此の地域は富津の潜水業組合の専用漁場で魚の豊富な地域だった。

☆潮などの知識

潮の満ち引きは旧暦と密接な関係を持つ。潮の満ち引きの周期は、「潮回り」といわれ、月の満ち欠けに応じて、月に二回、ほぼ半月ごとのサイクルで変わる。潮は、若潮・中潮・大潮・中潮・小潮・長潮と変わりこれを毎月二回繰り返す。この一回ごとの潮の動きが「潮回り」で、新暦採用後も、旧暦に基づいた独特の数え方をした。釣り漁では上げ潮と下げ潮に関して「アゲシヨ七分、オトシヨ三分」といういい方がある。この時間帯に魚がよく釣れた。また、海苔養殖や、採貝業に携わる人たちにとっては、この潮回りは特に大事だった。とくに潮の大きく引く日が歓迎された。

潮の流れも重要で、特に網漁のテグリでは、潮の流れが、網の流れの向きと一致した場合には「網の流れの具合が良かった」逆の場合は困ったものだ。潮はまた、四季を通じた変化もあり、それらも経験的によく知られている。秋から冬にかけては「昼間より夜の方が引く」ので、海苔養殖の人びとは、昼間の作業では、浅い場所のノリサクで海苔採り作業をした。沖のサクの海苔を採るには、夜の干潮時に作業をしな

ければならなかった。

☆ヤマアテ

魚のよく集まるところを一般に「根」という。「魚は根に付く」といい、この「根」を探し当てることが漁を豊饒なものとした。海の上からはみえない「魚のつく根」を探し当て、漁場を特定する方法がヤマアテである。漁場での位置の確認は「山を見る」とか「山を合わせる」といわれるが、山だけでなく固定している目標物はすべて覚えていて使った。

☆簀立て・釣り船

昭和の初めごろ、坂田では漁師仲間六人で簀立てを行い、獲れた魚はイナが多く地元でも売ったが、大部分は木更津へ自転車に乗せて売りに行った。昭和二三年には二〇〇㍍ほどの簀立てを二カ所建て、獲った魚はポテで近所に売り歩いたり、木更津の魚市場へ出したり、魚屋に卸した。この簀立ては、坂田漁業協同組合の直営となり、観光用の簀立てとなって,三か所に増設された。人見では毎年入札で業者を指定し、入漁料を徴収する方法をとった。

（『はまっぺ』『周西地区民俗調査報告書』『君津市史民俗編』）

昔の坂田浦の潮干狩と地曳網　（坂田）

大正中期ごろから昭和の初めにかけて、春先の坂田の浦は、にぎやかな潮干狩が始まり、夏近くなると小型の地曳網が勇ましく行われた。

昔、坂田の浦は漁場も他より広く東京・横浜の向う地まで見渡された。また、岸からは遠浅で干潮時には、二㌔くらいも干上がり、潮干狩のよい漁場となった。春休みの、水のぬるむころになると、中村・周南村方面から農家の婦人たちが田股引（たももひき）姿で子供たちを連れ、荷車やリヤカーに篭、ザル、バケツ類を載せ、弁当持ちでにぎやかに坂田浦に集まってきた。このさまは、ほほえましく素朴な年中行事風景であった。この潮干狩が終わると、そろそろ苗代づくりが始まる。

潮干狩〔漁業資料館蔵〕

浅蜊（あさり）は今から思うと随分多くとれ、人々はあげ潮を合図に、海中まで曳き入れた荷車に獲物を満載し、三々五々家路に急いだ。この浅蜊などは夜の食膳をにぎやかし、あるいは目刺しを作り子供たちの栄養源に役立った。この浅蜊の味のよさは格別だった。また、干潮によって海水の引いた瀬スマやニラモには、石ガニ・小ジヤコ、潮におくれた小ダコなどもいて子供達の遊びにはこと欠かなかった。

夏場近くになると、神門地先の守さんという、年輩の体格のよい網元が経営する小型地曳網が、魚の多い坂田浦で行われ、一日二回くらい、総勢三〇人位で二隻の船に

分乗し、沖合で山見（漁場の様子をみること）をしてから、網を下しながら左右に分かれ、浅瀬の方に艪をこぎ、浅瀬に着くと下船して腰縄に網をかけて引く。思いのほかの大漁に湧くこともあった。そのころは魚も多く、近所の友達とこれを手伝った。半日以上も手伝うと、とれた小魚を土産にくれ、このほか漁の結果にもよるが手間賃として、子供の場合は二、三〇銭（当時、盛そば一杯の値段は六銭位だったと思う）ほどくれた。この手間賃が当時の子供にとってどれほど有難かったか言葉にはつくせない。

また、夏場には私達小学生は一日中沖で水泳、貝採りに興じ、飽きると手操船の太い繋ぎ網の廃品を使って、岸辺でにわか地曳きをやり、ときには二〇センチほどのイナを二〇尾くらいもとった。しかし、カニ以外は家に持ち帰った記憶がないのは、自分ながら不思議に思っている。

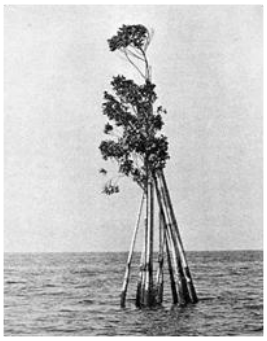
しかし、そのころの先輩の大人たち、そして遊び仲間もすでに世を去った人がほとんどだ。歳月の流れの早さと自分の老齢をしみじみと思う。私はこの地曳網のお蔭で海にしたしみ、艪をこぐことも覚え、また勤労の尊さを体験した。自分自身の体格作りにも大いに役立ったと思っている。

これらの記憶は遠い半世紀以上も昔のことであるが、今なおきわめて鮮明なのは自分でも驚いている。忘れ得ぬ昔の坂田浦の少年のころの思い出をここに記す。

（「はまっぺ」　坂井清治）

小糸川「川尻」の思い出　（人見）

漁場であった頃の川尻には、大きなミヨ棒が二組建てられていて、沖から帰って来る漁船が、この二本を目安に、航行して来ると、川にはいれる目標でもあり、海苔柵の場割にも、重要な役割を果たしていた。また、この川尻は、漁民に恐れられた所でもあった。北風をまともに受ける川尻は、浅瀬が、急に深くなるところだけに、荒波が打ちよせ、冬、海苔の期間中、川を使用する漁民は、風が吹き始めると早々に仕事をしまって川に入らないと、思わぬ難儀をする場所でもあった。だがこの川尻には、四季を通して色々な思い出がある。


ミヨ棒〔漁業資料館蔵〕

冬、海苔の期間中、大風が吹いて時化た翌日には、ケタをもって「拾海苔」に行くと、川のミヨ（航路のこと）で大量に収穫があったものだ。又、海苔の季節も終わりに近くなり、陽も暖かくなる春先、雨の少ない年には、ヒビにバカ海苔（春芽）が付き、思いもよらぬ海苔を採らしてくれたのも、この川尻である。

春になり、四月下旬から五月上旬にかけて、苗代フグ（お婆フグ）が日没後の満潮と、夜半の二、三時頃の満潮の潮時に、瀬際の浅いところまで、産卵に回遊して来るのを灯を照

らして捕りに行ったのも川尻だ。
夏は地曳網で、オキから三船だし「山合せ」に網を投じて、川尻で引き揚げると豊漁が度々あり、川口の沖合はアジ・サバ等が沢山いる場所でもあった。
秋は北風が吹いて海が荒れた日、夜中の干潮時にはコロバシ(魚取機)を持って行き、白波の立つ浅瀬を押して廻ると、カレイやコチ等大きな魚が沢山獲れたのもこの川尻で良き漁場でもあった。さらに大雨の降った時に満水となり、すごく荒れ狂う川尻も浮かんでくる。
今は、新日鉄君津製鉄所の海の玄関口として各国の船舶の出入りする港。これから先もっと変わるだろうかと思いつつ、昔の川尻を偲ぶ。
(「はまっぺ」白井勝雄)

昔し狐の嫁とり (人見)

私が四歳か五歳の頃なので多分七五年位前、私が母の懐にあった頃、その時分には狐にばかされた話を母からきいた事がある。
私の実家の東側に、六畳の隠居の部屋があり、其の部屋に父と母と子供であった私がいた。部室から見ると東は田畑で、三〇〇㍍位東のたんぼの中に、かえる町(今の日の出町)があった。それから二〇〇㍍位の処が高芝の松林、ここが狐の宿のあった処で、その下が小糸川です。この日の出町より高芝まで細い道の両側は田でした。
雨が少しふりだし、夕方日がくれてまもない頃、母は私に「狐の嫁取りだ、見ろ」と言ふのです。三尺の雨戸は、夏の事であけてある。座敷は細いランプのあかり、外はまっくらです。そこに日の出町より高芝の間に、提灯が一〇箇になったり、一五箇になったりして、少しずつうごいて歩いているように見える。それがかなりの時間あったように覚えている。この様な狐の嫁取りの姿を見るのは一回や二回でない。

狐火(広重画)

それが昭和の頃になってから一回も見た事さえない。土地が造成されたり人家も多くなったりしたことから、狐もたぬきもうさぎまでも姿が見えません。私の本家が大正八年頃より神奈川地先で養魚場を始めた頃も、養魚場に狐が魚を取りにきて困ると言っていた事も、すでに六〇年も前の事です。狐の足あとは犬や猫の足あととはちがうと云っていた。
(「昔話あれこれ」川名邦五郎)

海苔漁の思い出 (人見)

孫たちの前で昔はこうだったと話すと、よくお婆さんは、「昔、昔という」と笑われる今日このごろ。何かと忘れがちになりましたが記憶をたどりながらペンをとりました。
子供のころから非常時の時代に育ち、物資や食料など次第

に少なくなり、どんな苦しいことでもお国のためと耐えてきました。間もなく永い永い戦争が始まり、養父と夫を戦場に送り、幼子二人をかかえ、男たちにかわって海苔とりに百姓に夢中で働いてきました。

海苔仕事は朝の二時・三時に起きて海苔をつけ、夜の明ける頃、大簀（だいず）干しに一枚一枚、二人がかりでメグシを刺しながら干し、終わると子供を年寄にあずけ、鉄砲巻の弁当を持ってホラ貝のきこえる海にでました。

北風の強い日など川岸でたき火をかこんで「出るか、でないか」話し合ったものです。今日は時化かと思っているうちに、人見の人が出てくると「それ行け」と一斉に舟をこぎだしたものです。こんなときは休みにすればなあと思いながらほほを赤くして一生懸命になって海に出ました。

当時は着物をヒラヒラとなびかせ、腰巻まで見える服装でした。男たちに負けるものかと浜の女の強さを見せ、沖まで出て、腕まで冷たい水に入れて海苔をとりました。岸の方を見るとシガで真っ白です。水につけた手がいたくなるほど冷たくなると、舟のこべりに手をはたきながら採りました。欲も得もなくなり、帰りたくなることもしばしばでした。舟から小便をする時は大変でした。

かごの中の海苔が、少ないとくやしいので、右手で海苔をとり左手の突棒で舟をあやつりながら、弁当を食べました。干汐になって北風が強くなると、沖の大波にゆられながら川へ入ったものです。川に入ると浅くて、前の人の舟についてゆかないと、ちょっとのことで横に流され、水の中に素足で入り、むきをなおして、又舟にのりました。寒中でも汗をかき鼻の孔が二つではたりず、口をあけて息をした時のことは、筆には表せません。前後しますが簗立てになると、朝四時ころ弁当を背負って道具をつんだ、リヤカーの後ろについて行き、川岸で舟につんで海にこぎだし、胸まで水につかって仕事を始め、男たちにどなられながら一生懸命働いたものです。女のことで思うように仕事ができず、けんかになったこともあります。

人見浦の海苔漁〔漁業資料館蔵〕

大きなおなかをしていても、簗（ひび）立てを休むことができません。それでも子供は丈夫に生まれ育ちました。簗立てから上がると家事をすましてすぐ稲刈りにでて夕方はへトへト。こんなにしなければ暮らして行けなかったのです。夏は、百姓の間にあさりとりやウゴ拾いで小遣銭にしました。先祖からうけつがれた仕事、これが天命かと思いました。

忙しい中でも近所隣りの睦みは深く、毎日のように顔を合わせ語り合ったものです。埋立ての話がでた時、私達はつかれがでていたので、補償金の魅力も伴って海や野良にでない

奥さん家業をしたくもなったのでしょう。でも埋立てになった時、将来の生活に対する空想もしました。また不安もありました。幸い長男が日鉄に就職しましたが、工場のできるまで見習いとして、戸畑にいきました。君津製鉄所の建設がおくれたため、三年間もむこうにいました。一時はとりやめという話もあって心配したものです。

月日のたつのは早いもので、夢中の内に二〇年がたちました。妻として母として、子供たちが成長したいま、海苔を始めて浜を守りぬいた先代のお蔭で、良い世がきたことを感謝しています。海を捨てたことが無にならぬように、これからの人たちが益々頑張って幸せになるよう、老人として願っております。

「ありし日の　思い出語り　お茶をのむ
ねんぶつならう　友としたしき」
（「はまっぺ」守　あき）

イボ取り地蔵　（東日笠）

清和保育園入口の山際の土手に、半跏趺坐像丸彫りの立派なお地蔵さまが鎮座しています。右の手の錫杖は、欠けてしまってありませんが、左の手はしっかり宝珠を持っておられます。近くの人のお話によりますと、「最近は車の交通量が増えるに伴って、この辺は下り坂にかかる為か事故も増えてきました。時にはこのお地蔵さまに車をぶつける人もありますけどね。でもお地蔵さまが守ってくれるんでしょうねえ。大難に至らないですんでいるようですから…」。こんな話を聞きましたから、多分その時に、右手をなくされたのでしょう。身代わりに、なってくれたのかも知れません。

また或人は、「私が嫁に来た頃の話ですけどね、長女は生まれた頃、夜になると泣いてね。私が一晩中おぶって歩きましたよ。まあ、歩きながら考えましたね。毎晩これじゃあ、勤めの方にもさしつかえてくるだろうし、どうしたらいいもんかしらって…。そうしましたらね、おじいさんとおばあさんが心配してくれてさ、そんなに泣かれたんじゃ困るべいから、あのお地蔵さまにお願いしてみたらどうかえって教えてくれたもんで、私ゃ夜中に線香を一束持ってお願いに行ったですよ。そっで帰って来たらまあ驚きましたね。あんなに泣いてばかりいた子がさ、ぴったりと夜泣きが止まちゃったですからねえ。有り難い地蔵さまですよ。この頃はね、随分イボを取って貰いたいってお願いに来る人がいますよ。お線香をあげてお願いすると、本当に落ちっですってから不思議ですね。だからこの辺の人はイボ取り地蔵なんて呼んでますねえ」。

この地蔵さまは、平安中期以後閻魔王の本地仏で常に六道を廻って衆生を救い、極楽に行けるよう力を貸してくれると

言われていましたが、近世になって民間信仰と結ばれて広まっています。元は保育園に近い所の草むらの中にもぐっていて、人目にはつかなかったそうです。ところが昭和三〇年頃だったそうですが、お祭り前に部落の道普請があって、いつもより丁寧に幅広く草刈りをしていったところ、思いがけない所からこのお地蔵さまが出て来たそうです。そこで誰言うとなく「人目に当たらないこんな所に、お地蔵さまを置いておくのはもったいない話だ。もっと広くて明るい所に出してやろうじゃないか」と、言い出したので、成程その通りだと皆意気投合したまでは良かったけれど、さて、どこへお地蔵さまを持って行ったらいいのか。

そこで、石屋さんが言いました。

「それじゃあ、道の向うの土手でいいぱ家の土地だから置いてもいいよ」。

すると、皆大喜びでお地蔵さまは、今の位置に納まることに二つ返事で決まりました。さあそうなると、そこまで運ばなくてはなりません。

「こんなうんてえものを、あじして運ぶだ」。

若い衆は頭を揃えて考えました。すると、石屋さんがまた良い案を出しました。

「そっじゃあ、おがぶって行ぐべよ」。

さすが石屋ですね。他の若い衆にはそれだけの力持ちがいなかったのかも知れません。そんなわけで、道普請が終わると石屋さんはお地蔵さまをおんぶして、土手まで運びました。皆でそこへ据え終ると、石屋さんが言いました。

「大仕事が無事に終わったから、家へ寄ってお茶でん飲んで解散にしべい」。

若い衆は、石屋さんでお茶を御馳走になって、気分良く帰っていきました。

一方、石屋さんも人一倍骨折りをしたり、ご馳走したりして、やはり気分良く床に着きました。ところがどうしたことなのでしょう。夜中になると、俄に発熱して四〇度の高い熱が一向に下がりませんでした。そこで三日目には遂に入院したそうです。医者もあれやこれやと随分検査をしてみたけれども、発熱の原因は皆目わかりませんでした。家族の人たちは心配が募るばかりですので、とうとう神のお力を借りることにしました。或ところへ行って拝んで貰ったところ、

「お宅では神さまのようなものを動かしませんでしたか」

と言われて、はっとしたそうです。

「はい、部落のお地蔵さまを道普請のときに広くて明るい場所へ運びました」すると、

「じゃあ、それですね。元の場所へ帰りたいって言っていますよ。おはらいもしなかったんじゃないですか」

と、言われたそうです。それからすぐ神主さんを頼んで、場所を移動したわけを話してお祓いをして貰ったところ、今まで唸って寝ていた石屋さんの熱はうそのように下がってし

まいました。早速退院することになったそうです。それ以来八〇歳に余る今日まで病気一つせず、石屋さんの仕事をしていると聞きました。

このお地蔵さまには、宝暦一四年（一七六四）二月と刻まれていますので江戸中期から、もう二四〇年も東日笠の人たちを守り続けて来たわけです。いきなり運び出されたので、さぞびっくりしたのでしょう。それは三〇年余り前の話です。今はイボ取り地蔵と呼ばれて多くの人から親しまれているようです。

（『尾根は囁く』奈良輪美智野）

川びたりついたち　（馬登）

昔から一二月一日は「川びたりのついたち」といっておしることを食べる日だそうです。房総の山奥の村では、この日朝早くおしることを食べて、口のまわりにあんこをつけて、こっそりと川に行って、お尻をつめたい川の水にひたしたそうです。ところによっては「かーびたれ」とも言うそうだ。

この馬登の村にも、一二月一日には「川びたり餅を食べないで仕事に行ってはならない」という言い伝えがあって、色々な話もありました。川びたりのおしることを食べずに、畑や山仕事にいっても能率はあがらず、おまけに怪我をしたり、山道に迷ったりなどと謂われます。

ある村に、一人の若い木こりが居て、うっかり寝すごして、この木こりさんは、川びたりのしることを食べずに、山仕事にいったそうです。山に着いてみると、仲間はもう大分、仕事もはかどっていたので、夢中で仕事をし、大分仕事も出来たので、一服して居る内に眠くなって来て、ついうとうと眠ってしまったそうです。やがて寒くなって来て目を覚ますと、日は西に落ちて夕闇がせまって来ましたので、急いで帰り支度をしていると、若いきれいな女性が出て来て話もはずみ、御馳走を作ってくれたり、風呂が出来たので入れと勧められ、良い湯加減で歌など歌って良い気持ちになった所で、気が付いたら狐に化かされて居て、御馳走は馬糞で風呂は肥だめに入って居たそうです。だから「川びたりのついたちには必ずおしることを食べて仕事に行くものだ」と昔から謂われています。上総の山奥の古老から聞いた民話のひとこまです。

〔Web ページ〕

（『すなみふるさと誌』馬登の巻）

地名

『水と緑の君津ヒストリア』を作成するにあたり、地域の地名や場所の特性を理解することが不可欠であることがわかりました。そこで、町村合併の沿革、君津市成立までの経過をまとめると概ね次のとおりです。

・明治一一年（一八七八）一一月二日、郡区町村編制法の千葉県での施行により、行政区画としての周淮郡が発足。

・明治二二年四月一日、町村制施行により、周淮郡に一二村（波岡村・八重原村・周西村・中村・小糸村・三島村・周南村・貞元村・飯野村・青堀村・富津村・秋元村）が発足。望陀郡内に久留里市場村・吉野村・小市部村・大谷村・久留里・怒田村・浦田村・大和田村・富田村・愛宕村・向郷村・栗坪村・川谷村と寺沢村飛地、台村錯綜地が合併して久留里町。末吉村・山本村・台村・寺沢村・三田村・西原村・賀恵淵村・長谷川村・俵田村・上新田村・箕輪村・青柳村・岩出村・戸崎村が合併して小櫃村。大戸見村・広岡村・平山村・山滝野村・大坂村・加名盛村・大中村・利根村・柳城村・高水村が合併して松丘村。折木沢村・川俣村・豊田村・笹村・藤林村・滝原村・蔵玉村・黄和田畑村・草川原村・香木原村・坂畑村・釜生村・四方木村（現鴨川市）が合併して亀山村となり一町三村が発足。

・明治三〇年（一八九七）四月一日、郡制の施行により、望陀郡・周淮郡・天羽郡の区域をもって君津郡が発足。

・昭和一八年四月一日、八重原村と周西村が合併し、君津町（初代）が発足。

・昭和二九年三月三一日、君津町（初代）・周南村・貞元村が合併し君津町（二代目）が発足。

・同年一〇月一日、久留里町・松丘村・亀山村が合併し上総町が発足。

・昭和三〇年三月三一日、三島村・秋元村が合併し清和村が発足。小糸村・中村が合併して小糸町新設。

・昭和四五年九月二八日、上総町・君津町・小糸町・小櫃村・清和村が合併し君津町（三代目）が発足。

・昭和四六年九月一日、君津町が市制施行し君津市となり、郡より離脱。

伝説・伝承には、旧地名表記による話しが多々ある。従って、個々の話しがどの地域に該当するのか読みとることが難しい。活動を進めるなかで利便性を考慮し、本文と関連性がちかいと思われる、明治二二年四月一日の町村制施行で消滅した地名を収集し本書内に記録した。

内容は、現君津市の西部、小糸川流域全地区と、旧望陀郡（現木更津市）に属した君津市の東部、小櫃川中・上流地区より、周西村・貞元村・八重原村・周南村・中村・小糸村・秋元村・三島村・小櫃村・久留里町・松丘村・亀山村を取り上げ現住所、地勢・出来事・寺社などにまとめた。

周西（すさい）村

【合併地】人見・大和田・坂田・中野・久保・台、北子安・畑沢・下湯江の三か村飛地

【村勢】戸数四二二戸、人口二三五一人となり、村有財産も耕地八反、山林三町歩となった。

【村名の命名】初め、久保村は、八重原村に包含される予定の北子安村ほか三か村との合併を希望した。民家が北子安村に接続し、用水源である「天神堰」を共有している関係であった。これに対し村勢が小さくなることから、中野村・台村が異議を唱え、当局は双方に説諭を試みたが互いに譲らず、県の裁定に従うこととなった。県は、久保村は中野村側と合併すべしと、当時の郡長から出された上申書のとおり裁定した。村名は、かつての呼称「周西郷」により命名された。地名は現存しないが、旧村内の人見や坂田の建物名（周西中学校・周西公民館など）に残る。

人見（ひとみ）村　現：人見一～五丁目、人見

〔地勢〕小糸川河口右岸に位置し、北は江戸湾に面する干潟。

〔出来事〕天正一九年（一五九一）検地があった（守家文書）。文禄三年（一五九四）の上総国村高帳では高三〇〇石。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳では家数一〇九、幕府領と旗本早野・小笠原の二家領。上総海苔として、江戸で名声を得た海苔養殖は、江戸の海苔仲買人、近江屋甚兵衛によって、文政四年（一八二一）始められた。字山下には小笠原氏陣屋があった。元禄四年（一六九一）小笠原彦太夫より太刀一振りが奉納。

青蓮寺

〔寺社〕真言宗豊山派青蓮寺、寺領五石。人見神社は北方の海を望む高地に鎮座。寛政九年には小笠原兵庫により社殿が造営された。夏祭りには馬出と呼ばれる神事で賑わう。

大和田（おおわだ）村　現：大和田・西坂田二丁目

〔地勢〕小糸川下流北岸、人見村の東に位置し、北は江戸湾に面する干潟。ほぼ東西に房総往還が通る。

大蓮寺

〔出来事〕文禄三年の、上総国村高帳に、村名がみえる。寛政五年の上総国村高帳では、幕府領と福島領。嘉永七年（一八五四）の様子大概書上帳（大和田自治会文書）によると高一三三石余。年貢は、海岸から江戸へ海上輸送。農業の

ほか男は山稼・漁業、女は貝・藻採り。家数三七、人数二四九、馬一六。延宝五年（一六七七）南東にある、中富村と村境の芝野の麦畑を発端とする争論で、当村が敗訴となり、名主一名入牢、罰金が申しつけられ決着した。〔寺社〕天正二年（一五七四）僧大運の開基と伝える浄土宗大蓮寺。日吉（日枝）神社がある。

坂田（さかだ）村　現：東坂田一～四丁目、西坂田一～四丁目、坂田、君津台一～三丁目

〔地勢〕大和田村の東に位置し、北は江戸湾に面する干潟。房総往還が通り、北東の畑沢村（現木更津市）に向かう。〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高三六三石。寛政五年の、上総国村高帳では家数七六、旗本小笠原領と幕府領。寛保元年（一七四一）には、人見浦とともに、小笠原氏から地引網一帖を請負、運上金一二両を納めていた（『富津漁業史』）。〔寺社〕弘治二年（一五五六）僧隆賢の開基と伝える、真言宗豊山派長福寺。元和二年（一六一六）創建という八幡神社がある。

長福寺・八幡神社

中野（なかの）村　現：中野一～六丁目、東坂田一～二丁目、西坂田一～四丁目、南久保三丁目・台一丁目・中野

〔地勢〕人見村の東に位置し南を小糸川が西流する。〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高三二七石。寛政五年の上総国村高帳では、旗本小笠原二氏領。家数八〇、海防関係で交通量が増大する、寛政期以降助郷をめぐる争論が多発。中野村は房総往還の馬継場、周淮郡下駅として貞元村と共に触村だった。〔寺社〕文明二年（一四七〇）尊清の開基と伝える、真言宗豊山派長安寺と御霊神社がある。

御霊神社

久保（くぼ）村　現：久保一～五丁目・南久保一～三丁目、北久保一～二丁目、久保、高坂、台二丁目、東坂田一丁目、陽光台一～三丁目

〔地勢〕台村の北から東に位置し、南を小糸川が西流。〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえる。寛永年間（一六二四～四五）久保村と南東にある杢師村が溜池を造ることで、久保村の東に位置する北子安村が、自村の土地であると争いになった。

増光寺

寛政五年の上総国高帳では、高四五一石余、三郷の清水領と幕府領。文政一二年（一八二九）の農間商渡世取調書上（立川家文書）によると、家数四九、人数二四五、居酒二、質屋一。

〔寺社〕真言宗豊山派増光寺がある。大宮神社は社伝によると元禄三年（一六九〇）創建という。

台（だい）村　現：台一～二丁目・南久保一、三丁目・久保一丁目

〔地勢〕中野村の東に位置し南を小糸川が西流する。

大雲寺

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名みえる。享保二〇年（一七三五）の年貢皆済手形（坂本家文書）は八王子河野領で、年貢は米二六俵余。寛政五年の上総国村高帳では、高七二石余。家数二四、幕府領と旗本の河野・山本・志村の三家領。

〔寺社〕曹洞宗大雲寺は、天和二年（一六八二）新御堂村最勝福寺六世禅峰文悦の開基と伝える。

貞元（さだもと）村

【合併地】貞元・中富・小香・下湯江・上湯江・新御堂・杉谷・郡・八幡、中野村飛地

【村勢】戸数四九七戸、人口二五六一人となり、町村有財産は耕地三町八反余、山林一七町歩余となった。

【村名の由来】往古、江尻島と称したこの地で、清和天皇第三皇子貞元親王が死去した為、その名をとったと伝えることにちなむ。

貞元（さだもと）村　現：貞元

〔地勢〕上湯江村の東に位置する。

満隆寺

〔出来事〕天正二〇年（一五九二）検地があった。文禄三年（一五九四）の上総国村高帳には定元村とあり、高六五四石。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳では旗本高尾氏・神尾氏の相給、家数一一八。西側江川を隔てて対する中富村から、村境をめぐって訴えられ、寛文二年（一六六二）裁許状が出された。延宝二年（一六七四）再び裁許状が出され、川際に牓示（ぼうじ）を立て両村の境が定められた（中富自治会文書）。貞元村は房総往還の馬継場下駅として、中野村とともに触村であった。安政二年（一八五五）の大地震では小糸川の道が三〇〇間ほど地割れし、一〇軒以上が壊滅して八幡宮・寺院・民家三三軒の過半数が半壊した（鳥居家文書）。

〔寺社〕真言宗豊山派満隆寺と神将寺がある。寺伝によると、満隆寺は元慶年間（八七七～八八五）僧頼瑜（らいゆ）の開山という。神将寺は里老によると、もと硯箱硯文庫色紙石印文鎮石太鼓驛鈴等を蔵す。皆貞元親王の用いたものという。三船山麓（小香）に八幡神社がある。

中富（なかとみ）村　現：中富

〔地勢〕中野村の南方に位置し、小糸川が北側を西流し、同川の北側に飛地の伽藍（がらん）がある。

〔出来事〕天正一九年検地があり、畠野帳によると粟・きび・大豆・胡麻・木綿を植え付けている。文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高一八八石。天正一八年小笠原領。寛政五年の上総国村高帳では、飯野藩領と神尾領。家数五八。小糸川の蛇行した地域にあるため、近隣の貞元村・下湯江村・中野村と境をめぐって争論に及んでいる（中富自治会文書）。

石上神社

〔寺社〕寺伝で、寛文六年の開基と伝える曹洞宗富西寺がある。境内に小糸川の水害防止に尽力した、小笠原氏の家臣大草平内を祀る「日の宮様」がある。天正一九年の創建という石上神社は、小笠原氏の崇敬を受けた。

小香（しょうこう）村　現：小香

〔地勢〕上湯江村の東に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高一三四石。安永九年（一七八〇）一四七石余が旗本神尾領となる（天保一四年「知行郷村高帳」中富自治会文書）。寛政五年の上総国村高帳でも旗本神尾領、家数一八。

八幡神社

〔寺社〕八幡神社がある。

下湯江（しもゆえ）村　現：下湯江

〔地勢〕中富村の南に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高二〇一石。寛政五年の上総国村高帳では幕府領と旗本赤松・花村領。家数六八。小糸川は、元来中富村との境を大きく蛇行していたが、度々流路が変わるため、元禄一五年（一七〇二）中富村と共に川回しを願い出て宝永元年（一七〇四）に完成した。

法厳寺

〔寺社〕慶長一九年（一六一四）領主の赤松義利が、妻の供養のため

開創した浄土宗法巌寺がある。開基の雄誉霊巌はのちに浄土宗総本山京都知恩院の住職となり、将軍徳川家光に講義をした人物。真言宗豊山派宝蔵寺（もと宝蔵院、与楽寺を合併し大正二年改称）は高源の開基と伝える。明和元年（一七六四）開基と伝える春日神社がある。

※明治一七年（一八八四）油江村を合併。

⊙油江（ゆえ）村　現：下湯江

〔出来事〕寛文一二年（一六七二）の油江村運上新畑改帳（法巌寺文書）に旗本花村領として村名がみえ、元禄郷帳に下湯江村枝郷とあり、高五一石余。

上湯江（かみゆえ）村　現：上湯江

〔地勢〕下湯江村の東に位置する。下湯江村とともに、古代周淮郡湯坐（ゆえ）郷の遺称地。

〔出来事〕文禄三年上総国村高帳に村名がみえ、高四七四石。寛政五年の上総国村高帳では、幕府領と旗本赤松領。家数七二。明和八年三船山の、秣場地所割りをめぐる、争論の取替証文が出されている。

大宮神社

〔寺社〕真言宗豊山派貞福寺は、安政二年の大地震で倒壊し、現在の南の丘陵地に移った。新御堂村最勝福寺の末寺とみえる徳昌寺は、当地の徳常寺と考えられる。字宮田に大宮神社がある。

新御堂（しみんどう）村　現：新御堂

〔地勢〕貞元村の南に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえる。貞享二年（一六八五）最勝福寺に村内で朱印地四〇石が与えられた（杉谷家文書）。旧高旧領取調帳では、最勝福寺領四〇石・飯室領一九石余。享保一六年（一七三一）貞元村から、新御堂地内に貞元村の用水堰があったが、当村が埋立て開発を始めた。また貞元村の百姓持山から、当村の村人が勝手に木を伐り出したとして訴えられた（鮎川家文書）。寛政五年の上総国村高帳では高四五石余（最勝福寺領のみ）、家数一五。

最勝福寺

〔寺社〕曹洞宗最勝福寺は、弘治元年（一五五五）里見義弘により改宗したという。旗本赤松氏置・義利、明治二年（一八六九）に没した小久保藩主田沼意尊の墓がある。

杉谷（すぎやつ）村　現：杉谷

〔地勢〕新御堂村の東に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高二〇〇石余。寛政五年の上総国村高帳では幕府領・飯野藩領

と旗本土屋領・久保領。宝暦一三年（一七六三）常代・郡・貞元・八幡の四村と五ヵ村用水組合に参加した。

郡（こおり）村　現：郡

〔地勢〕杉谷村の南に位置する。

〔出来事〕永禄二年（一五五九）の北条氏所領役帳に「西上総氷郷」とみえるのは当地か。文禄三年の、上総国村高帳に村名がみえ、高七七〇石。寛政五年の上総国村高帳では、三郷の清水領と旗本水野領・同玉虫領。宝暦一三年五ヵ村用水組合に参加。地名は、律令時代に当地に郡家（ぐんが）がおかれた事に由来するとされる。

春日神社

〔寺社〕曹洞宗地福寺・真言宗智山派正福寺がある。正福寺には玉虫氏の墓があり、同氏より寄せられた香炉などを蔵する。春日神社は、永禄一〇年里見義弘が、三船山で小田原北条氏の臣太田氏と戦った際に戦勝を祈願し、戦後社領五石を寄進したと伝える。

八幡（やわた）村　現：八幡

〔地勢〕小糸川南岸、北で杢師村、東で外箕輪村・常代村、南で杉谷村、貞元村の東に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高二〇〇石。寛政五年の上総国村高帳では、飯野藩領と旗本青木領。家数一三。宝暦一三年常代・郡・杉谷・貞元・八幡の五村で、五ヵ村用水組合が結成された。宮下川を、宮下・常代両村の境で堰止めて、常代・貞元・八幡の三村を通すものと、常代から郡・杉谷の両村を経て貞元村に至るものがあった。

八幡神社

〔寺社〕八幡神社がある。

八重原（やえはら）村

【合併地】外箕輪・杢師・南子安・北子安・法木作・内箕輪・三直、久保村飛地、畑沢村飛地

【村勢】合併により戸数四五四戸、人口二三一六人の規模になり、村有財産も耕地約二町歩余、山林一〇町歩余となった。

【村名の由来】村名の由来は定かではないが、「八つの村」の合併が由来になったとも（実際には七村であったが、久保村を入れて数えたものか）。「原」は原野を開拓したところを意味する。

外箕輪（そとみのわ）村　現：外箕輪一～四丁目・内箕輪一丁目・法木作一丁目・外箕輪

〔地勢〕杢師村の東に位置し、南を小糸川が西流する。
〔出来事〕正保国絵図に外蓑輪村とみえる。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳では高七三七石余、幕府領と三郷の清水領。家数三三。内箕輪村と、字弁財天（内箕輪村）出水の水引慣行、溝の普請分担、八町谷原（はっちょうやはら）の帰属をめぐって争った。元禄七年（一六九四）裁許状が出され、用水を利用する当村の田地が、内箕輪村と法木作村の田地を合わせた面積より、かなり多いという理由から、当村に有利な引水が認められた。文政一二年（一八二九）の農間商渡世取調書上（立川家文書）によると家数七〇、居酒屋四・質屋一。
〔寺社〕貞享元年（一六八四）正慶開基と伝える真言宗豊山派延命寺がある。外箕輪村草創の頃の創建と伝える八幡神社（字辻）があり、江戸時代には延命寺が別当だった。

八幡神社

杢師（もくし）村　現：杢師一～四丁目・南久保二丁目

〔地勢〕南子安村の南に位置し、南を小糸川が西流する。
〔出来事〕天正一九年（一五九一）石原四郎右衛門の検地があった（鶴岡家文書）。文禄三年（一五九四）上総国村高帳には木師村。安政二年（一八五五）の村明細帳（鶴岡家文書）によれば、高三六一石余。家数五三、人数二六四、農間には自家用として男は筵・縄作り・薪木取、女は木綿糸取。秣（まぐさ）は百姓持山、薪は佐貫藩領鬼泪山で賄った。年貢米は小糸川を経て大堀村（現富津市）へ津出し、用水が不足がちで、南子安村の、溜池からの用水に頼っていた。
〔寺社〕真言宗豊山派東福寺。総鎮守八幡神社がある。

八幡神社

南子安（みなみこやす）村　現：南子安一～九丁目・北子安一丁目・同六丁目・南子安

〔地勢〕北子安村の南に位置する。古くは、北子安村と一村であったと考えられる。
〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高六七〇石。寛政五年の上総国村高帳では、高九二八石。元禄一五年（一七〇二）杢師村との間で用水争論があった。文政一二年の、農間商渡世取調書

子安神社

上（立川家文書）では家数八五・人数四六九、居酒五。

〔寺社〕真言宗豊山派空蔵院。子安大明神と称して大日如来を安置した子安神社がある。領主雨宮氏が元禄一五年から初穂米を供えるようになったという（『君津郡誌』）。

北子安（きたこやす）村　現：北子安一～六丁目・久保三丁目・北子安・北子安飛地など

〔地勢〕久保村の東に位置する。古くは南子安村と一村であったと考えられる。

〔出来事〕天正二〇年検地があった（北子安自治会文書）。文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高三二五石。寛政五年の上総国村高帳では、幕府領と三郷の清水領、旗本の安藤・窪田（久保田）二家・中村・萩原・原の六家領。文政一二年農間商渡世取調書上（立川家文書）によれば家数七七・人数四〇五、居酒二。

菅原神社

〔寺社〕真言宗豊山派秀明院（観音寺）。字天神山に正慶元年（一三三二）の創建と伝える、菅原神社（毎年一月流鏑馬神事）がある。

法木作（ほうぎさく）村　現：法木作一丁目・外箕輪三丁目・内箕輪一丁目・法木作

〔地勢〕内箕輪村の南に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高五五石。寛政五年の上総国村高帳では、旗本本多領と幕府領。文政一二年の、農間商渡世取調書上（立川家文書）によると家数二六・人数一一八、居酒三・髪結一・質屋一。

塞神社

〔寺社〕治承四年（一一八〇）源頼朝が松を植え、鎌倉開府ののち、「道祖神」額を納めたという、賽（さい）神社があり、境内に応永九年（一四〇二）九月九日の年紀を持つ六地蔵がある。

内箕輪（うちみのわ）村　現：内箕輪一丁目・外箕輪三丁目・法木作一丁目・内箕輪

弁才天・厳島神社

〔地勢〕外箕輪村の北東に位置する。北の下烏田村（現木更津市）から鹿野山道が入り、東の三直に向かう。九十九坊廃寺の近くに県指定史跡の鐘ヶ淵がある。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に内蓑輪村とみえ、高一七一石。寛政五年、上総国村高帳では三郷の清水領と幕府領。文政一二年の

農間商渡世取調書上（立川家文書）によると家数二八・人数一三六。髪結・質屋各一。鐘ヶ淵は江戸時代、近隣五ヵ村の用水で、里見氏と小田原北条氏の合戦で九十九坊が廃絶したとき、梵鐘が鐘ヶ淵に落ち、のち鎌倉建長寺に姿を現したと伝える。

〔寺社〕池の畔の字弁財天に厳島神社がある。

三直（みのう）村　現：三直

〔地勢〕法木作村の東に位置し、南側は小糸川に接する。鹿野山道が通り南方六手村に向かう。古代周淮郡三直郷（和名抄）の遺称地とみられる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高六四八石。寛政五年の上総国村高帳では旗本赤松領と幕府領。文政一二年農間商渡世取調書上では家数一〇一・人数四六九、居酒三・髪結二・煮売二。天明元年（一七八一）鹿野山道が、嶺岡往還の道筋の一つとされ、六手村とともに新規継場（中駅）とされた（立川家文書）。字新田の通称行人山に、出羽三山の行者の墓（行人塚）三九基ある。江戸中期から明治三年（一八七〇）までで、多数の集合は珍しい。三直城（築城年代不詳）は平安時代に、藤原三直が居城したという。

忠善寺

戦国期には里見氏の城となり、家臣・忍足治部少輔が守り、後北条氏との、戦いの拠点となった。

〔寺社〕真言宗智山派忠善寺がある。

周南（すなみ）村

【合併地】宮下・浜古・小山野・常代・六手・尾車・大山野・作木・山高原・馬登・皿引・草牛

【村勢】戸数四九七戸、人口二五六一人となり、町村有財産は耕地三町八反余、山林一七町歩余となった。

【村名の由来】周淮郡の南部に位置していることから命名。君津市周南の地名は現存しないが、旧村内の建物名（周南小・中学校、周南公民館等）に残る。

宮下（みやした）村　現：宮下一～二丁目・宮下

〔地勢〕常代村の南に位置する。

〔出来事〕文禄三年（一五九四）の上総国村高帳に村名がみえ、高二七二石。正保国絵図には宮ノ下村。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳では、旗本赤松領。文政一二年（一八二九）の農間商渡世取調書上（立川家文書）では、家数三〇・人数一五八。

〔寺社〕春日神社が鎮座。

春日神社

浜古（はまご）村　現：浜子

建暦寺

〔地勢〕常代村の西に位置する。

〔出来事〕永享二年（一四三〇）六月二七日の、鎌倉公方足利持氏寄進状（鶴岡八幡宮文書）に周西郡「浜子田畠」、正保国絵図でも「浜子」、元禄郷帳では「浜古」。寛政五年の上総国村高帳では、高一五一石余、家数一八・旗本赤松領。

〔寺社〕真言宗豊山派建暦寺の木造菩薩面四面は、県指定文化財。天延二年（九七四）貞元親王の菩提を弔うために源満仲が恵信に命じ釈迦院を再建、寺号を建暦寺と改めたという。

小山野（こやまの）村　現：小山野

西了寺

〔地勢〕大山野村の西、郡村の東に位置する。

〔出来事〕天正二〇年（一五九二）検地があった。元禄郷帳では高五〇七石余。寛永一〇年（一六三三）から旗本大久保氏が入り（「寛政重修諸家譜」など）、幕末まで大久保領（旧高旧領取調帳など）。寛政五年の上総国村高帳では、家数五〇。

〔寺社〕浄土宗西了寺は源信の作と伝える阿弥陀如来を本尊とする。慶長年間（一五九六～一六一五）荒廃した西了寺を雄誉霊巌の命により、弟子壇風が天台宗から浄土宗へ改宗、復興した。のち悪疫が流行した折、病気で田植えのできない村人に代わり、本尊が田植えをしたとの事から、田植如来と呼ばれるようになったという。

常代（とこしろ）村　現：常代・宮下一丁目

〔地勢〕六手村の西、小糸川左岸に位置する。

〔出来事〕常城とも書く。文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高六八八石。寛政五年の上総国村高帳では旗本神尾・井上の二家領。文政一二年農間商渡世取調書上では家数七一・人数三二三、居酒二、髪結二、質屋一。江戸伊勢崎町の江戸中期の豪商高間伝兵衛は、当村の出身で、屋敷跡が残る。

常代神社

〔寺社〕常代（とこよ）神社は『三代実録』元慶元年（八七七）閏二月二六日条にみえる、常世神に比定され、中世には羽黒大権現と称したと伝える。真言宗豊山派花厳院、曹洞宗正竜寺・光聚院がある。

六手（むて）村　現：六手

〔地勢〕三直村の南方、小糸川左岸に位置し、鹿野山道が通る。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえる。寛政五年の上総国村高帳では。四八五石余。旗本の御手洗・筧・井上・河内・斎藤の五家領。文政一二年の農間商渡世取調書上によれば、嶺岡往還の継場で家数八一・人数四〇六、居酒二、髪結・煮売・質屋各一。地名は日本武尊に討たれた阿久留王の別名六手王にちなむという（房総志料続篇）。字山王前で貞治二年（一三六三）七月日の年紀をもつ、武蔵型板碑が出土した。嘉永七年ペリー来航にあたり、当村から長右衛門ら、六人の人足を江戸屋敷に送った（能城家文書）。筵織が盛んで六手筵と呼ばれた。

附属寺大師堂

〔寺社〕八幡神社（通称六手八幡宮）と真言宗智山派附属寺がある。

尾車（びしゃ）村　現：尾車

〔地勢〕皿引村の南に位置し、鹿野山道が通る。

〔出来事〕天正二〇年検地があった（山中家文書）。文禄三年上総国村高帳に村名がみえ、高二二七石余。寛政五年の上総国村高帳では旗本本多・三枝領。文政一二年の農間商渡世取調書上（立川家文書）では、家数三六、居酒兼質屋一。

〔寺社〕通称お歯黒様とよばれる尾車神社がある。

大山野（おおやまの）村　現：大山野

〔地勢〕宮下村の南西に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高六六六石。寛政五年の上総国村高帳では、旗本酒井領。文政一二年の農間商渡世取調書上（立川家文書）では家数七〇・人数三六八、居酒二。慶應二年（一八六六）には安房嶺岡牧へ運ぶ、牛を継立てる人馬を負担していた（渡辺家文書）。

大宮売神社

〔寺社〕宝治元年（一二四七）の創建と伝える大宮売（おおみやのめ）神社がある。

作木（つくりぎ）村　現：作木

〔地勢〕山高原村の南に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に作田村とみえるのが、当村と考えられ、高五三石。寛永八年（一六三一）の知行宛行状では作木村とある。寛政五年の上総国村高帳では旗本志村・山本・阿部の三家領。文政一二年の農間商渡世取調書上（立川家文書）では家数一三・人数六〇。

〔寺社〕作木神社は古く日吉山王社と称したという。

山高原（やまたかはら）村　現：山高原

〔地勢〕大山野村の南東に位置する。

〔出来事〕古くは高原村だったが、同郡内に同じ村名があるため江戸時代後期に改称したようだ。天正二〇年検地があった（小川家文書）。文禄三年の上総国村高帳に高原村とみえるのが当村と考えられ、高八七石。寛政五年の上総国村高帳では三郷の清水領と旗本萩原・窪田・志村の三家領。文政一二年の農間商渡世取調書上（立川家文書）には山高原村とみえ、家数一五・人数七〇。

馬登（まのぼり）村　現：馬登

〔地勢〕草牛村の南西、鹿野山の北西麓に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高一九一石。文政一二年の農間商渡世取調書上（立川家文書）では家数四〇・人数一七八。寛政二年（一七九〇）の郷村帳写（小川家文書）によると年貢米は小浜村（現木更津市）まで津出しした。寛政五年の上総国村高帳では、旗本三枝領。安政五年（一八五八）当村の百姓忠四郎が、農間に水車による搗売（つきうり）稼業継続を願い出ている。

薬王寺

〔寺社〕熊野神社、白山神社が鎮座。両社とも例祭に獅子神楽（馬登神楽）を奉納する。薬王寺は真言宗智山派。

皿引（さらひき）村　現：皿引

〔地勢〕六手村の南に位置し、鹿野山道が通る。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高五八石。寛永二年（一六二五）の知行宛行状では望陀郡皿引之郷とある。寛政五年の上総国村高帳では幕府領と旗本中山二氏領。文政一二年の農間商渡世取調書上（立川家文書）では家数二〇・人数一〇七、居酒・髪結各一。

〔寺社〕御太刀神社が鎮座。

草牛（そうきゅう）村　現：草牛

〔地勢〕尾車村の南にあり、鹿野山道が通る。

〔出来事〕〝そうぎゅう〟とも。文禄三年の、上総国村高帳に村名がみえ、高九四石。天和元年（一六八一）の年貢割付状（三平家文書）には惣久村。寛政五年の上総国村高帳では惣平村。神野寺領。文政一二年の農間商渡世取調書上（立川家文書）では家数二四・人数一一〇、居酒一。鹿野山道は天明元年（一七八一）から新規に、嶺岡

八幡神社

往還筋になったという（天保七年「差出帳」三平家文書）。幕末から明治末にかけて往来が多く、甘酒屋・豆腐屋・カジ屋・休み場とよばれた家々で通行人相手の商売が行われていた。

〔寺社〕八幡神社が鎮座。

中（なか）村

【合併地】中島・練木・上・大井・糠田・大鷲・大鷲村新田・泉・白駒、六手村錯綜地、大鷲村・大鷲新田入会地

【村勢】戸数四〇七戸、人口二二五八人となり、村有財産は耕地七畝、山林七町歩となった。

【村名の由来】「中村」は、原案では明治二一年（一八八八）一月二七日に惣代人たちが承認し周准郡の中央に位置することから命名された。しかし、明治二二年に至り「周東乃荘」の古称によって、周東村と改称したいと、惣代連名で郡長あてに上申したが、聞き入れられなかった。中の地名は現存しないが、旧村内の中島にある建物名（中小学校など）に残る。

中島（なかじま）村　現：中島

〔地勢〕籾山村の南東に位置し北側を小糸川が西流する。

〔出来事〕文禄三年（一五九四）の上総国村高帳に村名がみえ、高五五〇石。慶長四年（一五九九）成願寺に五石が与えられた（成願寺文書）。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳では、花村領と河内領。文政一二年（一八二九）の農間商渡世取調書上（立川家文書）によると、家数一〇二・人数四三（ママ）、居酒四・質屋二。寛文七年（一六六七）洪水があり、村境をめぐって、隣村大井村を訴えた。同八年の裁許状（大井区有文書）によると、川の流れを境とするとの裁許が出て、当村の主張は認められなかった。成願寺境内には枝垂れ桜がある。

成願寺

〔寺社〕大治五年（一一三〇）源進を開基とした真言宗智山派成願寺（じょうがんじ）は、常法檀林として栄え、七三ヵ寺の末寺を持つ本寺であったという。上総八十八箇所霊場第一番札所。毎年四月二六日に御影供の法事がある。

練木（ねりき）村　現：練木

〔地勢〕籾山村の北方、小糸川右岸に位置する。

〔出来事〕天正二〇年（一五九二）検地があった。（海老根家文書）。文禄三年の上総国村高帳に、錬木村とみえ高一〇五石。寛政五年の上総国村高帳では、幕府領と三郷の清水領、旗本本多領。文政一二年の農間商渡世取調書上（立川家文書）によると家数一七・人数九二、居酒・

質屋各二。延宝二年（一六七四）小糸川で洪水があり、同三年に峰田堰が造られた。宝暦七年（一七五七）大洪水、明和七年（一七七〇）大干害、天明三年（一七八三）大風雨、同六年長雨などが続き、施米などが行われたが、同年には諸勧進の禁止を記した高札が立てられた。

〔寺社〕延宝六年の創立という日吉神社がある。

上（かみ）村　現：上

※明治一〇年（一八七七）籾山村と原村が合併して上村となる。

⊙籾山（もみやま）村　現：上

〔地勢〕原村の東に位置する。

〔出来事〕嘉暦元年（一三二六）一二月二〇日の東盛義所領等注進状（金沢文庫文書）に「籾山」。文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高九九石。寛政五年の上総国村高帳では、旗本小宮領。文政一二年の農間商渡世取調書上（立川家文書）によると家数二三・人数一一五。文政元年（一八一八）には原村と当村大宮寺の寺地に、つきぬき井戸の掘立を企てている（岡部家文書）。

春日神社

〔寺社〕春日神社所蔵懸仏の応永二五年（一四一八）の銘文に「周東郡末利郷大宮上村之社春日大明神」とあり、大檀那は藤原周東左衛門景久。

⊙原（はら）村　現：上

〔地勢〕六手村の東方にあり北側を小糸川が西流する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高九〇石。寛政五年の上総国村高帳では三郷の清水領と飯野藩領、旗本本多・内藤の二家領。文政一二年の農間商渡世取調書上（立川家文書）によると家数二三・人数九九。

大井（おおい）村　現：大井

〔地勢〕大鷲村の東、小糸川右岸に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高三四〇石。寛文七年大出水で小糸川の流れが変わり、中島村と境論になったが、境界は川の流れ筋であるという方針に従い、立毛部分以外は当村支配とされた。小糸川の舟筏は、積荷値の十分一運上を課せられていた（寛政一〇年「小糸川十分一発由諸」尾車自治会文書）。寛文一二年（一六七二）内山検地帳（石川家文書）がある。寛政五年の上総国村高帳では家数三九、幕府領と旗本永田・

長泉寺

堀の二家領。

〔寺社〕応永期（一三九四～一四二八）の勧請と伝える天照大神社が鎮座。古くは六所明神と称していたという。真言宗智山派長泉寺は江戸時代同社の別当だった。

糠田（ぬかだ）村　現：糠田

〔地勢〕大井村の南方、小糸川左岸に位置する。古代周淮郡額田郷（和名抄）の遺称地とされる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高四五〇石。寛政五年の上総国村高帳では家数五七、旗本の永田・井戸・藁科の三家領。宝暦七年（一七五七）には矢那村（現木更津市）で秣を刈取っていたが、寛政六年当村などは下郡村（現木更津市）の秣野で、草を刈取る権利を買得している。文化一四年（一八一七）に当村の池田久蔵が鑿（さく）井業を開業しており、上総掘りと称される。

三島神社

〔寺社〕三島神社が鎮座。

大鷲（おおわし）村　現：大鷲

〔地勢〕練木村の東、小糸川右岸に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高一〇四石。寛政五年の上総国村高帳では大鷲村新田とともに家数三三、旗本永田領。寛文一二年村内の入会野の開墾により大鷲村新田が成立した（『中村誌』）。

〔寺社〕日吉神社が鎮座。日蓮宗妙性寺・曹洞宗長善寺がある。

大鷲村新田（おおわしむらしんでん）　現：大鷲新田

〔地勢〕練木村の北に位置する。

〔出来事〕元禄郷帳に大鷲村に並んで同所新田と記載され、高四七石余。寛文一二年大鷲村の入会野地を開墾し三年後家数一〇軒の大鷲新田が成立（『中村誌』）。寛政五年の上総国村高帳では大鷲村のうちで、飯野藩領。

泉（いずみ）村　現：泉

密蔵院

〔地勢〕六手村の東に位置し、北側を小糸川が西流する。

〔出来事〕正応三年（一二九〇）六月二三日の関東下知状（相馬岡田文書）に「周東郡泉村」。文禄三年の上総国村高帳に、和泉村とみえ高五九一石。寛政五年の上総国村高帳では、旗本本多領。文政一二年の農間商渡世取調書上（立川家文書）によると家数九四・人数四一八、居酒二。

〔寺社〕白山神社、真言宗智山派密蔵院がある。

白駒（しろこま）村　現：白駒

〔地勢〕泉村の南東、鹿野山北裾に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高二〇四石。寛政五年の上総国村高帳では高岡藩領、家数四二。地内、白駒神社蔵鰐口の応永一一年（一四〇四）五月一〇日付銘文に「周東郡白駒若一王子」（房総金石文の研究）とみえ、住持比丘明照、大工楠崎信吉とある。

妙弘寺

〔寺社〕日蓮宗妙弘寺は応永二年周東郡中島に、僧日敬を開祖として周東庄田丸弘親により、建てられた。文化一〇年（一八一三）本堂庫裡を再建したが明治四四年（一九一一）焼失。

小糸（こいと）村

【合併地】大井戸・行馬・根本・大谷・長石・法木・糸川・大野台・塚原・荻作・鎌滝・福岡、糠田村飛地、荻作村・中島村・泉村入会地

【村勢】合併により戸数四八一戸、人口二七六三人となり、村有財産は耕地約一町六反、山林四一町歩余となった。

【村名の由来】「小糸川」を挟んで諸村が点在していることにちなんで命名。鎌倉期にあった小糸郷にちなむか。君津市小糸の地名は「かずさ小糸」や「小糸大谷」として残っている。

大井戸（おおいど）村　現：大井戸

※明治八年（一八七五）、森戸村・谷木村・大月村・深井村と合併し大井戸村となる。

⊙大月（おおつき）村　現：大井戸

〔地勢〕谷木村の南に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高一〇二石。寛政五年の上総国村高帳では家数八、三郷の清水領。文化期（一八〇四～一八）に小糸川の洪水で崩れた川岸の修復では、六〇間を負担し、人足一八〇人を出した。

神宮寺

〔寺社〕諏訪神社は暦応四年（一三四一）源盛澄の創建と伝え、同年一〇月三日の年紀をもつ懸仏に、大願主源盛澄、康永三年（一三四四）一一月三日の懸仏銘に「周東郡秋元郷住人 大槻宮禰宜大夫源盛澄」とみえる。真言宗智山派神宮寺がある。

⊙深井（ふかい）村　現：大井戸

〔地勢〕大月村の北西、小糸川右岸に位置する。
〔出来事〕嘉暦元年（一三二六）一二月二〇日の東盛義所領等注進状（金沢文庫文書）に「深井」とあり、盛義の領分のうち他人の所領が、混在する地だった。文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高五七四石。寛政五年の上総国村高帳では家数五四、旗本神谷領と御留守居組与力給知。文化期（一八〇四～一八）に小糸川の洪水で崩れた、川岸の修復では四二間を負担し、人足二四六人を出した（『小糸町史』）。
〔寺社〕曹洞宗万福寺は寛永一〇年（一六三三）の龍穏寺本末帳に深井村満福寺とみえる。

満福寺

⊙森戸（もりど）村　現：大井戸
〔地勢〕法木村の南に位置する。
〔出来事〕文禄三年（一五九四）の上総国村高帳に村名がみえ、高五一石。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳では家数二、三郷の清水領と旗本河内領。

⊙谷木（やぎ）村　現：大井戸
〔地勢〕法木村の南に位置する。
〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に八木村とみえ、高八六石。元録郷帳でも八木村とある。寛政五年の上総国村高帳では家数一一、旗本花村領。

行馬（ぎょうま）村　現：行馬
〔地勢〕糠田村の東方、小糸川の右岸に位置する。
〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえる。寛政五年の上総国村高帳では高一二六石余で家数一八、旗本飯室領。宝暦五年（一七五五）塚原村とともに川上の根本村が、新堰を設けて引水に支障が出たとして争論になっている。文化期、小糸川の洪水で川岸が崩れ、百姓自普請のうち当村は一七〇間を負担し、人足五一〇人を出した。（『小糸町史』）。

根本（ねもとむら）村　現：根本
※明治七年箕和田村を合併。
〔地勢〕行馬村の北に位置する。
〔出来事〕至徳元年（一三八四）四月の黄梅院文書目録（黄梅院文書）に「三直郷根本」とある。天正一九年（一五九一）検地が行われた（石川家文書）。寛政五年の上総国村高帳では高六〇〇石余、家数五二。幕府領と旗本の中根、山田、江田（依田か）・大原の四家領。法木村の丸堰の余水で、三町歩を

都波岐神社

灌漑していた。明治初年には江尻幸蔵が日章学舎を開校しており、門人は約八〇名。（『県教育史』）。

〔寺社〕白山神社、天正六年の奉祀を伝える都波岐（つばき）神社が鎮座。真言宗智山派大正寺に天文八年（一五三九）銘の巡礼納札がある。

⊙箕和田（みのわだ）村　現：根本

〔地勢〕根本村に隣接する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえる。高一四石。元禄郷帳では蓑和田村とある。寛政五年の上総国村高帳では高二九石余、家数四、幕府領と旗本河内領。

大谷（おおやつ）村　現：小糸大谷

〔地勢〕根本村の東に位置する。

密乗院

〔出来事〕応永二四年（一四一七）正月一日の、鎌倉公方足利持氏寄進状（鶴岡八幡宮文書）に「周東郡大谷村」とある。文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、五四〇石。寛政五年の上総国村高帳では高一四七石余、家数二三、三郷の清水領と神尾領。宝暦期（一七五一～六四）望陀郡矢那村（現木更津市）と秣野をめぐって争論となった。元文二年（一七三七）本田畑で煙草の作付けを禁じられており、当時盛んに栽培されていたと思われる。

〔寺社〕八坂神社が鎮座。真言宗智山派密乗院がある。

長石（ながし）村　現：長石

〔地勢〕大谷村の東に位置する。

〔出来事〕応永二四年八月の日英末寺等支配注文（法宣院文書）に周東郡内として「南長石顕妙寺」。文禄三年の上総国村高帳に村名がみえる。寛政五年の上総国村高帳では高一九九石余、家数一三。幕府領と旗本河内領。享保三年（一七一八）根本村と用水をめぐる争論があった。

〔寺社〕山神社が鎮座。

法木（ほうぎ）村　現：法木

〔地勢〕長石村の南に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえる。寛政五年の上総国村高帳では高八〇石余、家数一三。幕府領と旗本小宮山領。地内の法木山は当村ほか八村の入会地で、長石村・箕和田村など多くの村の用水源でもあった。享保三年には根本村と水論になっている（『小糸町史』）。

糸川（いとかわ）村　現：糸川

※明治九年、長谷堂村・麁子崎村・金岡村・沢巻村・間野村と合併し糸川村となる。

⊙長谷堂（はせどう）村　現：糸川

〔地勢〕麁子崎村の南東に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高二四二石。寛政五年の上総国村高帳では家数三三、三郷の清水領。小糸川の舟運で用材・米・炭などを川下げ寛政一〇年には川舟二艘があった（高橋家文書）。

⊙麁子崎（そしざき）村　現：糸川

〔地勢〕小糸川右岸、深井村の南に位置する。

〔出来事〕庶子崎とも書き（天保郷帳など）「しょしざき」と読む。文禄三年の上総国村高帳に、祖師崎村とみえ、高九一石。寛政五年の上総国村高帳では家数一六、三郷の清水領。

〔寺社〕真言宗智山派新興寺がある。

新興寺

⊙金岡（かねおか）村　現：糸川

〔地勢〕長谷堂村の南東、小糸川右岸に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高七六石。寛政五年の上総国村高帳では家数一五、三郷の清水領。寛政一〇年には川舟一艘があった（高橋家文書）。

⊙沢巻（さわまき）村　現：糸川

〔地勢〕金岡村の南、小糸川右岸に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高一〇三石。寛政五年の上総国村高帳では家数二三、三郷の清水領。寛政六年近隣諸村とともに助郷負担の困難を奉行所に訴えている（真板家文書）。

⊙間野（まの）村　現：糸川

〔地勢〕沢巻村の東に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に野間村とあるのが当村と考えられ、高九石。元禄郷帳は間野村。寛政五年の上総国村高帳では家数九、幕府領と旗本内藤二氏領。元文四年（一七三九）大野台村など九村と秣場をめぐって争論。延宝五年（一六七七）の裁許絵図や正徳元年（一七一一）の検地帳が証拠で、同村など九村の主張する入会と認められた。

大野台（おおのだい）村　現：大野台

〔地勢〕沢巻村の南に位置する。

〔出来事〕天正二〇年検地があった（大野台区有文書）。文禄三年の上総国村高帳に、大之巻村とあるのが当村と考えられ、高二二六石。寛政五年の上総国村高帳では家数四三、三郷の清水領。年貢米は大堀村（現富津市）まで川下げした。竈数（かまどかず：家数）四一・人数二三七、馬五・牛三〇余。安房嶺岡牧（現鴨川市）への通行では人馬を鹿野山宿に出している。文化期小糸川の洪水で崩れた川岸の修復では一五一間を負担、人足六一三人を出している。嘉永五年（一八五二）上総掘りによる

掘抜井戸を掘り、一町七反余の耕地の灌漑用水を補った。幕末には大野文鱗が寺子屋を開いていた。

〔寺社〕山神社が鎮座。曹洞宗東光寺がある。

塚原（つかはら）村　現：塚原

不動寺

〔地勢〕深井村の西方、小糸川左岸に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一三一石。寛政五年の上総国村高帳では、家数二四、旗本井上領。小糸川河口まで穀物・薪・木炭・用材を川下げしており、寛政一〇年には川舟一艘があった（高橋家文書）。

〔寺社〕八幡神社が鎮座。真言宗智山派不動寺がある。

荻作（おぎさく）村　現：荻作

〔地勢〕駒久保村の南西に位置する。

〔出来事〕天正一九年検地があったとされる。文禄三年の上総国村高帳に荻作村とあり、高一〇一石。元禄一〇年（一六九七）の村明細帳（榎本家文書）に荻作とある。寛政五年の上総国村高帳では家数一七、幕府領と永田領。

〔寺社〕菅原神社は永禄元年（一五五八）の創立で永田氏の祈願所であったという。

鎌滝（かまたき）村　現：鎌滝

〔地勢〕荻作村の東方、小糸川左岸に位置する。

〔出来事〕「かまたき」とも。文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高三六八石。文禄三年に検地が行われている。八〇俵積の舟一艘があり、年貢米は、小糸川を川路五里の大堀村（現富津市）まで川下げした。竈数七三・人数四〇七、馬二三・牛三四。寛政五年の上総国村高帳では家数七三、三郷の清水領。寛政一〇年には川舟二艘があり、農産物・薪・炭・竹などを小糸川河口へ搬出していた（高橋家文書）。

天南寺

〔寺社〕天南寺は、始め天安護国禅寺（小糸城主秋元氏が華叟を開山として建立）と号したが、家康が寺領と、自筆の下馬札を寄進した際天南寺と記したため、その誤記をもって改号したという。

福岡（ふくおか）村　現：福岡

※明治七年、高原村・長和田村・駒久保村と合併し福岡村となる。

⊙高原（たかはら）村　現：福岡

〔地勢〕小糸川の左岸、塚原村の南西に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高八

石余。寛政五年の上総国村高帳では家数四、三郷の清水領。寛政一〇年には川舟が一艘あり、薪炭・竹・用材などを川下げした（高橋家文書）。

⊙長和田（ながわだ）村　現：福岡

〔地勢〕塚原村の南西方に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高六一石。寛政五年の上総国村高帳では家数一四、旗本井上領。

⊙駒久保（こまくぼ）村　現：福岡

〔地勢〕塚原村の南西に位置する。

〔出来事〕嘉暦元年一二月二〇日の東盛義所領等注進状（金沢文庫文書）に「胡麻窪」。盛義の領分のうち、他人の所領が混在する地だった。文禄三年の上総国村高帳は駒窪村とみえ、高六九石。元禄郷帳には駒久保村とある。寛政五年の上総国村高帳では家数一一。三郷の清水領。

法蔵寺

〔寺社〕顕本法華宗法蔵寺がある。

秋元（あきもと）村

【合併地】市宿・市場・日渡根・東猪原・上畑・東粟倉・西粟倉・平田・西猪原・鹿野山宿・西日笠、東西猪原村共有地、植畑村他四か村共有地、市宿村・市場村入会地、東粟倉村・東日笠村入会地

【村勢】合併により戸数三一三戸、人口二九四三人となり、村有財産は耕地四反、山林三一五町歩となった。

【村名の由来】かつて「秋元荘」に属し、市場村が「秋元城址」所在地であったことにちなみ命名された。秋元の地名は現存しないが、旧村内の清和市場や西粟倉に建物名として残る。

市宿（いちじゅく）村　現：市宿

〔地勢〕日渡根村の西方、小糸川中流左岸にあり、鹿野山への登り口に立地。東は川を渡り久留里へ、川沿いに、南北に周淮郡を貫く通りがあり交通の要地だった。

三経寺

〔出来事〕文禄三年（一五九四）の上総国村高帳に村名があり、高一七九石。寛永一八年（一六四一）旗本曾根領（「寛政重修諸家譜」など）。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳では家数八〇。舟運が盛んで市宿河岸（清水河岸ともいう）が設けられていた（川俣家文書）。元禄一二年（一六九九）の才真木請負証文（川俣家文書）

によると、江戸の商人が領内奥畑入（谷）の地頭林で薪の生産を請負い、市場・市宿の両河岸から船積みした。

〔寺社〕字下久原に浄土宗三経寺がある。

市場（いちば）村　現：清和市場

〔地勢〕市宿村の南に位置する。小糸川左岸にあり、上流から中流へ広がる地点に立地。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名あり、高二〇九石。慶安二年（一六四九）妙喜寺に一〇石余の朱印地が与えられた（川俣家文書）。幕末も曾根領と妙喜寺領。寛政五年の上総国村高帳では家数六四。旗本曾根氏の陣屋が置かれ、根岸氏が代々代官を勤めた。字根古屋（ねごや）を含む一帯に小糸城跡がある。天正一八年（一五九〇）と推定される関東八州諸城覚書（毛利家文書）に「こいとの城」とあり、里見氏の勢力下にあった。舟運が盛んで、中野河岸が設けられた（川俣家文書）。

本田寺

〔寺社〕鎮守は字市場の諏訪神社。字潰落興（つぶらつこ）に日蓮宗本田寺があり、暦応二年（一三三九）日徳の創立、不動堂がある。

日渡根（にっとね）村　現：日渡根

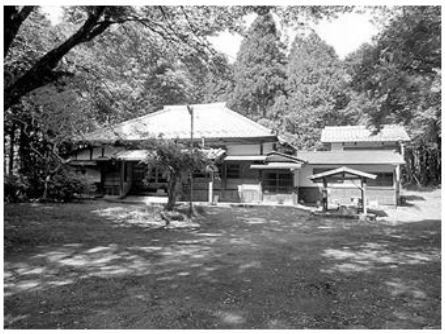
〔地勢〕大野台村の南に位置する。小糸川中流右岸にあり、東は上総丘陵の稜線を越え久留里へ通じ、西は同川を渡り市宿村へ、南は同川を挟み市場村と対する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一五五石。寛政五年の上総国村高帳では家数二六、小笠原領・中山領・井上領・幕府領を含め相給。寛政六年に大鷲村ほか二六ヵ村組合に所属し、弐拾六箇村議定書（大野台区有文書）を作っている。

東猪原（ひがしいのはら）村　現：東猪原

〔地勢〕西猪原村の東に位置する。小糸川中流右岸にあり、東は上総丘陵の稜線を越えて、望陀郡小坂村へ山道が通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳には本猪原村、高一七〇石。元禄郷帳に村名がみえる。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳では家数四四。



東田寺

〔寺社〕字山田に曹洞宗東田寺（とんでんじ）があり、機州連応の開闢（かいびゃく）と伝える。

上畑（うえはた）村　現：植畑

〔地勢〕西粟倉村の南、小糸川上流の左岸に位置する。南は西日笠村、西は上総丘陵高宕山の稜線を越え天羽郡田

倉村（現富津市）。植畑とも記した（旧高旧領取調帳）。〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高二一四石。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳では、家数六四。当地出身の秋広平六は寛政一二年（一八〇〇）伊豆大島の波浮港を完成させたことで知られるが（『伊豆七島志』）、当地方では馬鈴薯の普及功労者とされる。

八雲神社

〔寺社〕字姥谷（あざうばやつ）に曹洞宗圓通寺、字西大原に八雲神社がある。

東粟倉（ひがしあわぐら）村　現：東粟倉

〔地勢〕東猪原村の南に位置する。小糸川上流右岸にあり、北は同川支流の間並川を渡り西猪原村・東猪原村へ通じ、西は小糸川を渡り西粟倉村へ通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に東粟倉とあり、高八四石。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳では家数三七。

〔寺社〕字愛宕に愛宕神社がある。

西粟倉（にしあわぐら）村　現：西粟倉

〔地勢〕東粟倉村の北西方に位置し、小糸川左岸上流から中流への変換点に立地。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に粟倉村とあり、高七〇石。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳では家数一五。天明八年（一七八八）に一四ヵ村組合村に属した。公儀御用のほかに囚人預かり・行倒者・盗賊騒動・溢者（あぶれもの）・人違い召人のことなど一一ヵ条の規定を作り、どこの村で騒動が起きても、協力して事にあたり、入用は石高割、人足は軒別割など、各村の負担を定めた（「組合相談規定」清和公民館文書）。

八幡神社

〔寺社〕字久保庭に八幡神社。

平田（ひらた）村　現：平田

〔地勢〕西日笠村の北、小糸川上流左岸に位置する。西は上総丘陵高宕山を越え天羽郡田倉村（現富津市）。

〔出来事〕元禄郷帳に村名があり、高八一石余。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳では家数二七。高宕山周辺の当地から、現富津市豊岡にかけての国有林を中心にニホンザルの数群が遊動しており、高宕山のサル生息地として国の天然記念物に指定される。

西猪原（にしいのはら）村　現：西猪原

〔地勢〕市場村の東方、小糸川の川向いに位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一一九石。慶安二年に久原寺（くはらじ）に一〇石余の朱印地が与えられた（川俣家文書）。幕末は曾根領と久原寺領（旧高旧領取調帳）。寛政五年の上総国村高帳では家数三三。秋元義正が永正五年（一五〇八）小糸城を築き、久原寺を市宿から当地へ移して、城の鬼門除けと定めたともいう。南村境を小糸川の支流、間並川が流れ本流との合流点に、小糸川最奥の間並河岸が設けられた（佐藤家文書）。

久原寺

〔寺社〕字諏訪に諏訪神社、字久原に真言宗智山派久原寺がある。

鹿野山宿（かのうざんじゅく）　現：鹿野山

〔地勢〕市宿村の南西に位置する。鹿野山（三八〇㍍）山上にある神野寺の門前町。嶺岡往還の継場上（かみ）駅で、北は草牛村を経て中駅の三直村、六手村へ、南は天羽郡関村（現富津市）の継場を経て安房郡嶺岡牧（現鴨川市）へ向かう。東は市宿村を経て久留里へ、西は佐貫町（現富津市）へ通じる。西の集落を箕輪町、東の集落を閼伽井（あかい）町と称した。

〔出来事〕文政一二年（一八二九）の農間商渡世取調書上（立川家文書）に神野寺領鹿野山村とあり、江戸へ二四里、嶺岡往還継場、境内除地前は無高、家数九五、うち居酒七・髪結四・質屋一、ほかに煮売八三、人数四〇六。天正一九年（一五九一）一一月の徳川家康寺領寄進状写（神野寺文書）によれば、同年神野寺に五〇石の朱印地が草牛村内で与えられた。天明元年（一七八一）野馬奉行斎藤三右衛門が、嶺岡牧へ通行する際、周淮郡のうち六手・三直順路、鹿野山道が便利ということで、新規継場として二駅が設けられた。これまでの貞元・中野両村を下駅、六手・三直両村を中駅、鹿野山を上駅と称し、周淮郡九三ヵ村のうち、三六村を上駅助郷とした（綾部家文書）。

白鳥神社

〔寺社〕字春日山に春日神社、字白鳥に白鳥神社がある。

西日笠（にしひがさ）村　現：西日笠

〔地勢〕上畑村の南、小糸川上流左岸に位置する。西は同川支流の新女川（高宕沢）を渡り平田村、東は同じく桜川で画される。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一七〇石。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳

では家数二三。
〔寺社〕字城中台に真言宗智山派長久寺があった。

三島（みしま）村

【合併地】二入・辻森・大岩・宿原・正木・怒田沢・東日笠・旅名・奥米・豊英、豊英村他九か村入会地
【村勢】合併後、戸数二七六戸、人口一七一二人で、合併基準を満たさなかった。村有財産は耕地三反、山林三三三町歩と、村有林面積は市域最大であった。
【村名の由来】古社三島神社があることから、その社名にちなみ命名されたか。三島の地名は現存しないが、旧村内の正木にある学校名に残る。

二入（ふたいり）村　現：二入

〔地勢〕東日笠村の南東、小糸川上流右岸に位置する。
〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高六四石。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳では家数二二。
〔寺社〕字宮ノ前に二入神社があった。

辻森（つじもり）村　現：辻森

〔地勢〕二入村の東、小糸川上流右岸に位置する。東は上総丘陵の稜線を越え望陀郡小坂村へ通じる。
〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高五四石。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳では家数二二。
〔寺社〕字善示山に吾妻神社がある。

大岩（おおいわ）村　現：大岩

〔地勢〕辻森村の東、小糸川上流に位置する。
〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高九四石。寛永一八年旗本曾根領。明治七年（一八七四）には戸数二一・人数一三六、牛一三・馬一一、煙草八〇〇斤・樫炭一五〇俵（六貫入り）を生産（「一村限調帳」石井家文書）。弘化三年（一八四六）当村の五左衛門が、年貢を納めるため百姓居山で、樫炭二千二〇〇俵を焼いて津出ししたい旨、曽根氏の代官に願い出ている（「堅炭焼出願」鈴木家文書）。
〔寺社〕字井ノ上に真言宗智山派宝性寺（現寶性寺）がある。上総国石高并神社寺院朱印帳（千葉県史料）によると朱印寺領四石。

寶性寺

宿原（しゅくばら）村　現：宿原

〔地勢〕大岩村の南、小糸川上流に位置する。
〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高八三石余。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳では家数三一。

〔寺社〕字三島に三島神社がある。

正木（まさき）村　現：正木

〔地勢〕宿原村の北東、小糸川上流に位置する。

〔出来事〕元禄郷帳に村名がみえ、高四七石。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳では、家数三〇。元禄一六年（一七〇三）の、才真木請負証文（川俣家文書）によれば、大岩村と同じく、江戸の商人が当村などで、才真木の生産を請負っている。

八雲神社

〔寺社〕字東台に八雲神社（宿原三島神社摂社）がある。

怒田沢（ぬたざわ）村　現：怒田沢

〔地勢〕宿原村の南西、小糸川の上流左岸に位置する。西は丘陵を越え平田村飛地を通り高宕山へ達する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳には「野田村」とあり、高四九石。元禄郷帳に村名がある。寛永一八年旗本曾根領。慶応二年（一八六六）の宗門人別改帳（清和公民館文書）によれば家数二二、うち当村真言宗普門寺旦那一九・奥畑村真言宗薬上寺旦那三、人数一一四、馬一〇・牛六。

〔寺社〕字上ノ原に山神社（宿原三島神社摂社）がある。

東日笠（ひがしひがさ）村　現：東日笠

〔地勢〕小糸川右岸、西日笠村の東方に位置する。

〔出来事〕文禄三年の周東郡日笠之村屋敷検地帳（東日笠区有文書）二冊のうち一冊によれば、名請人一四人中には新左衛門尉・太郎左衛門尉・縫殿右衛門尉など武士を思わせる名前が多い。文禄三年上総国村高帳では高六三石。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳では家数三三。

〔寺社〕字市井棚に日枝神社がある。

旅名（たびな）村　現：旅名

〔地勢〕怒田沢村の東、小糸川上流に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高三〇石。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年上総国村高帳には張名村とみえ。家数一九。

菅原神社

〔寺社〕字寺ノ台に菅原神社がある（宿原三島神社摂社）。

奥米（おくごめ）村　現：奥米

〔地勢〕旅名村の東、小糸川の支流三間川流域に位置する。南は清澄山系の峰を越えて安房郡横尾村（現鴨川市）へ通じ、東は上総丘陵の稜線を越え望陀郡笹村へ通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高三五石。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳では家数二〇。享保六年（一七二一）炭焼出来高書上（川俣家文書）によれば、当村の三馬入（谷）で江戸の加藤屋が運上金二一両余を支払い、当年二月から一二月までに炭を四千三八七俵焼き河岸出ししている。

〔寺社〕字長倉台に山神社（大正の頃字花小屋から移転）。字旧川に愛宕神社がある。

豊英（とよふさ）村　現：豊英

※明治一〇年、奥畑村・倉沢村と合併し豊英村となる

⊙奥畑（おくはた）村　現：豊英

〔地勢〕倉沢村の南、小糸川上流最奥の谷間に位置する。南は清澄山系の峰を越えて安房郡横尾村（現鴨川市）へ通じ、西は上総丘陵高宕山を越え天羽郡宇藤原（うとうばら）村（現富津市）へ通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳には「関畑村」（誤記か）とあり、高三二石。元禄郷帳に村名がみえる。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳では家数一二。元禄一二年の才真木請負証文（川俣家文書）によれば、江戸の商人らが前金六〇両を運上金として支払い、奥畑入（谷）の地頭林で栂・樅・松の才真木の生産を請負、市場・市宿の両河岸から船積みしている。

⊙倉沢〈くらさわ〉村　現：豊英

〔地勢〕怒田沢村の南、小糸川上流に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高四七石。寛永一八年旗本曾根領。寛政五年の上総国村高帳では、家数二四。字木和田に県指定天然記念物の三島の白樫がある。樹高三〇㍍、目通り幹囲七・三㍍のウラジロガシの巨木。宝暦一二年（一七六二）名主儀右衛門と、安房から来村した里見倉沢により、川回し工事が完成した（『清和村誌』）。

熊野神社

〔寺社〕字花輪に熊野神社がある。

小櫃（おびつ）村

【合併地】末吉・山本・台・寺沢・三田・西原・貝渕・長谷川・新田・俵田・戸崎・岩出・箕輪・青柳、田川村飛び地、吉野村錯綜地

【村勢】合併によって区域面積は二三〇〇町歩を超え、市域で最も大きい村となった。戸数九二三戸、人口五二五一人、村有財産は耕地三町歩、山林四九町歩となった。

【村名の由来】「小櫃川」が新村の中央部を貫流しているのにちなんで命名された。

末吉（すえよし）村　現：末吉

〔地勢〕三田村の南、小櫃川支流御腹川の谷口に位置する。東は長谷川村を経て谷奥の川谷（かわやつ）村へ通じ、集落の西側を久留里道が通る。

〔出来事〕文禄三年（一五九四）の上総国村高帳に村名があり、高六六五石。寛文四年（一六六四）には久留里藩領。慶安元年（一六四八）市場村正源寺に当村内で一〇石の朱印寺領が与えられた（正源寺文書）。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳によると家数八九。元禄五年（一六九二）には長谷川堰の水懸りであった（吉田家文書）。

飯縄神社

〔寺社〕字壬申山に鎮守の飯縄神社がある。社伝に弘文天皇の随身蘇我大炊を祀るという。

山本（やまもと）村　現：山本

〔地勢〕萱野村（現木更津市）の南に位置する。西は小櫃川中流右岸の氾濫原に広く水田を開き、東は上総丘陵を背に集落を構える。集落を久留里道が北から南に通り、西は同川を渡って下郡村（現木更津市）へ通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一〇一一石。寛文四年には久留里藩領（寛文朱印留）、貞享元年（一六八四）には上野前橋藩領（酒井家文書）。寛保三年（一七四三）の久留里領山本村明細帳写（『小櫃村誌』）によれば男女とも作間稼なし。畑作は五穀のほか野菜・木綿・煙草など、渋柿少々。清酒売・大工各二、豆腐屋・せり商人・医師（ただし本道）・紺屋・桶屋各一。家数一一一（寺二・本百姓八四・水呑二五）・人数六四九（うち出家二・道心六）。陸路城下までは一里半ほど、川路二里ほど。城下への津出しは他領の大鐘村（下郡村大鐘の誤りか）。近世中期以降舟運が盛んになり、迎原（むかいばら：向原）に新河岸が設けられた（吉田家文書）。安政五年（一八五八）・同六年には、百姓舟持が安行船を一艘持ち運送を行っていた（粕谷家文書）。

圓明院

〔寺社〕字寺ノ台に真言宗智山派圓明院がある。

台（だい）村　現：小櫃台

〔地勢〕山本村の南東、小櫃川の支流御腹川の谷間に位置する。東は上総丘陵の稜線を越え万田野村（現市原市）へ通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳には「台田村」（誤記か）とあり高八九石。正保国絵図に台村とみえ、元禄郷

帳では高九九石余。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数二三。

〔寺社〕字新多々に鎮守の八幡神社があり、貞治年中（一三六二～六七）身延山久遠寺五世日台の勧請という。

寺沢（てらさわ）村　現：寺沢

〔地勢〕岩出村の南東、小櫃川中流左岸に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高二六四石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数四八。近世中期以降舟運が盛んになり、新河岸が、設けられた（粕谷家文書）。安政三年に百姓が安行船を一艘持ち運送を行っていた（粕谷家文書）。

実蔵院

〔寺社〕字真崎台に鎮守の八幡神社があり、字出戸に真言宗智山派実蔵院がある。古くは長福寺と号し、寺伝によれば、建長元年（一二四九）田原秀光が父秀国の追福のため建立し僧源長を開山とした。

三田（さんだ）村　現：三田

※明治九年（一八七六）砂田村を合併。

〔地勢〕砂田村の東にあり、上総丘陵中、東から西に向かって浸食された三田谷（沢）に立地。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高三四三石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数四二。元禄五年には長谷川堰の水懸りであった（吉田家文書）。

〔寺社〕字一ノ作台に浅間神社、字二ノ作に弁財天社（三宝荒神）がある。同社には荒（竈：かまど）神社・水神社を祀る。字山坂東に日吉神社、字道山谷に曹洞宗瑞竜院、字谷には新義真言宗延命院がある。

瑞竜院

⊙砂田（すなだ）村　現：三田

〔地勢〕貝渕村の東に位置する。東は上総丘陵を背に集落を造り、久留里道が北から南に通る。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高八二石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数一二。

西原（にしばら）村　現：西原

〔地勢〕山本村の南、小櫃川中流右岸に位置する。西は同川を渡り田川村（現木更津市）へ通じる。

〔出来事〕文禄三年上総国村高帳に村名があり、高八一六石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の村明細帳（吉

田家文書）によると家数九六・人数四三九。他に稼ぎはなく運上物もない。用水は大谷村と長谷川村の板堰（長谷川堰用水）から引いた。近世中期以降舟運が盛んになり、新河岸が設けられている（吉田家文書）。安政三年・同五年・同六年・万延元年には、百姓が川舟を一艘持ち、運送を行っていた（粕谷家文書）。

神明宮

〔寺社〕字上村に鎮守の神明宮がある。字寺屋敷に真言宗智山派薬王院がある。古くは長福寺と号し、寺伝によると長禄二年（一四五八）慶海の創建。

貝淵（かいふち）村　現：賀恵渕

※明治八年川窪・宗政・大河原と合併し賀恵淵村となる。

〔地勢〕西原村の南、小櫃川中流右岸に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高四二一石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳では、家数三五。元禄五年には、長谷川堰の水懸りであった。明和七年（一七七〇）川窪・宗政・大河原の三村から用水引について、訴訟が起こされた。天保三年（一八三二）には、同じ三村を相手に用水溝の浚揚についての、訴訟を起こしている。近世中期以降舟運が盛んになり新河岸が設けられた。

熊野神社

〔寺社〕字下樋田に鎮守の熊野神社がある。字水神台に水神社、字東樋田に八坂神社、字槙ノ内に釈迦堂がある。

⊙川窪（かわくぼ）村　現：賀恵渕

〔地勢〕貝渕村の南東に位置する。南・北・西の三方を小櫃川にかこまれ、東は宗政村へ通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一六二石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳に川久保村とあり、家数九。元禄五年には長谷川堰の水懸り（吉田家文書）。

〔寺社〕字向屋敷に八幡神社と水神社がある。

⊙宗政（むねまさ）村　現：賀恵渕

〔地勢〕川窪村の東に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳には村名の記載がない。寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名がみえ、久留里藩領。元禄郷帳では高九一石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数一〇。元禄五年には長谷川堰の水懸りだった（吉田家文書）。

〔寺社〕字原に神明神社。

⊙大河原（おおがわら）村　現：賀恵渕

〔地勢〕宗政村の南、小櫃川中流右岸で支流の御腹川が合流する地点の北側に位置する。北は宗政村・貝淵村方面へ、東は末吉村へ、南は俵田村へ通じる道がある。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に大川原村とみえ、高一四一石。正保国絵図には大河原村とある。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数一五。元禄五年には、長谷川堰の水懸りであった（吉田家文書）。安政三年・同六年・万延元年には百姓が安行船を一艘もち、運送を行っていた（粕谷家文書）。

〔寺社〕字天王前に鎮守の八坂神社、神明神社。

長谷川（はせがわ）村　現：長谷川

大嶽神社

※明治九年熊竹村・奥田村と合併し長谷川村となる。

〔地勢〕末吉村の東、小櫃川支流御腹川中流の谷間に位置する。東は台村を経て上流の滝村・大谷村へ通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高三八五石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると、家数九二。御腹川から引く板堰（長谷川堰用水）の水元。長谷川堰（のちに梶山堰とよぶ）は寛永九年（一六三二）久留里藩によって、大上堰（大谷村）の水量不足を補うために設けられた。

〔寺社〕字蔵王に鎮守の大嶽神社がある。社伝によれば天武天皇一四年（六八五）の創建、弘文天皇の随身長谷川紀伊を祀るという（『君津郡誌』）。字川面に山神社、字居藪に稲荷神社、字西鹿ヵ谷に中山神社（神社明細帳）。字上平田に真言宗智山派長泉寺がある。延暦一二年（七九三）の創建。

⊙熊竹（くまたけ）村　現：長谷川

〔地勢〕長谷川村の北の谷間に位置する。

〔出来事〕元禄郷帳に長谷川村の枝郷として村名があり、高七〇石余。天保一一年（一八四〇）の望陀郡戸口録、旧高旧領取調帳では久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数一〇。

〔寺社〕字熊竹に八幡神社がある。

⊙奥田（おくだ）村　現：長谷川

〔地勢〕長谷川村の南対岸、小櫃川支流御腹川中流左岸に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一二三石。貞享元年には上野前橋藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数一〇。

〔寺社〕字奥田に日蓮宗正覚寺がある。同寺の過去帳によれば、里見義師が三千坪を寄付して長栄山正覚寺と号し、乳母妙義比丘尼によって応永元年（一三九四）開闢（かいびゃく）成就したという。

新田（にった）村　現：上新田

※明治一二年新田村は、村名を改称し上新田村となる。

⊙新田（にったむら）村　現：上新田

〔地勢〕箕輪村の西、小櫃川中流右岸に位置する。村の南側を久留里道が通る。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高二一三石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数三五。近世中期以降舟運が盛んになり、新河岸が設けられた（粕谷家文書）。安政三年・同五年・同六年・万延元年には、百姓が川舟を一艘もち運送を行っていた（粕谷家文書）。

〔寺社〕字向山に浅間神社（浅間神社古墳）と真言宗智山派西光寺がある。江戸時代は浅間神社の別当でもあった。

浅間神社

俵田（たわらだ）村　現：俵田

※明治九年川田村と合併する。

〔地勢〕新田村の西、小櫃川右岸で支流の御腹川が合流する地点の南に位置する。集落の東側を久留里道が通る。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高六三七石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数七二。近世中期以降舟運が盛んになり、新河岸が、設けられた（粕谷家文書）。元禄五年には長谷川堰の水懸りであった（吉田家文書）。安政三年に百姓が川舟三艘をもち、同五年・同六年・万延元年には二艘もって運送を行っていた（粕谷家文書）。

〔寺社〕字天神台に鎮守の白山神社がある。字下ノ後に真言宗智山派徳蔵寺がある。

白山神社

⊙川田（かわだ）村　現：俵田

〔地勢〕俵田村の西、小櫃川右岸の低地に位置する。

〔出来事〕寛永二年（一六二五）の知行宛行状に村名があり、知行高は不明であるが旗本天野領となった。元禄郷帳では高七九石余。寛文四年の土屋利直領知目録には河田村とみえ、久留里藩領。以降の領主の変遷は山本村と同じ。寛政五年の上総国村高帳では家数九。

戸崎（とざき）村　現：戸崎

〔地勢〕大河原村の西方、小櫃川中流左岸に位置する。西は上総丘陵の稜線を越え周淮郡法木村へ一里ほど、北は佐野村（現木更津市）へ一五町ほど、南は岩出村へ通じる道がある。

冨崎神社

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳には高九六六石。正保国絵図に戸崎村とみえる。寛文四年には久留里藩領。延享五年（一七四八）の村明細帳控写（重田家文書）によれば家数一三七・人数七九五、うち道心一一・出家五、山伏・尼・座頭など各一、馬五二・牛三三。畑作は五穀のほかたばこ・木綿など、樹木は栗・柿・茶。農間に男は縄・筵作り、薪伐り、女は木綿織など。先年より市場になったとあり、大工・指物大工・医師・紺屋・桶屋・豆腐屋・酒売がいた。城下への津出しは　川端で行い川路一里二〇町ほど。城下へは陸路一里。

〔寺社〕字追場（おつば）に鎮守の富崎神社。原に満福寺がある。

岩出（いわで）村　現：岩出

〔地勢〕戸崎村の南、小櫃川中流左岸に位置。西は上総丘陵の稜線を越え周淮郡法木（ほうぎ）村へ通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に岩手村とあり、高一一三石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数三三。

〔寺社〕字下川に皇産霊神社がある。古くは大六天宮と号した。

箕輪（みのわ）村　現：箕輪

熊野神社

〔地勢〕奥田村の南に位置する。東は上総丘陵を背に集落を構え、村の西側を久留里道が通る。

〔出来事〕文禄三年（一五九四）の上総国村高帳に村名があり、高四八三石。寛文四年（一六六四）には久留里藩領。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳では家数八二。

〔寺社〕字谷に鎮守の熊野神社がある。

青柳（あおやぎ）村　現：青柳

〔地勢〕寺沢村の東対岸、小櫃川中流右岸に位置する。村の東を久留里道が通り、南東の市場村へ通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高三一七石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると、家数三〇。近世中期以降舟運が盛んになり、新河岸が設けられた（吉田家文書）。安政五年・同六年に百姓が川舟を一艘、万延元年には、安行船を一艘もち

運送を行っていた（粕谷家文書）。

〔寺社〕字上沢に熊野神社、字堀内（下沢）に八幡神社、字滝に真言宗智山派不動院がある。元禄一二年観音像を新彫する。

久留里（くるり）町

【合併地】市場・吉野・大和田・小市部・川谷・大谷・栗坪・芋窪・怒田・浦田・冨田・愛宕・向郷・上郡葛原刀、寺沢村飛地、台村錯綜地

【町勢】合併により戸数八一七戸、人口四六九八人、町有財産は耕地一町歩、山林四町歩余となった。

【町名の由来】久留里が、旧久留里藩邸の所在地にあることにちなみ命名された。

市場（いちばむら）村　現：久留里市場

〔地勢〕小市部村の南、小櫃川の谷が広がる中流右岸に位置する。中世久留里に含まれた。東は上総丘陵を越え川谷村から、大多喜方面へ久留里道が、西は同川を渡り鹿野山方面へ、南は久留里城追手門前を経て浦田村から亀山方面へ道が通じる。集落は小規模ながら城下町を構成し、文政一二年（一八二九）の熟談議定証文（吉田家文書）には市場町と記載される。小櫃川右岸には市場河岸（久留里河岸）が久留里藩の御用河岸として古くから設けられていた（吉田家文書）。

〔出来事〕文禄三年（一五九四）の上総国村高帳に、久留里市場とあり、高三九〇石余。正保国絵図に久留里市場町、元禄郷帳では久留利市場村とある。寛文四年（一六六四）には久留里藩領。慶安元年（一六四八）村内で正源寺に、一〇石の朱印寺領地が与えられた（正源寺文書）。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳によると、家数二四六。町場はほぼ北西流する小櫃川右岸に沿う、久留里道沿いに形成される。上町・仲町には河岸があって、年貢米や薪炭などを取引する商家や倉庫が建ち、運送を業とする舟持ちが居を構えていた。

正源寺

〔寺社〕字安住原（あんじゅうはら）に単立（独立した宗教団体）真勝寺がある。天文九年（一五四〇）勝（武田）真勝の開基、雄山の開山。字仲町にある正源寺は浄土宗に属する。本尊の加勢観音菩薩は、里見義堯が守り本尊にした（『上総町郷土史』）。

吉野（よしの）村　現：吉野

※明治一〇年堰場村・滝村・山田村と合併し吉野村となる。

⊙堰場（せきば）村　現：吉野

〔地勢〕御腹川の中流右岸に位置し、南は大谷村。

〔出来事〕元禄郷帳に村名があり、高一六石余。貞享元年（一六八四）には上野前橋藩領（酒井家文書）。寛政五年の上総国村高帳によると家数二。

〔寺社〕字堰場に稲荷神社がある。

⊙滝（たき）村　現：吉野

〔地勢〕堰場村の北、御腹川の中流右岸に位置する。東は丘陵を越え市原郡万田野村。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高八二石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数一八。

〔寺社〕字滝ノ沢に熊野神社がある。

⊙山田（やまだ）村　現：吉野

〔地勢〕滝村の南西方、小櫃川支流御腹川の中流左岸に位置する。

〔出来事〕元禄郷帳に村名がみえ、貞享元年には上野前橋藩領（酒井家文書）。寛政五年の上総国村高帳では高二五石余。家数二。

〔寺社〕字山田に稲荷神社があった（神社明細帳）。

大和田（おおわだ）村　現：久留里大和田

〔地勢〕向郷村の北東、小櫃川左岸に位置する。他領市場村と川を挟んで対峙するため、同村へ通ずる領内境には番所が設けられた（「亀山領分見絵図」石井家蔵）。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高八九石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳では家数一九。川越藩の河岸場が設けられ、亀山領の年貢米や炭・真木の回漕が小櫃川の舟運を利用して行われた。

小市部（こいちぶ）村　現：小市部

〔地勢〕青柳村の東に位置し、南は市場村。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一〇三石。寛文四年には久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳では家数一八。慶長一七年（一六一二）の関東八州真言宗連判留書案（醍醐寺文書）に「久留里円如寺」とみえる。寛保二年（一七四二）黒田直純が久留里藩主になって以降、同氏の祈願所になった。

円如寺

〔寺社〕字台に鎮守の熊野神社。字弘野（こうの）台に真言宗智山派円如寺。字橋戸沢に曹洞宗円覚寺がある。

川谷（かわやつ）村　現：川谷

〔地勢〕市場村の東、小櫃川の支流御腹川の上流部谷間に位置する。東は上総丘陵の稜線を越え、市原郡（現市原市）菅野（すげの）村を経て大多喜方面へ通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一五

一石。寛文四年の土屋利直領知目録に河谷村とみえ久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳では家数六三。

〔寺社〕字伊草根に鎮守の熊野神社がある。

大谷（おおやつ）村　現：久留里大谷

〔地勢〕川谷村の北、御腹川流域の谷間に位置する。東は市原郡万田野村・柿木台村。

八坂神社

〔出来事〕寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名があり、久留里藩領。元禄郷帳では高一七七石余。寛政五年の村明細帳（久留里大谷区有文書）では、家数五六・人数二三九（うち僧侶二）。農間は男女とも山稼。年貢米は久留里河岸から木更津まで、一俵につき米九合宛、舟賃は百姓持。

〔寺社〕字庄司に八坂神社、字明王台に真言宗智山派持明院がある。

栗坪（くりつぼ）村　現：栗坪

〔地勢〕小櫃川左岸に位置し、北は向郷村。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳には「西坪村」一一八石とあるが栗坪村の誤りか。寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名があり、久留里藩領。元禄郷帳では高六五石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数一〇。

芋窪（いもくぼ）村　現：芋窪

〔地勢〕栗坪村の南西、小櫃川左岸に位置する。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。元禄郷帳では栗坪村枝郷芋窪村とあり、高六一石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数一〇。

〔寺社〕字久根岸に山神社があり、境内社は八雲・秋葉・日枝など四社（神社明細帳）。

怒田（ぬだ）村　現：怒田

金福寺

〔地勢〕浦田村の東、御腹川水源地に位置する。北西は稜線を越えて久留里城下へ通じ、東は市原郡石塚村（現市原市）。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高一一四石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳では、家数九〇。応永二六年（一四一九）一二月二七日の、鎌倉公方足利持氏御教書（円覚寺文書）に畔蒜（あびる）庄内「亀山郷並沼田寺」とあり、鎌倉円覚寺領として安堵されている。

〔寺社〕字瓜倉に真言宗智山派金福寺がある。古くは金剛

寺と号し、寺伝に里見義堯の創立という。背後の丘腹に大日堂があり、大日如来を安置する。

浦田（うらた）村　現：浦田

〔地勢〕久留里城下の南に位置し、小櫃川右岸の上流域から中流域への変換点にあたる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳には「麦田村」（誤記か）とあり、高五七二石。寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名がみえる。久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳では、家数一三五。

〔寺社〕字浦田に、鎮守の久留里神社、真言宗智山派密蔵院がある。字名敷に、曹洞宗延長寺、日蓮宗妙長寺がある。

久留里神社

富田（とみた）村　現：富田

〔地勢〕寺沢村の南、小櫃川中流左岸に位置する。西方上総丘陵を背に集落を構え、東は川を渡り市場村。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名がみえ、高八六石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳では家数二一。近世中期以降舟運が盛んになり、新河岸の下富田河岸が設けられた（吉田家文書）。同河岸からやや上流に、武蔵川越藩の領主河岸である富田河岸（向郷村飛地）がある（「亀山領分見絵図」石井家蔵）。安政三年・同五年に百姓が川舟二艘もち、同六年は一艘、万延元年には二艘もって、運送を行っていた（粕谷家文書）。

〔寺社〕字菩提に熊野神社・稲荷神社・日吉神社がある。

愛宕（あたご）村　現：愛宕

〔地勢〕富田村の西に位置する。小櫃川が形成した最も古い河岸段丘上に立地し、南の村境を久留里城下の市場村から西方西野村を経て周淮郡市宿村へ至る道がある。中世は久留里向郷のうち。

〔出来事〕天正六、七年（一五七八、七九）頃と推定される、一二月二〇日の里見義頼判物（田代文書）に「久留里之愛宕」とみえる。寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名があり、久留里藩領。元禄郷帳では高三九石。寛政五年の上総国村高帳では家数二〇。

〔寺社〕鎮守の愛宕神社は愛宕山の峰に位置する。社伝によれば天延年中（九七三～九七六）の創建。字国光に稲荷神社、字坪山・国光に神明社がある。

愛宕神社

向郷（むかいごう）村　現：向郷

〔地勢〕愛宕村の東、小櫃川左岸に位置する。亀山郷の交通の要衝で、西野村・蓮見村・谷向村からの、それぞれの道が集まる。

〔出来事〕文政九年（一八二六）まで武蔵川越藩の陣屋が置かれた。中世は久留里のうち。元禄郷帳によると、高三七八石余。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳では、迎郷村とあり家数六六。長く陣屋が置かれたこともあって、その近くには川岸場（かしば）など河川舟運に関する地名が残る。北の久留里藩領富田村内に飛地があり、川越藩の富田河岸が置かれた（「川越藩分見絵図」石井家蔵）。

大宮神社

〔寺社〕字下松山に大宮神社。字後場に真言宗智山派観音寺がある。

上郡葛原刀（かみごおりくずはらと）村　現：向郷一帯に比定

〔出来事〕天文（一五三二～五五）末年小田原北条氏が里見氏の久留里城を攻略する際に「向かひの郷に着陣して（中略）葛原辺」に布陣したと伝え（関八州古戦録）、向郷地区には久津原・久津原下・久津原代・久津原部多および般若寺谷の地名が残る。

松丘（まつおか）村

【合併地】大戸見・広岡・平山・山滝野・大坂・加名盛・大中・柳城・利根・高水・藤林村飛地、笹村飛地、豊田村飛地、川俣村飛地

【村勢】合併により戸数六四八戸、人口三八一八人の村となり、村有財産として山林が三五町歩となった。

【村名の由来】村の中央の丘の上に「三株の老松」があり、それが、弘文天皇親裁であるとの伝説にちなみ命名された。

大戸見（おおどみ）村　現：大戸見

※明治七年、片野・蓮見・女食・九兵衛・細野・切畑・七郎兵衛・八郎兵衛・谷向・四町・網場・田面村の一二村が合併し大戸見村となる。明治一三年には名殿村を合併。

⊙片野（かたの）村　現：大戸見

〔地勢〕柳瀬村の南西、小櫃川右岸にある。同川の南対岸は九兵衛村。

〔出来事〕文禄三年（一五九四）の上総国村高帳に村名があり、高一四〇石。寛文四年（一六六四）には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳によると家数三二。

⊙蓮見（はすみ）村　現：大戸見

〔地勢〕片野村の西方、小櫃川左岸にある。同川支流の

沢を渡って北方鴫畑村から久留里城下方面へ通ずる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高二七石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると、家数二四。天保一二年（一八四一）の村明細帳（蓮見区有文書）によれば小物成として百姓山銭・糠代・藁代・鮎運上・職人役銭。年貢米の津出しは、大和田河岸まで付出し、吾妻村（現木更津市）まで川道七里を下す。運賃米は一俵につき米九合。

〔寺社〕字中村に真言宗智山派宝蔵寺（現寶蔵寺）がある。

寶蔵寺

⊙女食（おなめし）村　現：大戸見

〔地勢〕小櫃川左岸に位置し、西対岸は片野村。

〔出来事〕寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名があり、久留里藩領。元禄郷帳では高三三石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数六。

⊙細野（ほその）村　現：大戸見

〔地勢〕女食村の南、小櫃川左岸にあり、同川支流の一つ三川（さんかわ）に沿って展開する。村の北を南東笹村からの道が北西蓮見村方向へ通じ、村の東で分岐して関村および小櫃川を渡って切畑村・谷向村方向に通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高三九石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると家数一七。

⊙九兵衛（くへい）村　現：大戸見

〔地勢〕片野村の南対岸、小櫃川左岸に位置し、北は女食村。

〔出来事〕貞享元年（一六八四）の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。元禄郷帳では片野村枝郷九兵衛村、高四九石余。

〔寺社〕真言宗智山派吉祥寺は明治初期、女食村の福蔵寺を合併した（『君津郡誌』）。

吉祥寺

⊙切畑（きりはた）村　現：大戸見

〔地勢〕細野村の北対岸、小櫃川右岸にある。

〔出来事〕寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名があり、久留里藩領。元禄郷帳では高七一石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数一六。

⊙七郎兵衛（しちろべい）村　現：大戸見

〔地勢〕切畑村の北、小櫃川右岸にある。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。元禄郷帳には谷向村枝郷七郎兵衛村、高四〇石余。

⊙八郎兵衛（はちろべえ）村　現：大戸見

〔地勢〕小櫃川右岸、七郎兵衛村の北にある。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。元禄郷帳では谷向村枝郷八郎兵衛村とあり、高三六石余。

⊙谷向（たにむかい）村　現：大戸見

〔地勢〕八郎兵衛村の北、小櫃川右岸にある。南東の安房清澄山からの道と、南の同北小町村（現鴨川市）からの道が合流し、柳瀬・外ヶ野、小櫃川を渡って小滝・向郷の各村へと続く。安房と上総を結ぶ交通の要衝で、幕末には、武蔵国川越藩の安房と上総の領地を管轄するため、字三本松に陣屋が置かれた。

稲荷神社

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に「谷田村」とみえるものにあたるか。元禄郷帳では高六三石余。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると家数二二。

〔寺社〕字三本松に稲荷神社があり、社伝によれば、文政九年、川越藩主の松平氏が向郷村から遷宮したという。祭礼には、氏子により県指定無形民俗文化財の大戸見の神楽が奉納される。

⊙四町（よまち）村　現：大戸見

〔地勢〕谷向村の東、小櫃川右岸にある。

〔出来事〕寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名があり、久留里藩領。元禄郷帳では高五七石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数一五。

⊙網場（あんば）村　現：大戸見

〔地勢〕四町村の北、小櫃川右岸に立地。田面村から同川を越えて関村へ通ずる道と、同村から川越えに切畑村を通り谷向村方向へ通ずる道とが川の手前で合流する。

〔出来事〕寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名があり、久留里藩領。元禄郷帳では高五〇石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数一〇。

〔寺社〕雷（いかずち）神社があったが明治四三年谷向の稲荷神社に合祀（神社明細帳）。

⊙田面（たのも）村　現：大戸見

〔地勢〕網場村の西、小櫃川右岸に立地。南へ下ると関村から同川越えに谷向村方向に通じる道と合流する。

〔出来事〕寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）

に村名があり、久留里藩領。元禄郷帳では高三七石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数一一。

⊙名殿（などの）村　現：大戸見旧名殿

〔地勢〕四町村の東、小櫃川右岸に立地。南東の高水村からの道と、同川左岸中山村からの道が村の北で合流し、谷向村の三本松陣屋方向へ通ずる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高七七石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると家数一八。明和七年（一七七〇）大戸真木伐り出しにつき名殿・利根・柳城・高水の四村から三五村を相手に訴え、向郷村など三村の仲裁で内済するという事件があった。

広岡（ひろおか）村　現：広岡

※明治七年、朝立・外ヶ野・鳥居台・千本・稲滝・戸穴・朝柄・打路木・柳瀬の九村と合併し広岡村となる。

⊙朝立（あさだち）村　現：広岡

〔地勢〕外ヶ野村の北東に位置する。

〔出来事〕寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名がみえ、久留里藩領。元禄郷帳では高六六石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数一〇。

⊙外ヶ野（とがの）村　現：広岡

〔地勢〕小櫃川右岸にあり、西の対岸は大山田村、南方谷向村方向からの道が村の北東で分岐し、一方は朝立村・平山村へ、一方は同川を北に渡って小滝村・大野宮台村方向へ通ずる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳には外野村とあり、高一四三石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の、上総国村高帳によると家数一六。明治元年（一八六八）の村明細帳（『上総町郷土史』）によれば畑方は麦・粟などのほか木綿、烟草、農間稼には大戸真木伐り出し山駄賃付け。

〔寺社〕字市場に厳島神社があり、社伝によれば元亀二年（一五七一）の創建といい、明治四一年朝立神社など七社を合祀（神社明細帳）。

厳島神社

⊙鳥居台（とりいだい）村　現：広岡

〔地勢〕外ヶ野村の南に位置し、村域は小櫃川本流に注ぐ沢に沿って展開する。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。元禄郷帳では高四六石余。文政一二年の農間商渡世書上（鈴木家文書）によれば家数九・人数三五、農業一統渡世。

⊙千本（せんぼん）村　現：広岡

〔地勢〕鳥居台村の北東に位置する。村域は千本谷に沿

って展開し、西方向へ下ると谷向（たにむかい）村から鳥居台村を通り、外ヶ野村へ通ずる道に合流。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一五九石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の、上総国村高帳によると家数三〇。天正八年（一五八〇）一一月の妙本寺日我書状（椙山文書）に、同六年の里見義弘死後の里見氏の内紛のとき、安房の里見義頼が上総に攻め込み、「せんほん」を陥落させたことがみえ、当時城があったことがわかる。

北野神社

〔寺社〕字用替（ようがえ）に北野神社がある。古くは天満宮と号し、社伝によれば長享二年（一四八八）、里見義実の創立という。

⊙稲滝（いなたき）村　現：広岡

〔地勢〕外ヶ野村の南西、小櫃川右岸にある。同川を渡って小坂村・鴫畑村への道が通ずる。

〔出来事〕寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名があり、久留里藩領。元禄郷帳では高三二石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数六。

⊙戸穴（とあな）村　現：広岡

〔地勢〕稲滝村の南に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳には「浅ヶ戸村」とある。「浅ヶ戸村」とは当村と朝柄村をさすものか。寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名があり、久留里藩領。元禄郷帳では高二五石余、寛政五年の上総国村高帳によると家数七。

⊙朝柄（あさがら）村　現：広岡

〔地勢〕戸穴村の南に位置する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に「朝ヶ戸村」五〇九石とある。朝ヶ戸村とは当村と戸穴村をさすものか。正保国絵図には麻柄村とあり、高七九石。寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名がみえ、久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳では家数一二。

⊙打路木（うつろぎ）村　現：広岡

〔地勢〕朝柄村の北東にある。小櫃川を西に越えて小坂村への道が通る。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳には「窪路木」とあり、高一〇八石。寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に打路木村とあり、久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数一四。

⊙柳瀬（やなせ）村　現：広岡

〔地勢〕西は打路木村・稲滝村、小櫃川を渡って小坂村・鴫畑村へ通じる。村域は同川に注ぐ沢に沿って展開し

ている。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳には、「早瀬村」（柳瀬村の誤記か）。元禄郷帳に村名があり高八〇石余。寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）には「築（やな）瀬村」とあり、久留里藩領。文政一二年の農間商渡世書上（鈴木家文書）によれば家数一九、うち農業一統渡世一二・農間渡世七、人数一一二。年貢は本途のほか百姓山銭・大豆永・糠代・藁代・鮎運上。年貢の津出しは、大和田河岸まで道法一里余、木更津まで川船で道法七里。農業以外は出家・山伏・医師各二人。農間の職人は桶屋・鍛冶屋が各一人。農間稼は、男は大戸真木を伐り出し、女は薪・木綿取。

幸田寺

〔寺社〕字柳瀬に大嶽神社。字林に真言宗智山派幸田寺がある。慶応三年（一八六七）色衣着用の寺格が許されたという（『松丘村誌』）。

山滝野（やまたきの）村　現：山滝野

※明治七年小滝村・宿戸・大野宮台・菅間新田・大山田・西野・四宮の七村が合併し山滝野村となる。

⊙小滝（こたき）村　現：山滝野

〔地勢〕小櫃川左岸台地上にあり、同川を挟んで平山村、古宿村と対する。平山村のほか、南の朝立村・外ヶ野村からの道が川を越えて村の西で分岐する。西は宿戸村・四宮村へ、北は大野宮台村から向郷村・久留里城下へ通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳（萩野本）に村名があり、高一二七石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛保三年（一七四三）の村明細帳（『松丘郷土史』）によれば高一〇一石余・家数一六・人数六三、馬三・牛五。麦は本畑で作り、新畑は一毛作。農間稼ぎは大戸真木の伐り出し、女は薪取・木綿織。年貢米の津出しは久留里川岸まで三～四里を付出し、川舟で七里を河口の吾妻村（現木更津市）まで回漕。運賃は一俵につき米九合。

龍泉寺

〔寺社〕字小滝に真言宗智山派龍泉寺がある。

⊙宿戸（しゅくど）村　現：山滝野

〔地勢〕小滝村の西、小櫃川左岸に位置する。

〔出来事〕寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名があり、久留里藩領。元禄郷帳では小滝村枝郷宿戸村とある。天保一二年の村明細帳（『松丘郷土史』）

によれば高三八石余。家数一一・人数六一、馬五・牛一、年貢は永四貫余、小物成として百姓山銭・糠代・藁代・鮎運上。農間の稼は男女とも苫商売。炭木・大戸木を伐り出した。

〔寺社〕字宮ノ上に八幡神社がある。

⊙大野宮台（おおのみやだい）村　現：山滝野

〔地勢〕宿戸村の北東に位置する。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。元禄郷帳では高二四石余。寛政五年の上総国村高帳では家数六。

⊙菅間新田（すがましんでん）村　現：山滝野

〔地勢〕大野宮台村の北に位置する。

〔出来事〕宝永四年（一七〇七）の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。寛政五年の上総国村高帳では菅間田新田。高三五石余、家数五。

⊙大山田（おおやまだ）村　現：山滝野

〔地勢〕小滝村の南西に位置する。

〔村勢〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高五六石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると家数一六。

⊙西野（にしの）村　現：山滝野

〔地勢〕宿戸村の北西に位置する。東部から久留里藩領愛宕村などを通り久留里城下へ通じ、西は周淮郡間野村へ通ずる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一一九石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると家数一九。

⊙四宮（しのみや）村　現：山滝野

〔地勢〕西野村の南に位置する。西方周淮郡日渡根村への道が通る。

〔出来事〕元禄郷帳に西野村枝郷四宮村とあり、高二〇石余。宝永四年上野前橋藩領となる。

平山（ひらやま）村　現：平山

※明治七年古宿村と合併。

〔地勢〕小櫃川上流右岸、浦田村の南にある。集落は平山本村と宇坪集落に分かれる。北は浦田村を通り久留里城下へ、西は川越えに小滝村へ通じる道が通る。

大原神社

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一二二石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の、上総国村高帳によると家数八四。天保七年（一八三六）には平山用水が完成して村内の畑の田成が図られ、畑作村落から水田村落への転換がなされた（『松丘郷土史』）。

〔寺社〕字宮後に大原神社がある。

⊙古宿（ふるやど）村　現：平山

〔地勢〕平山村の南東にあり、集落は宇坪（うつぼ）谷に沿って展開する。同村ほか西は朝立・千本・外ヶ野各村へ道が通じる。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名がみえ、上野前橋藩領。元禄郷帳では平山村枝郷古宿村とあり、高三一石余。

大坂（おさか）村　現：大坂

※明治八年、小坂村・鴫畑村・太郎右衛門村と合併し大坂村となる。

⊙小坂（こさか）村　現：大坂

岩田寺

〔地勢〕鴫畑村の南西、小櫃川左岸に位置し、同川本流と支流に挟まれて展開する村。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高三七二石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の、上総国村高帳によると家数八四。

〔寺社〕字富士山に浅間神社があり、社伝によれば貞享二年の創立。字向ノ代に白山神社があり、元和二年（一六一六）の創立。字上ノ台に真言宗智山派岩田寺がある。

⊙鴫畑（しぎはた）村　現：大坂

〔地勢〕大山田村の南西、小櫃川左岸に位置する。蓮見村、および小坂村からの道が北上して西野村からの道と合流し、向郷村を通って同川を渡り久留里城下へ通じる。

〔出来事〕寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名がみえ、久留里藩領。元禄郷帳では高三二石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数九。

⊙太郎右衛門（たろうえもん）村　現：大坂

〔地勢〕小坂村の西に位置し、村域は小櫃川本流と同川の支流に挟まれて展開する。南は郡境の大塚番所を通り周淮郡へ通ずる。

〔出来事〕元禄郷帳には小坂村枝郷太郎右衛門村とあり、高二二石余。宝永四年上野前橋藩領となる（「酒井忠挙領知目録」酒井家文書）。

加名盛（かなもり）村　現：加名盛

※明治七年関・上関・下関・石崎の四村と合併し加名盛村となる。

⊙関（せき）村　現：加名盛

〔地勢〕小櫃川左岸にあり、西対岸は切畑村、集落は同川と沢との合流地点に展開する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳（荻野本）に村名が

あり、高八八石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると家数八。天保一二年（一八四一）村明細帳（『上総町郷土史』）によれば、土地の麦は悪く、秋は粟六分・稗四分、芋少々。農間には男は大戸真木を作る。

⊙上関（うえせき）村　現：加名盛

〔地勢〕関村の南東、小櫃川左岸に立地。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。元禄郷帳では高二一石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数一〇。

〔寺社〕神明神社と大鳥神社があったが、明治四三年（一九一〇）谷向の稲荷神社に合祀（神社明細帳）。

⊙下関（したせき）村　現：加名盛

〔地勢〕上関村の北、小櫃川左岸に立地。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。元禄郷帳では上関村枝郷下関村とあり、高一八石余。

〔寺社〕八幡神社があったが、明治四三年境内社とともに谷向の稲荷神社に合祀（神社明細帳）。

⊙石崎（いしざき）村　現：加名盛

〔地勢〕小櫃川左岸の下関村の北東にある。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に「岩崎村」とあり、一八九石。寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に石崎村とみえ、久留里藩領。元禄郷帳では高七三石余、寛政五年の上総国村高帳によると家数一一。

大中（だいなか）村　現：大中

※明治七年中山村・大録村と合併し大中村となる。

⊙中山（なかやま）村　現：大中

〔地勢〕関村の南東方、小櫃川左岸に立地。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。元禄郷帳には大録村枝郷中山村とあり、高三五石余。天保一二年の村明細帳（船橋市西図書館蔵）によれば、家数一一・人数四三・農間稼ぎは、男は大戸真木稼、女は野草・薪取。小物成は百姓山銭・糠代・藁代・鮎運上。年貢米の津出しは大和田河岸まで二里を出し、川舟で木更津まで七里を送る。川舟賃は米一俵につき一升一合。

⊙大録（だいろく）村　現：大中

〔地勢〕中山村の西、小櫃川左岸に立地。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に「大六村」、高一〇六石。寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に大録村とあり、久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数二五。

柳城（やなしろ）村　現：柳城

〔地勢〕小櫃川右岸にあり、南東高水村からの道が谷向村方向に通ずる。久留里城下まで二里、木更津まで六里、

房州天津村まで五里。

〔出来事〕文禄三年上総国村高帳に村名があり、高一四六石。寛文四年には久留里藩領（寛文朱印留）。寛保三年の宗門人別帳（柳城区有文書）によれば家数三二、うち水呑二、人数一六六、牛馬三一。寛延三年（一七五〇）の村明細帳によれば、畑作は木綿など。紺屋が一人。農間に男は南御山で大戸真木を伐り出し、女は真木末を薪に取る。年貢津出しは川舟で、舟賃は一俵につき米九合。延享二年（一七四五）の年貢割付（柳城区有文書）によれば小物成は糠代、藁代・藍瓶役金・鮎運上。

熊野神社

〔寺社〕字宮ノ脇に熊野神社がある。

利根（とね）村　現：利根

〔地勢〕名殿村の南東、小櫃川左岸にある。久留里城下へ二里、周淮郡市宿村へ二里半、房州前原村（現鴨川市）へ五里、木更津へ五里（天保一二年村明細帳）（『松丘郷土史』）。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。元禄郷帳では柳城村枝郷利根村とある。天保一二年の村明細帳によれば、高一〇八石余、家数二五・人数一一八。田は谷田・沢田で難所にあり、分散的で土性も不良。畑作は米七分、三分は大豆・稗・芋・木綿、麦の作は不良。農間の稼は奥山の大戸真木稼・炭焼。大工がおり武士屋敷があった。小物成は百姓山銭・百姓萱林永・糠代・藁代・鮎運上、職人役。年貢の津出しは大和田河岸へ二里、大和田より木更津まで川道七里。船賃は一俵につき米一升一合。

高水（たかみず）村　現：高水

〔地勢〕小櫃川上流右岸に立地。清澄山からの道、草川原三石山からの道、笹村・川俣村からの道が合流。北西の柳城村、さらに谷向村の三本松陣屋方向へ通ずる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高六四石。寛文四年には久留里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると家数二一。天保三年（一八三二）村明細帳（高水区有文書）によると畑作は木綿など。水田は谷にあって実り悪く、猪鹿の被害もあった。農間稼は大戸真木伐り。大工・鍛冶屋・紺屋が各一人。米の津出しは向郷河岸まで二里、大和田から木更津まで七里を船積みし、川舟運賃は一俵につき一升。天保一三年、当村の百姓が主唱して、川越藩に安く買叩かれる炭・真木の売買自由などを要求、同藩領亀山領一円の百姓一揆が起った（「松平藩日記」前橋図書館蔵）。

亀山（かめやま）村

【合併地】滝原・折木沢・川俣・豊田・釜生・藤林・蔵玉・黄和田畑・草川原・香木原・坂畑・笹、加名盛村飛地

【村勢】合併により戸数五〇八戸、人口三二一一人となった。村有財産は耕地六反、山林三九町歩となった。

【村名の由来】かつて、「亀山郷」に属していたという史伝により命名された。

滝原（たきはら）村　現：滝原

〔地勢〕折木沢村の東、小櫃川の右岸にある。滝の不動（現亀山神社）下の道から、徒歩渡りで東方釜生（かもう）村へ通じる。

泉滝寺

〔出来事〕貞享元年（一六八四）の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。元禄郷帳では高一七石余、寛政五年上総国村高帳によると家数一一。

〔寺社〕字下滝に真言宗智山派泉滝寺（せんりゅうじ）がある。寺伝に正徳五年（一七一五）の開基という。

折木沢（おりきさわ）村　現：折木沢

〔地勢〕坂畑村の東に位置する。集落は小櫃川上流右岸にあり、左岸には入会地の字加勢峰がある。南方の安房国長狭郡境から加勢を経て坂畑村に通じる道が通る。

〔出来事〕文禄三年（一五九四）の上総国村高帳に村名があり、高一四四石。寛文四年（一六六四）には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年（一七九三）の上総国村高帳によると家数六四。

〔寺社〕鎮守は字堀ノ内の山神社。

川俣（かわまた）村　現：川俣旧川俣

※明治一〇年（一八七七）押込村・月毛村と合併し川俣村になる。

〔地勢〕笹村の東に位置する。清澄山を源流とする小櫃川本流と、元清澄山を源流とする笹川が当地で合流。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に「川殿村」とあり、高九四石。正保国絵図に村名がみえる。寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に河股村とみえ、久留里藩領。寛政五年の上総国村高帳によると家数一八。

⊙押込（おしごめ）村　現：川俣旧押込

〔地勢〕川俣村の南、笹川の右岸にある。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名があり、上野前橋藩領。元禄郷帳では高二五石余、寛政五年の上総国村高帳によると家数一〇。

⊙月毛（つきげ）村　現：川俣旧月毛

〔地勢〕川俣村の南西、笹川右岸に立地。

〔出来事〕寛文五年の山神宮造立棟札（笹山神社蔵）に

村名がみえ、地頭土屋民部とあり、久留里藩領。元禄郷帳では川俣村枝郷月毛村とあり、高二六石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数一一。

豊田（とよだ）村　現：豊田

※明治一〇年菅間田村・野中村と合併し豊田村となる。

⊙菅間田（すがまた）村　現：豊田旧菅間田

〔地勢〕ほぼ北流して小櫃川左岸に合流する笹川の左岸に立地し、北は野中村。

〔出来事〕寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名がみえ、久留里藩領。元禄郷帳では高三八石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数四。

⊙野中（のなか）村　現：豊田旧野中

〔地勢〕菅間田村の北、笹川が小櫃川に合流する地点の、西の台地上に立地。

〔出来事〕寛文四年の土屋利直領知目録（寛文朱印留）に村名があり、久留里藩領。元禄郷帳では高七〇石余。寛政五年の上総国村高帳によると家数二〇。

〔寺社〕字真崎台に真言宗智山派円蔵寺がある。

円蔵寺

釜生（かもう）村　現：釜生

〔地勢〕滝原村の東に位置し、集落は小櫃川を挟み左右両岸に展開する。右岸の集落は同村と東の蔵玉村へ通じる道に沿い、左岸の集落からは同川を徒歩渡りで両村へ通行する。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高五三石余。寛文四年には久留里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると家数一四。

藤林（ふじばやし）村　現：藤林

〔地勢〕高水村の南東に位置し、小櫃川上流右岸に立地。村内を南へ下り、東は同川を渡って草川原村へ、西は同じく川俣村へ通じる道がある。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高六四石。寛文四年には久留里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の、上総国村高帳によると家数一八。三差路にある享保二年（一七一七）の道標には右に「三石山二十八丁」左に「きよすみ道」と記す。

〔寺社〕鎮守は字神代の熊野神社。社伝によれば創建は正保二年（一六四五）という。

熊野神社

蔵玉（くらたま）村　現：蔵玉

※明治七年門生村と合併。

〔地勢〕釜生村の東、小櫃川上流に位置し、集落の南東には枝郷の黄和田畑村、南方に同門生（かどう）村が連なる。屈曲しながら深い谷間を流れる同川に沿って村域が展開している。黄和田畑村を通り、南の山越えに安房国長狭郡清澄寺・天津村に通じる道があり、北西は坂畑村を通り久留里城下へと通じる。一方、村の北で分岐し大多喜城下へ通じる山道も通る。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高二〇一石。正保国絵図には「黒玉村」とある。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。安永二年（一七七三）の村明細帳（蔵玉区有文書）によれば家数七五・人数三八二、牛三五・馬一九。農間の稼は、男は大戸真木伐、女は木綿織。炭焼、木挽二人、大工・鍛冶屋各一人。小物成は、山銭（百姓山一四町余）・糠代・藁代・鮎運上、諸職人役。米の津出しは久留里河岸へ三里を付出し、川船で七里を木更津浦へ送る。船賃は一俵につき一升一合。

円盛院

〔寺社〕字堀之内に熊野神社、真言宗智山派円盛（えんじょう）院がある。星福山蔵王寺と号す。

⊙門生（かどう）村　現：蔵玉

〔地勢〕小櫃川の左岸、蔵玉村の南にある。同村と東の黄和田畑村へは同川を徒歩渡りで通行した。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名がみえ、上野前橋藩領。元禄郷帳には蔵玉村枝郷門生村とあり、高二〇石余。天保一二年（一八四一）の村明細帳（門生区有文書）によれば家数八・人数三四、馬四。畑作は麦・粟などのほか木綿。農間稼は炭焼で、大工がいる。小物成は山銭・糠代・藁代・鮎運上。米の津出しは、大和田河岸へ三里半付出し、木更津までは川道七里半。

熊野神社

〔寺社〕字門生台にあった山神社は明治四一年（一九〇八）蔵玉の熊野神社に合祀（神社明細帳）。

黄和田畑（きわだはた）村　現：黄和田畑

〔地勢〕蔵玉村の南東に位置する。北は夷隅郡と接し、南方は安房国長狭（ながさ）郡に向かう。夷隅郡筒森村（現勝浦市）を通り大多喜城下（現大多喜町）へ通じる山道と、小櫃川沿いに字追原・湯ヶ滝を南下し、長狭郡清澄寺（現天津小湊町）から同天津村に通じる道が集落の南東部で分岐する。南東境には石尊山がある。中央を貫く

小櫃川の上流に七里川がある。札郷の原生林（東京大学演習林）・湯ヶ滝鉱泉がある。

〔出来事〕貞享元年の酒井忠挙領知目録（酒井家文書）に村名がみえ、上野前橋藩領。元禄郷帳には蔵玉村枝郷黄和田畑村とあり、高七七石余。慶応四年（一八六八）の村明細帳（黄和田畑区有文書）によれば家数五〇、人数は記載なく、牛九・馬二四。農間の稼は炭焼。小物成は山銭（百姓山四町余）・糠代・藁代、鮎運上。米の津出しは市場村まで付出す。同村から房州への道筋にあたり馬継の村でもあった。

〔寺社〕字北畑に春日神社がある。

草川原（くさがわら）村　現：草川原

〔地勢〕坂畑村の南方対岸、小櫃川上流左岸に立地。南方は峰伝いに、三石山から安房長狭郡粟波戸（あわと）村（現粟斗）に通じる道がある。三石山の享保一二年（一七二七）の道標に「是より東ハぼう志うみち、北ハくさ加はらミちくるりへ」と記す。

観音寺

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一二四石。正保国絵図・元禄郷帳に草河原村とある。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると家数四三。明治一〇年当村野村喜惣治が草川原用水を開削し、七町余の良田を開墾したという（『君津郡誌』）。

〔寺社〕字三ッ石に真言宗智山派観音寺がある。

香木原（かぎはら）村　現：香木原

〔地勢〕小櫃川の支流笹川の最上流に立地。笹村の南に位置し、上総国と安房国の国境を画す村。南方の安房国長狭郡北小町村（現鴨川市）に至る手前の国境長野田には、上野前橋藩の番所が設けられた（『上総町郷土史』）。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳（荻野本）に村名があり、高一〇石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると家数一九。

〔寺社〕鎮守は字原の愛宕神社。社伝によれば元禄四年（一六九一）の創建という（『君津郡誌』）。

坂畑（さかはた）村　現：坂畑

〔地勢〕小櫃川上流右岸に立地。西は藤林村・高水村方向、東は折木沢村・滝原村方向に通じる道が通る。また東方蔵玉村方面から当村字横尾を通り、北の久留里藩領怒田村・浦田村に通じる山道がある。当村は同藩領と上野前橋藩領の境界にあたり、字横尾には前橋藩の横尾番所が設けられた（『上総町郷土史』）。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に坂畠村とあり、高九八石。正保国絵図には坂畑村とみえる。寛文四年には久

里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると家数五一。天保一二年の村明細帳（坂畑区有文書）によれば、家数四八・人数二六五、牛二〇・馬三〇。畑作は麦・粟などのほか紅花・木綿。農間の稼は、男は大戸真木伐り出し、女は薪・木綿取、牛馬のないものはかち稼。炭焼、木挽と弟子、鍛冶屋一人がいた。小物成は百姓山銭（一四町余）・糠代・藁代・鮎運上、職人役、夫役は鷹夫役。米の津出しは大和田河岸まで道法三里を付出し川舟に積む。舟賃は一俵につき米一升一合。

〔寺社〕鎮守は字本代の山神社。社伝によれば、元禄元年（一六八八）の創建。安政三年（一八五六）の火災で社殿・宝物・文書類を焼失、翌四年に再建したという。

笹（ささ）村　現：笹

山神社

〔地勢〕菅間田村の南西、笹川左岸に立地。集落は山神社周辺と、同川に沿って南方香木原（かぎはら）村方向に寄った字片倉・清水の三つに大きく分かれる。北方利根村方面から通じる道と、北東川俣村方向からの道が、北部で合流し、さらに関村・細野村方向からの道を合わせて村内を南下、字奥笹・西清水を通り香木原村、安房国長狭郡北小町村（現鴨川市）へ通じる。

〔出来事〕文禄三年の上総国村高帳に村名があり、高一〇六石。寛文四年には久里藩領（寛文朱印留）。寛政五年の上総国村高帳によると、家数八七。万治年中（一六五八～六一）当村の野村藤右衛門は久留里藩に願い出て、迂回する川筋の狭所、木越山に横穴をうがって川流を直通させ、旧河床に新田一町六反余を開墾したという（野村家文書）。嘉永六年（一八五三）当村の宮野庄左衛門は開削工事で水道五〇〇間を通し、一町八反余の新田を開墾したという。文久三年（一八六三）には小櫃川の支流を堰き止め、笹・野中両村にまたがる隧道三千二〇〇間余を開削し、水田二〇町余を得たという（『君津郡誌』）。

〔寺社〕奥笹の山神社。字中笹に真言宗智山派明覚院。

凡例

一、本書は、サークル活動の一環として君津市の歴史・文化を学ぶために調べた資料の中から、興味や関心深かったものを取り上げまとめた。また、調査中に発見した事柄については原文中に追記した。

一、本書は、明治三〇年四月一日、郡制施行により発足した君津郡（周淮郡・望陀郡・天羽郡）より、主として周淮郡の伝説・伝承を中心に取り上げた。

一、伝説・伝承には、昔の地名が多々登場する。この場所や位置関係をイメージし易くするため地名を追加し、その補足として「君津郡町名地図」「鹿野山参道地図」を添付した。

一、本書の記述は、つとめて常用漢字・現代仮名遣いを用いた。しかし、古文書等に使用されている漢字は極力、忠実に書き著すよう努めたが、難解な漢字は□とした。

一、専門用語、人名、地名並びに難解な文字には、適宜（　）でふりがなを付けた。

一、年号は和暦を用い、西暦は（　）書きした。ただし重複する場合の西暦は省略した。

一、応永期や天正年間など範囲を示す西暦については、原則として原文表記したが、西暦の範囲記述がない場合は編集者が注釈として記入した。その場合の範囲は改元後～改元前とした。

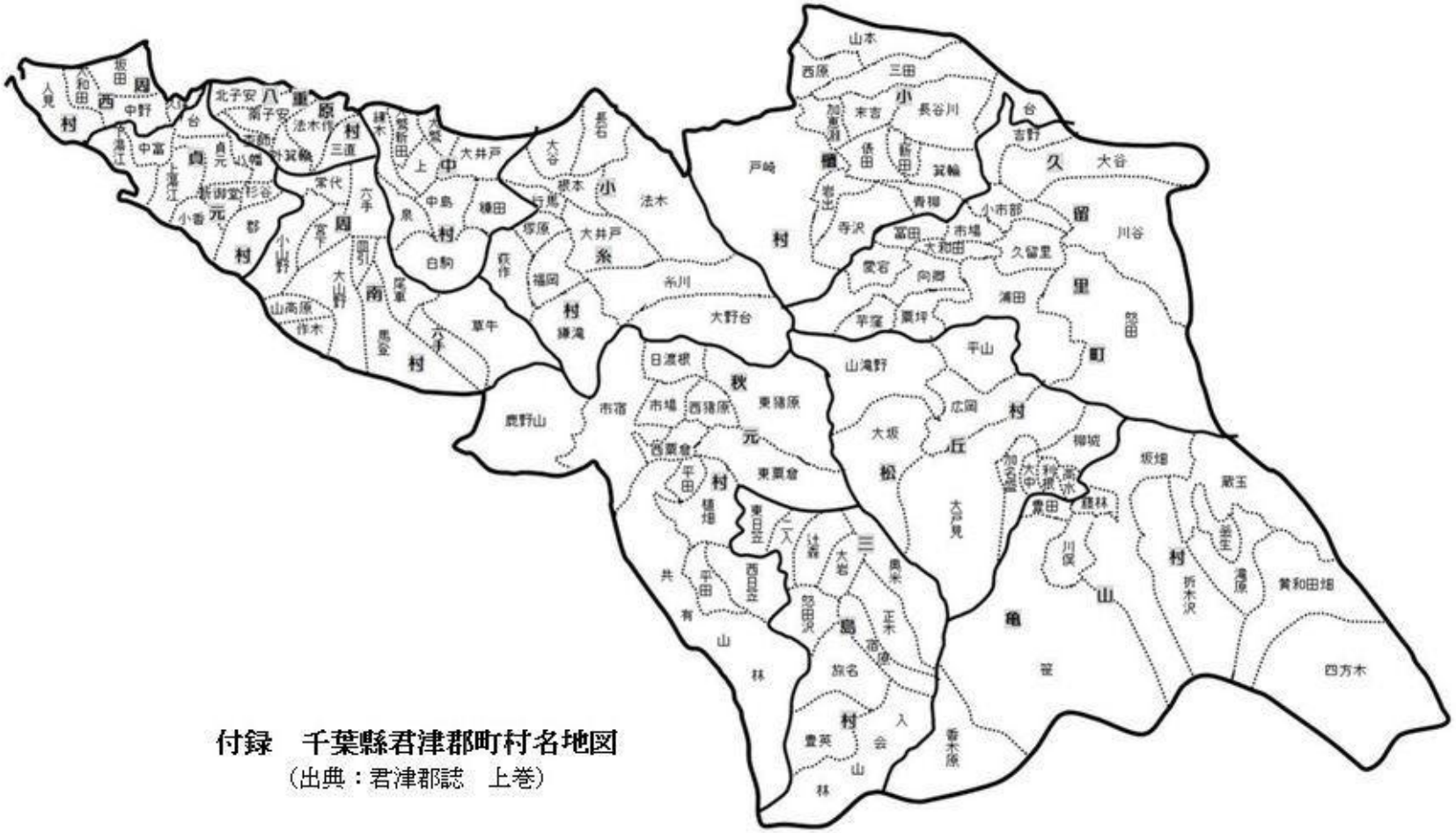
（例）元禄年間：（一六八八～一七〇四）。貞享五年から元禄と改元。元禄一七年、宝永と改元するまで。

一、度量衡については、資料中に使用されている当時のままを用いた。

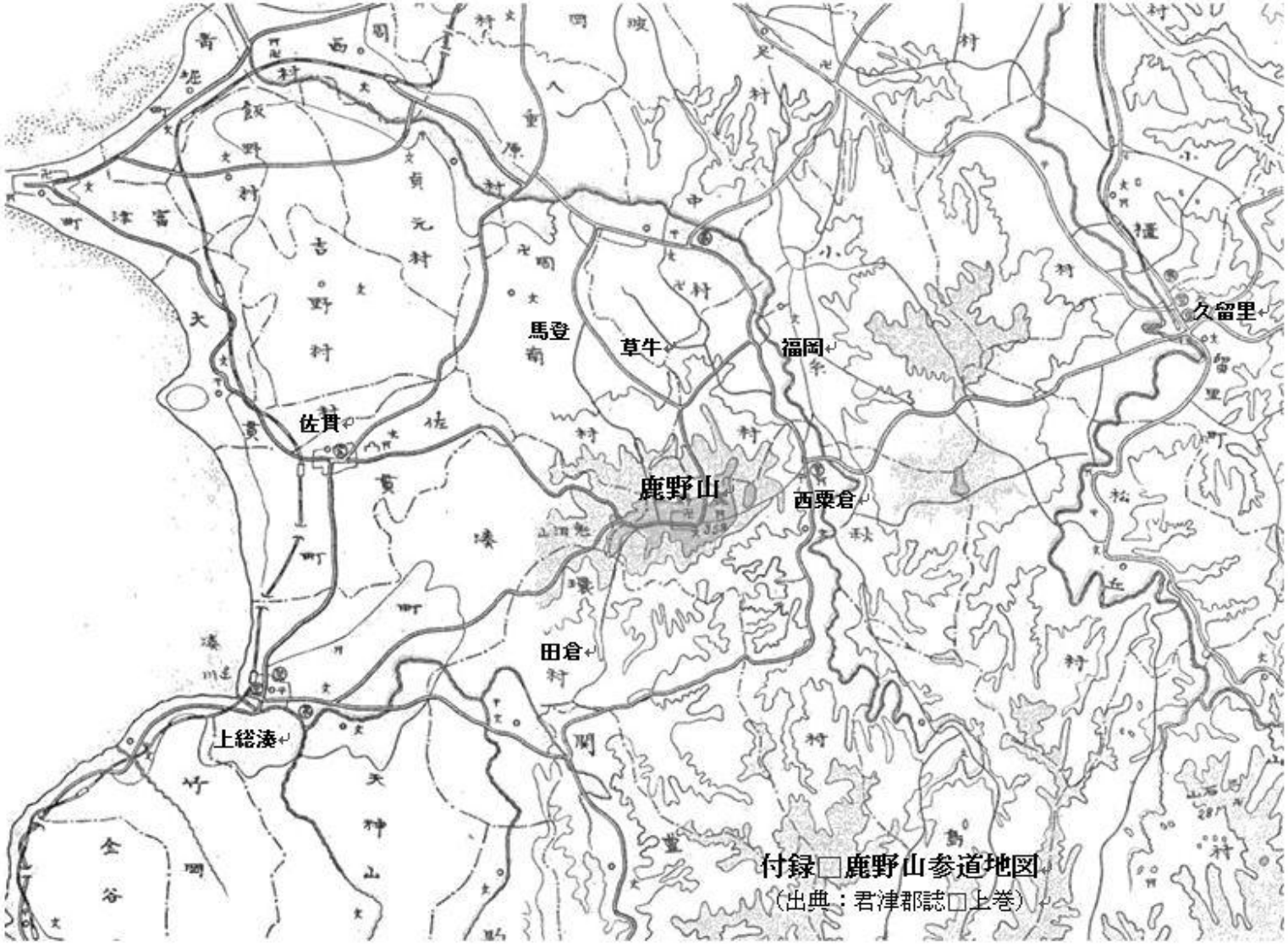
一、出典について書籍・雑誌は『　』、論文や自治会報などは「　」、個人の資料は（　）でくくり、それぞれ文末に付した。人名は原則として敬称を略した。また、「君津いまむかし」は君津市史編さん委員会とし、人名は略した。

一、原文を忠実に引用したが、同じような内容の複数の資料を読むと、少し整理・加筆すると理解しやすいのではと思われる箇所や文章があった。それらについては、編集時に一部修正した。

一、写真の出典、所有者については、写真の下部に「　」書きした。周西マップクラブ会員が撮影した写真・画像は表記していない。表現上で万止むを得ないものは、インターネットの画像を拝借した。その場合、使用した画像については、下部に「Web ページ」と明記した。



付録　千葉縣君津郡町村名地図
（出典：君津郡誌　上巻）



付録□鹿野山参道地図
（出典：君津郡誌□上巻）

参考文献・資料

・君津郡誌・君津町誌・君津市史・小糸町史・周西地区民俗調査報告書・小櫃村誌・貞元地域誌・笹生活史・周南部落誌・坂田郷土誌・人見郷土誌・清和村誌・中富郷土誌・蔵玉風土記・中村誌・西上総民俗誌・上総町の民話・楽石雑筆・千葉県浄土宗寺院紹介・戦国武将の時代・西上総の史話・日本歴史地名大系千葉県の地名（平凡社）・鹿野山歴史とその周辺・きわだ風土記・房総の伝説を鉄で読む・防災誌（千葉県）・西上総歴史よもやま話・君津市の文化財・坂田自治会報・小糸川流域のかたりべ・君津いまむかし・君津地方の歴史・人見老人会報・周西高齢者学級・房総の祭り・鎌滝部落誌・君津風土記・西かずさ　昔むかし・すなみふるさと誌・ふるさとの伝説（清和　周南）・房総の伝説民話紀行・ふるさと西上総・はまっぺ・大戸見神楽保存会・房総弘文天皇伝説の研究・昔話あれこれ・尾根は囁く・続きさらづの民話・上総の民話・小櫃川流域のかたりべ・第５回共に学ぶ市民の集い（『千葉ふるさとむかし話』平成四年二月　株式会社千葉興業銀行）・久留里城祉資料館

伝説・伝承・地名を読む

水と緑の君津ヒストリア

発行責任者
千葉県君津市人見四－八－三一
周西マップクラブ
元岡　陸視

編集　大石　明子
大島　良美
林　世地子
姫野　重信
福山　友子
佐々木千恵子
鳥居　正寛
倉内　加代子
木村　晴美

平成三十年十二月十五日